ラダトリアの聖女異聞

時満

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ラダトリアの聖女異聞

【Ｎコード】
Ｎ７８８３Ｍ

【作者名】
時満

【あらすじ】
十年以上にわたる内戦に疲弊したゼッタセルド王国の傀儡の王として祭り上げられた若き王エルドシール。国の未来を憂う心と野心とが神子を召還し、王の伴侶として利用しようとする。様々な人々の思いが交錯する中、召還された神子をきっかけにエルドシールの運命は急に停滞を打ち破って転がり始める。
異世界トリップで日本人の女の子が神子ですが、彼女視点ではなく、召還した側の視点で物語は進みます。逆ハーではありませんし、彼女は重要な脇役的役所です。

登場人物（前書き）

登場人物が多くなったので、まとめてみました。
年齢は物語開始時のものです。
ネタバレは……微妙にあるので、気になる方は一通り読んでからの方が良いかもです。

登場人物

王室関係者

エルドシール・ドラクロム・ゼッタセルド（十九歳）
ゼッタセルド王国の現国王。赤金色の巻き毛と濃く暗い色調の紅の瞳を持つ。
前国王の末子で第十二王子。
身長は約百九十センチ

ローレッセン・ドラクロム・ゼッタセルド（享年三十六歳）
エルドシールの父で前国王。十二人の王子と八人の王女を設けるが、第五王子の謀反により死亡。

シェゼールミーア皇后（五十三歳）
北の大国フェンリール出身の王族。息子である王太子が不慮の事故で死亡した後は離宮に引き籠ったまま十年以上人前に姿を見せていない。

サイゲル卿（五十歳）
故ローレッセン王の弟。エルドシールの叔父。

神殿関係者

キヨ（鈴木京子）（二十三歳）
召還された五代目神子。黒髪黒目の純日本人。割と成熟した女性の肉体を持っているが、こちらの世界では華奢で小柄な部類に入る為に十五歳前後と認識されている。現在はアレシアの元で尼僧見習いとして励んでいる。

アレシア（三十八歳）
エルドシールの母。ダークブロンドの髪に灰色を帯びた緑の瞳。尼僧として高位の慈母の位を持つ。現在はラダトリア女子修道院の院長。

グラスロー（六十一歳）
シーラ教主神殿の神官長。王の幼少時の教育を担った。仙人の様な長い白いヒゲが特徴の見た目は穏やかな老人。

貴族社会関係者

ハロルド・デア・ドールーズ／ドールーズ伯爵（四十五歳）
色々と裏で暗躍中の野心家。現在は副宰相として表面上はレイゼン公爵の派閥に属している。白髪混じりの銀髪に灰色の瞳の偉丈夫。文官というよりは武人の様な見た目。独身。

セリーヌ・ファレ・ガルニシア／ガルニシア公爵令嬢（二十歳）
髪は茶色、瞳は暗緑色。エルドシールの正妃候補の一人。

メイミ・アレ・スフォルツァ／スフォルツァ子爵令嬢（十六歳）
ダークブロンドの髪、茶色の瞳。ぽっちゃり体型で丸顔が特徴。セリーヌの侍女として王宮に上がる。

ベレス・ファレ・ガルニシア／ガルニシア公爵（五十九歳）
財務大臣を務めているセリーヌの父。金髪に緑の瞳だが、今は完全に白髪になっている。綺麗に整えられた白い口ひげが自慢。子供はセリーヌの他に折り合いの悪い跡取り息子と既に他家に嫁いだ娘が二人いる。

チェルネイア・ガレ・ゼットワース／ゼットワース侯爵令嬢（十九歳）
ゼットワース侯爵の弟の娘だが、現在は養子縁組で長女となっている。
髪は栗色、琥珀の瞳。

カトリーヌ・デア・マルゴット／マルゴット伯爵令嬢（三十歳）
金髪に青い瞳。チェルネイアの侍女として王宮に上がる。未婚。十代の頃、王宮侍女として働いていた。

メレデス・ガレ・ゼットワース／ゼットワース侯爵（四十二歳）
茶褐色の髪、暗赤色の瞳の武人。剣の他、槍も得意とする偉丈夫で、現在は左将軍を務める。三人の息子がいる。

フィリシティア・ファレ・レイゼン／レイゼン公爵令嬢（十六歳）
銀の髪、青い瞳。レイゼン公爵の次女。国一番の美女と言われた母譲りの美貌で父に溺愛されている。エルドシールの正妃候補の一人。

ハンナ・シェ・アンセル／アンセル男爵令嬢（十八歳）
髪は赤みがかかった茶。瞳は焦げ茶。養子縁組で男爵令嬢になり、フィリシティアの侍女として王宮に上がる。平民出身。

アルフォース・ファレ・レイゼン／レイゼン公爵（五十一歳）
アッシュブロンドの髪とアイスブルーの瞳。フィリシティアの父。宰相を務めている。痩身で神経質そうな外見。フィリシティアの他に亡くなった息子と長女マリエラの三人の子供がいる。

召還前夜～一人目の策士～

「くだらん」
くだらな過ぎて思わず笑ってしまう。
エルドシールは緋色に輝く金の巻き毛を無造作に掻きあげて失笑した。
神官長が内密に重要な話があると言うので、一体何事かと無理を押して神殿地下の隠し部屋まで来てみたが。
「神官長、そなた本気で神の娘を召還出来ると思っているのか？」
今しがた正気を疑う様な事を告げた神官長は、皺に埋もれた双眸でエルドシールを鋭く見据えながら重々しく頷いた。
「はい。次の満月の夜は全ての条件が揃うのです。計算上では三百三十二年ぶりのことであり、ハーナ様がご降臨なさったのもその年の儀式によるものです」
既に伝説になりかかっている神子の名前にエルドシールは深い溜め息を吐いた。
「神官長、悪いがそんな訳の分からない儀式で召還した得体の知れない女を娶る気は無いぞ」
「神の娘はあなた様が王と神に認められた証拠になりましょうぞ」
「そのような証拠は要らぬ！」
思わず怒りが声に籠る。本来なら王位を継ぐ事等あり得なかった前国王の末子であり、未だ十九の若輩者、傀儡の王と侮られていることはエルドシールも重々承知していた。しかし、だからと言って神頼みの様な事をするなどとは。お前まで私を侮るのかとエルドシールは神官長を睨みつけた。
「その通りでございます。そのような証拠など無くともあなた様は真の王。しかしながら陛下。甚だ遺憾ながら愚かな者どもには証拠が必要なのでございます」
「……愚か者どもを黙らせる事の出来ぬ我を嘲うか？」

淡々とした神官長の言葉は、エルドシールには皮肉にしか聞こえなかった。　王として臣下に強い力を持たぬ自分に忸怩たる思いを抱いているエルドシールにしてみれば、己の無能を悪し様に罵られた方がまだましだった。

自嘲するかの様な君主の言葉に神官長は深々と頭を下げ、恐縮したようにその場に跪いた。

「滅相もございません。陛下の光は大変お強い。胸の内に闇を飼う者が反発して苦し紛れに愚かな戯言を弄するのは止むおえない事でございます。ですが民とは心弱く心惑わされ易きもの。取るに足らぬ戯言も捨て置くにはいささか問題が大きゅうございます。民の平安の為にも神の娘を娶られませ」

民まで引き合いに出して神の娘を娶る大義名分をひねり出す神官長に、エルドシールはある種の感動と虚しさを覚えた。宮廷に蔓延る古狸よりも厄介な狸が神殿の長とは。

「時々そなたが何故神に仕える者なのか、理解に苦しむ。いっそ神官長など辞めて宰相にでもならぬか？」

「恐れながら真の策士とは政治の表舞台には出ぬものでございますれば」

返って来た言葉はこれまた聖職者にあるまじき言葉で、エルドシールは観念した様に溜め息を吐いた。

「分かった。儀式は許可しよう。ただし、実際に召還が成功したとしても神子の人となりを見極めた上で公表する。それまでは召還の事自体も内密にし、決して外に漏らさぬ様に」

「心得ておりまする」

重々しく、更に深々と頭を下げる神官長にエルドシールは何とも複雑な顔をして何か言おうとしたが、そのまま無言で隠し部屋を後にした。

ゼッタセルド王国はドラゴニア大陸の東に位置する大国だ。ドラゴニア大陸はその形が竜が翼を拡げて飛んでいる姿に似ている事からそのように名付けられた。伝説では最初の生き物である偉大なる始祖竜の骸(むくろ)が大陸になったとされている。ゼッタセルド王国は竜の右翼にあり、大陸中央の砂漠を挟んで逆側左翼に位置するマーレシア王国に次いで二番目に大きな国である。

しかし、国力で言えば今現在ゼッタセルドはマーレシアに遠く及ばず、第三の大国である北のフェンリールにも劣る。その原因は長く続いた内乱である。

ローレッセン前王は政治よりも美姫と戯れる事に熱心だった為、正妃との間に生まれた第一王子の他、十一人の妾妃との間に十二人の王子と八人の王女がいた。

正妃はフェンリールから嫁いだ王族の姫君で、その身分と後ろ盾の大きさから第一王子が世継ぎであることには誰一人表立って異を唱える者は居なかった。しかし、狩りに出掛けた第一王子が不慮の事故で亡くなった為に状況が一変する。

ローレッセン王は次の後継者を指名せず、既に政治の実権を握っていた臣下はそれぞれが支持する王子を擁(よう)して血みどろの政争を繰り広げた。そしてついに第五王子にローレッセン前王が討たれた事を契機に、十年以上に渡る内乱が始まったのである。

結果を言えば王子は末子である第十二王子であるエルドシールのみが生き残り、他は皆戦死した。エルドシールが生き残ったのには母であるアレシアの功績が大きい。アレシアは尼僧であったが、たまたまローレッセン王に見初められて攫(さら)われ、半ば強引に還俗(げんぞく)させられて最後の妾妃に迎えられた女性だった。その経緯故か、自分が生んだ第十二王子エルドシールと第八王女レンカはアレシアの強い希望で幼い内に神殿に預けられた。アレシア自身もローレッセン王が討たれてから間を置かず再び尼僧に戻った事もあり、幼く後ろ盾も無い王子の存在は忘れ去られていたのである。

何の後ろ盾も無かったことも幸いだった。もしエルドシールが誰

か有力者の息が掛かった者ならば、その者の台頭を防ぐ為に他勢力から暗殺されていただろう。臣下達は共に祭り上げる傀儡の王として十五歳のエルドシールを即位させたのである。

その一方で内戦を生き延びた前王の弟、サイゲル卿が不穏（ふおん）な動きを見せていた。政治の表舞台からは降りて隠居を気取りながらも離宮にて健在である前王妃の御機嫌取りに余念が無く、前王妃の祖国フェンリールと接触しているとまことしやかに囁（ささや）かれていた。即位して四年経っても傀儡の王であるエルドシールでは未来は暗いと、一向に暮らし向きが改善されない民衆の苛立ちを煽る様な流言で惑わしているとも囁かれ、実際再び内乱を起こすきっかけになり得る火種となってくすぶっていた。

それが事実であれば大罪であるが、決定的な証拠が無い為に前王妃のお気に入りであるサイゲル卿を罪に問う事は難しかった。国力低下したゼッタセルドとしては、前王妃の祖国フェンリールにおさおさ付け入る隙を作るのは是非とも避けたい状況なのである。その為サイゲル卿に警戒しつつも目下のところ臣下一同の一番の関心事は陛下の王妃選びであった。それぞれが推す王妃候補と、その派閥による熾烈な戦いが当の王をそっちのけで繰り広げられていた。

若き王はといえば孤立無援の中、加熱する王妃選びと己の無力さに立ち竦（すく）んでいた。

召還前夜～二人目の策士～

副宰相を務めるハロルド・デア・ドールーズ伯爵に家族と呼べるものは居ない。前代の伯爵は愚鈍を絵に描いた様な男で、内戦時の早い段階で息子共々淘汰された。没落した伯爵家を継いだのは前代伯爵の従兄弟に当たるハロルドであった。堂々とした体躯は文官よりも武官を思わせ、鋭い眼光を放つ茶の瞳を柔和な笑みと洗練された立ち振る舞いで包み隠す老獪な政治家である。

四十を過ぎても妻を持たず、後ろ盾も無い中で己の才覚のみでのし上がって来た成り上がり者である。上司である宰相レイゼン公爵は王家の血筋に最も近い名家であるという矜持だけしか持たぬ凡人であったが、人を使う事には中々長けた人物で、実質的な業務を優秀な副宰相に任せて自身は権力闘争に明け暮れていた。その裏で手駒としての認識でしかない副宰相が着々と力を着けていることには未だ気付いていない。

ハロルドは既に床に入っていたにも関わらず、無遠慮に寝室に忍び込んだ黒い影に反応して寝台の上に身体を起こした。

「ミゲル、このような夜更けに何事か？」

「陛下に動きがございました」

子飼いの密偵の報告に闇の中で伯爵の眼光が鋭く光った。

「ほう？」

「おそらく城内の未確認の抜け道を使用したと思われます。途中で気配を見失いました。姿を隠されていた時間は一刻程度。現在は既に寝室に戻られています」

「うむ……そういえば神殿のご生母から陛下に手紙が届いていたな。しかしご生母相手に密会する必要は無い筈だ。ということは……」

王に渡される手紙は全て当然の様に検閲が入るが、王のご生母からの手紙だけは無検閲で通されていた。権謀術策に興味があるご生

母では無いという事実と、書かれている内容は母として王の身体などを気遣うごく普通の手紙であることが最初の数回の検閲で明らかになり、それ以後無検閲となっていた。しかし、もしそれを知った第三者が検閲無しで陛下に連絡をつける為に利用したとすれば、そんな事を出来るのは限られている。手紙の差出人の署名は確かにご生母のものであったのだ。

「神官長か……。ふむ、陛下に私を駒にする資格があるかどうかそろそろ見極め時であるな」

即位したばかりの十五歳の頃は随分と頼りなげな少年であったが、あれから四年。王は従順な傀儡の王であり続けたが、自らが己の才覚でのし上がったハロルドにはある予感があった。

剣を習い始めたのも帝王学を学び始めたのも十五からと王族として遅過ぎたが、それでもハロルドの見る限り王は愚鈍ではなかった。剣技の鍛錬を熱心に行った身体は体格的にも立派に成長し、前王よりも獅子王と呼ばれた前々王を彷彿とさせる赤金色の巻き毛も、意志の強そうな口元と暗い紅の瞳も、見栄えと言う点では若き王は申し分が無かった。御前会議で殆ど発言をしないながらも王の眼差しは会議の内容をしっかりと理解している事を感じさせたし、時折何か言いかけて口を噤む様子にハロルドは気付いていた。

己の立場を良くわきまえた慎重さをハロルドは高く評価していた。王の有り様は、ハロルドにいずれ荒れたこの国を立て直し、繁栄を齎す賢王になれる資質があるのではないかという予感を抱かせていたのである。

そしてまた、実質力の無い王という存在が策士であるハロルドを駆り立てる。無力で、しかし賢く素質のある若い王を、歴史に名を残す程の賢王に押し上げるという計画は、己の才覚に絶対の自信を持つハロルドにとって己の野心と矜持を満足させる非常に魅力的なものだった。

つまり実際は王に己を駒にする資格があるか見極めるというよりも、王に己の駒となる資格があるのか見極めようというのである。

王が傀儡王から脱する為に動き出したのだとしたら、それに是非とも関わらなければならぬとハロルドは計略を巡らせた。

「時に陛下。三日前の夜更けに抜け道を使われたそうですな。密会の相手は神官長ですか」

執務室に書類を届けに来たドールーズ伯の突然の言葉に、エルドシールは思わず一瞬固まった。

そもそも副宰相は直接国王と口を聞ける身分ではない。普段は書類を届けにくるのみか必要最低限の報告をするだけだった男を前に、エルドシールは背筋に冷や汗が流れるのを感じた。実務能力に長け、抜け目無くのし上がって来た男だということは既に承知している。確信に満ちた口調は何らかの確実な証拠を握っている可能性が高い。

「……何が言いたい？」

否定はしないが肯定もせず、慎重に相手を観察しながら問う。

「陛下は私が己の才覚のみで成り上がって来た事はご承知でしょう。陛下が名実共に国王になりたいとお望みならば、優秀な手駒が必要です」

仮にも国王である自分に対してあからさまに名ばかりの王だと言い放つ相手の、率直過ぎる台詞にエルドシールは言うべき言葉を見失った。

この男は不遜にも己の才能を国王である自分に直接売り込んでいるのか、という認識に至るとエルドシールは思わず声を上げて笑った。

「それでお前を手駒にしたとして、その背後にレイゼン公爵が控えているのではないか？　お前を手駒にしたつもりが、上手い具合に公爵の思惑通りに踊らされてはかなわん」

そっちがその気ならと、エルドシールもまたあけすけな物言いで問返す。公爵の人柄から判断するに実際そのような背後はないだろうとエルドシールは踏んでいたが、だからといって思いもよらない

黒幕が隠れていないとも限らない。
「残念ながら信用の置けない者を手駒にする気は無い」
この話は終わりだとエルドシールが軽く手を挙げて退室を促したが、副宰相はすかさず口を開いた。
「そうですか。ではお聞きしますがあの神官長は信用出来るとおっしゃるのですか？」
「……そう来たか」
鋭く切り込む相手言葉にエルドシールは再び相手を見た。この男は背後関係など無いといくら言葉を尽くしたとしても、疑いを晴らす事は出来ないと知っているのだ。そして最初から疑われる事を承知で、そしてまたその疑いを晴らす気はさらさら無いのだ。
神官長には神殿内で父代わりとして世話をしてもらった恩はあるが、だからといってエルドシールは全面的に神官長を信用しているわけでは無かった。それもこの男は見抜いてる。その上で挑発しているのだ。
本気で傀儡の王を脱する覚悟があるのなら、裏切り覚悟で手駒として自分を使ってみろ、と。
「ある程度は、信用している」
「ようございました。もし陛下が信用していると即答されていたら私は手駒を辞退するところでございました」
満足そうな相手の表情と言葉に、エルドシールは自分の考えが的を射ていたと確信する。
「良かろう……。お前の事も、ある程度信用してやる」
深々と頭を下げる男を見つめながら、エルドシールは僅かに動悸を感じて表情を引き締めた。事態が、動き出している。一度動き出した流れに翻弄されてはならない、確り自分の意志で立っていなければ。
この判断が吉と出るか凶と出るか。かなり危うい賭けであるとの認識はあるが、だからと言って野放しにするのも危うい事に変りはない。

上手く隠していたはずの己の本音、いつか実権を臣下から取り返すという望みをこの男には知られてしまったのだから。
「それにしても、冷静沈着な男だと思っていたが……。問答無用で手打ちにされても文句の言えない程の無礼を働くなど、随分と思い切ったな」
「無謀ではございません。私は勝算の無い賭けはしない主義です。もしその様な事態になったとすれば、それはひとえに私の状況判断が甘く、人を見る目が無かったということでしょう」
澄ました表情で結局のところ人を見る目のある自分を自画自賛している喰えない男に、エルドシールは苦笑しか出なかった。
その間もエルドシールの頭の中では目まぐるしく幾つもの思考が交差する。神子召還が成功し伴侶とすることが現実味を帯びたならば、この男の養女として体裁を整えることが可能かどうか、その背後関係を如何に探るか、神官長にこの事を伝えるか否か、伝えるとしたらどのようにどの程度伝えるか、母に及ぶ影響は無いか、考えねばならぬ事は山の様にあった。

召還前夜～姫君の憂鬱～

「今日もお綺麗ですわ、姫様」
銀の髪を美しく結い上げ、繊細なレースのリボンで清楚に仕上げた侍女ハンナは満足げに微笑んだ。
姫様と呼ばれた少女は鏡に映し出された己の顔を無表情に見つめていた。少女はレイゼン公爵の次女、名をフィリシティアという。侍女達に熱心に手入れされた白い肌は染み一つ無く、髪は艶やかな光を放ち、整えられた爪は花びらのよう。瞳は最高級のサファイアの輝きを放つ青だ。国一番の美女と名高かった母の美貌を受け継いだ姫君はゼッタセルドの白薔薇と呼ばれていた。今年十六になったばかりの姫君は、美貌もさることながら血筋の良さからも一番有力な王妃候補と目されている。
レイゼン公爵家は王家の流れを汲む由緒正しい家柄で、母であるミルミラは代々将軍を輩出する武門の名家デニスローン侯爵家の出である。現在もミルミラの弟が右将軍を務めている。そして内戦で自慢の跡取り息子を亡くした公爵のフィリシティアに対する溺愛は凄まじく、我が娘こそ王妃に相応しいと公言して憚らなかった。
「それを持って付いて来なさい」
フィリシティアは鏡の中の己の姿に不意に眉をしかめると目を逸らし、立ち上がるなりテーブルに置かれた小振りの箱を指差した。
中には薔薇の香油が入っている。公爵が愛娘の為に取り寄せたマーレシア産の最高級品だ。ハンナは慌てて箱を手に既に部屋を出た主を追った。

目的の部屋の前まで来ると、フィリシティアは一つ大きな深呼吸をしてから扉を軽くノックした。
「どなたですか？」
「フィリシティアよ。通してちょうだい」

扉の向こうから聞こえて来た侍女の問いに答えると、程なくして扉が開かれた。恭しく頭を下げる侍女の横をすり抜け、落ち着いた淡い青で統一された部屋に足を踏み入れる。部屋の主は侍女達に指示を出しながら荷造りの真っ最中だった。

「マリエルお姉様」

声を掛ければその人は不機嫌そうな顔で振り返った。シニョンに纏めただけのくすんだ金髪も、質は良いものの飾り気の無い簡素な紺のドレスも、地味の一言。似ているのは瞳の色だけといっても過言ではない。美しい装飾の施された淡い水色のドレスを纏い、美しく整えられた縦ロールを結い上げてレースで装飾した髪型のフィリシティアとは対照的だ。

「今忙しいの。見て分かるでしょう？」

出て行けと言わんばかりの姉の言葉に、フィリシティアは思わず俯いて唇を噛んだ。しかし、すぐに顔を上げて傍に控えていたハンナの手から小箱を取り上げる。

「お母様に渡して欲しいものがあるのです。マーレシアの薔薇の香油ですわ」

フィリシティアと同じ様にかつてゼッタセルドの薔薇と讃えられた母ミルミラは、ことのほかマーレシア産の薔薇の香油を好んでいた。マリエルは無言で妹が差し出した小箱を一瞥し、侍女にこれも持って行くようにと指示を出すとすぐに背を向けた。マリエルに指示された侍女は、フィリシティアの手から小箱を受け取って荷造りをしている他の侍女達に合流する。

フィリシティアはその後姉に声を掛けてもらえず、途方に暮れた様に立ち尽くしていた。

それでもフィリシティアは意を決して拒絶するかの様な姉の背に声を掛ける。

「……お姉様！あの……私も……」

「フィリシティア」

マリエラは妹の名をぴしりと叱る様に呼び、妹が言おうとしてい

る事を遮った。
「あなたはお父様の愛だけで我慢なさい。お母様はあなたの顔など見たくはないと思っていらっしゃるし、来ても嫌な思いをするだけよ」
無情にも言い放たれた言葉にフィリシティアは涙を堪えて部屋を飛び出した。

フィリシティアの姉、マリエラは妹や亡くなった兄程には容姿に恵まれなかった。しかし、幸か不幸かその容貌は公爵夫人の母、つまり祖母と生き写しだったために夫人には非常に可愛がられていた。並より上程度の容貌の長女に父である公爵は冷淡であったが、公爵夫人は逆に己の若い頃によく似た次女を疎み、憎しみさえ抱いていた。
「おぉ、私の可愛い白薔薇！　どうした？　何があったと言うのだ！」
王宮に出仕する前に愛娘にの顔を見ようと訪ずれた公爵は、ベッドに突っ伏して肩を振るわせている姿に顔色を変えて駆け寄り、周りでおろおろしている侍女達を何があったのかと厳しい顔で問いつめる。
「お父様……」
「フィリシティア……どうしたというのだ？　こんなに目を赤くして、其方の美しい顔が台無しだ」
「……お姉様が、お母様のところへ行ってしまわれるので寂しくて……」
「なんと……私の白薔薇よ、そなたはあのような陰気な姉でも慕っているのか。なんと優しい子か。よし、ご褒美に何でも欲しいものを言ってみなさい。新しいドレスでも宝石でも……そうだ、舞踏会を開いても良いぞ」
まるで壊れ物を扱う様に優しく手を握る父を、まだ涙の滲む瞳でフィリシティアは見つめた。

「お父様は……」
私の顔が本当にお気に入りですね、と、姉への愛情が一片も感じられない言葉に思わず言いかけた皮肉を飲み込んだ。言っても父にはどうせ皮肉と分からない。
「いえ、何でもありません。有り難うございます、お父様。もう寂しくありませんわ。ご褒美はゆっくり考えますから、どうぞ王宮に行ってらして」
父が自分を愛してくれるのは、母譲りの美貌と有力な王妃候補であることのおかげだ。機嫌良く出て行く父の背中を眺めながら、フィリシティアは足下が崩れて行く様な寂しさと未来への絶望を感じるのだった。再び涙を流し始めたフィリシティアを気遣ってハンカチをそっと差し出すハンナを見た瞬間、暴力的な衝動が爆発する。衝動に駆られるまま枕元に飾られていた薔薇を花瓶ごとハンナに投げつけた。ハンナは悲鳴を上げ、花瓶は割れて散らばる。一度爆発した感情は止めようも無く、手当り次第に周りのものを掴んではハンナに向かって投げつけた。もう投げるものが見当たらなくなると、フィリシティアはボロボロになったハンナを部屋から追い出し、荒れた部屋で一人声を殺して泣いた。
かつて公爵夫妻はそれは仲睦まじく、公爵夫人も三人の子供を分け隔てなく可愛がっていた。どうして変ってしまったのだろうかと、フィリシティアは美しい思い出に胸を痛めた。老いに容色が衰えたせいなのか、公爵はもう妻には見向きもしない。夫人もお気に入りの別荘に引きこもって、ほとんど屋敷に帰ってこない。それを良い事に公爵は娘と年の大して変らない愛人を離れに住まわせ、他にも何人か外に愛人がいるようだった。
気持ちが落ち着くと、フィリシティアは涙を拭ってしゃんと背筋を伸ばし、呼び鈴を鳴らした。何事も無かったかの様に平然として侍女達に部屋を片付けさる。それから冷たい水で赤くなった目元を冷やし、ドレスや髪の乱れを直させた。
「私は、美しいわ。陛下もきっと私をお選び下さる」

鏡の中、化粧を直した美しい顔で微笑みながら、まるで暗示を掛けるように囁く。

いずれは衰える容姿では父の愛をずっとつなぎ止めてはおけない。母や姉の様に捨て置かれてしまう。だから父の願い通り王妃になること以外、フィリシティアに目指すべき未来は無かった。どんなに歪であろうとも、現在フィリシティアには父の愛情だけが心の支えだった。

召還前夜～姫君の憂鬱～（後書き）

召還前夜はこれにて終了です。
次回からやっと神子登場。
前置き長くてすみません。

召還～神子の降臨～

ドラゴニア大陸には三大宗教が存在する。大陸の元となったという始祖竜を祀るガロ教、水の女神を信仰するリルル教、そして最大のものが創造神キアを仰ぐシーラ教である。

シーラとは古い言葉で全ての根源を意味する言葉で、ゼッタセルドはこのシーラ教を国教に定めていた。それというのもキア神の聖地がここにあったからだ。王都にある主神殿はこの聖地の上に立っている。

主神殿の地下にある泉はキア神の涙といわれ、代々の神子はここから現れた。

記録に残っている神子は四人。初代の神子は額に涙型の宝玉を抱き、世界を干上がらせた大旱魃から人々を救った。水の女神はこの初代神子の別称である。

二人目の神子は詳細は伝わっていないが、暗黒に包まれた世界に太陽を呼び戻したと言われている。

三人目の神子ハーナは大きな癒しの力で猛威を振るった恐ろしい疫病を退けた。

これらの逸話によってゼッタセルドはある種特別な国と認識されてきた。だからこそ暢気に十年以上内戦をやっていたとも言えるし、内戦中でも神殿内は平穏が辛うじて保たれていたのである。唯一警戒されているフェンリールも、内政に干渉されてサイゲル卿を王にでもされては困る、という利権を守りたい奸臣の警戒に過ぎない。

そして今宵、五人目の神子が召還されようとしていた。

普段は堅く閉ざされている泉への扉が開かれ、神官長グラスロー、国王エルドシールに続いて十人の選ばれた上級神官が地下への階段を下りて行く。響く足音と俄に沸いて来た緊張とにエルドシールは無意識に息を詰めた。

神秘の泉は三年に一度の大祭の時にしか神官長でも訪れることを許されない。当然エルドシールも存在は知っていても実際に目にするのは初めてである。

階段を下りきると、そこに広がった光景に思わず小さく感嘆の声を上げた。真っ暗な筈の洞窟には僅かに緑色を帯びた無数の光が瞬き、さながら夜空に瞬く星のようだった。白い石灰に縁取られた泉は柔らかに青白い輝きを放ち、これがキア神の涙かと幻想的な美しさに畏怖の念を覚える。

半信半疑だった神子召還が、己の中で現実味を帯びてくるのを感じる。そしてそこに現れるであろう神子に対する期待もじわりと増してゆく。

エルドシールが見守る中、詠唱が始まった。高く低く、幾重にも唱う声が洞窟に反響し、不思議な高揚感がその場を支配してゆく。祈りの最後の一節がまるで百人の祈りの様に共鳴した瞬間、強い光が泉から放たれた。

エルドシールが眩しさに思わず閉じた目を再び開くと、まず泉の中央に浮かぶ黒いものが目に入った。それが神子の頭だと気付くと同時に、その瞳が真っ直ぐ己を見ている事に気付いた。髪と同じく黒い瞳は泉の光を反射してきらきらと輝き、首から上だけを泉から出したまま、ゆっくりとその唇を開いた。

「私、裸なのよ。あなたのマントで良いから泉のほとりに置いて」

響いた声の内容が咄嗟に理解出来ず、エルドシールは目を丸くする。

「意味分からない？おかしいわね、言葉は通じてるはずなんだけど……」

「いや、分かる」

顔を顰めてどうしようかと悩む顔をする神子に慌ててエルドシールはマントを外し、先程までの自分の様に固まっている神官達の横をすり抜けて岸辺にマントを置いた。

「良かったわ。置いたら後ろ向いていて。そっちの人達も」

言われるまでもなくすぐさまエルドシールは後ろを向き、神官達も動揺を隠せない様子でわらわらと後ろを向く。

背後で水をかき分ける音が響き、ざばりと岸辺に上がる音と衣擦れの音がそれに続く。その場にいた全員が全身を耳にでもしたようにその音に集中し、振り向く事を許される時を待った。

「良いわよ」

その言葉にいち早く反応したのは神官長だった。振り向くなり跪いて深々と頭を垂れる。そして重々しい口調で口上を述べ始めた。

「神子様、ご降臨感謝致しまする。私は神官長を務めるグラスローでございます」

神官長に続いて次々と神官達が膝を折るのを尻目に、エルドシールは目の前の神子をじっと見つめていた。

肩に掛かるくらいの不揃いな真っ直ぐな黒髪、群青のマントを纏った素肌は浅黒く、晒された膝から下の脚は細いが儚さは感じられない。華奢というよりも少年の様な瑞々しい筋肉を感じさせ、特筆すべき美しさは無いものの印象的な意志の強そうな眼差しが余計に中性的な雰囲気を助長していた。

しかしエルドシールの目を釘付けにしたのは、露になった額にあ

る宝玉である。濡れて張り付いていた髪のせいで先程は気付かなかった。神官達もしっかりその姿を見る前に平伏してしまったのでまだ気付いていないが、初代神子のみが頂いていたという涙型の宝玉が確かにその額に光り輝いていた。

「神官長、グラスローね。ところで私が跪くべき相手はこの世界に存在するのかしら？」

「恐れ多くもキア神の愛し子、神子様より尊き者はありませぬ」

「それは良かったわ。それでこの国では目上の人間に許可なく話しかける事を許されているのかしら？」

「……っ！　申し訳、ございません」

まさかの皮肉に神官長は額を床に擦り付けんばかりに平伏した。

「理解が早いわねグラスロー。年の功で許してあげるわ。皆、顔をお上げなさい」

恐縮しながらもゆっくりと神官長はじめ上級神官達の顔が上がり、そしてその瞳が驚愕に見開かれ、口からは感嘆の溜め息がこぼれる。彼らの視線は神子の額に輝く宝玉に集中していた。

それに気付いた神子があぁ、と頷いて額の宝玉に触れた。

「私を神子と証明するのはこの祝福の石だけよ」

その言葉の意味を量りかねた一同に戸惑った空気が流れる。その様子に神子はにこりと微笑んだ。

「つまり私には歴代の神子の様な力は一切無いの。普通の人間と同じよ。何故なら私はあなた方を助けるために来たわけではないからよ」

召還～神子のお告げ～

きっぱりと神子の口から伝えられた事実に一同は呆気にとられた。それはそうだ。神子とはその絶大な力で民を助ける者というのがこの世界の常識であるし、そういう者であるから神子と尊ばれるのだ。

「私はね、キア神からの伝言を伝える為に来たの」

そんな一同の驚愕を何故か満足げに見渡すと、おもむろに口を開いた。

「人間で解決出来ることは自分たちでどうにかしなさい。くだらない理由で召還をするならば、召還そのものを出来なくする。そうなれば本当に神の力でしか解決出来ない様な災厄が起きた時、そなた達に未来は無い。以上がキア神からの伝言です」

神子の口から出た言葉に心当たりがあり過ぎるだろう神官長は、畏れ入ったとばかりに再び頭を下げて平伏した。国王も己が当初抱いた憤りを思い出して微妙な顔になる。いつの間にやら自分も神頼みに期待していたと気付いた居心地悪さに、溜め息が出た。

「それで、あなたは誰？」

「……ゼッタセルド国王、エルドシール・ドラクロム・ゼッタセルドだ」

不意に己に向けられた黒く輝く眼差しに、エルドシールはにわかに緊張する。グラスロー相手にあれだけ高飛車に出た相手だ、平伏しなかった自分にどんな皮肉を言ってくるかと身構えた。

「そう。あなた独身？」

またしても神子の口から出たのは予想外の問いで、エルドシールは絶句した。そんなふうに国王に対してあからさまに聞いて来る者はまずいないということもある。が、それ以上に真意が全く分からなかった。女性にそう聞かれたなら相手が己に気があるのだと分かる程度にエルドシールは世慣れしていたし、己の容姿の良さもそれなりに自覚があった。しかし神子にはそういった時に女性が発する色気が皆無だったのだ。

「もしあなたが既婚で、そもそもその気が無かったら申し訳ないんだけど、一応言っておくわ。私は結婚は一生しない。特に権力者とは絶対に無い」

答えないエルドシールに焦れたのか、これまた予想外の断言がその口から放たれた。その断言に言われた本人以上に激しく反応した者がいた。

「神子様……！！」

グラスローはまだ当初の計画を捨てきれないのか、老体とは思えない素早さで立ち上がって神子に駆け寄り、その足下に縋った。

「神子様、どうかこの国のために王妃として……」

「キア神はこうもおっしゃっていたわ。神官は本来の神官の職務を忘れている。近頃は私の声が聞こえる程の信仰心を持たぬ者ばかりで困ったものだ、と」

哀れな老人の声を装って懇願される内容をすっぱり遮って言い放

たれた言葉は随分と辛辣だった。さすがのグラスローも最後まで言う事が出来ず黙り込むしかなかった。慈悲の塊だと言われる神子の情に訴える方法も失敗に終わったのである。

「くく…っ、はははははっっ！！　グラスロー、そなたの負けだ。そもそも神子様を利用しようというのが無礼極まりない話ではないか」

突然笑い出したエルドシールに神官達がぎょっとして振り返る。エルドシールにしてみれば何時も自分を丸め込んでしまうグラスローが翻弄されている様子が愉快でならなかった。そしてまた、やはりこの国を立て直す事に神を頼るのは間違っていたと改めて思った。神子の真意は未だ掴めないものの、神の御心を知る事が難しいのと同じ事だろうと納得した。

「して、神子様はこれからどのようになさるつもりか？」
「私は京子。鈴木京子よ」
「キオーコ？」
「キョウコ」
「キ、ヨーコ？」

エルドシールは聞いた事の無い名前と音に戸惑いながらも、慎重に神子の声をなぞる。自分では上手く出来た様に思えるのだがどうも違うらしく、神子は首を傾げた。

「こっちの人には発音難しいのかしら。キヨで良いわ」
「キヨ様」
「……なんだか本当に神子様になった気がして来たわ……」

ぼそりと呟かれた言葉の意味が分からずエルドシールが怪訝な顔

をすると、神子は軽く首を振って苦笑した。

「何でも無い。それでこれからの事なんだけど、女性でも神官になれる？」

「なれるが、それにはまず尼僧として修行を積まねばならん」

「では見習い尼僧の身分を用意してくれれば良いわ。額の宝石は隠して一般人として後は適当にやるから」

そう神子が告げた瞬間、それまで大人しくしていた神官達が色を失って騒ぎ始めた。

「見習い尼僧など、とんでもない！！」

「私はあなた達に話して良いと許可してないわ」

鬱陶しげに彼らを一瞥する眼差しにひるまず、神官長は無謀にも神子の手を握る。

「いいえ、神子様！　これだけは！　御身がどれほど尊いかご存知ない！　たとえその額を隠したとしても何処から真実が漏れるか分かりません。見習いでは警護もままなりません。せめて上級神官として……」

「あ～、はいはい、その尊い御身を思惑通りに動かそうなんて思わないことね。尊きキア神も笑ってるわよ。たとえ私がどこぞの国に攫われようと、私がやるべき事は決まっているの。はっきり言えば別にこの国に固執する理由はないのよ。命の危険からならこの石が守ってくれるし」

またしても最後まで神官長に言わせず、放たれた言葉はエルドシールから見ても暴言に思われた。少々神官達が可哀想になる。色々問題はあるものの、彼らの国を思う気持ちに偽りは無い。たとえそ

の気持ちが純粋でなくとも。

「なんと……長くシーラ教を国教として大事にしてきたゼッタセルドを見捨てるとおっしゃるのか……！」

案の定打ちひしがれた悲鳴を上げる神官長はじめ神官達。このままでは不味いな思ったとエルドシールは失礼、と一言声を掛けて神子を強引にマントごと抱き寄せた。そのまま神官達から十分距離を置けるところまで連れて行く。

「王様、あなたも神官達と同じ意見？」

「いや、我は最初から神子召還には乗り気ではなかった。そなたの言う通りくだらないと思ったし、神頼みはご免だと思っていた」

エルドシールの意図を悟ったのか小声で不機嫌そうに問い掛けた神子は、返答を聞くとほっとしたように笑みを見せた。

「良かったわ、やっぱりあなたとは気が合いそう」

神子からそんな評価を得ていたとはと、エルドシールは嬉しく思いながらも言う事は言わねばと気を引き締める。

「しかし、王としてはそなたが他国に攫われる事には賛成出来ぬ。今我が国は余り良い状況ではない。神に見放されたと侮られれば、我の命どころか国そのものが危うくなる」

「うーん……、まぁ王様としての言い分は理解出来るわ」

気性が激しいようだが他人の意見に耳を貸す姿勢はあるらしいとエルドシールは安堵し、そのまま話を続けた。

「だが神子様の望みを無下にしてはいずれ本当に見放されるとも限らん。そこでだ、我が母のところへ行かぬか？　母上は修道院で修道院長を務めておられ、そこならば母上の警護官も常駐している。表向き希望通り尼僧見習いとして過ごすことは可能だ。それから……神子であるキヨ様にこんな事を言うのは無礼かも知れぬが、神官達の顔も少しは立ててやれ。彼らの有り様は神子にとっては腹立たしいものかも知れぬが、国を思う気持ちは王としては有り難い事なのだ。味方は多いに越した事は無い。味方にしないまでも、敵にする事はキヨ様のためにもならない」

じっと見つめていると吸い込まれそうな漆黒の瞳を見据え、エルドシールは心を砕いて話した。伴侶にはなれずとも、この存在をこのまま手放すのは惜しい。

「……分かったわ」

多少は怒りをぶつけられるかと覚悟していたが、エルドシールの予想に反して何故か恥ずかしげに目を逸らして居心地悪そうに一歩離れた。それから二人の様子を見守っていた神官達に向き直り、表情を先程の自信に満ちたものに変えて口を開いた。

「神官長。私は王のご生母である修道院長の元へ身を寄せます。陛下のご生母の警護官も常駐しているし、危険は少ないはず。心配なら独自に尼僧としてでも警護を任せられる者を寄越して構わないわ。ただし、私が神子だと拷問されても話さない様な口の堅い人間にしてね」

かくして召還に関与した人間と秘密を知る事を許された少数の人間のみがその存在を知る神子は、一尼僧見習いとしてこの世界に居場所を得たのである。

汝、恐れることなかれ1

「陛下。今日は随分とご機嫌麗しいようですが、何か良い事がございましたか？」

何時もと変らぬ態度をとっているつもりだったが、ドールーズには分かってしまったようだった。書類への署名が一段落したことを見計らって声を掛けていた男に、エルドシールは顔を上げる。

「……気になるか？」

「それは勿論でございます。それが臣下というもの」

瞬時にどの程度話すかエルドシールは脳内ではじき出す。おそらくドールーズは昨夜も抜け道を使って神殿に赴いたことに気付いているだろう。

「うむ……。そなたは信じてはいない気がするが、キア神の涙を知っているか？」

「キア神の涙、ですか？　あの神子が降臨されるという……」

「そうだ。あの泉は半ば伝説化しているが、実際に神殿内にある」

三年に一度の大祭がキアの涙において祭祀が行われるのは、この国の民なら誰でも知っていることである。神子大祭は国一番の祭りであると同時に、世界一の祭りでもあった。世界の人々のおよそ四割はシーラ教の信者で、初代神子を信仰する二割強のリルル教の信者にとってもその降臨の泉の祭りとなれば無関心ではいられないの

が当然であろう。
だがしかし、その泉を実際に見た者はいない。祭祀は常に神官長と十人の選ばれた上級神官によって行われ、その情報は秘匿されて来た。それゆえ、実際にそんな泉は存在しないのではないかと疑う者も意外と多い。

「陛下は実際にご覧になったのですか？」

「うむ。実はな、王も臨席を許される秘された祭祀がある。頻度としては百年に一度あるかないからしいから、最初で最後だろうが。昨夜がその祭祀だったのだ。まさしく神秘の泉であった」

真実を語った上で一番隠したい事実だけを言わないという選択によって作り上げた話が、一番秘密を守るのだと経験的にエルドシールは知っていた。虚偽は不自然さを隠すために最低限混ぜるだけだ。あの場で経験した出来事は、語る時に無感動でいられない程大きな出来事であったし、相手に悟られる程態度にも出ていたなら全て隠すよりもそうした方が怪しまれない。
それにいつ離反するか分からない暫定の味方である相手に対して、腹の内を少しも見せないのは得策でない。釣りきれていない魚に餌はやはり必要だ。極秘中の極秘のキア神の涙の情報はたとえ信者でなくとも魅力的な餌だろう。
それは重畳でございましたと驚きを見せて頷くドールーズに、エルドシールは成功したか、と安堵した。キア神に仕えるグラスローならともかく、この男に神子の存在を知られては厄介だ。
あの神子ならドールーズさえもいなしてしまいそうだが。

「それよりも、今日の御前会議で決まった王妃候補の話だ。そなたはどう思う？」

最初は二十近く上がっていた正妃候補も年月を経て三人に絞られていた。つまり大きな派閥三つに集約されたわけだが、血筋など条件的にはいずれ劣らぬといったところだ。それぞれが一歩も譲らないので、最終判断は結局のところエルドシールに任された。三人の姫君は正式な正妃候補として近く王宮に上がることになっている。

「今は善くも悪くも国内の勢力は調和がとれていますが、いずれの姫君が正妃になられてもその調和は崩れるかと。いっそ他国から正妃をお迎えして、国内の候補の姫君はまとめて側室になされば、と思いますが……」

「それは不可能であろうな。貴族達はこぞって反対するだろう。そんな事を言えば最悪どこからか父上の御落胤でも出て来て、首をすげ替えられかねない」

ドールーズの言葉はエルドシールも何度か考えた事だ。しかし、自分たちの推す姫を正妃にして権力の拡大を狙う者達からすれば承服出来ない相談だ。思い通りにならない傀儡の王はお払い箱にされてしまう可能性が高い。

「どなたを選ぶのが一番被害が少ないかと言えば、セリーヌ嬢でしょうな」

「うむ」

セリーヌ嬢の父、ガルニシア公爵は官僚の支持者の多い穏健派で知られ、他の二人の候補者を推す旗頭、血筋こそ全てという保守派のレイゼン公爵、武門の名門で少々過激なところのあるゼットワース侯爵に比べれば幾分マシではあった。

「陛下」

「何だ？」

「いっそ派閥と関係の無い姫君に一目惚れでもなさったらどうですか？」

何時もの様に柔和な笑みを貼付けたままのドールーズの雰囲気が少し剣呑なものに変る。どうやら策があるようだ。

「……それで？」

促してやれば恭しく頭を下げて、幾分潜めた声で話し始める。

「恐れながら浮いた話一つ無い陛下が政治権力の意識の外でご所望された女性ならばよっぽどの事、皆様もいずれかの姫君を正妃に立てた上で側室にならと妥協するかと。陛下のご寵愛は側室のもの、との認識を広めた上で正妃を迎えられれば、或る程度正妃ご実家の派閥の台頭を抑えられるでしょう。その上側室にのみお子様が誕生すれば自然と正妃から力を奪う事が出来ますな」

「臣下の言う通りに正妃は迎えても、お飾りにして力を削いでしまえば実質無力か」

成る程、妙案ではあるなと思う。現段階では取り得る最上の策であることは間違いない。さすが己の才覚一つで成り上がったと豪語するだけあって、頭は良い。

しかし、エルドシールは頷けなかった。権力と金に群がる女をいくら利用しようと心は痛まない、とは言えない。地位はあっても力が無いゆえの苦しみをエルドシールはよく知っていた。

権力と金に縋らざるを得ない状況に女達を追い込んでいるのは、他ならぬ自分たち支配者階級の男達である。今の貴族社会を見れば一目瞭然だが、女は男の道具でしかない。貴族の姫君としてかしずかれていようとも、父親や兄弟に言われるがままの人生を送らされる姿は奴隷のようだとさえ思う。

そして形だけの正妃は傀儡の王である自分にも重なる。それに幼い頃から尼僧院で母をはじめ心穏やかな尼僧達に育てられたエルドシールにとって、女性を道具として見ることは非常に難しかった。

しかしそのような心情をドールーズに知られる訳にもいかない。王とは非情な決断をしなければならない時が少なからずあるのだ。皮肉な事に傀儡の王であるためにそのような決断をせずにすんで来たが、実権を取り戻そうというのならば情に流されぬ決断が出来る王であることを示さねばならない。

「そなたの策、考えておく」

「もしお命じ下されば、陛下の好みの姫君を見繕ってまいりますが」

「そこまでそなたを信用してはいない」

すかさず提案してくるドールーズをエルドシールは軽くひと睨みし、再び書類を手に取り話を打ち切る。

「申し訳ありません、出過ぎた事を申しました」

引き際をわきまえているドールーズが退出すると、エルドシールは深く椅子に凭れて重い溜め息を吐いた。

全て心の内を見せ合って、共に戦ってくれる存在が欲しい。

そう思った時脳裏に浮かんだのは神子の強い意志の輝きを宿す黒い瞳だった。もし神子を側室に迎えたなら、毎日がどれほど愉快だ

ろうか。だが、気が強過ぎて側室には向かないだろうし、何より本人が承知しないだろうと苦笑しながら頭を振る。

今までずっと侍従や騎士、官僚達を注意深く観察し、信頼出来る者を見定めようとして来た。幾人かは信頼出来ると踏んでいるがそれも確信の域ではなく、最後の最後で心の内を打ち明ける事を躊躇っていた。ひとたび明らかになれば、今許されている僅かな力すら奪われてしまうだろう。そうなれば状況はもっと厳しくなる。

しかし踏み出さねば何一つ始まらない事も分かっていた。王妃選びは大きな切っ掛けになるだろう。最初の一歩をどこに踏み出すか、決断せねばならない時が近付いていた。

汝、恐れることなかれ2

その日終わらせるべき執務を済ませると、エルドシールは次の予定に向かって足早に廊下を進む。

先触れを出しておいたこともあり、アルフォース・ファレ・レイゼン公爵は既に宰相執務室前に立ち、恭しくエルドシールを出迎えた。正妃候補の一人、フィリシティア姫の父である公爵は痩せて骨張った身体を折り曲げて臣下の礼を取る。

「これはこれは陛下、いかがいたしました？」

どうぞ中へと誘う公爵を遮って告げる。

「レイゼン公爵、明日から暫く政務を貴殿に任せたい」

実際こんな事を言うまでもなく政務の実権はエルドシールには無いのだが、貴族社会は何事も形が大事なのである。

「は、それは有り難き事にございますが、なにゆえでしょうか？」

急な事に大袈裟に驚いてみせる公爵の神経質そうな視線から、何事か考えるように視線を落として目を逸らす。エルドシールは公爵のある種の強迫観念を覚える様な視線が苦手だった。

「うむ。正妃候補も決まり、いよいよ婚姻が近いので母上にお会いして来ようと思う。婚姻が本決まりになれば、暫くは母上にゆっくりお会いする時間もあるまい。今宵本神殿で禊をしてそのままラダトリアに向かう。十日程で戻る予定だ。何かあれば早馬で知らせるように」

本来なら十日も王宮を留守にするなら最低一ヶ月前に申し出なければならないが、神子のことは急だったため、急に思い立ったように見せる必要があった。今日の会議で正妃候補が決まる事は分かっていたので、それを利用したのだ。

「おお、確かにそうですな。では丁度良い機会でしょうから、陛下からご生母様には是非とも結婚式に出席して頂ける様ご説得下さいませ」

おそらく公爵の中では正妃は自分の娘に決まったも同然なのだろう。痩せているせいか大きく見える目を更に喜色満面で見開くので、どうにもエルドシールとしては逃げ出したい気分になる。その顔がどうしても神殿でよく見ていた地獄絵の壁画の餓鬼に見えてしかたがないのだ。分かったと頷いて準備があるからと早々に退散した。

自室に戻ったエルドシールは侍従に命じて急ぎ旅支度を整えさせる。今回は視察ではなく、修道院に滞在するので個人的な荷物は最小限におさえる。その代わりに騎士達に支給さていた毛布等が古くなって回収されたものの一部を馬車に山積にした。普段なら下働きの者に下げ渡される品であるが、こうして母を訪れる時は持って行くようにしている。この程度のものならわざわざ宰相達に許可を得ずに済む。

王宮と主神殿は大して離れていない。位置関係としては王宮の背後、少し小高い丘になった場所に主神殿が立っている。馬車ならばあっという間だ。

エルドシールはそういえば正面から堂々と入るのは久し振りだ、

などと思いながら神官長グラスローの出迎えを受けた。

「まずはそなたの部屋へ。その後禊を頼む」

グラスローは心得たとばかりに頷き、禊の用意を下級神官に指示して執務室に向かった。

扉を開くと中には見慣れぬ尼僧がいた。当然人払いすると思っていたグラスローはエルドシールが中に入るとそのまま扉を閉めてしまうし、何故かと顔を顰めた。そんなグラスローは何故か意味ありげにしわを増やして微笑み、そこではっとエルドシールはその尼僧が神子だと悟った。

頭巾に隠されて髪の色こそ見えないが、あの黒い瞳は間違え様が無い。

「キヨ尼僧、か」

「キヨ尼僧見習いです、陛下」

澄ました表情で恭しく頭を下げる姿に戸惑う。昨夜の神子の態度とはまるで違う。

「それで、明日のことはもう話してあるのか？」

昨夜はあの後くしゃみをした神子を慌てて風呂に入れ、母上のいる修道院へ神子をお連れする算段をグラスローと簡単に打ち合わせしただけだった。

抜け道を使って来ていたので余り長居は出来なかったからだ。書面で知らせるには不安があったのでもう一度詳細を打ち合わせねばならない。

「明日、ラダトリア修道院に向かうということは既にお伝え申し上げてあります」

グラスローの返答に軽く頷いて神子に向き直る。

改めて見るとゆったりとした尼僧衣の上からでも豊かな胸の存在が分かり、少し幼げな印象を受ける顔立ちと中性的な印象に反して成熟した女性なのかもしれぬと思った。身長も成人女性より少し低い程度だ。

「では、キヨ尼僧見習い。明日、そなたは我と共に母上のいらっしゃるラダトリア修道院に向かう。馬車でまる一日の旅になる。書簡は第三者に見られぬとも限らぬので母上にはそなたのことは伝えてはいないから、あちらに着いてから事情を話すことになる。

それからそなたの素性だが、南のマゼン海王国出身の流民というのが妥当だろう。マゼンの民は黒髪黒目が多いし、肌の色も近い。修道院は俗世と縁を切った者の住処だから俗世での事情を聞かれることもないだろうが、一応それくらいは覚えておくと便利かと思う。何か他に聞きたいことはあるか？」

「恐れながら私も陛下と同じ馬車で参るのでしょうか？」

「その方が目立たぬし都合が良いと思うのだが、何か不都合があるか？」

神子の真剣な眼差しに少し不安になって問えば、解釈に苦しむ返答が微笑みと共に返って来た。

「いいえ、私にとっても好都合です。丸一日、陛下を独り占め出来ますね」

ぎょっとしてグラスローを思わず見れば、彼もまた意味深な微笑みを浮かべた。

「なかなか頭の痛い状況にいるみたいね、王様。グラスローから話は聞いたわ」

翌朝、馬車に乗った途端に豹変する口調と雰囲気に、エルドシールは一瞬動きが止まる。

「……神子様は人を翻弄するのがお好きのようだな。何から聞いていいやら分からなくなって来た」

「順番に聞けば？」

「では。口調が違うのはここならば聞かれる心配が無いからか？」

飄々とした態度の神子に気を取り直して、とりあえず気になった順に聞いて行くことにした。

「そうよ。正体がバレたら私の計画も狂っちゃうし。壁に耳あり障子に目ありってね」

ショウジが何かは知らないが、言いたい事は分かった。神子も普

通の人間の様に人を欺くことは出来るらしい。

「グラスローとは随分打ち解けたようだが、何かあったのか？」

「別に。ただこの国の状況とあなたの事聞いただけよ」

召還時はあれほど人間の事情など知った事かといった態度だったのに。やはり神子の考える事は良く分からぬ。神子に話を聞いてもらってあのグラスローが満足したのか……？

言葉を交わさずとも通じ合っている様な、申し合わせたような昨夜の二人の微笑みを思い出して、顔をしかめる。

「うむ……そなたは余り身分の上下を気にしないように見受けられる。それなのに召還された時は随分と高圧的な態度だったが」

「そりゃ簡単よ。私が小娘でグラスローが海千山千のじじいだから。私には特別な力が無いわけだし、舐められたら終わり。だから先制攻撃でどっちが格上か一発で叩き込まなきゃなんなかったわけ。ちょっとやり過ぎちゃったから、あの時あなたが止めてくれて助かったわ。有り難う」

海千山千のじじい。中々衝撃的だ。そのような言い回しは初めて聞くが、つまり狸だと言う事だろう。はっきり言ったものだ。

それに先制攻撃がどうとか、それは何処かで聞いた事がある。孤児院のガキ大将が言っていた喧嘩のうんちくだった気がする。

それでやり過ぎて止められたからあの表情か、とエルドシールはあの時神子が見せた何処か恥ずかしげでバツが悪げな様子を思い出した。

神子、として見るから分からないのか？

数々の驚きも、相手が口の悪い部類の頭の回転が速い人間と仮定

すると納得いくものが多い。年頃の娘ならまず身を隠すものを欲するだろうし、自分の意志に沿わぬ事をされれば怒りを持って拒絶するのも当然だ。いやな事はいやだと言ったに過ぎない。やり過ぎたと反省したから歩み寄ってグラスローの話を聞いた、と。

「非情に無礼かもしれぬが、神子の思考回路とは人間と大して変らぬものなのか？」

すると神子は黒い瞳を丸くして、それは嬉しそうに口元を笑みの形にした。

「ご名答。だって私、元々普通の人間だもの」

あっさり告げられた言葉に、エルドシールは何度目か分からぬ絶句するという状況に目眩を感じた。

汝、恐れることなかれ3

キア神の神子、といえば現人神のようなものだ。
決して人間ではない。
彼女らは常に神子としてこの世に招かれ、神子として生涯を閉じた。人間が神になれるなどとちら、とでも考えることすら普通はあり得ない。
普段余り物事に動じない質のエルドシールだったが、これには頭を抱えた。自分が育った孤児院で日夜すり込まれた“常識”を打ち壊されるのは、なかなか精神的にきつい。

「……一つ聞くが、普通の人間が神子になれるものなのか？」

「そうよ、代々の神子もキア神に力を与えられた普通の人間。ただし、異世界の、ね」

「異世界……」

また突拍子も無い言葉が飛び出す。

「そう。神様にも色々制約があって、そういう面倒な手続きを経ないと地上に自分の力を反映させることが出来ないんだって」

「……それは……キア神から直接聞いた、ということか？」

「そうよ」

キア神は実体の無い神と言われている。だから神子を遣わすのだと。しかし、直接聞いたということは、キア神に実体はあるらしい。

色々な意味で許容範囲を超える情報に、エルドシールはどっと疲れを感じて溜め息を吐いた。

「……何と言うか、そなたが言うなら本当なのだろうが、話が大き過ぎて抱えきれん……」

「そうでしょうね。私だって異世界から来た神子です、とか名乗る奴がいたらまずは正気を疑うわ。ま、必要の無い知識だから理解する必要は無いと思うけど」

エルドシールもその言葉には頷く。実際にキア神の涙での召還に立ち会ってその額の宝玉を見ているからどうにか信じられるが、普通なら信じられる話ではない。

「あ、この石もキア神がくれたの。前もちょっと話したけど、命の危険を回避してくれるんだって。どんなふうにかは分からないけれど」

今は頭巾に隠された宝玉がある辺りを無意識に見つめていると、神子は肩を竦めて布の上から額を軽く撫でながらそう言った。一見ごく普通の尼僧にしか見えない娘の額にそんなだいそれたものがあるとは、到底思えない。

「そうそう、私、五人目の神子だってグラスローが言ってたけど、キア神からは三人しか聞いてないのよね。何か知ってる？」

「あぁ……三代目神子ハーナ様の後、記録上では四人目の神子が存在する。しかし、この神子は人ではなかったので神殿で大事に育てられたが、歴代の神子のように何かを成されたわけではないし、余り知られてはいない。神子と呼ばず神獣と呼ぶ方が一般的だな」

およそ百年前に行われた召還で現れたのは黒い小型の獣で、美しい姿をしていたという。その解釈を巡っては未だ神学者達が激しく議論を戦わせている。

「あ。もしかして、これくらいの大きさの、黒い動物？」

両腕で抱える様に環を作って問う神子に驚いた。

「知っているのか？」

「うん。こっちの世界にはいない動物？」

「いないな」

「私の世界ではネコっていうのよ。くだらない理由で神子召還されたから、神子を降ろすわけにいかなくて身代わりに黒猫を送ったって言ってた。それであやまちを悟ってくれればって思ったみたいだけど、また召還するから困ってたよ」

世間話のように語ってくれるが、エルドシールにしてみれば背筋が寒くなる思いだった。聖堂に暫く籠って、我ら人間の不徳を懺悔せねば。グラスローにも伝えよう。

しかし、神獣も神子のいた世界から来ていたのか。異世界とはどんなところだろうかと思いを馳せ、ふと疑問に思った。

「そういえば神子はこちらの言葉を話すが、異世界でも同じ言葉を話すのか？」

「そんなわけ無いでしょ。キア神がそうしてくれたの。だから文字も読めるわよ。ただし書いた事は無いから、練習しないと書くのは無理ね。それから元人間てばらしちゃったんだし、キヨって呼び捨てで良いわ」

「では我のことも名前で呼べ」

「エルドシール、だっけ？じゃあエディ」

平然とそう受け答えする娘に、神子と思っていた時には感じなかった疑問を感じた。

「キヨは我が王だと知っても平然としていたが、それが異世界では普通なのか？」

「うーん、産まれた国によるかな。王様がいない国もあるし。私の国には貴族とかはいなかったけど、ちょっと特殊な王様はいたわ」

「特殊、とは？」

「政治権力を持たないのよ。精神的な支えとしての象徴的な王様。天皇って呼ばれているけれど、どっちかっていうと宗教に近い感覚があるのかも？　その行動や言動は道徳的なお手本、ていうか……。海外との外交活動で国益に寄与したり、慈善事業や式典に出席したり。でも政治を動かす人間を任命する権利は持ってるけど、その人間を選ぶ権利も政治そのものを動かす力も無いの」

「実権は無いのに、尊敬されていのか？」

「私の国はね、かつて大きな戦争に負けたの。その時、敗戦国にな

った私の国を統治しに来た司令官に陛下がおっしゃったのよ。国民は悪くない。全て私の責任だって。実際戦争は軍部が暴走して泥沼化したけれど、陛下自身は戦争には積極的でなかったと聞いているわ。そして陛下は実権を奪われたけれど処刑されることもなく、敗戦国なのに属国にならずに独立国として生き残った。勿論他にも色々な思惑や駆け引きがあった末にそうなったわけだけど、その後天皇陛下やそのご家族が権力に頼らずに国民に尽くす道を歩まれた。少なくとも私はそう思っていて、だから尊敬しているわ」

敗戦国の王が処刑されなかったのにも驚いたが、その後の一節が酷く心を捉えた。

「権力に頼らず、国民に尽くす道か……」

考えたこともなかった。裏を返せば、権力が無ければ国民に尽くすことなど出来ないと思っていた。

「言とくけど、あなたが王様って思えば自然に敬語が出るくらいにはちゃんと教育受けてるわよ、私。でもあなたを対等に扱おうとするのは、腐っても神子様の自覚があるから意識してやってる事でもあるわ。神様の前には人は皆平等。王様も乞食も同じ人間」

キヨの言う事はとても良く分かる。敬語は使うだけで身分の上下をはっきり分けてしまうのだ。神子として扱われるのを拒否しながら神子の自覚を持つという不思議な娘は、やはりどこか普通の人間とは違うと思った。

「そなたは腐ってはいないと思うぞ。神の前には皆同じ、か。分かっていてもそう行動出来るものは少ない。身分を知れば態度が変わる」

「それは私がこっちの世界にしがらみが無いからよ。あっちの世界ではしがらみがあったから、理不尽な状況でも従っていたこともあるわ。でも、あなた怒らないのね」

「何を？」

「乞食と同列に扱われても。王様ってもっと気位が高いものだと思ってたわ。それともあなたが特別なのかしら？」

キヨの問い掛けに思わずエルドシールは苦笑した。十五歳までの環境を思えば、自分は庶民と大して変らないのだ。

「キヨ」

「何？」

「キヨも我と同じ普通の人間だ。そう思ってみれば我はそう難解な人間では無いと思うぞ。普通の人間としてみれば、キヨは基本的に理解の範囲内だ。神子と思ってみれば理解が難しい」

「両方とも私なのに？」

「神子がどういった存在なのか、我は小さい頃から刷り込まれている。我は修道院育ちだし、慈悲深く神の御業を使って世界を救う神子がするだろうと予想される行動、言動というものがある。だが、キヨの行動も言動もその予想を裏切るからな」

キヨは苦笑いして、何かを誤魔化す様に視線を彷徨わせた。

「確かに。でもその割りには神子という存在に囚われていないのね」

「そうか？」

「そうよ。凝り固まった信仰心を持つ神官なら、こうあるべきという姿に沿わない神子は存在してはならないっていう方向に思考がいくでしょうね。グラスローがそういうタイプじゃなくてホント助かったわ」

俗にいう狂信者というやつか。

「グラスローは……神官というより政治家だからな」

「そうね、利害の一致を見れば案外すんなり手を組めるし。あなたの言った通り、国の事を憂いているのは本当だったみたい」

「利害の一致？　一体どんな一致を見たんだ？」

「それはそのうち教えてあげるわ」

飛び出した意外な言葉が非常に気になって喰い下がったが、結局教えてくれなかった。上手い事はぐらかされて興味の矛先を異世界の教育事情に向けさせられてしまったため、昼食休憩までの間エルドシールは好奇心に従って異世界の学制についてキヨを質問攻めにした。

汝、恐れることなかれ４

昼食後、再び馬車での旅が始まると、キヨは世話になる予定の母について教えて欲しいと言ったので、母の人物像から始まって妾妃になった経緯、そして現在の状況などを問われるままに答えた。妹レンカに関しても問われたが、実のところ兄であるエルドシール自身もその所在や現在の状況を把握していなかった。

第一王子が不虞の事故で亡くなった翌年、三歳のエルドシールと二歳になったばかりのレンカは神殿に預けられた。一年後、ローレッセン王が討たれたのを契機に再び尼僧に戻った母と再会し、母は修道院、兄妹は併設の孤児院に別れて育った。当時内戦で焼け出されて母子共に修道院に身を寄せる難民は多かったので、エルドシールは自分たち親子も同じ様な境遇だろうと思っていた。

王宮の記憶はうっすらとあるものの自分が王子という認識は無かったし、レンカにいたっては全く覚えていないようだった。その上アレシアは母として幼い兄妹に接してくれたが、同時に俗世と別れを告げた尼僧として父の事は一切話すことはなかった。エルドシールは孤児院で庶民の子供達と共に、分け隔てなく育ったのである。

唯一エルドシールが他の子供達と違う待遇だった事はといえば、当時ラダトリア地方の司祭長だったグラスローに毎日二時間程度の特別授業を受けていたことくらいである。孤児院の暮らしは貧しく辛い事も多かったが、心穏やかな尼僧達に囲まれて精神的には恵まれた環境だったとエルドシールは懐かしく振り返る。

そして貴族達がエルドシールを王として迎えるためにやって来た十四歳の秋、その生活は突然終わりを告げたのだ。母は兄の知らぬうちにレンカを何処かに隠し、不在に気付いた兄は当然妹の所在を

聞いた。
　しかし母は何も知らない事があの子を守る一番の盾になる、お前もあの子は死んだ者と思って忘れなさいと厳しい口調で告げ、その後妹に関しては一切口を閉ざしてしまった。母は貴族達には妹はとっくに流行病で死んだと伝えていた。
　当時は母の思いも意図する事も理解出来なかったが、今は良く分かる。現王の実の妹となれば、その存在が知られれば否応無しに政治に巻き込まれてしまうだろう。妹の他に七人いた王女も内戦に巻き込まれて死ぬなどして今は四人にまで減っているし、政治の道具として有効な未婚の王女は既にいない。
　挨拶一つ出来ずに生き別れてしまった妹の事は、抜けない棘の様にエルドシールの胸を時折ちくりと痛ませた。

「守ってやれるだけの力が無いから探す事も出来ぬ」

　おそらくグラスローに聞けば渋っても最後は答えてくれる気がするが、知ってしまえば遠くから姿を見るだけでもと思うだろううし、それを我慢するのは難しい気がする。自分が動けばレンカの存在を知られてしまう可能性は高かった。だからエルドシールはあえて聞かないことに決めていた。

「逢いたい、わよね……」

　意外な事にキヨは少し涙ぐんでいた。何か痛みを耐える様な表情に、もしかしたらキヨにも兄弟がいるのかもしれないと思った。

「逢いたい。だが思うだけだ。叶ってはならぬ願いだ」

「……決めたわ。神子としてはむりだけど、ただの尼僧見習いキヨとしてあなたの全面的な味方になるわ。孤児院育ちで、お人好しで、

素直で、全然王様に向いてないと思うけど、すごく気に入ったから」

何がどうしてそういう結論に達したのか、エルドシールには全く分からなかったが、味方になると言ってくれた嬉しさよりも殴りつけられたような衝撃が勝った。

エルドシールは、決意を決めた清々しいキヨの笑顔を呆然と凝視したのだった。

「……お人好しと言われたのは初めてだし、王に向いていないとそんなにはっきり言われたのも初めてだ」

王に向いているとは自分でも思わない。だが他人にはっきり言われるとこれほど衝撃を受けるものなのか。キヨには攻撃しているつもりは毛頭無いだろうが、物理的な攻撃に換算するとみぞおちを思い切り殴られたくらいの威力があるな、とエルドシールはショックを受けている割りに冷静に分析していた。

同時にそんな自分に少し驚いたりもしていた。

「お人好しでしょ？　だって結構悲惨な目に遭ってると思う。孤児院の生活だって生易しいものじゃないだろうし、身分とか、傀儡の王とか、妹と生き別れとか、捻くれる原因要素満載じゃない。その割りには、誰も恨んでないでしょ？　ロクデナシの父上に対してでさえ、全然嫌悪感ないみたいだし。なんだかエディってどんな人間でも、“そういうもの”としてすんなり善も悪もなく受け入れちゃう感じがする。私の事も、異世界の存在も、割とあっさり納得しちゃうし」

恨んで当然と言わんばかりの口調に、エルドシールははて、と首を傾げた。恨むとしても誰を恨むものなのだろうか？

父は確かに国王としても夫としてもあまり褒められたものでは無

い。しかし父がいなければ当然自分もいないわけで、慕ってはいないが嫌悪する理由が見付からなかった。顔も覚えていない思い出一つない相手なので、父という感覚が薄いせいもあるかもしれない。エルドシールにしてみれば、父という存在は客観的な記録上のものでしかなかった。

「そう言われれば……そうなのか……？　確かに恨む気持ちは、誰にも抱いていないし、そなたの話も疑ってはいないな。しかしあっさり納得したわけではないのだが……」

「勿論額に物証はあるし、召還の場にいたからっていうのを差し引いてもっていうことよ。自分の常識を越える事に遭遇すると普通は都合の良い様に曲解したり、拒絶するものじゃない？　だから素晴らしいとは思うけど、不測の事態に対して柔軟性があるっていうよりエディの場合素直過ぎるっていうか。鈍いだけなのかもしれないけど、そういうのって普通王様向きじゃないでしょ。傀儡の王様向きかもしれないけれど」

「耳が痛いな。だが、信じやすいわけでは無いぞ。逆に慎重過ぎているかもしれんと思う。そのせいで王宮に四年も居ながら未だに確固たる味方がいない。お人好しという評価は、甘んじて受けよう。傀儡の王を脱したところで自分に務まるのかと不安に思って二の足を踏んでいる部分もある。非情にならざるを得ない場面があるのは分かっているのだが、いざその時になってみたら出来るかどうか……」

二度目の攻撃は耐性が出来たのか、思ったより衝撃は少なくて済んだ。よし、反撃は出来なかったが一応受け身はとれた。何故かエルドシールの頭の中では剣術の稽古が繰り広げられていたが、キヨには勿論知るよしもない。

しかし、次のナイフ投げの様な短く鋭い攻撃に対応出来なかった。

「そういうところは普通に馬鹿ね」

「……馬鹿……」

馬鹿。

それはどういう意味だったか思い出すことを全力で拒否しているのか、エルドシールは頭が真っ白になった。自分は天才だとは思ったことはないが、選りすぐりの教師達が及第点を出す程度には出来が良かったはずだ。

冷静に考えれば勉学の上での馬鹿では無いということは簡単に分かりそうなものだったが、傀儡と思われようとも馬鹿とは思われない様に努力を重ねて来たエルドシールには強烈なカウンターパンチだった。

汝、恐れることなかれ5

「王様向きじゃないあなたが普通の王様目指してどうすんの。お人好しのあなたにしかなれない普通じゃない王様目指すべきでしょうが。こういう時こそ逆転の発想でしょ。弱点を長所に変えるのよ。周囲の固定観念に付き合ってたら、あなた自身が傀儡の王から抜け出せないことになるわよ？」

少しショック状態から立ち直ると、エルドシールは自分なりにキヨの言う事を理解しようと試みた。先程まで頭の中で繰り広げられていた剣の稽古を思い浮かべる。

武器を長所と仮定してみよう。王が持つべき武器は剣だと信じて来たが、実は自分には剣よりも槍の才能があるのに剣に固執してその才能を見過ごしている、ということか？

うむ、多少は違うかも知れんが当たらずとも遠からずだろう。なかなか良い例えを思いついた。だが、お人好しが武器になるとはどういうことか、具体的な事例が全く思いつかない。

「……そなたのいう事は、理論上は理解出来る。だが、実際にそれをどうするのか、見当もつかん」

「やっぱり素直。良いわ、じゃあ参謀役やってあげる。まず、目下のところの大問題はお妃選びだっけ？　グラスローもしつこく正妃がどうのって言ってたけど、面倒だからちゃんと聞いてなかったんだよね」

ちゃんと聞いていなかったと悪びれず言うキヨを彼女らしいな、と思ったが、この事でグラスローがした勘違いとそのグラスローを見ていつの間にか打ち解けたと思ったエルドシールの勘違いは、キ

ヨ本人も知らない。

正式に決定した正妃候補三人についてだが、エルドシールには勿論面識がある。しかし個人的に知り合い、とまで言って差し支えない程の関係は無い。

慎重なエルドシールは、紹介されるご令嬢達に通り一遍の社交辞令以上の会話を交わしたことは無かった。下手な事を言えば、これ幸いと百倍拡大解釈によりどんな噂と思い込みを引き起こすか分からない。

しかし、このおかげで臣下の誰もエルドシールの女性の好みを正確に把握する者はいなかった。加えてエルドシールが侍女に手をつけたという噂も事実もどこからも出てこない。

ひょっとして女性に興味が無いのではと誤解され、一時期見目麗しい少年ばかりが侍従として揃えられたこともあったが、当然エルドシールはその辺の思惑には全く気付いていない。エルドシールはといえば、女性を紹介される機会が多少減って不思議に思いながらも気が楽だと暢気に喜んでいただけだった。

「現在、宮廷での勢力図は大まかに三つに分かれているのは知っているか？」

「血統至上主義一派、武力至上主義新興勢力一派、官僚事なかれ主義一派、だっけ？」

多分グラスローから聞いたのだろうキヨの中々的確にその性質を表す表現に、エルドシールは感心して頷く。

「それぞれの一派が推す三人の正式な正妃候補がいる。よっぽどのことが無い限りその中の一人が正妃になるだろう。そなたの言う血統至上主義一派の筆頭は宰相、レイゼン公爵十六歳の娘、武力至上主義新興勢力一派の筆頭は左将軍、ゼットワーズ侯爵の十九歳の姪、

官僚事なかれ主義一派の筆頭は財務大臣、ガルニシア公爵の二十歳の娘、以上三人が正妃候補だ」

「ん。で、傀儡脱出にはどの候補を正妃にしても都合が悪い、と」

説明するまでもなく、悩み所を言い当てられた。が、それは大して驚く事ではない。傀儡脱出を狙っているなどと、エルドシールは一言たりとも誰にも言った事が無い。ドールーズには悟られたし、グラスローは暗に我にそうせよとせっついて来たが。

「……一つ聞くが、傀儡の王を脱したいとそなたに言ったか？」

「グラスローに聞いた。でも別に聞いてなくても話聞いてりゃ分かるわよ」

エルドシールは今までの会話を思い出す。成る程、確かに賢いキヨならそれくらい悟るのは容易い。

「そうか。確かにそなたには全て包み隠さず話しているからな」

「良いの？　結構危うい立場なのにこんなふうに全面的に信頼しちゃって」

「そなたが我を裏切る理由が無い。ただの尼僧見習いには政治的な力は無いし……あぁ、そう考えるとそなたはやはり素晴らしいな。キヨ、そなたが神子として我の味方になると言っていたら、きっと我は包み隠さず全て話すのは無理だったろう」

「……さらっと嬉しいこと言ってくれるじゃない。でも正直殴り掛かりたいくらい恥ずかしいからそれ以上は無し。で、話戻すわよ」

顔を奇妙に歪ませてキヨは言った。照れているらしいが、赤くなったわけでも無くどちらかというと強張ったような表情に、エルドシールは珍しい照れ方をするな、と内心不思議に思った。

「うむ、今は三つの勢力が拮抗しているので表面上は平和なのだ。そっちの睨み合いに気を取られて、我のことは忘れがちになっている辺りは結構自由度が増えて楽だし、それほど重要ではないことは割と我の意見も通り易くなっていたりするし、このままの状況が一番望ましいのだが」

「……エディ、あんた一応結婚の当事者なんだから忘れがちになられて楽とか言うな」

「あ、あんた……」

突然あなたからあんたに変った二人称にエルドシールは顔を青くする。使う言葉で相手との身分の上下関係を明確に示してしまうこの国では、あんた、という二人称は平民が目下の者や、社会的に蔑まれている相手に対して使う言葉である。どうしてそれほどの蔑称を使われてしまったのかと呆然と相手を見ると、不機嫌そうに睨まれた。

「何か文句ある？　あんたなんかあんたで十分よ」

だめ押しに連続で言われてエルドシールははぁ、と天を仰ぎ、キヨの怒りを買ったらしい先程の己の言動を検証する。

「……確かに、結婚するのは我自身だし、不謹慎だった。反省する」

「素直で宜しい。で、何か考えてる策はあるの？」

とりあえず怒りの原因と思われるものを特定して反省を述べると、あれほど怒っていた筈のキヨはあっさり機嫌を直した。キヨの気性は激しいが、赦しの心は寛大らしい。さすが神子を自覚するだけある。

「うむ。我の策ではないが、策を立てて進言して来た者はいる。その男はレイゼン公爵の一派に属しているが、我に直接己を売り込んで来た自称我の味方だ。才能があって野心がある分、中々に巧妙な策を立てる」

気が進まないものの、他に良い策があるわけでもないので昨日ドールーズに提案された策を正直に話した。

「でも、その策は嫌なんでしょ？　顔に出てるわよ」

キヨ相手に隠す必要は無いので、エルドシールは渋い顔で頷いた。

「じゃあ別の方向から考えてみようか。政略結婚そのものには別に抵抗無いの？」

「あぁ。恋愛結婚に憧れを感じないわけでは無いが、共に時間を過ごす事で育てられる愛情もあるし、我には向いていると思う」

「そうね。エディって外見派手なくせに、恋愛とかだと退屈って思われそうな地味ないい人系キャラだし」

「た、退屈……地味……」

「うん。それで男で苦労した女が最後に行き着く安住の地」

「……」

この衝撃を何と言い表したら良いのだろうか。エルドシールの頭に浮かんだのは剣の師匠である王立騎士院の教師だった。元親衛隊の隊員である男は、ローレッセン王を狙った刺客と戦って左腿に深い傷を負った。すっかり傷は塞がった今でも寒い夜はズキズキと痛むという。俗にいう古傷が痛むという奴だ。今回の攻撃は、きっとそういう傷になる。

別に恋愛に対して積極的な興味があるわけでもないのだが、馬鹿と言われた以上の破壊力に何をどうやって立ち直る切っ掛けにしたら良いのか分からなかった。遊戯のように女達との恋愛を渡り歩いて自慢する貴族達は理解出来ないが、必要があれば出来ないこともないと思っていたのだ。

キヨは素晴らしいと思う。思うが、我の方も側室は無理だ。何と言うか、男という生き物は繊細な生き物なのだ。きっとキヨ相手では勃たない。

昨日キヨが側室になったら愉快だと思った自分を全力で否定したい。

「そういえばエディって何歳なの？」

「十九だ」

「十九！？　その性格と枯れかけたっぽい言動で！？　まぁ、外見は若いと思ってたけどっ」

大袈裟だろうと思う程の反応を見せるキヨとその台詞に、流石にエルドシールもむっとした表情になる。

「……そういうキヨは幾つなのだ？」

「二十三よ」

「二十三か」

事によったらもっと上かとも思ったが、意外にも想像の範囲内だった。キヨに限っては常識は通用しない、というのが既にエルドシールの常識になっていた。

「驚かないのね。グラスローなんか十五くらいって思ってたみたいだけど」

外見の印象をそのまま年に換算すればそれくらいだろう。が、狸のグラスローがそう思っていたとは意外だ。

「そなたの言動で十五という方が頭痛を覚える」

「言うわね。とにかく話戻すわよ。で、その策の一番嫌っていうか引っかかっている事は何？」

「甘い……と言われるかも知れんが、利用する事になる側室の女性と正妃になる者の苦悩を思うとな……そんな非情な事はしたくないと思ってしまうのだ」

「ふーむ。じゃあ面倒な派閥とか調和とかそういうことを一旦棚上げにして聞くけど、どういう結婚をしたいと思ってる？」

そんな事を聞かれたのは初めてだ。結婚は常にエルドシールにと

って臣下の思惑と欲望が渦巻く、済ませなければならない政治の一段階であった。どういう結婚がしたいかぼんやり願望めいたことは思うことはあるが、事情を棚上げして純粋に結婚そのものを考えた事はない。試しに考えてみると意外にも割とすぐに考えが纏まった。もしかしたら無意識に考えていたのかもしれない。

「我は政略だろうと結んだ縁を大事にして出来る限り正妃を大事にしたいと思う。跡継ぎが出来ねば側室を迎えるのも仕方ないだろうが、出来ればそのような事をしたくない。勿論妾妃も迎えるつもりはない」

「えっと…ちなみに側室と妾妃って違うの？」

「側室は正式な妻だ。神殿で結婚式も挙げる。妾妃は私的なもので、子供は正式に認知されるが妾妃には正式な地位は何も無い」

妾妃の子供の地位は横一線である。父が側室を決めていれば側室との間に生まれた王子が第一王子の死後、繰り上がって王太子になったはずだ。側室は単純に迎えられた順番で地位の上下も決まるから、側室が複数いてもおそらく内戦は避けられた筈だ。避けられなかったとしても、これ程泥沼にはならなかったに違いないし、自分の息子に殺されることも無かったのではないだろうか。何故そうしなかったのか我が父ながら全く理解に苦しむところである。

「ふむふむ。で、この国では妾を持ったり、政略結婚には愛が無いというのがわりと通常認識だったりする？」

「そうだな。父がああだったからか、今も多く妾を抱える事を自慢する事はあっても恥に思う者はいないな」

「使えるわね」

「何がだ？」

「あなたの誠実さが、よ。それを餌にして正妃を釣り上げようじゃないの」

「正妃を、釣り上げる？」

相変わらずキヨの言う事は突拍子も無い。先程結婚を真剣に考えない我を不謹慎だと怒っていたのに、釣り上げるという言葉はどうなのか。大事な花嫁を魚に喩えるなど、不謹慎ではないのか？

「そう。どの正妃候補でも良いけど、そのうちの一人でもその餌に食いついてくれたら、正妃はあなた自身の味方になって自分から実家派閥の専横を戒める様に動いてくれるわ。心強い相棒が出来てまさに万々歳じゃない？」

「つまりどの正妃候補でも良いが、そのうちの一人で良いから我自身に夢中にさせろということか？　だが先程そなた、我は退屈で恋愛には向かぬと申したではないか」

「私の世界では、ね。でもきっと貴族のご令嬢達は飢えてるはずよ。誠実さと一途な愛に」

さっき地底に我を沈めておきながら、今度は持ち上げるキヨの精神構造が分からない。あまり持ち上げられた気はしないし、気分は全く浮上しないが。

「……そうだとしても、どうやって釣り上げるというのだ？」

「だからその作戦を立てるのよ」

やたらと黒い瞳を輝かせ、キヨが立てた計画はやはり突拍子も無いものだった。その計画は無茶過ぎると主張したが、全く相手にされなかった。

「大丈夫、私がついてるわ。私、腐っても神子様なのよ？」

確かにキヨは計り知れない何かがあると思うが、実行するのは普通の人間の我なのだ。

「都合の良いときだけ神子になるな」

「良いじゃない、そう思った方が心強いでしょ」

そう言って笑ったキヨは召還の夜に見せた神子様然とした雰囲気を纏い、平凡な顔立ちが何故か神々しく見える様な、不思議な微笑みを浮かべて告げた。

「全ては神の御心のまま。汝、恐れることなかれ」

暗躍する神子1

修道院に着いたのはかなり夜も更けた頃で、その晩は修道院の外にある巡礼者のための宿泊施設に泊まることになった。

巡礼者の宿泊施設は僧侶なら誰でも無料で使う事が出来る。一般の者は神殿で禊を行い、巡礼証を貰えば使用可能だ。期限は二年と結構長い。これがあれば、一般の者は立ち入る事のできない修道院内へもある程度立ち入る事が許されるし、宿泊施設では一日一回に限り食事も無料で食べることができる。

ただし、巡礼証を得るためにはそれ相応のお布施が必要とされる。お布施であるからどの程度払うかは本来個々人の自由であるが、一応年収の十分の一が目安とされていた。

エルドシールも母を訪れる時は必ず主神殿で禊をし、かなりまとまった金をお布施として納めるようにしていた。その代わりといっては何だが、連れて行かざるをえない護衛達も巡礼証無しでも宿泊施設を利用できる許可を特別に貰っていた。

修道院の朝は早い。エルドシールは早朝の礼拝には参加するつもりでいたので遅めの夕食を取るとすぐに床に着いた。起床予定時間を告げるとキヨは乗り馴れない馬車のせいで尻が痛くてたまらないし、そんなに早く起きれないと文句を言っていたが、態度の割にはひ弱だなと正直な感想を述べたところ絶対起きてやると息巻いていた。予想通り負けず嫌いのようだ。

明けて翌日、まだ夜の闇が微妙に残る早朝、宣言通り不機嫌な顔をしながらも予定通り起床したキヨを伴い、エルドシールは修道院の門をくぐった。

門を開けた顔見知りの老尼僧はエルドシールに連れられた若い尼僧に驚いたようだったが、何も聞かずに笑顔で迎え入れてくれた。隣でキヨがふっと緊張を解くのを感じてエルドシールも思わず微笑

んだ。
聖堂の末席で早朝礼拝に参加して遠目で母の姿を確認したエルドシールは、何時もと変らぬ様子にほっと安堵の吐息を吐いた。手紙のやりとりは頻繁にしていたが、母の姿を目にするのは殆ど一年ぶりである。キヨはと言えば、先程までの不機嫌な表情は消えて物珍しそうに礼拝の様子と聖堂の彫刻や絵画などを見ていた。
礼拝が終わると一旦宿泊施設に戻って朝食を取り、再び修道院の門をくぐる。

いよいよ母にキヨを引き合わせる時が来た。修道院長室へと先導する尼僧の後にエルドシールとキヨが続く。道すがら、エルドシールはだんだんと緊張して来る自分に顔を顰め、腹が痛くなりそうだと思った。
キヨの立てた計画には、母も巻き込む必要があった。エルドシールは母上は巻き込んで欲しくないと再三言ったのだが、信用出来る人間が少な過ぎる、今までボケッとしてたツケなんだから我慢しろと押し切られた。

しかしながら、いくらキヨでも母は首を縦に振らないだろうとエルドシールは思っていた。母アレシアは相当な頑固者で、エルドシールの知る限り一歩たりとも修道院からは二度と出ないと言い続けて来たし、実際それを頑なに守り続けて来た。王宮に来れば否応無しに様々な事に心煩わされ、命の危険も増すだろう。何も知らなかった十四の頃は一緒に王宮に来て欲しいと願ったものだが、今では是非とも修道院から一歩も出ずに平穏の内に暮らしていて欲しいと思う。

だから結果的にキヨの計画は諦めざるをえない状況になるだろうと予想し、そうなればあんな無茶をせずに済むとほっとする反面、残念だという気持ちが沸き上がる複雑な気分に陥っていた。

エルドシールとしても計画が上手くいったら、これ程嬉しいことはないのは確かなのである。様々に思いを巡らせていると、あっという間に目的地についてしまった。

「修道院長様、面会希望者をお連れしました」

「お入りなさい」

ノックの音に続いて案内係の尼僧の声が響く。中からは落ち着いた、しかし張りのある若々しい声が入室を許可した。

「よく来ましたね。エルドシール。そして新しき妹」

何時もと変らぬ母の笑顔にエルドシールは息子としての笑顔を返し、礼儀作法にのっとって膝を折った。

「慈母様には恙無きご様子、まことに重畳。今日は神官長グラスロー様よりお預かりした尼僧見習いキヨを送り届けに参りました」

慈母とは位の高い尼僧に対する尊称である。そして修道院内では俗世の地位は無効、もっとも身分が高いのは現在修道院長であるアレシアで、エルドシールは一番下である。そして親子というのは俗世での関係であるので、二人きりにならない限り親子として会話する事は無い。修道院内で妹といえば後輩尼僧、弟といえば後輩僧侶のことで、息子や娘は存在しない。とはいえ、俗世の地位やしがらみを修道院内に持ち込む者は少なくない。エルドシールのように厳格に守っている方が稀である。

エルドシールに倣ってキヨも膝を折り、深々と頭を下げる。

「慈母様、尼僧見習いキヨにございます。未熟な我が身を妹として受け入れて下さった事、深く感謝致します。早速ではございますが、神官長より内密のお話をお預かりして参りました。お人払いをお願い出来ますでしょうか？」

キヨの言葉にアレシアは驚いた顔をしたが、すぐに頷いて部屋の外に控えていた尼僧に人払いを命じた。

ここまでは予定通りである。

「あなたも部屋の外へお願い出来ますか？　不届きものがいないとも限りませんから」

朗らかに告げられたキヨの言葉は完全に予定外である。エルドシールはキヨと母を二人きりにすることに不安を感じ、驚いた顔をしている母を心配げにちらりと見たが、断るのも不自然なため渋い顔をしながらも了承し、修道院長室の前で警護の代わりを務めた。

腕組みして厳しい顔で仁王立ちしている姿は、なまじ容姿が良いだけに怒れる闘神のようで、うっかりそのエルドシールの姿を見てしまった尼僧達をぎょっとさせた。その実、微かに漏れ聞こえて来る会話を扉に耳を押し当てて聞きたい、という衝動を必死で抑えているだけだとは誰も気付かない。

そして数十分後、再び開かれた扉の向こうに立っていたのは泣いた形跡を残す母の笑顔と、神子スマイルを纏ったキヨだった。

「慈母様は例の件ご了承下さいました」

晴れやかに告げられた言葉に、エルドシールが固まったのは言うまでもない。

副宰相ドールーズ伯爵は柄にも無く鼻歌でも歌いたい程に上機嫌であった。先程宰相レイゼン公爵に呼ばれ、養女を一人迎える様にと言い渡されたのである。詳細はこうだ。

近くご生母様が国王陛下の正妃選びの手伝い、及び婚儀にご出席なさる為に王宮に上がられる。この度のことは還俗ではなく、陛下の願いを聞き入れ、尼僧として一時的な出仕という形をとる。それに伴って何時も身の回りの世話をしている尼僧見習いの娘を侍女として連れて行きたいが、娘は平民なので王宮に上がるには身分が足りない。そこで適当な貴族の養女に迎えることで体裁を整えよ、という主旨の書簡が陛下からレイゼン公爵に届けられた。ちなみにご生母はれっきとした貴族の血を引いている。ただし随分昔に廃れてしまった名家の末裔で、実態は平民同然である。

その書簡の最後にドールーズ伯爵なら家族も無いようだし、形だけの父にするには面倒が無くてよいのではないかと書かれていた。

通常家族のある貴族が養子を迎える際には、相続などで後々問題が起きないように最低十人の立会人を立て、事細かに養子に与えられる権利を決めなければならない。

ちなみに出家して僧籍に入れば、一切の権利を失う。侍女はいずれご生母と共に修道院に戻るから、本当に一時的な形だけの養女なので面倒な手続きは避けられればそれに越した事は無い。

レイゼン公爵にしても何ら懐の痛まない陛下の依頼を快く受けて、恩を売っておく事に越した事はない。便宜を図ったのがレイゼン公

爵と知れば、娘フィリシティアに対するご生母の心証も良くなるであろう。ドールーズが自分の一派であることも都合が良い。形だけとはいえ父になるのだから機会があれば養女に迎える侍女に、フィリシティアをご生母に売り込む様に吹き込めと遠回しに指示を出した。

そんなレイゼン公爵を暢気なものだと内心嘲笑いながら、ドールーズは養子縁組の書類を整えるべく迅速に動いた。一日でも早く娘を養女に向かえ、側室となるべく教育を施さねばならない。

そう、ドールーズはエルドシールが自分の策を受け入れて行動を始めたと判断したのである。ドールーズに直接知らせが来ないのも慎重なエルドシールらしいと疑問にも思わず、養女に迎える予定の娘の手の上で転がされているとは知る由もなかった。

暗躍する神子2

キヨがエルドシールの母アレシアに引き合わされてから八日後、早くもドールーズ伯爵家から迎えの馬車がやって来た。キヨは尚も不安を隠せず厳しい表情をしているエルドシールに、再び例の“神子の微笑み”を纏ってあの決め台詞を吐いた。そしてアレシアとしっかり手を握り合って見つめ合った後、迎えの馬車に乗って去って行った。

エルドシールとアレシアは馬車を見送った後、修道院の中庭の隅で暫しの休憩を取った。この中庭は敷地の実に五分の四を占める広さで、この中庭を囲む様に修道院、孤児院、聖堂が建っている。何故これほど広大な中庭があるかといえば、それは自給自足の為の耕作地だからだ。日々の糧となる野菜や穀物、現金収入を得る為の商品作物を育てている。

今日もせっせと作業に励む孤児達や尼僧達の姿を眺めながら、エルドシールはおもむろに切り出した。

「母上、本当に宜しいんですか？　あれほど嫌がっておいでだったのに」

「エル、お前だから正直に打ち明けますが今でも嫌です。私にとって、王宮はとても恐ろしいところでした。今もやはり恐ろしい。そんな恐ろしいところにお前一人を置いておく事をとても辛く思っていましたが、共に来て欲しいと懇願するお前にどうしても頷けなかった。不甲斐ない母を赦して下さい」

「その様な事は良いのです。母上はいつも最善を尽くして我とレンカを守って下さった。それに母上はもう既に十分ご苦労なさった。

あの頃我は何も分かってはいなかったのです。今は母上が願いを聞き届けてくれなかったことは本当に良かったと思っています。王宮で辛い思いをなさる母上の姿を見るのは辛い。やはり今回のことは考え直した方が……」

「いいえ、エル。私は目が覚めた思いです。恐ろしくて目を逸らしたとしても、その現実は無くなるわけではない。私は運命に翻弄され、何時もそこから逃げる事ばかりを考えてきました。お前達の事も、恐ろしいものから遠ざけよう、逃がそうとするばかりで、常に選択は消極的なものでした。ですがそれではいけないのだと、あの方が気付かせてくれました。エル、私の息子。お前には、真に人としての幸福を掴んで欲しい。その手助けが出来るなら、これしきの恐怖を乗り越えないで何が母親か」

アレシアの力強い言葉にエルドシールの瞳に不覚にも涙が滲みそうになった時、不意に歓声が上がる。アレシアに気が付いた孤児が嬉しそうに手を振っていた。

アレシアは降り注ぐ陽射しの中、眩しそうな顔をして笑い返し、ゆっくりと手を振った。その横顔の決然としていながら慈愛に満ちた表情を、エルドシールは何にも代え難く美しいと思った。

「母上……」

「大丈夫、あの方がついていて下さいます。これもキア神の思し召し。全ては神の御心のままに委ねましょう」

キヨはおそらく母上に神子としてのキヨしか見せていないのだろう。それは母上が神子を利用したり、神子の存在に無責任に依存したりしないことを見越しての事だろう。

こんなふうに全幅の信頼を寄せている母上を見るにつけ、素のキ

ヨを知っている我としては少し複雑な気持なるが、それでもキヨには感謝をしたい。
これ程晴れやかな母上の顔を見たのは初めてだった。もともと芯の強い人だったが、何時も何処か憂いを帯びて張り詰めた様な空気がつきまとっていたのに、今それが綺麗に払われている。
我も母上に倣って子供達に手を振った。きっと我も今は晴れやかな笑みを浮かべられている筈だ。
母上がキヨを信じたのだから、我も信じよう。
キヨが我を信じてくれた様に、我も信じよう。

一方、キヨを屋敷に迎えたドールーズは戸惑っていた。
尼僧姿の娘のあまりにぱっとしない容貌に眉間に皺が寄る。黒い瞳は賢そうな光をたたえているが、顔立ちも不細工ではないが、まぁ有り体に言えば十人並みなのである。
予想外に良かった事は、流暢に述べられた挨拶と養女に迎えてくれた事への感謝の言葉くらいだった。南からの流民だというが、元は貴族階級かそれに仕える家柄の出身かもしれぬと思った。
とりあえず用意しておいたドレスに着替えるよう指示したところ、早くも大問題が二つ発覚した。
まず目についたのは額に巻かれた包帯である。頭巾に隠れて分からなかったが額には大きな傷跡があるので、こうして隠しているという。更に髪が短過ぎる。
黒い艶やかな髪は美しかったが、貴族の娘がする髪型を維持するには圧倒的に短い。肩より少し長いくらいの髪の女など、平民でもまずいない。しかもこの国では黒髪は珍しいので付け毛を調達するのは困難だ。しかし入手不可能ではないから、とりあえず髪の長さはどうにか誤魔化せるだろう。だが額の傷はどうにも隠しようがな

かった。侍女の服装には一定の決まりがある。ドレスは無地の落ち着いた色合いのもの、髪型はきっちり結い上げて仕事の邪魔にならないもの、そして宝飾品の類いは一切禁止である。
たとえば飾り布や額飾りなどで額を隠すことも出来ないのである。

「私は慈母様の侍女として王宮に上がりますし、尼僧見習いであることは宰相様もご存知です。ですから尼僧の服装でも構わないと思うのですが、いけませんでしょうか？　額も自然に隠れますし」

「それではいかんのだ！」

珍しく焦ったドールーズは、イライラと部屋の中を歩き回りながらもう少しましな人選をしろと内心でエルドシールに悪態を吐いた。
いくらなんでも尼僧姿の娘に手を出すのは外聞が悪過ぎる。だが、正妃候補を差し置いて寵愛を受けていると納得させるには既成事実がどうしても必要だ。

「とにかく額の傷を見せて見なさい。化粧で隠せるかもしれない」

ドールーズが言うと、娘は明らかに困った顔をして口を引き結んだ。

「どうした？　書類上とはいえ私は父だ。恥ずかしがることもなかろう、見せてみなさい」

「では……人払いをお願いします」

よっぽど額の傷を見られるのが嫌なのか、娘は固い表情で俯いた。仕方あるまいと、ドールーズは娘の身なりを整えさせた女中達を下がらせた。

「エルドシール様に、どうしてもの時はドールーズ様一人にお見せする様にと言われておりました。どうか驚かれませぬよう……」

そんなに酷い傷なのかと渋い顔になるドールーズの前で、娘はもどかしい程ゆっくりと包帯を解いた。取り払われた包帯の下から現れた涙型の宝玉に、ドールーズは今までの人生の中で最も間抜けな顔をして絶句した。

そして天啓のようにエルドシールに先日聞いた秘された祭祀の事を思い出す。

あれは神子召還の事だったのか！

何という事だ、神子などというものが現実に存在するとは！

いやいやいや、冷静になれ。まがい物かも知れぬではないか。このようなこと到底信じられぬ。

そう思ってその涙型の宝玉に触れてみた。娘は大人しくドールーズのされるがままになっている。思い切って力任せに引っ張ってみたが、その宝玉はしっかりと娘の額に根を降ろしている様でびくともせず、痛みに娘が小さく悲鳴を上げた。と同時に、バシッと強力な静電気の様な衝撃が走り、ドールーズは反射的に手を引っ込めた。これは間違いない、と瞬間的にドールーズは納得した。

「素晴らしい……！！」

思わずドールーズは叫んだ。それならば話は違って来る。神子であれば正妃に立てることも可能だ。いや、神子を差し置いてだれが正妃に立てるというのだ。しかも最も尊ばれている初代神子と同じ宝玉の神子だ。宝玉と、その力を示せば誰も反対は出来まい。

とにかく既成事実など無い方が逆に神性を保てて良いし、神子であることはぎりぎりまで知られるのを避けた方が良い。だとすれば

尼僧衣姿でも全く問題は無い。いや、むしろその方が都合が良い。
なんという隠し球か。これほどの切り札を陛下が隠し持っていたとは！
これ以上を望めない程の娘の出現に、ドールーズはらしくもなく喜びも露に娘の手を取った。

「私が神子だということは、知られたくないのです」

先程までは取るに足らない娘にしか思えなかったが、良く見れば中々味のある顔をしているし、真剣な表情は大変賢そうだとドールーズの中でキヨに対する評価はうなぎ上りに急上昇した。普段のドールーズならもう少し冷静だったろうが、一度落胆していただけにキヨが神子だったという思いもよらない僥倖に冷静さを欠いていた。

「言われずとも心得ている。いや、心得ておりますとも、神子様！
仮そめとはいえ神子様の父になれるとは、ドールーズ伯爵家末代までの誉れでございます」

ちゃんとキヨの意思確認をしなかったのは一生の不覚であったと、後にドールーズは苦笑とともにこの一件を振り返る事になる。
少し時を遡ればグラスローも同じ様に誤解して大喜びしていた。やはり神子は我らをお見捨てにはならなかった、と感激の涙を流したとか流さなかったとか。

キヨもエルドシールも嘘は何一つ吐いていない。ただ言わなかっただけである。

暗躍する神子3

ゼッタセルド国王であるエルドシールがどうのように育ったのか、民は殆ど知らない。また、貴族達の多くも一通りのことしか知らない。

捨て置かれていた前王の末の王子は、母親譲りの美貌に鮮烈な緋色を金髪と瞳に持つ。赤味を帯びた金のたてがみの様なその髪と濃く深い紅玉の瞳は、偉大な王の一人に数えられる獅子王と呼ばれた祖父にそっくりで、その姿だけでも感嘆と賞賛の対象であった。

不遇な少年時代も母性をくすぐるのか、一部の貴族のご令嬢達には熱狂的に支持されている。だが、表立って何か行動を起こす者はいない。何故なら、その心は凍り付いた様に冷たいとされていたからだ。獅子王は姿そのままに豪快で激しい気性の持ち主だったが、エルドシールは全く正反対と思われていた。

『凍れる炎の王』

影で彼はこう呼ばれている。

そう信じられているのには、幾つか理由がある。まず十五で王位についてより、王は笑顔を見せた事が無い。そしてどんなに美しく魅惑的な女を前にしても眉一つ動かさず、機械仕掛けのような通り一遍の社交辞令しか言わない。ご自分の結婚にも興味を全く示さず、正妃候補選定に際しても一言も口を挟む事無く淡々と了承した。

これらのことから、一握りのごく僅かな人間を除き、王はその外見とは裏腹に凍えた心の持ち主だと信じられていた。心が凍った原

因は想像するに容易く、それゆえ王の過去に関する事は暗黙の了解で禁句となっている。心を閉ざした悲劇の若き王を私の愛でお救いしたい、笑顔を取り戻して差し上げたい、と胸を焦がす女性は少なくない。

一方、傀儡の王である事を揶揄して『張り子の獅子王』などと陰口も密かに広まっていたが、それはまた別の機会に回そう。

エルドシールは単純にもともと表情が表に出にくい。そしてどちらかと言えば無口だ。話すのが苦手というわけでは無いが、宮廷では口は災いの元と慎重にしていたに過ぎない。

もしエルドシールが貧相な容貌をしていれば、萎縮しているとでも思われたであろう。姿形とは、それだけで行動の印象も全て変えてしまうのである。

エルドシール自身もどう思われているのかなんとなく把握してはいたが、実害を感じなかった上に女性避けに都合が良いので放置していた。

「くれぐれも間抜けを晒すんじゃないわよ？　凍れる炎の王の危険なロマン香るイメージを壊すんだから、期待はずれでがっかりっていう裏切り方は絶対しちゃ駄目。良い方に裏切るのよ。私と違ってエディは見てくれは良いから期待度の初期値が大きいの。それだけに中身が残念だと落胆も大きいのよ。思ってたのと違う！　その驚きの後に続くのが『期待はずれだわ』になるか、『実はとても純粋で愛情深い誠実な方だったのね（ハートマーク）』になるか、それが運命の分れ道よ！」

王宮の王の居室で寛ぐのは、王と尼僧姿の娘という珍しい組み合わせだ。
そして、何故か王より娘の方が居丈高である。
言わずと知れたキヨだ。
アレシアより一足先に王宮に上がり、ご生母様がお越しになられる前に準備を整えるという名目で情報収集に余念が無いキヨである。
本日仕入れて来た情報、『凍れる炎の王』という称号に先程まで抱腹絶倒、大笑いしていたせいか、顔が上気して鼻息も呼吸も荒い。
「……つまりキヨの見てくれは普通だから期待度の初期値も平均値だが、中身が我と同じ程度に残念でも落胆はそれほどでもない、ということか？」
「その通りよ。うふふ、私ってド庶民な外見だから賢さを全く期待されてないの。だからちょっと賢い事言ったりしたりすると、おぉっ！？　ってこっちが期待する以上に評価が上がるのよね～。面白いったら無いわよ。お義父様なんか私が神子だと知ったら、拾った小石が実はダイアモンドでした的な喜びようだったんだから～。更に実のところダイアモンドじゃなくて火薬玉だったりして」
愉快げに思い出し笑いをするキヨに、エルドシールはお義父様と呼ばれたドールーズに同情せずにはいられなかった。
「……一応皮肉だったのだが」
「あら、勿論分かってるわよ。皮肉言われてムッとしたら相手の思うつぼじゃないの。そんな素直さや可愛げを私に期待するなんて、やっぱりエディはお人好しね」

「いや、期待はしていなかった。余りにも酷い言われようなので、皮肉の一つも言っておいた方が良いかと思っただけだ」

「うわー、私そういうエディの掴みどころがない性格好きだけど、可愛くないわ～。正妃候補の皆様にはそういう事言っちゃ駄目だからね」

キヨは顔を顰めて苦笑いをし、やり方が分からんというので我がいれてやった花茶を一気に飲み干した。しかし、折角我がやって見せてやったのにキヨは覚える素振りも見せなかった。こやつに本当に母上の侍女が勤まるのか？

不安になるエルドシールの内心などキヨは知った事ではなかった。既に侍女達から教えてもらって花茶のいれ方は習得済みだ。キヨは単に王様にお茶をいれてもらうというアンビリーバブルな状況を体験してみたかっただけである。

暗躍する神子４

「は～、それにしても疲れた。こっちの世界の敬語ってホント、疲れる」

花茶を飲み干したキヨは、伸びをしながらそう言った。こちらの敬語が疲れるということは、あちらの敬語は疲れないらしい。

「確かに王宮での敬語は複雑で面倒だが、異世界の敬語は違うのか？」

「うーん、どうもこっちの世界の敬語と、私が慣れ親しんだ敬語は根本的に質が違うみたいなんだよね。自動翻訳機能で意識としてはあっちにいたときと同じ様に敬語を使ってるんだけど……なんか、こう、頭をむりやり押さえつけられる様な圧迫感を感じるんだよね。身分とかに慣れてないからなのかなぁ」

キヨは肩をとんとんと拳で叩きながら首を傾げた。

「そういえばキヨのいた異世界の国は、王はいても貴族はいないのだったな。相手の地位や立場によって使う敬語がいちいち変るし、確かに慣れない者には辛いだろう。王宮に来たばかりの頃は我も慣れるまで苦労した。我は制度上一番地位が上だから、しきたりまで絡んだ複雑怪奇な敬語を習得せずに済んで本当に助かったと思ったものだ」

「え……そうなの？」

驚いた顔をするキヨに我も驚く。礼儀作法の中で一番厄介なのが

敬語である。それを習得させる為にドールーズは驚く程迅速に動いたのではないのか？
一体一ヶ月の間何をしていたんだ。
「ドールーズに教わらなかったのか？」
「全然。敬語は完璧だとやたら褒められた。社会人なめんなよとか思ってたけど、実はそんな単純な問題じゃなさそう……。私全部同じ様な感覚で誰にでも敬語使ってたんだけど、完璧って言われたってことは……自動翻訳効果でその場に相応しい敬語に自動変換されてる、ってことかな。便利だけど……ちゃんと理解するには不便だわ。敬語の用途別系統を簡潔に説明とかできる？」
求めに従ってエルドシールはなるべく分かりやすく説明しようと試みた。
ドラゴニア大陸では全土で通用する大陸共通語がある。地方によって訛りや独特な言い回しはあれど意思疎通に問題は無く、特有の言語がある国や地方もあるが、一般的ではない。通常庶民が使う言葉はこの大陸共通語である。その元になった言語は正確な記録の残っていない神話の時代、キア神から神官達に授けられたという古代神聖語だ。その古代神聖語の形をより多く残したものが宮廷典雅言語、より簡略化したものが大陸共通語である。
この宮廷典雅言語は正式な国家間の外交でも使用され、庶民からは貴族語と呼ばれている。何事も格式と体裁を重んじる宮廷の言葉だけあって、敬語に関しては非常に細かな分類がある。
大きく分けて系統には二つあり、一つは血筋で上下関係を示す血統敬語、もう一つは仕事上役職上の上下関係を示す秩序敬語だ。
この二種類の敬語を時と場合によって使い分けるのだが、一方だけでは使うのではなく、混合して使う。たとえば仕事中ならば秩序

言語優先の混合敬語となり、社交の場では血統敬語優先の混合敬語となる。
更に性別、既婚か未婚か、年齢の上下なども事細かに敬語と連動しており、使われる敬語を聞いただけで両者の力関係や立場、家格が分かってしまう。
一通り説明を聞き終えると、キヨはぐったりした顔で深い溜め息を吐いた。

「ごめん、説明してもらったけど難解過ぎて途中から理解努力を放棄してた。潔く負けを認める。便利な自動翻訳機能に全面的に依存する」

「気持ちは分かる。説明しながら考えていたのだが、貴族がいないのならキヨの世界には秩序敬語しかなかったということか？」

「いやぁ……まぁ仕事上で敬語使うのは当然なんだけど、それはちょっと違う。私はあっちじゃバリバリ庶民だし仕事も下っ端だったけど、敬語使うだけじゃなくて使われることにも慣れてるの。ん～、例えば私の家族名は鈴木だけど、鈴木様って『様』付けで呼ばれることは結構普通に馴染んでる。名前に『様』付けはあんまり無いけどね」

「身分が上でも立場が上でもないのに、『様』付けで呼ばれるのか？　それはどういう時だ？」

「お店にお客として行ったときには店員に、診療所に行ったときは受付や会計時に、あと役所でも申請した書類が出来上がって呼ばれる時とか」

「店員はともかく、役所の役人が庶民を『様』付けで呼ぶのか！？」

衝撃だ。こちらでは役人は貴族か貴族ではなくともそれに仕える家柄の出であることが多いし、身分という制度が無い国では事情も違うのだろうが、それにしても信じがたい。

「うん。あ、様じゃないとこもあるかな。もうちょっと砕けて、『さん』付けとか。役人の給料は庶民の税金から出ている、つまり役人の生活は庶民が支えているという理屈でお役人は表面上庶民に頭が上がりません。内心はどうだか知らないけどね」

「うむ……」

成る程、そういう理屈なら納得出来ないこともない。しかし、そんな考え方を発想出来るのは身分が無い国だからこそだ。そんな考え方が一般的に認識されていたら、現行の政治形態は崩壊するしかない。

「ちなみにお店で買い物の時、私がお客でも店員さんに対して敬語で話すよ。流石に店員さんを『様』付けでは呼ばないけれど、素晴らしい接客をしてくれたら『有り難うございます』って丁寧にお礼を言って感謝を態度に示すのは、まぁ普通かな？　外食して満足な美味しい食事が出来たら会計終わりに『ご馳走さまでした、美味しかったです』くらいは言うし。

そういう場合じゃなくても、たとえば初対面の二人はお互いに敬語で話すのが普通。仲良くなれば態度が砕けて敬語を使わなくなったりするけどね。

何て言うかな……もちろんこっちの秩序敬語みたいな使われ方もするけれど、どっちかっていうと私の知っている敬語は感謝の気持ちを表すとか、人間関係を円滑にする為の潤滑剤だったり、あるいは単純に尊敬の気持ちを表す為に使ったり……上下関係を示す為に

使われるんじゃないの」

説明しながら考えを纏めるているのか迷いながら話しいたキヨが、突然腑に落ちた顔をしてポンと手を叩いた。

「うん。そうなんだよ、職場で使えば結果的に上下関係を示すけど、もともと他人に対する尊敬だったり感謝だったり思いやりだったりを示すもので、身分とか立場で強制されるものじゃない」

キヨの話を聞き、エルドシールは自分たちの使う敬語が味気ないものに感じた。仕事の場で、社交の場で、それぞれの身分や立場が周りにも一目瞭然になる事は機能としては高性能かもしれないが、情緒的な機能が余りない。だからキヨは無理矢理頭を押さえつけられる様な圧迫感を感じたのかもしれない。

店の店員が客に対して尽くすのは当然だし、料理人が美味しい料理を作るのは当然だ。よっぽどの事が無い限り、特に言葉を掛けることもない。

「気持ちがあってこその敬語、ということか。そなたの世界の敬語は素晴らしいものに思える」

「私もそう思う。というか今気が付いたかも。あまりにも当たり前に使ってたから改めて考えた事無かったけど、私の国の敬語って素敵だ。でも元々古代神聖言語が根幹にあるなら、こっちの敬語だって本当は気持ちがあってこそ、だったと思うよ。敬意を示す相手がキア神なら、そこには畏敬と感謝があるはずだもの」

キヨは珍しく外見に相応しい無邪気な笑顔で嬉しそうに語った。他を知る事で己を知る、という事を目の前で実践してみせたキヨにエルドシールは尊敬の念を抱いた。そしてその気遣いにも。

「そう、だな。キヨの言う通りかもしれない」

「いや～、そういう顔ヤメてよ。恥ずかしいから。良い事言っちゃったっぽい自分がキモイ……」

どういう顔か知らぬが、本気で嫌がっているらしいキヨに話題を変えてやることにした。

「ところで、キヨ。話を元に戻すが、良い方向に期待を裏切るには具体的にどうすればいいのだ？」

「簡単よ。前から言ってるじゃない。エディの場合下手に色々計算めいた事を考えないで、直球勝負。本来の馬鹿が付く程のお人好しさ加減と真面目さを最大限に発揮して正妃候補の皆さんに接すれば良いのよ。私に対して裏表無く接してくれた様に、ね。間抜けを晒すなって言ったのは、権謀術数の渦中で身に染み付いた本来のエディらしくない計算高さと慎重さが出ない様に気を付けろってこと」

エルドシールが無謀だと反対していたのは、このキヨの発言ゆえである。キヨはエルドシールにありとあらゆる武器と策謀を持って襲って来る敵に、防具も武器も持たない無防備状態で迎え撃て、と言っているようなものだ。

キヨの策とは、『策を弄さないこと』なのだ。もっとも、その『策を弄さないこと』が最大の成果を上げる為のお膳立てや舞台を整えるという計画は周到に用意しているらしい。その詳細はエルドシールには知らされていない。計画を知ると気持ちに余計な不純物が混ざるというのが理由だ。

キヨ曰く、女の勘を侮るなかれ、誠意で勝負なら不純物は徹底排除、だそうだ。

「……やはりそれだけなのか……」

「それだけっていうけどね、やってみたら結構難しいんじゃないかな。ま、ある意味エディが生き残る為に身につけた技術なんだし、それを封印するのって簡単じゃないと思うよ」

「分かっている。とにかく我も腹をくくらねばな。どうしたら正妃候補達に我の誠意と熱意を知ってもらえるか、そして相手に応えてもらえるか、必ず結果の出せるであろう行動と言動について真剣に検討してみる」

「……政策を考えるんじゃあるまいし。正妃候補の皆さんは食うか食われるかの政敵じゃないんだから、もうちょっと言葉を選びなさいよ。全く固いんだから。ま、でもそれがエディのエディらしさだから仕方ないか」

言われた通りに真剣にやっているのに何故注意されねばならんのだ。固い、というが、どんな言葉を選べというのだ。言葉に固いも柔らかいもあるものか。しかもこの場で選んだところでキヨの印象が多少良くなるだけではないか。我にそんな事をする必要がどこにあるというのだ。

エルドシールはキヨが知ったら笑顔で容赦ない言葉の暴力を行使しそうな反論を胸の内に留め、深々と溜め息を吐いた。

「ねぇ」

「何だ」

「ちょっと気になってて、聞こうか聞くまいか迷ってたんだけど、

聞いて良い？」

このキヨが聞くことを遠慮して迷うとは、一体どんな質問なのかと興味を惹かれる。

「我に答えられる事なら何なりと」

「エディって、やっぱり童貞？」

好奇心はキヨ相手に持つものではないと、痛感した。

「……回答を断固拒否する」

「やっぱりそうなのか～。それでこそ私の見込んだ男！」

既に侍女達から乱れた宮廷内のセックス事情を聞き及んでいたキヨは、エルドシールを内心で天然記念物指定した。

王と剣の師1

誠実さを伝えると一言で言っても、それを実現するのはとても難しい。

誠実さとは、積み重ねられた小さな行動と普段の何気ない会話の中で徐々に伝わるものであろう。口でいくら誠実を主張したところで、大した意味も無い。無実を訴える人がいたとして、それだけで誰がその人を無実と信じるだろう。無実を信じられるだけの人間関係があるか、もしくは証拠がなければならない。

たった二ヶ月という限られた正妃選びの期間の中で、どれだけ誠実さを伝えられるのだろう。考えれば考える程分からなくなるようで、ならばとエルドシールは己の知る誠実な人間を訪ねてみることにした。

王立騎士院は貴族の子弟に武芸を中心に政治学、経済学、外交術などを教える教育機関である。

剣術の教授を二十年以上務める元親衛隊員ガッシュは、久し振りの教え子との再会に何時ものしかめっ面を忘れていた。

ガッシュにとってエルドシールは仕えるべき国王である前に可愛い教え子であり、剣を通じて知った彼の不器用な程の真っ直ぐさをとても好ましく思っていた。

ガッシュが初めてエルドシールに会ったのは、まだ王位につく前の十四の頃だった。王となる少年は曇りのない真っ直ぐな眼差しでガッシュを見詰め、緊張した面持ちでよろしくお願いしますと頭を下げた。一緒に来ていた教育係の大臣が慌てて臣下には頭を下げても、敬語を使ってもならないと強く諭した。

叱られて戸惑った顔で立ち尽くしていた頼りなげな少年を、今でもガッシュは鮮明に覚えている。
通常貴族なら八歳前後で剣を習い始める。十四で始めるということは、それだけで随分と遅れをとっていた。
それを必死で挽回しようと真面目に取り組む姿はいじらしく、ガッシュもだからこそ手心を加えずに厳しく指導した。時には行き過ぎたかと自身でも思うほどの厳しい特訓にも、エルドシールは泣き言一つ言わなかった。無愛想で無口で、笑顔もほとんど見せない少年の瞳はいつも生き生きと輝いていた。剣の筋は数多い教え子の中でも中の上といったところだが、そのひたむきな努力と姿勢は文句なく一番の出来だった。

王として恥ずかしくない程度に剣を使えるようになるまで約三年かかった。勉強と政務をこなしながらもほぼ毎日二時間の訓練を続け、いよいよ生徒を卒業する日のことである。
王立騎士院の修了証と共に訓練用の刃を潰した剣ではなく実戦で使える剣を、王は典礼大臣から受け取った。
最後にガッシュに対して労いの言葉を掛けた王は、ガッシュにだけ聞こえる様にこう言った。

「そなたとの剣の稽古はとても楽しかった。そなたは良い師であった。だが、今日この日から、我の剣は人を殺す剣となった。この剣が鞘から抜かれる日が来ぬよう、そなたには祈っていて欲しい」

国を守る騎士として剣を握る者は、命の重さを知らねばならない。その意味ではエルドシールはガッシュにとって素晴らしい生徒であった。
しかしこのように優しい性格では、どんなに強い心を持っていても宮廷では苦しむことになるだろう。真っ直ぐすぎるその気性は、その真っ直ぐさゆえにぽきりと脆く折れてしまいはしないか。もう

これからは簡単に会うことはかなわぬことになる王の進む暗く険しい未来を憂い、深く頭を下げたその陰でガッシュは涙を滲ませた。

あの日からガッシュは王と会っていない。緩やかに悪化してゆく王の評判に不安を感じながら、何の力にもなれぬ己を悔しく思っていた。

王は政治には御興味が無い。そう宮廷内では見なされていた。だがガッシュはそうは思わない。

王はどの派閥の主張も平等に聞くが、徹底してどの派閥も優遇も冷遇もせず、口は出さないが中立を守り続けている。そのおかげで三つ巴の状態が続き、お互いを牽制して目に余る様な大きな悪事や不正は行われていない。また内戦の傷跡は宮廷内にもまだ色濃く残り、身内を殺された者と殺した者が近い立場に居る事も珍しくない。危うい綱引き状態でも一応の平穏があるのは、この王の態度のおかげとも言える。

自ら積極的にご政務に関わろうとなさらない、と陰口を叩く者もいるが、それが許されぬ立場であると宮廷の誰もが知っている。王太子なら幼い頃から叩きこまれる帝王学も、まだ学び始めて五年では知識も経験も足りぬ。だからガッシュは、現状で取りうる最善の道を王は取っていると感じていた。

だがしかし、そんな事情は民には関係が無い。

ガッシュは下級貴族の出なので、割合平民とも交流があった。無償で町や村の自警団を指導したことも一度や二度ではない。そしてガッシュが目の当たりにしてきた民は打ち続いた内戦に疲れ切り、荒れた領土と貧困はエルドシールが王になってからほとんど改善されていないのが現状だ。一向に良くならない暮らしに民は希望を持てず、王を恨み始めていた。

そんな中での突然の王の来訪である。

ガッシュは何とか王の助けになれないか焦燥を感じながらも、久々の再開に喜びを隠せなかった。

王と剣の師2

エルドシールにとって王宮に迎えられ、与えられた仕事はまずは一にも二にも勉強だった。

王に相応しい言葉遣い、王に相応しい立ち振る舞い、礼儀作法、教養、そして帝王学、数えるのも嫌になる程の量を教育担当となった典礼大臣の指示に従ってこなしてゆく。

勉強そのものはグラスローに手ほどきを受けていたので、その量には嫌気が差したが抵抗は無かった。礼儀作法や宮廷の約束事などは理不尽さや疑問をとりあえず棚上げして、暗記に励んだ。芸術美術関係や舞踏に関しては気分転換の要素にもなったからそれほど苦にならなかった。

そんなエルドシールがもっとも苦労したのが、言葉遣いである。

それまで修道院で母をはじめ尼僧達の元、敬語を使う方の立場として育って来たのだから無理も無い。己自身は何も変わっておらず、何も敬われるべきことを成していないのにも関わらず、一夜にして使う立場から使われる立場に変ったのだ。

エルドシールははっきりとは自覚していなかったが、生来生真面目な性格ゆえに、その事はエルドシールの心に大きな負荷となって積もっていった。

その負荷から解放される一時が剣の稽古の時間だった。元は父の親衛隊隊員だったガッシュ・メルローを剣の教師としてくれたことに関しては、エルドシールは典礼大臣に心から感謝していた。

夢中になって剣を振っているいる時は煩わしいことも、悩みも全て忘れてしまう事ができたし、ガッシュは王としてではなく一人の生徒としてエルドシールを扱ってくれたため、エルドシールも王ではなく一人の生徒としてガッシュを慕うことが出来た。

騎士院の剣の課程を終了して会う事が絶えてから、エルドシール

はどれほどガッシュの存在が自分にとって救いだったか思い知らされた。そして、ガッシュが教師としてとても誠実な人間だったということも、改めて知ったのである。

ガッシュは大きな男である。背も確かに高いが、その存在感で更に一回り大きく見える。白髪の混じった茶色の剛毛を後ろに撫で付け、鋭い眼光と太い眉、厳めしい口髭と右頬の刀傷が歴戦の猛者の様な風格を醸し出していた。鍛えられた腕や脚は日に焼けて、鋼のように赤銅色に輝いている。

「ガッシュ、久しいな。あいも変らず壮健そうで何よりだ」

「有り難きお言葉でございます。陛下にもお変わりないご様子で何よりでございます。久し振りにこの老いぼれめと手合わせ下さりますかな？」

深いしわを刻む様にして笑みを浮かべる剣の師に、エルドシールは少し躊躇ってから口を開いた。

「いや……今日は剣ではなく、言葉を交わす為に来た。付き合ってくれぬか」

「言葉、ですか。いやはや、このような老いぼれた無骨者に務まるかどうか定かではございませぬが、陛下のお望みならば否やはございません。

では初等科の剣の授業でもご覧になりながらはいかがですか？手を抜く事ばかりに頭を働かせる悪童どもには良い刺激になることでしょう」

驚きながらも快く承諾してくれたガッシュと共に、剣の稽古場に向かう。この時間はどうやら初等科の生徒達が使っているようで、八歳から十歳までの小さな剣士達が基本の型をさらっているところだった。

突然現れた国王の姿に、少しふざけた様な雰囲気が一瞬で消え、緊張した空気に変わる。担当の教師が挨拶に来ようとしたのをエルドシールは手ぶりで止めさせ、授業を続けるように促した。

王の見学に張り切る子供達の姿を見てガッシュは愉快げに短く笑い、二人は壁際に並んで立ったまま暫くその様子を眺めた。

「ガッシュ、そなたは今幸せか」

ようやく話始めた王の最初の問いに、ガッシュは一瞬答えに詰まる。

「……は、それは……そうですな。剣を教えることは私の天職だと思っておりますし、今の生活には満足しております」

「我は……そなたの幸せに少しは貢献しているか？」

それは随分漠然とした問いであり、しかし恐らくそれが王の聞きたいことでは無いのだろう、もっと話したい事、おそらく悩みがおありなのだろうとガッシュは少し気を引き締めた。

「……はい。少なくとも私めは陛下が国王で良かったと思っております」

「そうか」

微かに頷いたきり、エルドシールはまた沈黙した。ガッシュは辛抱強く次の言葉を待ち、やがてぽつりぽつりと再びエルドシールは話し始めた。

「我は……五年前初めて自分が王の子であると知らされ、王位に就けと言われたとき、それで内戦が終わるならば、と、承諾した」

一度言葉を切り、ガッシュの様子をちらりとエルドシールはうかがう。

「……内戦で貴族達も多く命を落としたというが、彼らはまだ良い。彼らは彼らの正義と欲望の為に闘った末の死だ。しかし内戦に巻き込まれ、ただ運悪く村を、家を焼かれ、家族を殺され、血に酔った兵士に無惨に身体を蹂躙された娘達は……」

苦しげな顔をして声を詰まらせる主君の話に、ガッシュは驚いた。王が稀に見る真っ直ぐで、不器用な程に真面目な性格と知っていたが、それは隔絶された修道院で現実を知らずに育ったゆえだと思っていた。だからこそ、王宮の陰謀と欲望の渦巻く環境に耐えきれるのかと心配もした。

だが、当時十四の、出生を知らされたばかりで混乱しただろう少年が、傀儡の王となる事も、悲惨な民の現実と苦しみも承知の上で王になったとは。

「修道院は出来る限り傷付いた人々を受け入れたが、全てを救える筈も無い。心に負った傷に耐えきれず、助かった命を捨ててしまう者もいた。あんな悲しい出来事が我が王となることでもう起きなくなるのなら、それで良い。後は長く、王の椅子に座り続け、跡継ぎを残し……。そうすれば最低限の平和は保たれる。そう思っていた。

だが、修道院に母を訪ねる度に耳にする民の苦しみは未だ尽きない。元の土地に戻り、生活を取り戻す為の支援策は取られている筈なのに、その成果どころか実施されたのかも定かではない。我がそれを糾弾しても、宰相も、大臣達も、書類を整えて、これこの通りちゃんと成果は上がっていると示すだろう。

下手に騒げば勢力を争う者達の格好の餌になり、宮廷は泥仕合の混乱に巻き込まれる。そうなれば、民を思いやる僅かな余裕も臣下の者達は失ってしまうだろう。独自に調査をして証拠を集めようにも、我にはそれを可能にするだけの味方も力も無い……」

淡々と、感情を抑えた声で語るエルドシールの声は、逆に激しい感情を隠している様に思われて、ガッシュは胸を突かれる想いがした。やはり王は、政治に興味が無いのではなかった。

「我が最低限の平和だと思っていた影で、民の戦いはずっと続いていた。それに気付いてから、ずっと傀儡の王を抜け出す方法を考え、切っ掛けを探していた。

しかし、考えついた方法はどれも誰かを利用し、不幸を呼ぶものばかりだった。綱渡りのように人の心を読み、裏をかき、駆け引きと言葉の揚げ足取りで邪魔者を罠にはめる。そして少しずつ実権を我の手に集めてゆく。それには非情にならねばならぬ。綺麗事では政治は動かぬ、犠牲を払わねば何も得られぬ。分かっている。

だが、我は……我の妻になる女を不幸にはしたくない」

あぁ、これか。王の苦しみは。

王の結婚は明らかな政略結婚だ。いずれの正妃候補も権力者縁の娘であることは、周知の事実。

ガッシュにはどんな方法を王が考えたのか分からなかったが、それは王の生来の真っ直ぐさと優しさを酷く傷付けることだということは分かった。

「我の気持ちを、どうしたら正妃候補達に伝えられるだろうか？我を信じてもらえるだろうか？」

王は、王と結婚する事で権力争いに勝とうとする娘を真に家族とし、共に生きる伴侶としたいと本気で願っているのだ。その術を探しに、自分のところに来て下さったのだ。そう思うとガッシュはその信頼が、涙が出る程嬉しかった

「陛下。私は曲がりなりにも剣で身を立てて来ました。剣で打ち合い、その剣筋を見れば相手の人柄も分かるのです。陛下の剣にはいつも曇りが無い。真っ直ぐでひたむきな剣でした。

ですから、分かる者には陛下の真のお心は分かっているでしょう。それでも今日、このように陛下の胸の内をお聞き出来た事はこの上ない喜びでございます。言わなくとも分かることもあれば、言わねば伝わらぬ事もございます。

どうぞ、そのまま御正妃候補の皆様にお話なさいませ。

陛下が何を思い、何を悩み、何を望んでいるのか、ありのまま、私に打ち明けて下さった様にお話しなさいませ」

一瞬驚いた様にエルドシールはガッシュを見つめ、すぐに視線を稽古中の生徒達に戻して微苦笑した。

「……そなたも同じ様に言うのだな」

「は？」

「いや。我はずっと本心を悟られぬ様に仮面を被っていた。余りにも必死でそれを被り続けていたので、いつの間にか本心がなんだったのか自分でも見失っていたのやもしれぬ。そなたに話して、我は

初心を思い出した」

先程までの苦しげな様子は無く、何かが吹っ切れた様にエルドシールの瞳は生き生きと輝いていた。

それをガッシュは見て安堵し、再び稽古風景に視線を戻した。

「ガッシュ、我は……いや、私は、ガッシュ先生の様な方が父なら良いのにと、一度ならず思っていました。

ある人が私には何より素晴らしい誠実さがあると教えてくれたとき、思い出したのは先生のことでした。迷った時に話したいと思ったのも、先生でした。感謝しています」

突然途中から言葉遣いを変え、まるで身分が上の人間に話す様に自分に話す王に心底仰天したガッシュは、ここが訓練場の片隅だと一瞬忘れて狼狽えた声で怒鳴った。

「へ、陛下っ！　私の心臓を止める気でいらっしゃいますか！」

「ありのまま打ち明けよと言ったのはそなたではないか。我の、素直な気持ちだ」

言葉遣いを元に戻して今にも噴き出しそうな顔をしている王に、ガッシュは冷や汗をかきながら顔を引き攣らせた。

「いやはや、陛下がかくも物騒なお方だったとは……」

ガッシュの怒鳴り声に何事かと驚いて一斉にこっちを見た生徒達と教師に、何でも無いと示す様に軽く手を振る。

「もう言わぬ。そなたにはまだ生きていてもらわねば困る。だが忘

れてくれるな」

笑いの気配を消して真面目な雰囲気に戻った王は、小さな声で、しかし重々しく命じた。

「陛下がそのように思っていて下さったとは……決して忘れませぬ」

「見ていてくれ。我は、きっと妃を幸せにする。民も、幸せにする」

固い決意を秘めた王の言葉に、ガッシュは無言で頭を下げた。

王と剣の師3

そろそろ時間だと、切り出した王にガッシュは急いで跪いた。

「陛下、一つ申し上げたきことがございます」

「良い、申してみよ」

「陛下は親衛隊を持つべきかと存じます。陛下には、陛下の目指す未来に賛同し、惜しみなく力を尽くす明るい瞳をした若者が必要です。親衛隊ならば出自は関係無く、陛下の望む者を採用出来ます」

王宮を守る兵を近衛兵と言う。そして王族が個人的に持つのが親衛隊である。

身分、実力ともに必要とされる近衛兵と違い、出自さえはっきりしていればなれるのが親衛隊の隊員である。普通なら王族と言葉を交わす事も出来ぬ身分でも、実力があって気に入られれば抜擢されるので、血筋の劣る者達にとっては最大の出世の道であった。

親衛隊の最大の特徴は、忠誠を誓う相手にある。通常近衛兵はじめ右軍、左軍に所属する騎士団は厳密に言えば王ではなく国に忠誠を誓う。

だが親衛隊は王や王族個人に忠誠を誓う。現在親衛隊を持つ事を許されているのは王であるエルドシールと、王后である前王妃シェゼールミーア、王の叔父に当たるサイゲル卿のみである。降嫁した王女は王族と見なされない。例えばシェゼールミーア王后の親衛隊は王の命令に従う義務は無く、王と王后が同時に命の危機に晒された場合も王后の命を優先して守ることが許されている。親衛隊は常に主人と行動を共にし、いわば護衛と侍従の役割を両方こなす。

しかし、実際に王宮にいる王族は王一人であったため、エルドシールは親衛隊を持たずに近衛兵を護衛として使っていた。親衛隊はいわば私兵であり、心理的に非情に懇意になり影響力を持つ可能性が高いため、宰相はじめ大臣達は王が親衛隊を持つことを当然ながら進めなかった。

そして周囲に親衛隊を持つ王族を知らなかったエルドシールはその本当の意味を知らず、特別欲しいとも思わなかった。親衛隊の給料は王個人の資産から支払うことになるので、近衛兵がいるのに無駄な出費をすることもあるまいと判断した次第である。

ちなみにエルドシールの個人資産は現在直轄領となっているラダトリア地方の税収から成り立っている。神殿や修道院への寄付、式典など特別な時の衣装以外の普段の服や細々とした私物を買う費用はここから出ている。勿論直轄領を治める為に殆どを使ってしまうので、王個人が自由に出来る資産は実はかなり少ない。では、ローレッセン前王はなぜ遊興に耽っていられたのか？　答えは簡単である。領地を治める為に使うべき金を私物化し、王の歓心を買いたい臣下からの貢ぎ物、いわゆる賄賂が大量に献上されたからだ。

その前王にガッシュが仕えていたのは、まだ王太子時代のことである。獅子王レッドガルドは長く嫡子に恵まれなかった。王妃との間にも五人の側室の間にも王女ばかりしか生まれず、ようやく第四側室に王子、後のローレッセン王が生まれた時、レッドガルド王は既に齢六十を越えていた。

その後、地方視察のおりにお手つきになった妾妃との間にも王子が生まれたが、母親は素性の知れぬ流れの民であったために最初から継承権が認められていなかった。これがサイゲル卿である。

レッドガルドは幾つもの改革を行って、国を豊かにする事に努めた。他国との外交にも積極的で時には戦争の仲裁を行い、友好国フェンリールが飢饉に見舞われた時は援助を惜しまず、内外の民に尊敬され愛された王だった。

一方、当時北の山岳地帯に生まれた新興国ユトの侵略行為に先陣

を切って戦いに臨み、荒くれ者の山賊集団の様な敵のいわゆるゲリラ攻撃にもひるまず、勇猛果敢に闘った。そして十年余りをかけてユトを完全に滅ぼしたのである。

文武に秀でたレッドガルドは、赤い髪と瞳を持つその姿からゼッタセルドの赤獅子と呼ばれ、後に敬意を込めて獅子王と呼ばれるようになった。

その誉れ高き獅子王も、待望の王子にはただの親バカになってしまったようである。ローレッセン王は幼い頃から父に溺愛されて育った。父親譲りだったのは赤い瞳くらいのもので、柔和な容貌や栗色の髪は母である第四側室ゆずり、文武の才能も凡庸、と、偉大な王の跡継ぎとしては物足りない限りであったが、父である獅子王にはその頼りなさがかえって溺愛を助長させる種となったようである。

そんな目に入れても痛くない程の愛息の親衛隊隊員として、ガッシュは十八で獅子王に取り立てられた。剣をこよなく愛した獅子王の治世には、毎年大規模な剣の大会が行われており、ガッシュはその大会の一つで優勝したのである。

獅子王に目を掛けられ、次代の王の親衛隊隊員に抜擢されたガッシュは、間違いなく将来有望な出世頭であった。

ガッシュは当時十歳だった王太子に良く仕えた。我が儘にも根気よく付き合い、時には諌め、半ば守役のように仕えていた。言うなりにならないガッシュに時には癇癪を起こしながらも、王太子はそれなりにガッシュを慕っていた。獅子王もまた、自分では可愛さが先に立って叱れないためか苦言を言えるガッシュを信頼していた。

だが、王太子が十二歳になって間もなく獅子王が病で倒れた。獅子王は優秀であったがゆえに全ての政務を精力的にこなしていたため、瞬く間に全ての政務が滞って混乱に陥った。

そして動揺する宮中の隙を突いて入り込んだ刺客に王太子は狙われたのである。ガッシュは王太子を庇って刃を受け、瀕死の重傷を負ったのだ。胸の刀傷はそれほど深くは無かったが、左太腿に深く

刺さったナイフには毒が塗られており、全身に毒が回ってまる三日意識が戻らなかった。
変色した左足は一時は切り落とさねばならないと医者が判断した程危機的状況であったが、生来の強い生命力ゆえか運良く一命を取り留めて左足の切断も免れた。
しかし、医者の見立てでは脚の機能は完全に回復しないだろうということだった。その話を聞いて誰よりもショックを受けたのは、ガッシュ本人ではなく王太子だった。
もう親衛隊の隊員は務まらない。任務を全うしての名誉除隊ではあるが、ガッシュの本来の血筋では再び王太子の傍近く仕えるのは無理であった。
見舞いに訪れた王太子は、未だ床から起き上がれぬガッシュを見て何も言わず、ただただ涙を流していた。そしてガッシュの傷も完全に癒えぬ内にあれほど壮健であった獅子王はあっけなく病に崩御し、王太子は十三歳で王位を継いだ。
ガッシュは思う。姿形は確かにエルドシールは獅子王に似ているが、ふとした瞬間に見せる繊細な優しさや寂しさを滲ませる立ち姿は父であるローレッセン王に似ている、と。
今でもガッシュの胸の中に生きるのは、国を傾けた暗愚なローレッセン王では無く、言葉も無く泣いていた今にも崩れ落ちそうな王太子の寂しげな姿だ。
もし、自分が怪我などせず、王となった後も仕え続けることが出来ていたら、かの方の運命を少しでも良き方に導くことが出来たかもしれぬ。そんな埒もないことを考えてしまう。
結局のところ、ガッシュは約五年かけて殆ど前と変わらぬほどの機能回復を果たしたのだが、その頃には王となったローレッセンはガッシュに見向きもせず、親衛隊に再び戻る事は無かった。数年間地方で国境警備隊として勤めた後、同じ親衛隊員だった男の紹介でガッシュは騎士院の教師になった。

教師という仕事は思った以上に性に合っており、いつしか自分の代わりに王に仕えてくれる優秀な親衛隊候補を育てたいという望みを持つ様になった。その願いはもう叶える事はできないが、その息子であるエルドシールならばまだ間に合う。親衛隊の隊員は単なる私兵として以上の意味を持つことが可能だ。そしてエルドシールには今、それが何より必要なものとガッシュは確信していた。

「親衛隊、か。そなたに息子があれば一も二もなく取り立てたであろう」

「生憎私は独身でございますし、これからも結婚の予定は無いでしょうな」

「何故結婚せぬ？」

「嫁に来てくれる者がおりませぬ」

これは嘘である。そろそろ老境に差し掛かる今でも縁談はたまに持ち込まれてくるが、ガッシュにはその気がなかった。

「そうか。では我は嫁に来てくれるという正妃候補達にせいぜい感謝することとしよう。親衛隊については、そなたがこれはと思う若者がいるならば推挙を許す」

王はあっさり引いて、ガッシュの願いを聞き届けた。

中、下級貴族にとって一度でも親衛隊に所属した男は家名の箔付けをする婿として申し分無いのだから、縁談が無いなどということはあり得ない。

聡い王がそれに気付かぬ筈も無いが、それを無理に聞こうともせずにさりげなく気付かぬふりをしてくれる。そんなところもあの

方に似ていると、ガッシュは懐かしさに痛む胸に息を詰めて深々と頭を下げた。

正妃選びの幕開け

キヨが神子として召還されてから約二ヶ月半弱、王宮滞在日数も十日目を迎えたその日は朝から城全体がざわざわと落ち着かない雰囲気に包まれていた。

初夏の緑が美しく、吹き抜ける風はさわやかに青い空を駆け抜ける穏やかな昼下がり、国王陛下のご生母であるアレシア慈母様は十五年ぶりに王宮を訪れた。あくまでも尼僧として出仕する形をとったご生母は、普段と変わらぬ質素な尼僧姿で馬車から降り立った。臣下である貴族一同が出迎え、次々と腰を折って礼を取る中、ゆっくりと静かに国王陛下に向かって進む。

色好みのローレッセン王が一目惚れして強引に妾妃に迎えた程の美貌は、三十八になる現在も健在だ。年を重ねて妾妃時代とはまた違った輝きを放っている。

質素な尼僧姿だから余計にその際立った美貌が強調され、居並ぶ貴族達からは賞賛の溜め息がこぼれた。

「ようこそおいで下さいました、慈母様。この度は我が願いをお聞き届け下さったこと、幾重にも感謝申し上げる」

「何事もキア神のお導きの成せる技なり。感謝はキア神に捧げなさい」

俗世では王であるエルドシールは決して頭を下げてはならないので、お互いに立ったまま対等の立場を示して儀礼的な挨拶を済ます。

傍目にはエルドシールがご生母アレシアの来訪を熱望したということが疑わしく思える程、淡々としたものだった。

勿論エルドシールは内心大喜びしていた。結婚式までの短い期間

といえど離ればなれだった母と共に暮らせるのだ。色々頭の痛い問題やら不安やらはあるが、エルドシールにとってはこの上なく喜ばしいことには変りはない。

普通なら歓迎の宴でも開くところだが、アレシアが尼僧であるということで謁見の間において簡単にお披露目の儀が行われるのみに止められた。

現在ゼッタセルドにおいて最も位の高い女性は前国王の正妃、シェゼールミーア王后であるが、皇太子を亡くしてから王都から馬車で三日程掛かる離宮に引きこもったままだ。

そういう意味ではラダトリア王国の後宮は驚く程長期間女主人が不在であった。後宮の侍女達は仕える主人も無く、ただその建物や調度類が傷まぬ様に手入れをし、美しく保つだけの日々を繰り返して来た。

だが、これからは違う。三日後にやってくる正妃候補の姫君達を迎えるに当たって、侍女達は浮き足立っていた。彼女らは真面目に仕事に務めていたが、やはり主人が居た方が張り合いがあるし良い緊張感も生まれて活気が生まれるのである。

つい先日女官長次官に抜擢された古参の侍女、ベルタもまた何時も以上に気を引き締めて部下達の働きぶりに目を配っていた。

実はベルタはアレシアの妾妃時代の部屋付き侍女であった。そんな理由もあって今回の抜擢となったので、ベルタはご生母のお世話と、その侍女として既に王宮に上がった尼僧見習いの娘の面倒を全面的に任されていた。

今ベルタはアレシアが滞在する貴賓室の最終的な確認作業を、尼僧姿のキヨと共に行っている最中である。

侍女として王宮に上がるならば、侍女の格好をするのが理にかなっている。尼僧といっても見習いの身分なら問題無いだろうに何故尼僧姿を押し通すのか、職場の規律を乱す原因ともなる、と、当初

ベルタはキヨに対してと良い感情を持っていなかった。
しかし、それが仕えるべき相手であるアレシアの希望だと聞かされて否定的な感情を忘れる事にした。ベルタにとって最も重要な任務は、王宮に滞在する間、アレシアがつつがなく快適に日々を過ごせるよう心を配ることである。

「キヨ、程なくしてアレシア様がこちらにいらっしゃいます。おそらく陛下もご一緒でしょう。お茶は何をご用意するのか分かりますか？」

「はい。旅のお疲れを癒す為に慈母様には香草茶に蜂蜜を少々、陛下にはいつもの花茶をご用意致します」

「宜しい。陛下の侍従から本日陛下は少し目にお疲れのご様子が見られると報告がありました。セルジの薬湯も念のためご用意して差し上げなさい」

「かしこまりました」

尼僧特有の膝を軽く折って胸の前で手を交差する仕草をして礼を取ってから、キヨはきびきびとした動作でお茶の準備を始める。

実際指導してみるとキヨは中々優秀であった。飲み込みが早いし、機転も利く。できればこのまま後継者の侍女として指導してみたくなる人材だった。

侍女の殆どは、中下級の貴族の娘が結婚前の行儀見習いと給料を持参金の足しにする目的を兼ねて宮中に上がった者だ。ローレッセン王の時代なら妾妃の座を狙って、という理由もあっただろうが、今の時代はそういった望みを持って侍女になるものはいないだろう。

とにかく、侍女の殆どは既に婚約者がおり、皆二十歳になる前に辞めて結婚する。ベルタの様な古参の侍女は少ない。ありがちな事情としては、婚約者と死に別れた後新たな婚約者を得る事が出来ずに行き遅れてしまった者か、困窮する実家の事情で持参金を用意出来ずに結婚出来なかった行き遅れか、いずれにしても女の幸せから外れた者達ばかりである。

ベルタはどちらかというと後者だが、侍女を続けてきたのはそれが大きな理由ではない。割合血筋の良い方から若いうちに辞めてゆく侍女の世界は、血筋よりも努力で上を目指せる他に類を見ない仕事場である。いわゆる職業婦人の自覚と誇りを持つベルタにとって、侍女の仕事は生き甲斐であった。その生き甲斐に気付く切っ掛けをくれたのがアレシアであったので、ベルタの気合いの入り方も半端ではなかった。

やがて扉の向こうが騒がしくなり、その到着が告げられるとベルタは若い娘の様に胸を高鳴らせた。懐かしさと、次官としてかつての主を迎えられる誇らしさに上気した顔を一度しゃんと上げ、背筋をぴしりと伸ばしてから優雅に裾を摘んで膝を折り、深々と頭を下げた。

一方、正妃候補の三名を迎える日を間近に控えて臣下達には静かに困惑と動揺の波が広がっていた。

先日、王が朝議の終わりに宣言した言葉が波紋を呼んでいるのである。

「どの候補を選ぶかは、最終的に我に委ねられていたはずだ。いずれの姫君もそなた達が重要と目する条件において甲乙付けがたい。よって我は独自の選定基準を定める。公平を期す為に、その評価を下すための選定方法も全て我に委ねられたものとする。また、選定

方法については全面的に慈母様にお任せするものとする。慈母様は公平な存在であるので、異論は無いはずだ。では、今日の朝議はこれで終了とする」

正妃候補選定期間は二ヶ月、その間どのような課題を正妃候補達に課すかはその開始が間近になっても紛糾を極め、殆ど決まっていなかった。

それぞれの姫君に得意な分野があり、少しでも所属する派閥の姫君に有利な課題にしようとした結果、準備に時間がかかる上予算も莫大になる大舞踏会、芸術披露会の他は何一つ決まっていなかった。

もう準備の始まっている大舞踏会、芸術披露会は当初の予定通り行われる事になったが、王の宣言でそれらは選定基準に含まれない事になったようなものだ。

王の宣言は全ての問題を解決する公平さを持っていたが、その代わり臣下の介入を最終段階の今に到って完全に拒絶した。そればかりか、重要な選定方法を今まで頑なに修道院から出てこようとしなかったご生母に任せるという。

勿論、三人の内どの姫君が選ばれても表向き誰も文句は言えない。何故ならどの姫君も臣下が示した共通の王妃たるものに必要な条件を十分過ぎる程備えているからである。どの姫君を選ぼうとも、それは臣下の思惑通りなのである。

それなのに何故、最終段階でこれ程強硬な態度を王が取ったのか。今まで一言も口を挟まなかっただけに、ある種の不気味さと不安を臣下達に抱かせていた。そして、その理由の分からない不安を振り払う様に慈母様に対する賄賂と間者の手配に奔走し始めた。

旧き戦友

王が部屋を辞し、キヨも片付けの為に部屋を離れると、かつての主従が残された。

深く椅子に腰掛け、寛いだ穏やかな笑みを浮かべてアレシアはすぐ傍へとベルタを呼び寄せる。ベルタはきっちりと美しい礼をしてから跪き、伸ばされたアレシアの右手を両手で受けてその甲に額をそっと付けた。

これは位の高い神官や慈母、慈父と呼ばれる高位の僧侶から祝福を受ける時の正式な作法である。普通は神殿での儀式でしか行わないが、あえてベルタはこの作法で十何年ぶりの再会の喜びを示した。アレシアもまた、ベルタの心意気を受けて嬉しげにベルタの手を取ってしっかりと両手で握る。

「ベルタ、久しいですね。元気な様子で安心しました」

「有り難きお言葉でございます。アレシア様もお変わりなく、再びこうしてお仕えできる喜びは語り尽くせませぬ」

「まぁ……、ベルタ、本当に流暢になったこと」

ベルタの口上にアレシアは驚いて目を見張る。昔部屋付き侍女であったベルタはまだ王宮に上がって日も浅く、慣れぬ宮廷典雅言語の敬語に四苦八苦して失敗ばかりしていた。そんなアレシアにベルタは目尻に刻まれたしわを深くして笑った。

「恐れながら申し上げます。私も侍女を務めて二十年以上になりま

すれば、成長もいたします」

「そうね、私も年を取りました。そなたも今は女官長次官でしたね」

「はい、私も年を取りました。アレシア様も今は慈母様でいらっしゃいます」

そういって涙ぐむベルタに、ふっとアレシアの脳裏に蘇る映像があった。かつて逃げる様に去った後宮の入り口で、涙を零しながらも唇を噛み締めて声を殺し、必死で手を振って見送ってくれた若き日のベルタの姿だ。

「……そなたとも二度と会えないと思っていましたが。決死の覚悟で戻って参った王宮で思いがけず嬉しい再会がありました」

もう一度強くベルタの手を握ってから、アレシアはそっとその手を外す。ベルタもまた自然な仕草で手を引き、立ち上がると一歩下がって脇に控える。

その瞳には既に涙の影は無く、女官長次官として頼もしい限りの風格を感じさせる立ち姿にアレシアは感慨深げに目を細めた。

「ベルタ、私はいずれ修道院に戻ります。ですからなるべく修道院での生活習慣を崩したくありません。そういうわけですから私には貴人に対しての様な世話は必要ありません。私の身の回りの世話はキヨ一人で十分です。ベルタには、ベルタにしか頼めない事を頼もうと思います」

「私に出来ることでしたら、なんなりと」

「では、まずは贈り物の整理です。私には貴族達から多くの贈り物

が届くでしょう。それら全ての管理をそなたに任せます。
誰から何時、何が贈られたか、全て書面にしておくように。
そして全てを彼らの名でシーラ神殿に寄贈すること。神官長グラスロー様にお願いして、そのご署名の入った感謝状を私に届けて頂きます。それに私の署名を加えた後、贈り物の主に届けて下さい。
中々大変な作業だと思いますが、信頼の置けるものにしか頼めません」

「ア、　アレシア様、それは……」

流石にベルタは目を丸くして動揺を見せた。賄賂を受け取った上で賄賂としての意味をなさない神殿への寄付にしてしまうということは、賄賂を贈った方にしてみれば手酷い裏切りとも言える。

「えぇ、喧嘩を売るのよ。息子の未来の為に、私は慈母としてあるべき姿を貫くわ。私に贈り物をするということは、慈母への喜捨。つまり神に捧げるのと同義。
今までは逃げ回っていたけれど、今回は受けて立つわ。あなたにはその片棒を担いで欲しいの。でも私だけでなくあなた自身も危険に晒されるかもしれないし、今後侍女として……今は次官だったわね。女官長次官の仕事をやりずらくなるかもしれない。降格もあるやもしれません。
これは私の我が儘ですから、あなたには断る権利がある」

アレシアは今まで誰からの贈り物も受け取りはしなかった。一つでも受け取ってしまえば、なし崩しにその後も贈り物を受け取る事になる。また贈り物を受け取ればその贈り主との関係を詮索され、根も葉もない陰謀説が流れ、それらはいずれ自分ではなくエルドシールに影を落とす。
だからたとえどんな相手からのどんな贈り物だろうと受け取らな

い。
　それは妾妃の頃からずっと貫いて来た姿勢だった。ベルタもそれは十分すぎる程理解していた。それをアレシアは破るというのである。ベルタはアレシアの覚悟に背筋が冷える様な緊張感を感じた。
　だが、迷いは無い。
「アレシア様の信頼に応えないようでは、侍女としての誇りが許しません。喜んで片棒を担がせて頂きます」

慈母と神子1

アレシアとキヨは基本的にお互い自分の事は自分でする。侍女の手助けが必要なドレスの着付けも髪を結い上げることも無い。尼僧衣を着るのも頭巾を身につけるのも当然自分でやる。慈母という地位で出仕しているアレシアは社交の場に出る必要は無かったし、社交の場を主催することも今のところ特に無い。

正妃候補達が王宮に上がれば忙しくなるだろうが、それまでは一切の面会希望も断ることにして王宮の生活に慣れる事を最優先させる事に決めた。

勿論、それを可能にしたのは王である。お披露目の儀の折りにエルドシールが正妃候補達が王宮に上がる前に十分に休息を取って欲しい旨を皆の前で伝えた。王の言葉は母を気遣う息子としては当然と言えば当然で、流石に遠慮して面会の申し入れの希望も無かった。贈り物は幾つか届いていたが、どれもそれほど大きなものではない。贈り物は面会時に直接手渡して願望を伝えない事には賄賂の意味をたいして成さないのだ。よって、本当にアレシアはのんびりしており、キヨがいれば十分であった。そして目下のところキヨの最も大事な仕事は毒見である。

毒見と言っても実際に口にすることはない。毒の入ったものを食べようとすると、額の宝玉が熱くなって危険を知らせるのである。今までに発見した毒はどれも死に至る様な毒では無かったので、まぁ挨拶みたいなものだとアレシアは言い、キヨはさすが王宮と顔を引き攣らせた。

「宝玉が無かったら、どんなに良い条件を提示されても王宮なんかに住みたくないです」

疲れた顔でぼやくキヨに、キヨが首実検済みの香草茶を飲みながらアレシアはゆったりと微笑んだ。

「ほほ……、この程度なら可愛いもの。大方、私が体調を崩して正妃選定に関わる事を辞退する事を狙っているのでしょう。もしくは、辞退しなければ今度は本当に致死量の毒を盛るぞという警告か。

そこまでなくとも、体調不良で不安を煽り、誰か有力な者に頼るような心理状態に追い込んで有利な選定方法を引き出そう、とか。

特定は出来ませんが、いずれかの理由でしょう」

ちなみに毒入りクッキーやらスープやらはベルタが回収し、医者に分析させた後で内密に処分された。

大事の前の小事に過ぎないと王には知らせていない。王もこれくらいの事は予想済みだろうと言う。

いくら致死量じゃないとはいえ、毒が盛られたのだ。それを小事と言い切って平然とするアレシアと、その対応が当然という態度で処理を請け負うベルタを見てキヨは内心冷や汗を滝の様に流していた。

予想を上回る殺伐とした内部事情に、正直キヨは自分の無謀を後悔しそうだった。もしかして自分はとんでもなく楽観的で、恐ろしく無謀な事をエルドシールとアレシアにさせようとしているんじゃないだろうか。

今更な後悔をしてももう遅い。事態はもう引き返せないところまで来ている。

エルドシールは臣下に自分の基準で正妃を選ぶって言っちゃってるし、アレシアも選定方法についてやる気まんまんで準備も進んでいる。

（私が焚き付けて始めたんだから、最後まで私は自信満々の顔をしていなきゃ！　毒喰らわば皿までよっ！）

キヨは自分を奮い立たせて心の中で気合いを入れ直す。
それにしても、と空になったアレシアのカップを再びお茶で満たしながらキヨはちらりとアレシアを盗み見た。アレシアはそろそろ四十になるとは思えない程若々しく美しい。
顔立ちは、親子だと誰もが分かる程エルドシールにそっくりである。すっとした鼻梁に繊細な顎のライン、少し下唇の厚い形の良い意志の強そうな口元、彫りの深さが陰影の美しさを見せ、キャバクラ嬢も真っ青なボリュームたっぷりの睫毛とくっきり美しい二重まぶた。
存在感のある大きな瞳は灰色が掛かった様なくすんだ緑色で、頭巾から僅かに見える髪は柔らかなダークブロンドだ。修道院での生活で日に焼けて白い肌に多少シミそばかす、シワが見られるものの、かえってそれが穏やかな笑みを常に浮かべる彼女の溢れ出る様な心根の優しさを引き立て、親しみやすさを増している。
同じ顔立ちでも、無愛想な息子とは随分な違いだ。髪や瞳の色彩の印象の違いはあるだろうが、表情というのがこれ程人の印象を変えるのだというとても分かりやすい見本だな、とキヨは思った。
ローレッセン王の妾妃は美女ぞろいだったというから、ただの美女に一目惚れするわけがない。きっとこの天使がラッパでも吹いて周りに飛び回りそうな優しい笑顔に惚れたに違いない。

ところで、アレシアと少し会話するだけでキヨはアレシアが一通りでなく頭の良い人だと気付いた。勿論エルドシールからアレシアのことは聞いていたから母親の我が子を守る本能の様な賢さがあるとは思っていた。が、どうも話しているとアレシアにはそれ以上の洞察力や攻撃にも討って出られる知恵があるように思えてならない。
毒にも堂々として動じないアレシアなら後宮でも十分戦い抜けた様な気がする。悠然とお茶を飲む姿を見るにつけ、逃げ一方でやって来たアレシアの姿勢に違和感を覚えて首を傾げてしまう。

「慈母様、質問しても宜しいですか？」

「なんでしょう？」

「慈母様は何故、今まで戦わず逃げる事を選択してきたのですか？」

「そうですねぇ……。戦って、犠牲を覚悟してまで得ようと思う価値のあるものが無かったから、かしら。息子が王になることよりも、贅沢な暮らしよりも、私にはただただ息子と娘の命が大事だった。

幼子は本当に些細な事で命を落とすもの。後宮ならば特に。妊娠中も含めてエルは実際三回程死にかけました。レンカも妊娠中に一回。

幸いレンカは女の子でしたから、生まれてからは命を狙われることは少なかったですけれどね。自分で身を守れない幼子二人を抱えたままでは戦おうにも剣を握る事すら出来ませんし、逃げる事しか考えられませんでした。

それにエルを生んだ時、私自身がグラスロー様に泣きついてしまうような子供でした。あの時既に私は十九でしたから年齢的には大人でしたけれど、精神的には本当に未熟で……。今同じ十九のエルの方が遥かに精神的には大人でしょうね」

穏やかに話すアレシアは思った以上に恐ろしい状況をくぐり抜けて来たのだとキヨは知った。

妊娠中にエルドシールやレンカが死にかけたというなら、アレシア自身も死にかけたということだろう。今現在ですら気の抜けない状況であるのに、これ程ゆったり構えていられるのは比べ物にならないくらい過酷な状況を経験したという過去を持つからかもしれない。

数年前、十九の自分だったら、そんな状況でどう生き延びただろ

う？　頼る者もいない後宮で十九の自分に子供二人を守りきれたとしたら、それは奇跡に違いないと思った。

「……失礼ですが、慈母様のご家族は？」

「私の生まれた家は、もうこの世にはありません。父母は私が十の時に流行病で亡くなり、父の古い友人であったグラスロー様を頼って私は神殿の見習い尼僧になりました。子供は私一人でしたので家名を継ぐ男子もいません。本来なら私に婿を取るところでしょうが、今となってはそれも無理ですから古い名家ではありましたけれど実質断絶ですわね。そういえば神子様のご家族は？　天上界に残していらしたのでしょう？　心配ではありませんか？」

不意に話を振られてキヨは返答に詰まった。神子はキア神の住まう天上界から遣わされるというのが一般的に信じられていることらしい。

「……そういった未練の無い者の中からキア神は神子を選ぶそうです。私は父を知らず、母とも六歳で別れたきりです。祖父と住んでいたこともありましたけれど、その祖父も数年前に亡くなりました」

「そうですか……天上界でも、悲しみや苦しみがあるのですね……」

アレシアにはキヨの生い立ちは予想外だったのか、痛ましげな顔をしてほうっと小さく溜め息を吐いた。　アレシアと違ってキヨはまだ過去を振り返るのは辛過ぎて、話を打ち切る様に軽く頭を振った。

「それで、どうして今回は戦う気になったのですか？」

「あら、それを神子様がお尋ねになるの？」

「確かに説得したのは私ですけれど……でも、今のお話を聞いて何故説得出来たのか分からなくなってしまいました」

はっきり言って自分だったら、そんな何度も死にかけた場所には絶対戻ってきたくないとキヨは思った。キヨの言葉にアレシアは少し驚いた顔をしてから、柔らかな笑みを浮かべた。

「キヨはキア神の神子様でいらっしゃるけれども、その様に戸惑ってしまう程に幼くていらっしゃるのですね」

幼いと言われてキヨは赤面して俯いた。エルドシールには実年齢を言ってあるが、こちらの世界では見た目とそぐわない実年齢で色々面倒だから十五ということになっている。

「これまで私は命さえ無事ならと、息をひそめて生きてきました。子供達の命の事ばかり考えて、その幸せについては殆ど考えてこなかった。言い換えれば命さえあれば幸せなど二の次。今思えば生き延びるのに必死過ぎたのでしょう。それを間違っていたとは思いません。実際命を落としてしまえばそれで全てが終わりですから」

「私も、そう思います」

記憶は殆どないが、幼い頃死にかけたキヨは大きく頷いた。生きているからこそ、キヨはキア神にも出会う事が出来た。

「でも、もうエルは私が守ってやらなければ生きて行けない幼子ではない。神子様はそれを気付かせてくれました。本当はあの子が自分の意志で王になると言った時、気付くべきことでしたけれど」

「え…エディは、いえ、エルドシール様は自分で王になるって言ったんですか！？」

エルドシールに持っていた印象とはかけ離れたその事実にキヨは驚き、つい勝手に決めた愛称が飛び出す。あの性格からしててっきり運命に流されるままに王様になったのだろうとキヨは思っていた。

驚くキヨにアレシアも目を丸くして驚く。

「神子様はあの子をエディと呼ばれるのですね」

「す、すみません」

そこに驚くとは思わなかったキヨは、珍しく狼狽えて顔を赤くした。

「いいえ、謝る事はありません。可愛らしい呼び名ですわ」

確かにエルよりもエディの方が可愛い気がするとキヨは思った。そしてそんな可愛い愛称を付けちゃった自分を地に沈めたくなるキヨだった。

「そう、私もびっくりしましたよ。あの子が真剣な顔をして王になりますと私に告げたときは。あの子は人の前に出るよりも裏方として黙々と頑張る様な性格でしたし」

「私は王となってからのエルドシール様しか存じ上げませんが、確かにそういった役回りがしっくり来る方だと思います」

外見はともかく性格はいたって真面目で地味だ、とキヨは頷く。

「えぇ、間違っても権力を欲する様な性格ではありませんでしたし王に向いているとも思いませんでしたから、あの時は随分貴族達を恨みました。なぜ私達親子の事などずっと忘れ去っていてくれなかったのかと。

思い出されてしまい、見つけ出されてしまったからには王になる以外の道はあの子にはありませんでした。それでも子供ながらにあの子は、逃れられない運命だからという理由では無く、自分の意志でその道を選び取って歩き出したのでしょうね。それなのに私はまだ耳を塞ぎ、目を閉じて踞っていた。だから私はあの子の力になる事を考えるよりも、弱点にならない様に修道院に閉じこもっていたのです」

一口、お茶を飲んでから静かにカップを置いて、アレシアは身体を改めてキヨに向けて座り直した。

「ただ生き延びるだけの人生なら、エルの人生は生きていながら死んでいるようなもの。たとえ志半ばで倒れようとも、あの子本人が選びとった道ならばあの子の人生は一瞬だとしても光り輝くでしょう。神子様があの子の行く道を照らして下さったのも、きっと神の思し召し……」

そのアレシアの深く静かな眼差しと、告げられた言葉の重さに、キヨは頭を殴られた様な衝撃を覚えた。

慈母と神子１（後書き）

慈母と神子2

??たとえ志半ばで倒れようとも、あの子本人が選びとった道ならばあの子の人生は一瞬だとしても光り輝くでしょう??

最悪の事態を覚悟した上で、アレシアもエルドシールもキヨの計画に乗ったのだと、ここに至って初めて本当に自覚した。

そしてそんなアレシアの姿勢に、突然キヨは故郷の言葉を思い出した。

“武士道とは死ぬ事とみつけたり”

どのように生きて死ぬか。死を覚悟しても成し遂げる志を持って生きること。アレシアの眼差しはそれを見つめているのだ。

急に溢れ出る感情の波に呑まれ、キヨの瞳からは涙が溢れ出した。

元いた世界では権力争いだの政略結婚だのは遠い世界の話で、こちらに来てからもあののん気で緊張感の無いエルドシールのせいかもしれないけれど、どこか現実味が無く、恐ろしさを感じなかった。

たかが結婚の話だと言ってしまえばそれまでだし、死の覚悟など大袈裟だと言えなくもない。

でも、エルドシールは何度も命を狙われ、殺されかけた経験のある王様で、王の結婚はすなわち国の一大事で、その決断次第で国の未来が変わるかも知れない多くの人間の運命を担った結婚なのだ。

「っ、ごめん、なさい……」

「神子様?」

驚いておろおろするアレシアにキヨは唇を噛み締めて頭を振った。

「私、もっと、簡単に考えていました……そんなふうに……うぅ……」

後に言葉が続かず、キヨは零れ出る涙を乱暴に手の甲で拭う。そんなキヨの手を、アレシアの手が躊躇いがちにそっと握った。

「神子様、泣かないで下さい。大丈夫。簡単に考えるべき時が来たのです。あの子は大人になり、家族を作るのです。

その家族と共に国を守り、愛を育んで次代に命を繋ぐ、誰もがやっている普通のことです。母として、それを応援するのは当然の事。

ただちょっと普通と事情が違うのは、あの子が王様だということだけ」

「ちょっとどころじゃなく普通の事情じゃないです」

つい子供っぽい反論をして不貞腐れた様な顔になってしまうキヨを見て、アレシアは椅子から立ち上がり、小さな子供をあやす様に立ったままのキヨの背を撫でた。

「でも、神子様がおっしゃって下さったのですよ？

神の前には王も乞食も関係無い、一人の人間として幸福を追求することに何の遠慮があるのか。迎える伴侶を慈しみ、愛を育んで幸せを築くことを望むことに何の憂いがあるのか、と。

私はその通りだと思い、自分の意志で神子様の計画に賛同しました」

なんて強い人なんだろうか。キヨはもう顔も思い出せない自分の母を思いながら、アレシアの優しい顔を見るとまた涙が溢れてくる

のを止められなかった。

「私……私、エディが羨ましい。あなたの様な母親を持てたなら、世界中の不幸を背負っても良い」

思わず出てしまったキヨの本音に、アレシアは軽く驚いた顔をしながらも穏やかななままの微笑みでキヨの背を撫で続けた。

「それは光栄ですわ。でも、私の目を覚まさせて下さったのも、迷いの森で立ちすくむあの子の進むべき道を照らして下さったのも、神子様、あなたです。

さぁ、笑顔になって下さい。そしてあの時のように言って下さい。何も心配することはないと」

必死で涙を飲み込もうと息を詰め、キヨは自分に手を差し伸べてくれたキア神の姿を思い浮かべた。

自分を信じろとは言えないけれど、自分を神子に選んでくれたキア神は信じられる。

「……エディは……キア神に似ています。エディは全然王様に向いてないし、らしくないけど、キア神もぜんぜん神様らしくなくて神様に向いてるとは思えなかった。でも、そんなキア神が私は大好きになって、だからキア神が創った世界で生きてみたいと思った。だから、きっと大丈夫です。エディはキア神に似ているんだもの、この世界に愛されていないわけがないわ」

普通だったら創造神に対してこんな暴言はあり得ないだろう。キア神を信仰する相手に言うべき言葉ではない。

けれども、それはキヨの正直な思いの全てで、アレシアもそれを感じたのだろう。立ち尽くすキヨをアレシアはそっと抱き締めた。

「あぁ……何よりも嬉しい言葉ですわ、神子様。全ては神の思し召し……」

キヨは洟を啜りながらどうにか笑顔を作って頷いた。

「はい、全ては神の思し召し。汝恐れることなかれ……」

この時からキヨとアレシアは深い絆で結ばれる事になった。

キヨは生涯アレシアを母と慕い、己の目指すべき未来の姿として定めた。

そして自らも尼僧として修行を積み、慈母となって孤児達を始め子供達の教育と保護、一人前として社会に巣立つ道筋作りに一生を捧げることになる。キヨは死後、その功績と最後に見せた奇跡によってラダトリアの聖女と呼ばれるまでになるが、それはまだ遠い未来の話である。

慈母と神子２（後書き）

少しだけキヨの過去とキア神の事をちら見せして『慈母と神子』終了です。
すみませんがしばらく執筆お休みします。詳しくは活動報告をお読み下さい。

副宰相の授業1

時は少し遡る。

キヨはかりそめの父であるドールーズから、その屋敷に滞在中にエルドシールの正妃候補となっている三人の姫君達について詳しい説明を聞いていた。

長く俗世を離れていたアレシアの為の情報収集であったが、ドールーズは当然そうは思っていなかった。いずれ正妃になるのだからと、なかなか突っ込んだ政治の裏的な情報も教えてくれたので、それも含めてアレシアに話し、今後の計画に役立てる方向で進んでいる。

一番厄介とエルドシールが言っていた敬語の勉強をせずに済んだので、ドールーズ家に滞在中はすぐに宮廷で役立つ情報を得る事に終始した。

昼間は王宮で侍女の経験のあるドールーズ家の執事夫人から行儀作法、王宮の決まり事などの侍女業に関して必要な事を学んだ。

ドールーズは毎日きっちり夕刻には帰って来てキヨの教師役を努めた。キヨが副宰相って意外と暇なのかと思う程、きっちりと。キヨが屋敷滞在中は宰相のレイゼン公爵の口添えでかなり仕事を軽減してもらっていると知ったのは、一週間程経ったころである。

「レイゼン公爵からアレシア様によろしく、とのことです。それから、間もなく王宮に上がるご令嬢フィリシティア様もお年も近いことですし、よろしくと」

（ははーん、つまりアレか。義父上を通して私にレイゼン公爵に世話になったとアレシア様に言えと。そして娘をよろしくと。いやー、

表向き取るに足らない尼僧見習いにまでマメだね公爵！）

胡散臭い微笑みを浮かべる義父上にキヨも胡散臭い微笑みで応酬する。

見た目だけで言うなら、キヨの目から見たドールーズはなかなかのナイスミドルだ。

キヨは個人的にモヤシ体型よりも頼りがいありそうなドールーズのようなガッチリ体型の方が好きだった。こちらの人間は基本西洋人的彫りの深さで、ドールーズは造作も整っている。綺麗にオールバックに撫で付けた銀髪は白髪混じりだがその入り具合がメッシュの様で格好良い。

キヨにとって惜しむらくは、同種の人間の匂いがすることか。

そこには同族嫌悪という言葉がある。

ドールーズは、はっきり言葉に出して言わないがキヨを正妃にする気満々で、自ら歴史、政治等自分の得意分野の教師を買って出ていた。

「大まかな我が国の歴史と政治の仕組みは説明し終わりましたので、今日からはもう少し踏み込んで参りましょう。貴族の誇り、というといささか胡散臭いですが、貴族にとって何が重要か分かりますか？」

貴族の誇りを胡散臭いとキヨ本人に言ってしまう辺り、ドールーズもまたキヨを同類だと認識していることが明白だ。

「やはり血筋でしょうか」

「それも一つですが、あと二つあります」

「名誉、や、忠誠心、ですか？」

キヨはとぼけて無難な答えを言うと、ドールーズはその点には微笑みでぬかり無く応えた。

「神子様らしいお答えですが、違います。現実の政治の世界では名誉や忠誠心は紙くず並みの価値しかありません。血筋、家柄、そして権力です」

「血筋と家柄は、同じではないのですか？」

「違いますな。血筋というならば、最も尊い血筋は王家の血筋です。血筋で大事なのは血筋による特殊性です。王家の血筋以外ならば、例えば代々優れた武人を輩出する、代々音楽の才能に優れている、医術に秀でた者が多く生まれる、などです。

家柄というのは、その家の由緒、つまり位を授かった理由が大切なのです。貴族も最初から貴族だったわけではない。大きな功績があって貴族となったわけですから、その功績がどのようなもので、どれくらい評価されたかが大事なのです。

例えば位だけで言えばフォルス公爵家というのがありますが、この公爵家は家柄という意味ではさほど重要視されていません。フォルス公爵家は元は伯爵家でしたけれども、約四百年前に公爵位を授かりました。その理由は世にも珍しい青い薔薇を献上したからです」

「そんな理由で、ですか？」

「えぇ。ナイアード王を覚えていますか？　芸術院の復興とゼッタセルド王国史を編纂させた王です。かの王は別名薔薇狂いの王と呼

ばれる程の熱狂的な薔薇愛好家だったのですよ」

キヨはちょっとびっくりしたが、記憶を掘り返してみればまぁ、ままあることかと納得する。恋人の坊主を天皇にしようとした女帝とかいたし、それに比べれば可愛いものかな、という結論に落ち着いた。

「でも、そんなに簡単に王の気分で爵位を上げたりして混乱したりしないのですか？」

「一時的にはそういうこともあるでしょうが、長い目で見れば実際にはそれほど問題ありません。王個人の寵愛で頂いた爵位は王が代替わりすれば実質的な力を失いますから」

そりゃそうだな、とキヨは思う。

薔薇を献上したから貰った公爵位と、誰もが認める功績で貰った公爵位の価値には歴然とした差があるし、そんな理由で権力なんか実質与えられなかっただろうから、放置されて今でも家が残っているんだろう。

そんな理由で権力でも付与された日には、暗殺されて三日天下の可能性が高い。不名誉な事実、例えば謀反とかの証拠をねつ造されて、御家取り潰しの上に全財産の没収、処刑による一族の血筋の断絶、公爵位を貰った事も永遠に表の歴史から抹殺、という憂き目にあってもおかしくない。

「つまり、爵位の上下がそのまま家柄の善し悪しや、力があるかどうかの目安にならないという事ですか？」

「そうです。逆の例でいえばゼットワース侯爵家がそうですね。位で言えば公爵より下ですが、ゼットワース家は代々剣で王家に

仕え、功績という意味では相当華々しい家柄です」

「確か、暗黒時代を救った英雄の一人が初代でしたか？」

詳細不明の二代目神子に付き従った三人の英雄の内の一人がゼットワース家の初代当主で、他二人は当時の国王と神官長だったはずだ、とキヨは記憶を引っ張り出す。

「そうです。近い時代では獅子王の時代に王の片腕として戦場を駆け、一度ならず王の危機を救ったとか。

獅子王は褒美としてご自身と同腹の妹姫をゼットワース家に降嫁させました。この褒美は公爵という位に相当する程のものと解釈されています。そして内戦を経て現在全ての軍事力の約半分を握っているという意味では相当の実力を持っています。」

「今のお話からすると、家柄というのはどちらかというと名誉に近い気がしますが」

「そう解釈する事も出来ます」

じゃあ普通はどう解釈するんだとキヨは内心ツッコミを入れたが、聞くとちょっと面倒くさそうだったので微笑みで終わらせた。所詮はその名誉も実質的な権力に結びつくのは言わずと知れたことだ。

副宰相の授業2

「では、そろそろ三人の正妃候補の姫君についてお話しましょう」

「お願いします」

いよいよ本題だと、キヨは姿勢を正した。

「まず、宰相と大臣達が王の正妃としての条件に掲げたのが、王家の血を引いている事、公爵相当の家柄の出であること、そして後ろ盾の無い王を支えるに足る強力な後ろ盾を持つこと、以上の三点です。三人の姫君はいずれもこの条件を満たしています」

今までの話はこの条件の為の布石だったのかと理解して、キヨは頷いた。

「お一人目、ガルニシア公爵家の姫君はセリーヌ嬢、今年二十歳におなりです。ガルニシア公爵家はゼッタセルド建国以来の神話の時代から存在する名家です。ゼッタセルド建国の話は覚えておいでですか？」

「はい。キア神の涙の守人としてキア神に選ばれた兄弟のうちの弟が初代ですね」

キア神に祈って神子の降臨する泉を与えられた若者は初代神官長となり、信仰で泉を守った。

それと同時に武力で奪おうとする者から泉を守る為にキア神は泉を力で守る者としてある兄弟を選び、この兄の名がゼッタセルドで武の力で初代国王となり、弟ガルニシアは知の力で兄と共に建国に

尽くしたというのが簡単な流れだ。

「建国の祖の一人ですから、家柄としてはガルニシア公爵家を超える家はありません。武の兄に対し知の弟という性格もあったのでしょうが、今でもガルニシア公爵家は文に重きを置いています。内戦の間もどの王子にも与せず、野望を持ちえない中下級貴族出身の官僚達を束ねてギリギリのところで国を支えていたのは実質ガルニシア公爵でした」

「どうしてその方が宰相ではないのですか？」

ガルニシア公爵は現在財務大臣だったはずだ。勿論財務大臣という役職は七つの大臣職の中では最重要な部類には入るが、文官のトップは宰相だ。

「それは単純に力関係の問題です。いくら影響力があろうとも中下級貴族に限られる、しかも武力も財力も弱い。

ガルニシア公は人望はあっても即物的な力となる財力、軍事力ではレイゼン公爵やゼットワース侯爵に及ばないのです」

「でも陛下は三者の力は拮抗しているとおっしゃっていましたが」

「それはガルニシア公が本気を出せば、の話です。政治の場では拮抗していますよ。何しろガルニシア公の一派は最も数が多い。手足となって働く末端の実動部隊の殆どを掌握していますからね。公爵は一派の願いに根負けしてセリーヌ嬢を正妃候補にすることを承諾したのです」

「それではガルニシア公爵本人は、セリーヌ嬢を正妃候補にすることには乗り気でなかったのですか？」

これにはキヨはかなり驚いた。公爵の強みは血筋と家柄で、血筋と家柄を強化して力をつける土壌となる次期王の外戚という立場を、他派閥には普通絶対に渡したくないはずだ。
ドールーズとしても、これは少しばかり首を傾げる出来事だった。

「えぇ。何故か公は娘を正妃にすることには難色を示し続けてきました。あの容姿ではたとえ正妃になっても側室や妾妃との関係で苦労するだろうという親心かもしれませんが。
ですからセリーヌ嬢が正妃候補になられても、他の二大勢力の衝突に対する緩衝剤としてしか存在意義のない形ばかりの候補というのが実情です」

「ですが、もし陛下がセリーヌ嬢を気に入られたら？」

「陛下を本当にご存知の方ならその可能性が意外と高いと気付くでしょうが、普通はそうは思いません。二十歳というのは結婚適齢期ギリギリの上、陛下よりも年上。そしてセリーヌ嬢は大変賢い方という噂ですが、その容姿ははっきり言えば並以下です」

容姿のせいで眼中にないという判定に女としては同情を感じるが、基本キヨは面の皮一枚の問題であるとも思っていたし、その点についてはエルドシールも同意見の気がする。
だが、エルドシールは女性に余り興味が無いと思われていたが、容姿以外の条件がどっこいどっこいなら見栄えという点からも美しい方をとるに違いないと殆どの人間は考える。見栄えは民衆の心を掴むという点においても、外国との付き合いという点においても無視出来ない要素だ。
普段の鉄面皮ぶりからして、気が合うなどの精神的なものを求めるとも思えないから余計だ。

「他の二人は大変美しい、んですね」

「その通りです。ですが陛下はご自身が大変な美形でいらっしゃるせいか、他人の外見の美醜には余りこだわりが無い。神子もその点では安心して良いと思います」

何気に相当失礼じゃないか、こいつ、と思いながらキヨは何の事かしら？　といった感じの微笑みを浮かべた。

とりあえず頭が良い不美人で性格が良い人に会った事が無いキヨは、セリーヌ嬢に関しては個人的に余り興味を引かれなかった。

召還前、キヨは首都の名前を冠する国立大卒の、非常にお勉強的には頭は良いがプライドが高過ぎる上に実務能力とコミュニケーション能力に欠けたオールドミスな上司のせいで、恵まれない仕事環境におかれていた。

「では次に、二人目の姫君についてお話しましょう。先程も話に出てきましたが、ゼットワース侯爵の姪、チェルネイア姫は十九歳で陛下と同じ年齢です。

家柄については先程話した通りで、血筋も降嫁された王女の血を引いています。そしてゼットワース一派の強みは軍事力ですね。正直王位を簒奪する気なら一番実行可能なのがゼットワース侯爵です。正当性としては一番弱いので三日天下が関の山ですが。

そしてこの姫君は完成された女性的な肉体美を持つ妖艶な美女です。その家柄ゆえか女だてらに剣も達者だという事で、覇気が無いと揶揄される王にはうってつけだと息巻いていますね。ですがこの姫君、出自が怪しい」

「怪しい、とは？」

「チェルネイア姫はゼットワース候の弟の娘という事になっていますが、弟の一家は内戦で屋敷を焼かれた折りに全員死亡しています。当時の記録を見ると、確かにチェルネイア姫も十歳で死亡しているとの記述がありました。ですが姫は乳母に助けられて近くの農家の納屋に身を潜めており、後日ゼットワース候に保護された事になっています。内戦中のことで記録が正確さを欠いていてもおかしくないですが、不自然なことが幾つかあります」

「不自然な事」

「えぇ。チェルネイア姫は栗色の髪、琥珀の瞳をしていますが、一家の肖像画を手がけた画家は姫は母譲りの栗色の髪と青い瞳だったと証言したという話があります。また、この画家はじめ生き残ったはずの弟一家に仕えていた使用人達の足取りが何故か掴めません。乳母以外の姫本人を知る者の周辺に残していないこと、焼き討ちで死んだ姫の乳兄弟である同じ年の少女が稀に見る美少女だったという噂もあります」

「それは……あからさまに怪しいですね」

「えぇ、あからさまに怪しいので逆に本当にチェルネイア姫本人という線も捨てがたいのですが」

「それは陛下もご存知ですか？」

「はい、ご存知のはずです。対立するレイゼン公爵一派がその疑惑を広めていますから」

「成る程。それでは信憑性も疑わしいですね」

「ですが、チェルネイア姫には正妃候補になる随分前からそういう噂はありました。ゼットワース家は武人の家柄らしく、女も男も骨格がしっかりしていて頑健ですが容姿には恵まれた家系ではありません。しかも容姿が……特に特徴的な大きな鼻が遺伝しやすい家系なので、チェルネイア姫の美貌は誰もが首を傾げる異質さなのです」

「つまり、ご両親に似たところが一つも無い、ということですか？」

「母親譲りだという栗色の髪以外は」

重要視される父方の血筋の特色が全くない美貌の姫君。それは確かに色々憶測を呼ぶだろう。

「チェルネイア姫本人はどのような方ですか？」

「私見で宜しければ申し上げますが」

「聞かせて下さい」

「ご自分の魅力をよく理解しており、良くも悪くも女の武器を最大限に使う事に躊躇いの無い方です。利用価値のある男には無意識を装った計算された媚態で近付く、男心を惑わす事に長けた女性ですな」

「義父様もその被害を受けられたとか？」

「そういう女性だと承知しておりましたから、被害というまでには至っていません。毒牙に掛かった若い有望株は何人も見ましたが」

「毒牙ってまさか……チェルネイア姫は身体の関係も……？」

「そんなことがあれば正妃候補になっていませんよ」

肉食系女子の匂いがする姫君なら、正妃候補になりながらもそれもありそうな気がしたが、さすがにそれは無いらしい。

なぜか、少しがっかりするキヨだった。

「申し上げましたでしょう、無意識を装った媚態、と。

自分にその気は無かったけれど、相手が勝手に熱を上げてしまって困ります、という体裁を見事にどの場合も整えています。そういう方法で対立するレイゼン公爵一派の若者を取り込み、ご自分の崇拝者にして切り崩しを図っている、中々のやり手です。

なまじ肉体関係の無い為、崇拝者となった者はチェルネイア姫こそ正妃に相応しいと熱烈な応援を繰り広げるわけです」

どうやらチェルネイア姫は肉食系でも小悪魔タイプの美女らしい。個人的にはそういうしたたかな女性が好きなので、キヨは是非とも観察してみたいと思った。攻撃対象にはなりたくないので余り近付きたくはないのだが、友達になれたら楽しそうな人物だというのがキヨの印象だった。実は偽物の姫、というドラマチックな要素も、不謹慎だがわくわくしてしまう。

「なかなか強烈な女性の様ですね」

「何、陛下は色仕掛けには動じない方ですから心配はございません。神子様も後二年もすればそれなりに色気も出ていらっしゃるでしょう」

重ね重ね失礼なやつだと思いながら、何のことかしら？　という風情の微笑みを再びキヨは浮かべた。

「それで、最後の……レイゼン公爵の姫君はどんな方ですか？」

「姫はまだ十六ということもあり、社交界に登場したばかりでその人柄を推し量れる程には私も存じ上げません。

ただ、国一番の美女と名高かった母君にそっくりな美貌で評判の姫君です。チェルネイア姫とは対照的な美しさと言いましょうか。銀の髪、青い瞳、華奢な体つきで、まるで精巧に作られた最高級の人形の様な可憐な美少女です。

社交界に初めてお出になられた去年の大舞踏会でお見かけした印象では、緊張のせいか口数も少なく、どちらかと言えば内気な性格の様です」

「深窓の公爵令嬢という感じですね」

「姫ご本人については、それほど脅威はございません。むしろ問題なのは私の直接の上司でもあるレイゼン公爵です。公爵は一言で言えば一番危険な野心を持つ人物です。正直この公爵自身の能力は高くはありません。家柄という意味では、殆ど意味も無い。ですが、一番厄介な家柄でもあります」

綺麗なだけのお人形って言い切ったよ、仮にも上司の娘を！　と突っ込みを内心で入れながらキヨは情報を引き出す。

「確か七代前の王の弟が初代レイゼン公爵、でしたよね？」

「はい。普通、王の兄弟が王家を出て独立する場合は婿として臣下の家に入るか、断絶した家名を継ぐという方法を取ります。大概がご生母の実家がその血縁や地縁を駆使して引き受ける事になるのですが、そういった後ろ盾が無い場合は結婚も許されず王家の一員と

していわば死ぬまで飼い殺しになります。これは王家の私有財産を減らさない為の措置で、五千年近いゼッタセルドの歴史の中でもレイゼン公爵家が唯一の例外です」

「唯一の例外……。どうしてそれが許されたのですか？」

「七代前のラウス王は双子でした。ラウス国王の双子の弟、カイエン王子は生まれた当初大変小さく、長くは生きられないだろうと言われていました。

双子は正妃の生んだ初めての王子だったので、兄と定められた王子が必然的に王太子となり、生まれたばかりの王太子が死ぬのは縁起が悪い、万が一生き延びても病弱では先行きが不安だ、という理由で、兄弟は逆の立場として公式に発表されたのです」

「逆……つまり、本当はカイエン王子が兄だったということ？」

「はい。実は生まれたのはカイエン王子が先でしたが、泣き声も逞しく身体も大きかったラウス王が兄ということになったのです。そのまま予想通りに行けば良かったのですが……」

「カイエン王子は生き延び、健康に育ったということですね」

「それ以上だったのです。結果的にカイエン王子はラウス王太子を背丈でも剣の腕でも知識の上でもとにかく全てにおいて秀でてしまった。

それでもラウス王太子が兄であると誰もが信じていた間は良かったのですが、出生の秘密が暴かれると状況は急転しました。カイエン王子が自分こそが正当な王太子だと主張し始めた為に国を二分する内戦が勃発する手前まで緊張が高まったのです。ですが、その危機を回避した人物がいます」

キヨは教えてもらったその辺りの歴史を思い出すが、適当な人物が思い浮かばない。

「……二人の父親である八代前の王様、とか？」

「いいえ。第三代神子であるハーナ様です」

（出た、禁じ手！）

まさかの神子登場にキヨは少なからず驚くと共に、やっぱり神子は政治に関わったのかと少し遠い目になる。

「ハーナ様が二人を和解させ、王家の直轄領の三分の一をカイエン王子に与えて公爵家を持たせる事で双方をどうにか納得させたのです」

キヨは内心冷や汗を流した。自分とは関係無いが、同じ神子としては溜め息が出てしまう。

（政治に介入しちゃ駄目じゃん。仲直りさせるだけなら良いけれど、領地を分けたり公爵家をイレギュラーで持たせたりって相当政治的な行為だよね。キア神の威光を背負ってる自覚が足りないよ、ハーナさん。政教分離、これ基本。

その為にキア神だって神殿の長と、統治者として兄弟を分けて定めたんだろうし……）

「カイエン王子側にしてみれば納得できる条件では無かったでしょうが、当時疫病を打ち払い、世界を救った神子に逆らえる人間はいませんでした。ですが、私にしてみれば破格の計らいだったと思い

ます。
公式に発表されたのならば、ラウス王太子が兄であることに異議を唱えるのは王の決断に対する不敬であり反逆です。国によっては双子は後から生まれた方が兄と定めているところもある。カイエン王子は優秀だったかもしれませんが、ならば余計に国の為に弟として過去の王弟と同じ様に穏便に臣下にくだるべきだった」

「でも……カイエン王子は結局レイゼン公爵として臣下に下り、王位を諦めたのだから良かったのでは？　内戦になれば、カイエン王子側が有利になったと思いますし。民の人気もどう考えてもカイエン王子に傾く様な状況ですよね。どちらかというとラウス王太子側にとっては破格の対応だったのでは？」

民衆はいつだって悲劇の王子様やお姫様が好きなのだ。そして血筋の正当性が互角なら、より優秀で本当は兄であるカイエン王子の方が大義名分の上でも人望の上でも有利だ。

「その時点ではそう思われても仕方ありませんが、そのおかげでゼッタセルドはずっと厄介な火種を抱えることになったのです」

「どういうことでしょう？」

「最初にレイゼン家の家柄に意味は無い、と申し上げましたが、功績を立てたわけではない、という点では無いのです。が、王位を継げなかった兄王子の系譜、という見方をすると……何か分かりませんか？」

「正当な血を引く日陰の王家……」

はっとした顔をするキヨに、ドールーズは満足げに頷いた。

「なかなかに良い表現です。
王家の血が、同等の重さで別れてしまった。つまり、王家の血が万が一絶えた場合はレイゼン公爵家が新しい王家としてゼッタセルドの支配者となる正当性があるのです。
このことは、神子ハーナ様が明言したこと。神子の言葉はキア神の言葉、ゼッタセルドの建国の神話からしても、この明言が及ぼした影響は計り知れません」

（明言しちゃったのか！　増々駄目じゃん！　それは間違いなく火種だ。徳川家も御三家があったけど、一つじゃなかったから筆頭はあっても絶対じゃなかった。一つしか王家の分家が無くて、しかもそれが神子のお墨付きの分家だったら王家の血が絶えれば自動的に王位が転がり込む。って……あれ？）

「……まさか、陛下以外の王子がことごとく亡くなったのは……」

「察しが良いですね、その通りです。裏にはレイゼン公爵の陰謀があったのは証拠はありませんが間違い無いでしょう」

火種どころじゃなく物騒だ、とキヨは思った。

「公爵にとって誤算だったのは、国王にと望んでいた出来の良い一人息子が内戦であっけなく死んでしまった事、そしてすっかり忘れられた末の王子がいたこと。この二点ですな。
最もこれは誰も表立って口にしない裏の事情です。誰もがその可能性を考えながらも証拠があるわけではないので口を噤んでいます。公爵は下手につつくには相手が悪過ぎる。レイゼン公爵家の一派を形成するのは、主にカイエン王子の時代から付き従う旧家、名家が中心となっています。そして王家の領地の三分の一を受け継ぎ、財

力がある。更に公爵の奥方の実家は武門の名家デニスローン侯爵家の出身で、ゼットワース侯爵には及ばずとも武力の後ろ盾もある。
唯一の泣き所は、公爵には人望が無いところですな。これはご本人も気付いていない泣き所ですが」

「気付いていない？」

「えぇ、王位を継げなかったカイエン王子の怨念をそのまま身に宿した様な御仁ですから、血筋に異様な執着をしています。言い換えれば血筋で劣る中下級貴族の存在を虫程にしか気に掛けません。数でいえば圧倒的に中下級貴族が多いのに、その重要性を認識していらっしゃらない。良い武器は複数持っていても、足下の土台が頼りないという状況ですね」

虫程にしか気にかけない、という下りでキヨの頭には有名な某アニメの悪役が頭に浮かんだ。人がゴミのようだ、と言って嗤ったあの人だ。
ネタとして大人気な悪役の名言だが、実際にそういう人間がいたら絶対関わり合いたくないと思うキヨだった。

副宰相の授業3

「土台が脆いけれども複数の強い武器を持つレイゼン公爵、土台が一番しっかりしているけれども武器が弱いのがガルニシア公爵、土台はそこそこで良い武器が一つなのがゼットワース侯爵……」

「簡単に言えば」

「今までの話を聞いていると、政治的判断を王の立場でなさるなら、セリーヌ嬢を正妃にするのが一番かと思いますが」

「はい、セリーヌ嬢を正妃に選んだ場合が一時的には一番被害が少ないでしょうね。一派の長であるガルニシア公爵は争いを好まぬ方ですので。

ですが、公爵は老齢です。跡継ぎの息子は公爵を影で腰抜け呼ばわりするなかなか血気盛んな御仁ですから、妹が正妃になれば爵位を継いだ後どうなるか推して知るべし、といったところでしょうか」

なんでそうなるんだとキヨは内心で叫んだ。

王家といい、臣下といい、二代続けて出来の良い家長がなぜ続かないのか。本当にろくでもない。

一代で急成長した会社が二代目で傾くわけだ、と溜め息が出そうだった。

「では、お義父様なら三人の姫君からどの方を選びますか？　もしくは最も選びたくないのはどの方でしょうか？」

「どなたも選びたくないですが、最も選びたくないのはフィリシテ

ィア姫でしょうな」

やっぱりそうか、とキヨは思った。聞いた限りではレイゼン公爵ならフィリシティア姫が王子を生んだらとっととエルドシールを殺して孫王子を王位に即けそうだ。しかし、フィリシティア姫がエルドシールに惚れたとしても、自分の父親を抑えることができる力があるかという点では限りなく微妙だ。十六歳で若いし、何より性格が内気では強烈な性格らしい父親に楯突くことなど無理な気がした。

（エディがフィリシティア姫を選んじゃったらどうしよう。うーん、とりあえず本人と会ってみない事には分からないな）

「ところで、レイゼン公爵家成立の話は完全に裏のものです。表に出ている歴史とは全く違うので、その点はご留意下さい」

「その表の歴史も知っていた方が良いですよね」

「表の歴史は至って簡単です。ラウス王は双子の弟であるカイエン王子の優れた才能を愛し、王と同等の権利を与えようとしたが、それは国を乱すと神子に諭される。そこで王は領土を分け与え、新しく公爵家をカイエン王子に興させた。神子はこの新しい公爵家を祝福し、第二の王家としてその血筋を絶やさず末永く王家を支えるようにとの言葉をカイエン王子に与えた。カイエン王子は神子の言葉と兄王の心に深く感謝して末永く王家に仕える事を誓った、というのがだいたいの話です」

これだけ聞いたら美しい兄弟愛の話だ。歴史の改ざんは恐ろしい。

「裏の話というのは、どれほど浸透しているものなのですか？」

「平民は表の話しか知らないのが普通です。ですが、貴族の世界では公然の秘密です」

「公然の秘密……。そんなに浸透しているんですか」

「裏が忘れ去られてはレイゼン公爵家はカイエン王子が身を引いて得た公爵家の存在の重さが消えてしまいますから、公爵家一派が熱心に裏の歴史の普及に努めて来た結果ですね。普通は勝者に都合の良い歴史が正史になるので、力のない敗者の歴史は消え去るしかないですが、レイゼン公爵家は敗者ではなく、力を持ったまま地に放たれた獅子のようなもの。また、神殿独自で持っている神子ハーナ様の記録の存在も大きいですね。王家の都合で普及した正史の影で、レイゼン公爵家側の裏の正史を伝え続ける事が可能なだけの力も人脈もあったということです」

まるで呪いだな、とキヨは思った。

神子ハーナの召還は約三百年前だったはずだ。三百年の間、正当な王家の血筋は本当はレイゼン公爵家なのだと言い聞かされ、刷り込まれて来た公爵家の人間達が囚われた呪縛を考えると背筋が寒くなる。王家そのものへの憎しみを持ったとしてもおかしくはないし、王座に異常な執着を見せるのも仕方が無い気がした。

だからと言って、本当に片っ端から王子を謀殺していたならそれは許しがたい罪だ。キヨ個人としては、エディが王様になった事は良かったんじゃないかと思っているので、結果オーライではあるのだが。

「それにしても、よくそんなに危ない火種が生き残れましたね。やっぱりハーナ様が関わった事が大きいのですか」

「そうです。非公開ではありますが神殿の公式記録には事件の全容

が残っているはずで、それは裏の歴史とさほど変わらないでしょう。ですから神子の存在が大きいこの国ではよっぽどあからさまに謀反を起こさない限りレイゼン公爵家を排除するのは難しい。そのかわり、ラウス王太子が国を継ぐことが正当とした神子の言葉もしっかり残されているので、裏の歴史を都合よく改ざんされるのも免れているのですが」

「それは……逆に言えば神殿側とレイゼン公爵家が結託しようものならレイゼン公爵家は大手を振って現王家を廃することも出来るのでは……」

「それは現段階では不可能ですな。神の意志を伝える神子様の存在がある限りは」

普通なら宗教と権力が結びつきやすいのはこの世界でも例外ではない。ただ、一つ決定的な違いがある。神の存在を確かなものとだと証明する目に見える神の代理、神子が存在することだ。神の奇跡の力を行使する神子の存在に対する畏怖は神殿の腐敗を許さない程に強力だった。そして今現在はキヨの存在がある。神殿上層部がレイゼン公爵家と結託する可能性は無きに等しいとドールーズは見ている。

しかし、神殿側とは違いドールーズは神子を絶対視することには懐疑的であった。実際に神子が目の前にいるので、今は神子の存在そのものはもう疑っていはいないが、神子ハーナの行った事については長期的にみれば、ドールーズにはどう考えてもゼッタセルドの為にならない判断であったからだ。ハーナ程の力があれば、カイエン王子を無力化することも可能だったはずだ。そういう理由でドールーズは神子の能力を絶対視していなかったし、過度に期待もしていなかった。つまり非常に現実的に目の前の神子、キヨの存在価値と能力を把握しようとしていた。

結果としてドールーズは、キヨは神子らしからぬことに相当に腹芸が出来るしたたかさがあること、なかなか頭の回転が良い事、随分と割り切った考え方が出来ること、等を情報として得ていた。
そして、キヨの性格からして正妃となり、ゼッタセルドの裏の女王としてでも君臨可能だと結論付けた。キヨ本人もそれを狙っているが腹芸の一環として口に出さないのだろうというのがドールーズの予想だ。実際中々にキヨは口が堅く、キヨが神から与えられた力がどのようなものなのか全く分からなかった。ドールーズにしてみれば、おそらく神官長グラスローの息のかかっているだろう神子としては戦略的に正しい判断で、そのことには満足でもあった。

切り札というのはいざという時まで隠しておくものだ。
まさか神子の最大の強みである奇跡の力が無い、などとは思いもよらない話だったし、キヨの究極的なこの世界における目的などそれこそ神のみぞ知る、という類いのレベルだった。
キヨはキヨで、義父となったドールーズの勘違いを織り込み済みでの計画でもあったから、都合良く勘違いし続けるように日本人の得意な曖昧な微笑みでケムに巻いていた。

「とにかく、神殿側は今のところ何の心配も無いでしょう。神子様は正妃選定の最終日まで正体を知られない様に気を付けて下さい」

エルドシールが選定最終日に自らの口で正妃の名を発表するに当たり、グラスローとその他二人の上級神官が見届け人として招かれていた。このことについては前例があるので何の問題も無く貴族達も受け入れているが、ドールーズはキヨが神子であることを発表したときに当然出るだろう偽物説を否定する為に呼ばれたと確信している。
ともかく、その言葉を締めくくりとしてその日の授業はそれで終了になった。

だが、ドールーズの仕事はその後が本番である。子飼いの隠密が持ち帰る情報の整理、任務の遂行状況の確認、今後の対策の見直しと新たな指示の伝達など、精力的に裏工作に励み、眠りにつくのは明け方近くになるのだった。

それぞれの前夜1

王宮へ正妃候補として上がる日を明日に控え、セリーヌ嬢は憂鬱で仕方が無かった。セリーヌ嬢本人も父の公爵同様に全く乗り気では無い。

公爵家の食堂では、暖炉の前の長椅子で寛ぐ食後の二人の姿があった。

「あぁ……魔女の森に帰りたい……」

「すまぬ。だが形だけだ。二ヶ月後には帰って来れるから辛抱してくれ」

深緑のドレスを纏う娘の肩を、立派な白い鬚の老紳士がそっと叩いた。

娘は茶色の髪を無造作に纏めただけの茶色の髪の束で、老紳士の顔を叩く勢いで振り向いた。暗緑色の瞳はぶしつけな程じろじろと疑わしげに老紳士を見つめる。

「本当に、本当に帰ってこられるんでしょうね？」

「うむ……その、王に選ばれなければ、な」

娘はセリーヌ嬢、そして娘の剣幕にたじたじになっている老紳士はガルニシア公爵である。

「それ、本当ですよね？　父上の力で無理矢理正妃とかにならないですよね？」

「それは絶対に無い」

はっきり否定する父に、娘も納得したのか表情を和らげる。

「それなら安心だわ。フィリシティア姫もチェルネイア姫もすこぶるつきの美人だし、さっさと白旗掲げて逃げ帰って来ようかしら」

「これセリーヌ！　ちゃんと期間中はそれらしく振る舞いなさい。そうでなければ納得しない連中が多いのだ」

「あ～、もう。父上の我が儘を聞くのもこれっきりですからね！」

「……」

妻そっくりの捨て台詞を吐いてぷりぷりしながら部屋を出てゆく娘の後ろ姿を見送り、公爵は白い鬚を撫でながら困ったものだと呟いた。

そばかすだらけの四角い顔も、ちょこんと小さな鼻も、父の公爵からすれば愛嬌一杯で可愛らしくてならないのだが、性格だけはもう少し穏やかであればと願わぬ日は無い。

ガルニシア公爵の娘、セリーヌは殆ど社交界に出てこない。それは容姿に引け目を感じて、または母の身分の低さを気にして引きこもっているのだというのが大方の見方だったが、真実とは程遠い。

セリーヌ嬢は実はとんだじゃじゃ馬である。知識欲が旺盛なので頭が良いというのは本当だが、それ以上に女性上位の家風の母の実家の影響を色濃く受けていて父親の言う事を素直に聞いた試しが無い。

父の顔を立て、そして平穏な生活のために、母の実家から連れて

来た侍女数名と父の前以外では大人しやかな深窓の令嬢を演じてはいる。だが、それは一時的なものだから我慢出来るのだ。
父のガルニシア公爵にしてみれば、こんなじゃじゃ馬娘が正妃になった日には毎日心配で寿命が縮む、というのが本音である。

部屋に戻ると、すっかり荷造りを終えた侍女のメイミが待っていた。この後に及んで行きたくないと愚痴をこぼすセリーヌに、メイミは福々しい丸い顔に笑みを浮かべて励ました。

「セリーヌ様、二ヶ月なんてすぐですよ。それに王宮で生活なんて普通じゃ経験出来ないんですから、気分を切り替えて楽しんじゃいましょう？　王宮の温室には珍しい外国の植物が沢山あるって噂ですし」

正妃候補には一人だけ侍女を連れて行く事が許されている。セリーヌは気心の知れた気の合うメイミを選んだ。

「そうね、メイミの言う通りだわ。うん、王宮の温室は確かに興味深いわ。良いモノがあったらこっそり貰っちゃいましょうか」

「良いですね！　そんな手土産があったら魔女の森の大ババ様もきっと喜ばれますわ」

魔女の森とはセリーヌが子供時代を過ごした母の実家、キシェラ男爵家の領地にある森のことだ。男爵家と公爵家では家格に差があり過ぎるが、セリーヌの母は後妻であったために余り煩く言われなかった。病で亡くなった先妻は同格の公爵家から迎えており、その先妻との間に跡継ぎを設けていたからだ。フィリシティアもチェルネイアも姫と呼ばれるのに対してセリーヌが嬢と呼ばれるのも、母の出自が低いからである。

キシェラ男爵家には表向きの貴族の館然とした屋敷の他に森の中に屋敷がある。内戦で国内が乱れていた頃、セリーヌは母共々祖母の住む森の屋敷に避難し、物心ついた頃から少女時代の約十二年を過ごした。

キシェラ家は代々女性上位の家系で、長女に婿を取るのが習わしであった。表向き男爵家の家長はセリーヌの義理の伯父だが、実質的な家長は妻の伯母であり、セリーヌの祖母大ババ様が未だに最高権力を握る。

セリーヌはこの大ババ様にその跳ねっ返りぶりを可愛がられて、毎日森で泥まみれになって遊び転げて育った。そして伯母夫妻に娘が生まれなかったので、その息子のラッセと結婚して次代の家長にと望まれていたのである。正妃候補の話が持ち上がらなければ、一年前にラッセと結婚していたはずだ。

ちなみにメイミはラッセの乳兄弟だ。

セリーヌは父は好きだったが、父が属する貴族社会に馴染めなかった。セリーヌの幸せは育った魔女の森の日々にあり、当然正妃には興味など微塵も無い。かといって、ラッセが好きかと言えば四つ年下の従兄弟は可愛い弟という感覚でしかない。なにせラッセと最後に会ったのは四年前で、セリーヌの中には十二歳の従兄弟の姿しかない。結婚に関しても共に育ったから既に家族同然で、ラッセと結婚するのもまぁ良いか、程度の認識でしかない。

セリーヌは二十歳という年齢にしては、驚く程そっちの情緒が育っていなかった。

それぞれの前夜2

ゼットワース侯爵家の屋敷の中で二番目に広く、豪華な部屋の主は夜が明ければ王宮に旅立つ。そして、この部屋には二度と戻らないつもりでいた。

チェルネイアは全身が映る大きな姿見の前で自分の姿を見つめる。

艶やかな栗色の髪は美しく整えられた巻き毛の束を幾つも作り、神秘的と賞賛される琥珀色の瞳を縁取るのは栗色よりも茶色に近い濃い色の長い睫毛だ。ぽってりと肉感的な赤い唇はつやつやと輝いている。眉は柔らかな曲線を描き、女性らしい柔らかな表情を演出している。細い鼻梁はつんと形よく高く、ふっくらとした頬と笑うとくっきり出るエクボが愛らしさを添えている。

首は細っそりとして綺麗に浮き出た鎖骨に続く。豊かに育った胸は形よく深い谷間を形成し、細いだけではない引き締まった腰や腕は、華奢というよりは鍛え上げられた踊り子のそれの様にしなやかで、その動きは悩ましい色香を放つ優美さを備えている。

我ながらよくもここまで作り上げたものだと、鏡の中の自分に自嘲する。

「美しいな、チェルネイア」

「……伯父様、淑女の部屋に入る時はノックくらいするものですわ」

ノックもせずにずかずかと入室した男を、チェルネイアは鏡越しに睨みつけた。

「淑女、か」

可笑しげに笑いながら男は背後からチェルネイアの腰を撫でる。チェルネイアは鳥肌を立てて顔を引き攣らせ、その手を引き剥がそうと掴んだ。しかしその手はびくともせず、更に腕を回してチェルネイアの腰を抱き、首筋に生暖かい唇を押し当てた。

「いくら伯父様でも、それ以上はいけませんわ。私は国王陛下の正妃候補ですのよ？」

チェルネイアはせり上がって来る吐き気を堪えて努めて冷静に言い放ったが、男の手は更に無遠慮にチェルネイアの身体を這い回る。

「くっく…っ、今更だな。お前は十の時から俺の女だ」

「よして。どこで誰が聞いているか知れないわ」

「誰が聞いているというのだ？　ここは俺の館なのに」

チェルネイアは鏡越しに不敵な笑みを浮かべる男をもう一度、強く睨んだ。

「放して」

だが、男は目を細めただけでチェルネイアの言葉を無視し、睨むチェルネイアの顎を乱暴に掴むと自分の方に向かせ、低く囁く様に命令した。

「良いか、王の子を孕め。正妃にならずとも良い。側室で十分だ。王子を生め。その為の美貌、その為の身体だ」

「……王宮に上がる前に、母に会わせて」

「手紙だけで我慢しろ。ほら、これだ」

チェルネイアの要求は予想済みだったのか、男はにやりと笑うと懐から一通の手紙を取り出して床に投げた。チェルネイアは飛びつく様にその手紙を拾って胸に抱き、憎しみも露に歯を食いしばって男を睨んだ。

「忘れるな、お前の仕事を。王の子を孕んだら褒美に母親に会わせてやっても良い」

「……王の子を孕んだら、あなたにではなく王に褒美を貰うわ」

「そうだ、それで良い。お前はその美貌のせいで運悪く俺の目に留まった。だが、その美貌で上に上り詰める事も出来る。悔しかったら頂点まで上り詰めて、俺を見返してみろ」

満足そうな顔をして笑いながら男が出てゆくと、チェルネイアは扉に駆け寄って内側からしっかり鍵を掛けた。吐き気に口をおさえてそのままずるずると扉の前に座り込み、気持ちが落ち着くのを待った。

やがて落ち着きを取り戻したチェルネイアは、手にした手紙を読まずに破り捨て、ロウソクの火を移して暖炉に放った。

母マーセルがもうこの世にいないことをチェルネイアは知っていた。信じたくなくて今までは否定して来た。僅かに残る希望に縋って、チェルネイアは何年も前から手紙の中に注意深く嘘を潜り込ませていた。

しかし、手紙の相手は何一つ気付かなかった。マーセルなら知っ

ているはずの、些細な、しかし気付けば指摘して来るだろう幸せな記憶の欠片に、何一つ気付かなかった。

マーセルしか知り得ない事が書かれた最後の手紙が六年前のものだ。

チェルネイアが最初の違和感を感じたのは五年前だった。その可能性を否定する為に始めた嘘の混入が、結果的に疑惑を肯定してしまった。何時、マーセルの筆跡を盗んだ第三者がマーセルに取って代わったのか、正確なところは分からない。

しかし、あの男がマーセルを殺したのは間違いない。チェルネイアが偽物姫であることを証明する生き証人をいつまでも生かしておくほど、あの男は甘くはない、と、今ならチェルネイアは納得出来る。

マーセルの死は、到底チェルネイアには受け入れられないことだったが、正妃候補になった今、チェルネイアには正妃になることが自由への唯一の道に思えた。だからこそ、チェルネイアはマーセルの死を受け入れ、手紙を読まずに火にくべた。

男はチェルネイアが気付いていた事に気付いていないはずだ。この館を出て王宮に入れば、もう言いなりになる必要はどこにも無い。

「自由になるのよ。
あの男から自由になるには、あの男より強い男の心を奪えば良い。
太陽の化身の様な美しい王を、きっと私は虜にしてみせる。
凍った心を持つ傀儡の王。
私なら、あなたを理解出来るわ。
一緒に復讐するのよ、この世界に」

完全に手紙の残骸が燃え尽きるまで見届け、チェルネイアは呪いを掛ける様に最後の残り火に囁いた。

それぞれの前夜3

ハンナは呼びつけられた書斎で、息を殺して立ちすくんでいた。レイゼン公爵は使用人が何か粗相をすると、苛烈な罰を与える。勿論公爵自身が罰を与えるのではない。実際に罰を与えるのは、執事のバルだったが。公爵は使用人を空気の様に扱う。

ハンナの家は代々公爵に仕えて来た。男は下男として、女は厨房方で仕えて来たので、侍女というのは破格の待遇だ。

だが、それは公爵に認められたからではない。ハンナが家族思いで、長患いの母がいるからだ。公爵は人間の心理を利用して使う事に長けていた。

フィリシティアの侍女になったのは、三年前のことだ。王の正妃に我が娘をとレイゼン公爵が積極的に動き始めた時期の少し前である。ハンナは侍女としての教育の他に身につけるように言われた事がある。

それは毒薬の知識だ。表向きフィリシティアの身を守るためと公爵は言ったが、そんなことは建前だとハンナには分かっていた。

「私の白薔薇、フィリシティアは誰よりも美しく、穢れなく、清らかで、誰よりもキア神の授けたまうたゼッタセルドの王妃に相応しい。ハンナ、お前もそう思うであろう？」

書類に目を通していた公爵は徐に目を上げて宙を見ながら話し始めた。その視線の先には娘の姿でも浮かんでいるのだろう。

「はい、仰せの通りでございます」

名を呼ばれてようやく細い吐息を吐き出し、ハンナは答えた。

「陰気な卑しい血の母を持つ醜い娘も、血に飢えたあの男が姪に仕立て上げた阿婆擦れ女も、私の可愛いフィリシティアの敵ではない。だが、王はまだ年若く、判断をお間違えになることもある。王は真面目な方だからな。万が一にでも関係を持てばそれを盾にする可能性もある。良いか、ハンナ。何度も言ったことだがもしも、王が醜女や阿婆擦れ女に惑わされておしまいになると感じた時は……分かっているな？」

「……はい」

分かりたくない。それでもそう答えなければならない。

ハンナは足が震え出すのを堪える事ができなかった。

「恐ろしいか？　だが、それは王の為、ひいてはこの国の為の正義なのだよ、ハンナ。そうだ、王のご生母だが、これも王を惑わせる様なら制裁の対象と心得よ。仮にも慈母の称号を持つお方であれば、国の為に死するなら恨みはしまい。むしろハンナ、お前に感謝するであろう」

薄暗いロウソクの光に浮かび上がる公爵の痩せた顔は、ハンナにはまるで悪魔の様に見えた。ぎょろりとした目をギラギラさせて、不気味に笑う横顔に、ハンナの声は凍り付いて何も言う事が出来なかった。

「そうそう、王が万が一フィリシティアと関係を持てば色々とやりやすくなる。なに、実際にそういうことが無くて構わぬ。上手くやれば無用な殺生を避けられるぞ？」

ハンナの恐怖に気付いたのか、公爵はようやくハンナの方へ顔を

向け、優しげな声で宥めた。ハンナは涙の滲む瞳を伏せて、干上がった喉から必死に声を絞り出す。

「……ご期待に、添えるよう、頑張ります……」

「お前はフィリシティアに良く仕えてくれている。褒美としてお前の母を良い医者に診せてやろう。これからも良く仕えることだ。さすればお前の母も長生き出来よう」

（母さん……！！　助けて……！）

「ありがとう、ございます……」

内心の悲鳴を押し殺してハンナは息も絶え絶えに礼を述べ、逃げる様にして廊下に転がり出た。

ハンナはただただ恐ろしくてならなかった。

ハンナは侍女のドレスを身に着けるだけでも、心躍るよりも恐れを感じる様な純朴な娘だった。

母の水仕事で荒れた手が好きだった。母がまだ元気だった頃、鼻歌を歌いながら野菜の皮を魔法の様に調子良く次々と剥いてゆく姿を眺めるのが、大好きだった。

病気になった母の為に給金の良い侍女にして貰えた事には、家族全員が公爵に感謝している。父も母も、それから弟も妹も、みんな喜んでくれた。特に母は礼儀作法や読み書きを習わせて貰える事に涙を流して喜んだ。それは、一段上の階級の男性との結婚で下働きの階級から抜け出せる幸運の切符に見えたのだろう。ハンナは父の様に陽気で力持ちの男との結婚を夢見ていたが、母の願いならと諦める程に親思いの、どこにでもいる素朴な娘だった。

（母さん、どうしよう、私、恐ろしい事をしてしまうかもしれない……！
どうしたら良いの？
お願い、助けて父さん、母さん……！）

心の中で悲鳴を上げながらも、実際にはハンナは何一つ父にも母にも言う事など出来ない。
侍女に取り立てられた娘を誇らしげに自慢する愛情深い両親に、毒殺を暗に命じられたなどと口が裂けても言えない。
両親に話したところで待っているのは更なる地獄だ。
そんな恐ろしい事をするぐらいならと、両親は自分を連れて逃げてくれるかもしれない。だが、そうすれば安定した生活を失い、あっという間に病気の母は死ぬだろう。幼い弟や妹はどうなるのか？
かといって毒を盛ったり、恐れ多くも国王陛下に薬を盛って罠に嵌めるなど考えただけで心臓が縮み上がる。成功するのも恐ろしいが、失敗すれば家族がどんな仕打を受けるか分からない。
考えれば考える程、ハンナは雁字搦めにされて身動きが取れなくなっていった。

ふらふらしながらハンナがフィリシティア姫の居室に戻ると、姫は癇癪を爆発させていた。

「ハンナ！！　何をしていたのよっ！」

「ひ…っ、も、申し訳ありません、公爵様に呼ばれていました」

扉を開けると同時に投げつけられた本が腕に命中し、ハンナは思わず悲鳴を上げてその場に平伏した。

「お父様に？」

「はい。王宮に上がっても姫様に良く仕えるようにと」
「そう、それなら仕方がありませんわ。それより、瑪瑙のブローチは何処？」
公爵に与えられた恐怖を引き摺り、未だに震える身体を叱咤してハンナはどうにか立ち上がる。
あのブローチは確か金具の調子が悪くて修理に出した後、衣装部屋の奥に仕舞ったはず。
「少々、お待ち下さい」
苛々して爪を噛む主に頭を下げて足早に衣装部屋に向かった。目的の物を見付けるとほっとして小箱を手に主の元に戻り、両膝をついて恭しく献上する。
主は箱を引ったくる様に取り上げると蓋を開け、その中にちゃんとそれがあるのを確認して美しい顔を綻ばせた。
機嫌が直った主は、寝る前に蜂蜜を入れた花茶をハンナに用意させ、早々にベッドに入った。
ハンナもまた明日に備えて早めに床に入るが、先程の左腕の打撲が思ったより酷く、じんじんと熱を持って痛むのもあって中々寝付けなかった。
このままでは眠れそうもないと、同僚を起こさない様に注意しながらハンナは起き出し、台所に向かった。汲み置きの水を溜めておく瓶から柄杓で水をすくい、持参した大きめのハンカチを濡らす。
腕をまくり上げて腫れた部分に濡れたハンカチを当てて、暫くぼんやりと暗闇を見つめた。
何も考えたくないのに、気が付くと込み上げてくるのは先の見え

ない不安と公爵の悪魔の様な笑い顔で、ハンナは浅くなる呼吸の苦しさに胸をおさえた。
こんな暗闇にいたら余計に悪い事ばかり考えてしまう、と、ハンナは温くなった布をもう一度水で冷やし、それを持って部屋に戻る事にした。

三階にある侍女部屋に戻る途中、ハンナは少し気になって遠回りをして姫の部屋の前を通った。
癇癪持ちで、八つ当たりばかりする姫だったが、ハンナは姫が嫌いではなかった。ハンナにとってフィリシティア姫は何処から見ても完璧な貴族の姫君だった。その高慢さすら美しい。人間の種類が自分とは違うのだと、それが当然なのだと意識するまでもなく思っていたので、酷い仕打ちを受けていると思った事も無かった。
それに姫の我が儘は、何故か妹や弟のそれを思い出させた。もっとも妹や弟だったら叱り飛ばすところだが。母上に顧みられず、姉君にも邪険にされて、寂しさを暴力にして爆発させてしまう主は子供なのだろう。そして、それはハンナにとっては理解出来る感情だった。少なくとも、公爵などよりはずっと分かりやすかった。
辿り着いた部屋の前で、そっと扉に耳を当ててみると、微かなすすり泣きが聞こえた。プライドが高い姫はきっと私などには知られたくないだろうと思うものの、ハンナは躊躇った末にそっと扉を叩いた。

「姫様、ハンナです」

暫くして、微かに入ってという声が聞こえたので、ハンナはそっと扉を開ける。
入ってすぐの飾り棚の上に手燭台を置き、ベッドの上に身を起こしている人影に静かに近付いた。顔は見えないけれど、きっと泣いていたはずだ。

「こんな夜中に、何の用なの？」

「はい、今夜は少し寝苦しいようなので、姫様はどうしていらっしゃるかと心配になりまして……水で冷やした布をお持ち致しました。顔を冷やしますと、少しは眠りやすくなります」

「……」

暗くて表情は良く分からないが、姫は無言で布を受け取り、顔を覆うように拡げた。

「どうですか？」

「……怖いの」

「……はい？」

余りに小さな声に、言葉を拾い損ねたハンナは控え目に聞き返す。

「……怖いの。お父様は何も心配ないというけれど、怖いの。国王陛下は、美しい方だけれど、まるで鉄の仮面を被っているように冷たい表情の方よ。そんな方を、どうやって愛したら良いの？」

暗がりの中、濡れた布の下で泣いている気配が感じられた。ふと、姫が手に何かを握りしめているのが見えた。遠い手燭台の光を反射するそれは、あの瑪瑙のブローチだ。確か幼少期に母上から贈られたという、品質としては姫の持つ宝飾品の中では最も価値の低い部類のそれを握りしめて泣いていたのか。そう思うとハンナはつられて涙が滲んだ。

普段決して目下の者に弱さを見せない姫君が、こんな風に弱音を吐くとは。先の見えない不安と恐怖に怯えているのは、立場は違えど同じなのだ。であれば少なくとも、二つ年上の自分がしっかりしなければ。

「大丈夫ですわ、姫様は誰もが見蕩れてしまうほどお美しいのですから、姫様が微笑まれればきっと国王陛下の凍ったお心も溶けるでしょう。姫様程のお方が何を不安に思う事があるのか、私の愚かな頭では検討がつきません。私の方が怖いです、姫様。何しろ私は三年前までただの下女。姫様の様な高貴な方ばかりの王宮では、きっと私の心臓はたちまちに壊れてしまいます。現に今夜も恐ろしくて寝付けずにいました。私には姫様だけが頼りでございます。」

「……仕方ありませんわね。不出来な侍女でも私の侍女ですから、主人の私が面倒を見るのは当然の義務です。お父様もどうして王宮に上がる侍女にあなたを選んだのか分かりませんけれど、私とお父様に恥をかかせないように精進しなさい」

「はい、肝に銘じます」

すっかり落ち着いて何時もの調子を取り戻した姫に、ハンナは内心で安堵の溜め息を吐いた。

「もう、良いわ。さっさと下がって寝なさい」

突き返されたすっかり温くなった布を受け取り、ハンナは静かに部屋を後にした。

公爵様に言われた事は、一旦忘れよう。雇い主は公爵様だけれど、私の主人は姫様なのだから、とにかく姫様の為だけを考えよう。

実際、王宮に上がるなんて恐れ多い事この上なく、公爵様に言われた事を考える余裕などハンナには無いのだ。ハンナは頭が特に良いわけでも無いし、下手に何かしてハンナが犯人だとバレれば困るのは姫様、公爵様だ。だったら周りの警戒が厳し過ぎて何も出来ませんでした、というのも不自然では無い。

少しだけ気分が明るくなったハンナは、今度は床に入るなり瞬く間に眠りに落ちた。

神官長の説得1

ゼッタセルドという国の特殊性は既に述べたことだが、その特殊性故にゼッタセルドは今、過渡期を迎えていた。

キア神に祝福され、泉の守人として選ばれた兄弟が建てた国は最初は小さな都市程度の規模でしかなかった。初代神子の存在と泉の存在により神の恩寵を受けたゼッタセルドは赤子の様な存在でありながら、決して他国に侵略される事が無かった。その為、ゼッタセルドの周辺の小さな集落や小国は生き残る為に次々とゼッタセルドに恭順し、吸収されて行った。そして、約五百年程かけてゼッタセルドは今とほぼ変わらない規模に成長する。現在のゼッタセルドの貴族達の祖先の殆どが、吸収された小国の王だった。

ゼッタセルドはその建国の神話故に他国の侵略を免れてきたが、反面泉を守る為にだけに存在するゼッタセルドは他国を侵略することは決して出来ない。外敵に対しての防戦は出来ても、領土拡大を目的とした戦争行為は最も忌避すべきキア神への裏切りとされている。何故なら、キア神の垂れる慈悲に国境は関係が無いからである。

そもそも泉をキア神が授けたのは民を救う為であり、結果としてゼッタセルドが誕生しただけだからだ。キア神の民はたとえ他国民であろうと傷付けることは許されない。

つまりゼッタセルドは建国以来、防衛以外の目的で武力を持つ事を永遠に放棄した希有な国であった。奇しくもキヨの故郷と同じである。そしてだからこそ、戦後平和憲法の元で権力を失った天皇一家の歩んだ道にエルドシールは深く思うところがあったとも言える。

ともかく、文化的に中世ヨーロッパとさして変わらぬ段階にある世界で、ゼッタセルドは奇跡としか言い様の無い国なのだ。

その奇跡とは、キア神の涙であり、神の力をはっきりと示す目に見える神子の存在であり、たとえ二千五百年の歴史の中で神子がたった三人だったとしても、キア神の信仰を支え、神官達の腐敗を防いで来た。また、政治面でもキア神の涙を守る国を治めるという誇りが、長く存亡を危ぶむ様な腐敗を遠ざけていた。

そう、文字もろくに発達していなかった五百年程前までは。

事態が変化し始めたのは、文字が普及し、それに伴い文化水準の上昇や技術向上による進歩が格段に早くなった頃からだ。

また、ゼッタセルド以外の国々では戦争は日常の延長線上にある。戦争は様々な技術と知恵を生み出すものだ。文明が進歩して人間が出来ることが格段に増えてくると、価値観が多様化を始め、相対的に神子の価値が下がり、信仰も薄れてゆく。

特に聖地扱いで外敵の心配をしなくても良いゼッタセルドは、他国の文化を文字を媒体として吸収し、平和を背景に飛躍的な発展を遂げた。

だが、それは一時途切れる事となる。

およそ三百五十年前、世界を死の影で覆い尽くした伝染病でおよそ全世界の人口の四割にもあたる約三百万人が死亡したと言われている。降臨した神子ハーナが病を駆逐したことで、一時的にキア神信仰が盛り返した。約千年ぶりの神子の降臨である。これで再び長くシーラ教が栄えるかにみえた。

しかし、無知の時代には薄れなかった信仰心も、目の前の分かりやすい富の前には維持する事は難しい。文字が印刷技術の向上により庶民にまで普及し、進歩の波が押し寄せて現世的な利益と豊かさを齎すようになると、そちらに目を奪われて信仰心が薄らいでゆく

のは早かった。その豊かさも結局内戦のせいで失われてしまったのだが。

ともかく、その顕著な例が五百年前なら誰もがその存在を疑わなかったキア神の涙を、現在は実在するのか怪しいと考える人間が確実に何割かいる、ということだ。獅子王の時代に、山賊崩れの荒くれ者達で構成されていたとはいえ、新興国ユトが攻め入った事も時代の変化を示している。この変化を懸念した約百年前当時の神官長と、神子を利用して権力獲得しようとする一部の支配者階級の思惑で、例の黒猫は召還される事になったのだ。この一連の出来事は、神殿が純粋な信仰を維持しつつ政治権力と一線を画すことが難しくなっている現実を、端的に示していた。

そんな時代の過渡期に、キヨは召還されたのだ。

神子召還は、神官長のグラスローとしては腐敗する方向に転がり始めた神殿組織を立て直して民の信仰を取り戻したいという思惑が根底にある。だが、なにより差し迫った問題を解決するために、王と神子との結婚が必要だと考えていた。

シーラ教が国民の支持を受けていないかといえばそんな事は無い。内戦で発生した難民や孤児達の面倒を相当頑張って見ているので、評判は悪くない。むしろ内戦前に比べれば明らかに神殿は民の信仰を集めていた。

だが、疲弊した民から寄付をふんだくるわけにもいかず、内戦で金が無くなった貴族も寄付なんぞするわけがなく、経済的に破綻寸前であった。

今はなんとか国外のシーラ教支部から資金や物資を調達出来ているものの、ずっとというわけにはいかない。見返りとして発行している巡礼者証も、現在治安の悪いゼッタセルドは巡礼者を受け入れ

る体制が整っていないので本来より価値が格段に低くなってしまっている。そして復興の兆しが余り見えないために巡礼者証の価値は下がる一方だ。

国外のシーラ教にしても、その余り価値の無い巡礼証を餌に民から金を巻き上げ続ければ信者を失い、ひいては力を失う事になりかねないのでそろそろ限界が近い。

とにかく国が安定してまともな政治をして復興の目処が立たない限り、神殿は近いうちに破綻する。それはつまりこの国が破綻するのと同じで、無力な民の命綱である神殿を破綻させた無能な国に民の怒りが爆発しないわけがない。そして、神殿を破綻させた王家は最早聖地の守人としての意味を失い、他国に侵攻の大義名分を与えるだろう。

はっきり言ってしまえば、ゼッタセルドは存亡の危機に直面しているのだ。

しかし、それに気付いている貴族は殆どいない。気付いていても、それほど切羽詰まっているとは思っていない。神殿の台所事情を正確に把握していなかったせいもあり、ドールーズですらそこまでの危機感は持っていなかった。内戦が始まった頃からいち早く危機の到来を予測して準備を始め、行動を起こしたのが神官長のグラスローだった。

とにかく早急に国を建て直さなければならなかった。それが強引に召還の儀式を行った理由である。

エルドシールもそれを分かっていたから渋々といえど了承したのだ。

神子と王の結婚というのは、一番手っ取り早く貴族達を黙らせ、王に実権を取り戻させ、民の王家への信頼回復を実現し、生きる希望を民に取り戻させるという一石何鳥もの効果のある万能薬とでも言える様な解決策なのだ。

グラスローの信仰心は本物だ。しかし、グラスローは同時に非常

に現実的な思考の持ち主だった。力無き正義は絵空事であると若いうちに悟っていたグラスローは、信仰心と愛国心ゆえに、時には聖職者としては大っぴらにできないようなこともやってのけ、神官長の地位まで上り詰めた。周りを固める上級神官達もグラスローの考えに随分前から賛同してきた者達で、更に地位が上がるごとに位を引き上げて来た、半ばグラスローの子分の様な中級下級神官達が相当数存在し、神殿内での絶対的な権力はここ最近の神官長の中では明らかに群を抜いていた。

エルドシールがグラスローを政治家と評するのは、このような事情を良く知っているからである。

そのグラスローは今、アレシアとキヨからの手紙を手にエルドシールと睨み合っていた。

神官長の説得2

怒り心頭といった表情のグラスローは努めて冷静にあろうとした。

「陛下、これはどういうことでしょうか？　正気沙汰とは思えませぬ」

「我は至って正気だ。キヨを正妃にする気は毛頭無い。正妃は正妃候補の中から決める。その為に、そなたに協力を頼みたい」

「お断り致します。私はこのような愚かな王にあなた様をお育てしたつもりはない！！」

珍しく声を荒げて拳で机を叩いて怒りを示すグラスローに対し、エルドシールは淡々とした調子で言い返した。

「それなら聞くが、そなたは我をそなたの言う通りに動く傀儡に育てたかったと言う事か？」

「っ、そのような事を言っているのではありません」

「とにかく落ち着け、グラスロー。そのように興奮しては身体に悪い。そなたも高齢なのだから」

「誰のせいか！　この馬鹿もんがっ！」

思わず我を忘れたグラスローは怒鳴り声に、エルドシールは驚いた様子で目を見張った。

「……懐かしいな」

僅かな笑みをうかがわせる呟きにグラスローは、はっとして居住まいを正した。

「失礼しました、言葉が過ぎました」

「よい、グラスロー。お互い様だ。そなたは我が子供の頃から我を怒らせるのが得意だった」

「酷い言われようですな」

受け流すエルドシールの言葉に、グラスローは渋い顔をした。

グラスローはエルドシールの教育に関して、精神的に過酷とも言える方法を取った。それは内戦で傷付き、苦しむ民を救済援助する奉仕活動に連れて行くことに始まる。

限られた薬や食料を誰に渡すのか、実質命の価値に順番をつけるような冷酷な現場を直視させ、時には罵りながら薬や食料を奪おうと襲いかかる暴漢とも渡り合う。その上で、授業では政治、経済、国際関係を教えた。

時には正当のシーラ教の教義を外れ、組織としての弱点を含めて教義に反するような事も現状では受け入れざるを得ない事、その中でいかに効率的に弱き民を救うか、という教育を叩き込んだ。

生来の性格なのか、真面目で正義感の強かったエルドシールは時には感情を爆発させてグラスローのやり方に反発した。その度にグラスローは理想だけでは結局誰も救えぬ、いくらお前が理想を語ろうとお前の力では一つの命すら救えぬと重い現実でエルドシールの怒りをねじ伏せてきたのである。

エルドシールが王となってからはあからさまにその様な事は言わ

なくなったが、エルドシールにしてみれば現在のように慇懃無礼に言われる方が針のムシロの様で余程応えると常々思っていた。怒りに容赦なく罵声を浴びせるグラスローの方がよっぽど親しみやすい。
エルドシールはグラスローを教師として敬ってはいたが、同時に天敵の様な存在であるのは未だに変わらない。

そしてこの戦いはエルドシールが王としてこれから歩んでゆく為には超えなければならない試練であり、負けられない戦いだった。
一方、グラスローにも絶対に負けられない戦いであった。それは人生を掛けた彼の戦いを否定するような計画だったからだ。

グラスローの二代前の神官長は、レイゼン公爵と裏で繋がっていた。第五王子を唆してローレッセン王を弑逆させたのも前神官長で、その動きを事前に掴んでいながら地方の一司祭に過ぎなかった当時のグラスローは阻止することが出来なかった。
そして当時、既にエルドシールとレンカはグラスローの庇護下にいたが、当時の神官長の魔の手が伸びるのは時間の問題だった。レイゼン公爵の野望を阻止すべく、グラスローは聖職者としてあるまじき事に手を染めることになる。

神官長の暗殺だ。

それまでに築いて来た同志との絆と神殿内のつてを駆使して、それは成された。その後に立った前神官長は善良なだけが取り柄の、レイゼン公爵と裏で繋がることはまず考えられない小心な御しやすい人物であった。こうして後方の安全を確保したグラスローは次の行動に移る。

いずれエルドシール以外の王子はレイゼン公爵の野望により死に絶えると予想していたグラスローは、エルドシールの存在をキア神

を奉ずるシーラ教にとって望ましい、真に民を思いやれる王としてエルドシールを教育し始める。それが、例の教育法である。もしエルドシール自身に見込みがなければ、洗脳教育に切り替えたかもしれないが、幸いにもエルドシールには素質があった。そして王となった後、時期を見て今までの経緯をグラスローは包み隠さず全て話した。それに耐えられるだけの精神力がエルドシールにはあると信じ、憎まれる事も覚悟の上での事だった。

結果は、グラスローとしても予想以上のものだった。若き王は、全てを黙って聞いた後、「分かった」と一言頷いただけだった。顔色を悪くして微かに震えながらも、毅然として全てを受け入れた。グラスローに対する態度も、いささかも変わる事が無かった。

まだ十六の少年とは思えない器の大きさを示す態度に、これが王の器量というものかと、グラスローは感動と共に畏怖を覚えたものである。

それが、とんだ見込み違いだったのかと一瞬気が遠くなる様な計画を聞かされてグラスローは怒りを抑えられなかった。

一度怒鳴って我にかえり、落ち着いたところで怒りは変わらない。

「今回はそなたの負けだ。先に感情的になった方が負けだと教えてくれたのはそなただ」

「いいえ、こればかりは負けるわけには参りません」

今まで払った犠牲と同志達の思いを考えれば、ここで折れる訳にはいかない。

「グラスロー、ともかく我の話を聞け。

そなたが我が国と民の事を思って今まで己を捨てて尽くして来て

くれたことは重々分かっている。色々と腹の立つ事も多いが、そなたの言う事は常に正論であったし、それを否定しようとも思わぬ。
ただ、ずっと我は心の中に違和感を抱え続けてきた。
そなたは綺麗事では何も出来ぬというが、そもそもこの国そのものがキア神の慈悲の元、綺麗事で成り立ち、綺麗事の建前で生き延びて来た。キア神の涙というものは、いわば反則とも言える存在だ。それが無ければ、内戦で疲弊した我が国はとっくに亡国になっている。
確かに、キヨを伴侶に迎えれば一時的に国を建て直す事は出来るだろう。だが所詮は神子との婚姻の効力も神子が生きている間だけの対症療法にしか過ぎぬ。
二百年後は？　五百年後はどうか？
そもそもそなたも必ず神子が召還出来るという確信は無かったはずだ。張ったり半分であったろう？　キヨの言葉を信じるなら、神子を召還して王の伴侶とすることで国の安定を図ることはキア神の本意では無い。キヨは例外的な存在であり、こんな方法を取れるのは今回限りになるということだ。王が代替わりするごとに神子を召還して王妃にできるならいざ知らず、結局は根本的な解決にはならない。
それはグラスロー、そなたも分かっているはずだ」

痛いところを突かれたグラスローは、僅かに呻いて押し黙る。ゼッタセルドの危機の到来を予測してからというもの、根本的な解決法を探し求める事に日夜同志と議論を戦わせ、あらゆる文献を調べ、時には国外から学者を招いたこともあったが、ついには解決法を考える事を放棄するに至った。時代の流れという巨大な波を押しとどめることは、それこそ神でもなければ土台無理なのだ。
だが、だとしても抗うことを止めるという選択肢はグラスローには無かった。神子召還も、何年も前から文献を調べて確証はなかったが可能性があったから強引に提案したのだ。召還に成功したのに、

何故とりあずといえども最良の方法を捨てるのかグラスローには理解出来なかった。

「……ですが、現状では神子様を正妃に迎えることが一番の上策です」

「確かに、我が国の状況は悪い。切羽詰まっているのも良く分かる。だが、そうしたとしても長期的に見ればぐずぐずと悪化を長引かせるだけで、最終的にこの国が滅びる時はもっと酷い状況に民は陥っているはずだ」

「だからといって、今、この国を、民を犠牲にする可能性の高い大博打を打つ理由にはなりませぬぞ」

「昔と立場が逆になったぞ、グラスロー。目の前の悲劇に気を取られて大局を見極められない愚か者になるなと、そなたに何度言われたものか。安易に神子との婚姻でどうにかしようなど、随分と耄碌したな」

随分と辛辣な皮肉を言われて、グラスローは再び押し黙った。勢いでつい言ってしまったエルドシールはすぐに言い過ぎた、済まぬと短く謝った。

喧嘩をするつもりは無いのだが、どうしてもグラスロー相手だと血の気が多くなってしまう。確かに失敗すればどんな混乱にと悲劇を生み出すか予想もつかない。だが、エルドシールには未来を切り開ける若さがあった。病気や事故に遭わなければこの先四十、五十年王座に座り続けることも可能なのだ。そして後十年もすれば今政治を牛耳っている大臣達も引退して若い世代に道を譲る。

何もしなければそれまで国が保つかどうか限りなく怪しいが、エルドシールはすぐにも行動を始めるつもりでいた。早ければ一年程

で大まかな体制が整う。

「そなたの言を借りれば大博打に民を道連れにする愚王か。そういう意味では我は父上よりも質が悪いかもしれぬな。

だが、始まりがあれば終わりがあるのは当然のこと、ゼッタセルドが滅びる時が我の代だったとて不思議ではない。

むしろ、このまま腐り落ちるだけの国ならば、まだキア神の涙という護符が効力を持っているうちに有力なフェンリールにでも併合されてしまえば、民も奴隷の様に扱われずに済むとすら思う。

いずれにせよ、今のままの国のあり方ではより悲惨な未来しかこの国には待っていない。それを恐らく貴族達も民も漠然とした不安として感じているように思う。良い解決策を思いつかなかったから今までは黙っていたが、キヨが道を示してくれた」

「それが、この計画ですか？」

「キヨの発案を我と母上で練り上げた。グラスロー、一度じっくりキヨと話してみると良い。そんな考え方があったのかと目から鱗が落ちるぞ」

憮然とした顔のグラスローにエルドシールは愉快げに目を細めた。

「キヨはな、我に何故普通の王様を目指すのか、そんなことをして何になるのかと聞いたぞ。キヨは普通じゃない王様を目指すべきだと我に言った。主に我の性格のことに関してだったが、それで我は気付いたのだ。

ゼッタセルドは他国とは一線を画す特殊な事情の国だ。他国と同じように国を治めなければならない理由は無い。ゼッタセルドを特殊な国のまま生き延びさせるには他国には無い、独自の新しい仕組みが必要だと。キヨはその糸口を我に示してくれた」

そこで、一度話を止めてエルドシールはグラスローを改めて正面から見つめる。ようやく渋々ながらも話に耳を傾けてくれるようになったグラスローの表情が、先程よりも穏やかになり思索に耽っているような雰囲気に変わっていた。ここが勝負所だとエルドシールは深く息を吸い、呼吸と心を落ち着ける。

「そしてキヨは王としてではなく、人としてどうありたいか我に尋ねた。そんな事を尋ねてくれる者は王となってからは絶えてなかった。

その問いは、我に初心を思い出させてくれた。そして人としてあるべき姿も。

そなたにはその計画は子供騙しに感じるかも知れぬ。だが、この国に一番必要なのは未来に対する希望だ。力無き理想は何の役にも立たないが、理想無き権力には民は希望を抱けない。

このまま滅び行くしかないのなら、綺麗事で始まったこの国を綺麗事の理想の大花火を打ち上げて最期を飾るのも良いではないか。滅びてなお民の心に誇りと、未来への希望を宿せるような、そんな国を我は作りたい。勿論、滅びる事を前提で考えているわけではないが。困難だが新しい国として再生を果たせれば、きっとゼッタセルドは大きな意味を持って生き残る事ができると信じている」

話し切ったエルドシールとグラスローは暫く無言で見つめ合った。睨むかのような勢いのあるエルドシールの視線を静かに見据えていたグラスローは、不意にふっと微かな笑みを浮かべて溜め息を吐いた。

「……老人というものは、意固地なものです。陛下のお考えに賛同は出来ませぬが、神子の御意志を無視することは神官長たる身では許されぬ事。正妃選びの件は了承致しました」

「十分だ。感謝する」

グラスローとしても納得したわけではないが、確かにエルドシールの言葉にも一理あると認めざるを得ない。現段階では上手くいくとは到底思えないが、王とは結婚しないという神子の意志が固いならば無理強いも出来まい。

希望というには随分頼りなく思うグラスローだったが、それは確かに希望を持てる未来かもしれぬとも思った。さすがは王というべきか、王家の血というべきか、エルドシールの言葉には人を惹き付ける力があった。

「それにしても、私めに詐欺師の真似事をせよとは……」

「しかし、それで暫くはしのげるだろう？」

「はい」

キヨとアレシアの手紙にあった計画の直近の予定にグラスローが苦笑を漏らせば、エルドシールも苦笑で返す。焼け石に水だろうが、それでもそれなりの財源になるはずだと頷き合う。

「それから、時期を見てそなたが信用出来ると判断した神官達にも我の考えを話したい。正妃候補三人全員に振られる可能性もなきにしもあらずだが、結婚は臣下に我の考えを示す良い機会だと思う。花火を不発にしないために是非とも我にはシーラ教の後ろ盾が必要だ」

「先程賛同は出来ぬと申し上げたはずですが」

冗談を交えてのエルドシールの言葉にグラスローは遠慮なく言い

返すが、先程の様な怒りはそこにはない。

「いずれ必ずそなたは説得するが、とりあえずはそなたの信用する神官達の賛同が得られれば良いと思っている」

「外堀から埋める作戦ですか。しかしながらそうそう簡単にはいきませぬぞ。

セーニアンという男がカタルネア地方のマスタートンという村におります。かなりの偏屈ものですが、王の話を聞けば喜んで力を貸すやもしれませぬ。法律に関する知識では、この男の右に出る者はこの国には居ないでしょう」

「カタルネア地方、マスタートン村のセーニアン、か」

グラスローの思いがけない援護射撃にエルドシールは僅かに顔を綻ばせた。

「今の計画では余りにもお粗末でございますゆえ、もう少し現実味のある内容を今度は見せて下され」

「その苦言は甘んじて受けよう。我もまだまだお粗末だと思う。今、色々と人材を集めているところだ。失望させないように努力する」

「くれぐれも慎重になさいませ」

「分かっている。それよりいい加減臣下の如く振る舞うのは止めぬか？　そなたにその様に慇懃にされると酷く居心地が悪い」

神官長たるグラスローは本来王に頭を下げる必要はない。

だが、エルドシールが王位に即いて以来、公式の場では対等な態

度をとるが、非公式の場ではグラスローは臣下の如く振る舞う。エルドシールは何の嫌味か嫌がらせかと一度ならず止めるように言ったのだが、頑として聞き入れない。

「それが目的でございますれば。お立場の重き事、御自覚を促す為の策でございます」

「……」

それはつまり、王としての自覚がまだ足りぬということかとエルドシールは溜め息を吐いた。

厳しい鬼教師がある日を界に慇懃無礼な態度を取るという手法は、確かにエルドシールに多大な精神的圧迫感を与え、常に早く傀儡の王から脱せよと無言の内に圧力を加えることに成功していた。エルドシールが慎重派だったために余り結果には現れなかったが、ある意味グラスローの態度の豹変こそが王となったのだと実感させられた一番の出来事でもあった。

貴族達は最初から王となる者としてエルドシールを迎えたため、出会った当初から態度はさほど変わらない。修道院内では王であろうと立場は以前とやはり変わらぬものであったし、多くの人に跪かれる立場になったという大きな変化はあったものの、端的に同一人物の態度が王になったことで豹変するという状況はグラスローを通してのみ体験したと言って良い。

それは腹芸などとは無縁の孤児院で育ったエルドシールへの、相手の立場を見て人は簡単に態度を変えられるという警告でもあった。

全くどこまでも喰えない狸爺だ。

「なぜそなたが神に仕える者なのか、理解に苦しむ。政治に携わった方が余程力を発揮出来るだろうに」

「以前も申し上げましたが、恐れながら真の策士とは政治の表舞台には出ぬものでございますれば。それに私が居なければ、陛下はとうの昔に墓の下でしょう」

「確かに」

もっともな指摘にエルドシールは真顔で深く頷いた。その意味ではグラスローはエルドシールやレンカ、アレシアの命の恩人であるとも言える。

とにかく、最低限直近の計画への協力は取り付けられた。その後についてはエルドシールの努力次第と言ったところか。計画を一応の形を整えるまでにするのに思いの他時間が掛かり、明日正妃候補を王宮に迎えるという直前になってしまったがどうにかこれで準備が整った。

神官長の説得2（後書き）

いつも読んで下さって有り難うございます。更新遅れてすみませんでした。今回は中々難産でした。私の場合文章書くときは鮮明な映像のイメージが脳内に降って来て、それを文章に変換するという方法で執筆するんですが、爺が好き勝手暴走気味で、これだと思う映像がなかなか降って来なくて（涙）

キャラクターが勝手に動き出すという体験は割とあることだと思いますが、爺はエルドシールに折れるのは嫌だと散々抵抗してくれました。折れてくれないと話が進まないので、ちょっと無理矢理な形でまとめてしまいましたが、そんな訳で少し消化不良気味です。書き直すかもしれません。

爺のキャラクターの設定を喰えない爺にしすぎたかもしれないと少し後悔中。

次はいよいよ、やっと、正妃候補達が王宮入りします。

正妃候補達の王宮入り

その日は朝から曇り空で天気には恵まれなかったが、盛夏に向けて暑さを増すばかりの最近では珍しく涼しさを感じさせて過ごしやすかった。

白く覆われた空の下、華やかなファンファーレと共に三台の馬車が王宮の正門を潜る。

最初の馬車には一番年長の正妃候補であり、もっとも古く格式の高いガルニシア公爵家の三女セリーヌ・ファレ・ガルニシアとその侍女、続いく馬車にはレイゼン公爵家次女のフィリシティア・ファレ・レイゼンとその侍女、最後の馬車にはゼットワース侯爵の姪で、今は養女のゼットワース侯爵令嬢チェルネイア・ガレ・ゼットワースとその侍女が、それぞれ乗っていた。

前庭に乗り付けた馬車から美しく着飾った正妃候補達が降り立ち、典礼大臣に先導されて王の待つ謁見の間へと進む。

ずらりと両側に整列した騎士団が見守る中、中門を潜って中庭を抜け、王宮の本宮に到る。開け放たれた謁見の間の黄金の扉の前で、それぞれが緊張の面持ちで立ち止まった。

「国王陛下に申し上げます！　ガルニシア公爵が三女セリーヌ・ファレ・ガルニシア様、レイゼン公爵が次女のフィリシティア・ファレ・レイゼン様、ゼットワース侯爵が長女チェルネイア・ガレ・ゼットワース様、ご到着にございます！」

高らかに響く声に続いて正妃候補達が順番に謁見の間へと進んだ。

謁見の間の床は黒曜石と白い大理石でアルスターという国の花をモチーフにした模様が描かれ、天井にはゼッタセルド建国の物語が描かれている。天井近くにはステンドグラスを嵌め込んだ幾つもの

天窓があり、人の身丈程もある大きな燭台が白い大理石の壁際に幾つも並ぶ。正面奥には初代神子と二代目神子を彫刻した大理石の円柱が神殿の入り口の様に並び、その向こうの一段高くなったところに青い絨毯が敷かれ、その上に玉座が据えられている。約三百年前に活躍した偉大な芸術家、セフォールの緻密な彫刻が施された黒檀の玉座は天地創造の神話を語っており、青い天鵞絨に金の房飾りの付いたクッションを置いた上に王は座っていた。

泉の色の青を聖なる色としたゼッタセルドに相応しく、いわゆるロイヤルブルーの美しい深い青を多用した内装は、華やかさよりも荘厳な教会の様な佇まいを見せていた。

王であるエルドシールも、今日は青を基調として黒と金を刺繍した正装で正妃候補達を出迎え、傍らの生母アレシアも尼僧衣ながら飾り帯の付いた式典用のものを着用している。

先程までのざわめきが消え、主な家臣が勢揃いする中、静々と進み出た美しく着飾った三人に視線が集る。

セリーヌのドレスは少しくすんだような桃色の生地にレースを贅沢に使ったもので、随所にあしらわれた茶色のリボンが雰囲気を甘くなり過ぎないように上品にまとめている。

中に蝶を閉じ込めた珍しい琥珀を使った首飾りと、やはり琥珀の耳飾りもドレスに良く合っていた。

いくつもの三つ編みを複雑に組み合わせ、桃色のリボンと共に結い上げた髪型は、知的な雰囲気がありつつも可愛らしさもある。

最年長というのを気にしてか全体的に可愛らしさを感じさせる装いだった。美人ではないが、愛嬌のある顔立ちのセリーヌにはなかなか似合っている。

フィリシティアのドレスは純白の柔らかな薄い絹地を贅沢に使い、美しいドレープをデザインしたものだ。ロイヤルブルーに金の刺繍

を施したサッシュベルトをハイウエストに締めていて、妖精めいた流れる様なシルエットにメリハリを与えている。
また、ラピスラズリで花を模した金細工のチョーカーは華奢な細い首を引き立てている。
髪は一部だけ結い上げて小さなシニョンを頭の天辺に作ってチョーカーと同じ意匠の金細工の髪留めを飾り、後は流れる様な見事な銀髪を自然に流している。
全体としてフィリシティアの容姿の美点を遺憾なく引き出し、可憐さと高貴さとを際立たせている様は見事としか言いようがない。まだ女の匂いの薄い、ともすれば中性的な美しさは人形姫の様だ。

一方その対極にあるのがチェルネイアだ。チェルネイアのドレスは金に輝くシャンタン生地を使ったもので、デザインは首まで覆うタイプの露出を極力抑えた一見禁欲的なものだ。しかし、その実シンプルなシルエットで身体のラインの美しさを強調していて、かえって官能的な雰囲気を漂わせている。
宝飾品は大粒のルビーを使ったシンプルなブローチと同じくルビーを使ったシンプルな耳飾りのみ。結い上げられた髪は美しい巻き毛で飾られているが、装飾品は何も無い。姑である慈母アレシアへの心証と男性である王と家臣達への心証の両方に配慮した、なかなかに賢い装いだ。

三者三様、それぞれの美しさを最大限に引き出すような装いに、家臣達からは感嘆の溜め息や囁きが漏れる。特にいつもは大胆に胸元の開いた派手なドレスの多いチェルネイアの意外な装いと、別角度からの色香と魅力に目を奪われる者が多かった。
しかしながら一段高くなっている謁見の間の最奥、玉座に座る若き国王はその三人を見ても表情一つ変えない。

「顔を上げよ」

深々と頭を下げていた三人が顔を上げると、王は一人一人の顔をゆっくりと確認するように見つめた。

「セリーヌ・ファレ・ガルニシア、フィリシティア・ファレ・レイゼン、チェルネイア・ガレ・ゼットワース、以上三名をゼッタセルド王国正妃候補とし、本日より二ヶ月の選定期間中王宮に滞在を許可する」

玉座から王が発した言葉は以上で終わり、典礼大臣を務めるケーゼ侯爵が後を引き継いで正妃候補達に与えられる部屋、権利、そして禁止事項などを読み上げた。

それが終わると王は傍らの母に微かに頷いて見せると、再び口を開いた。

「三人には初対面であろう。この方は我が生母でもある慈母アレシア様だ。選定の内容に関してはほぼ一任している」

視線に促され、アレシアは一歩前へ出ると緊張しているだろう三人の娘達に微笑んだ。

「初めまして、美しい方々。偉大なる創造神キアの恩寵の賜物である我が国、ゼッタセルド王国に王の伴侶たる正妃を迎えることは、一尼僧としても大変喜ばしい事です。この後ささやかな歓迎のお茶会を開きますので、またその時に改めてご挨拶致しましょう」

以上、十分程度で謁見は終了した。もともと顔見せ以上の意味は無いのだが、何事も儀礼と体面を重んじる貴族社会では、これが政治的に重要な意味を持つ。難儀な事だと、久し振りの正装に窮屈な

思いをしたエルドシールは内心苦笑しながら謁見の間を後にした。

一方、正妃候補達が連れて来た侍女達は女官長の指示の元、それぞれの主人に宛てがわれた部屋に荷物を運び、王宮の侍女達の手を借りて片付けに追われていた。

セリーヌの侍女、メイミ・アレ・スフォルツァは実は名ばかりだが子爵令嬢でもある。メイミの母が身分的には子爵より下であるキシェラ男爵家の乳母になったのは、経済的理由に他ならない。とはいえゼッタセルドには領地を持たない名ばかり貴族が多数いるので、メイミは貧乏貴族だということを気にした事は無い。

父の子爵は騎士だったが、足を悪くして職を失った為に収入がなくなってしまったのだ。普通なら妊娠中の妻を抱えて路頭に迷うところだが、そこは貴族の世界。逆に妊娠中で良かったと不幸中の幸いに涙しながら乳母の話に飛びついたんだとか。そんな事を笑って話せる子爵夫妻であるから、その娘のメイミもしっかりその気質を受け継いでいる。

主人であるセリーヌ嬢に与えられた部屋は、淡いモスグリーンの壁紙に白い調度品で統一された居心地の良さそうな雰囲気だ。緑が好きなセリーヌにぴったりだとメイミは嬉しそうに丸い顔を綻ばせる。

セリーヌの荷物は他の正妃候補の比べると格段に少なく、あっという間に片付けは終わってしまった。なにしろ五人もの王宮侍女が手伝ってくれたので、メイミ自身は指示をするだけで殆ど片付けをしないで済んだ程だ。

ちなみにここは閉鎖されていた後宮の一部で、すぐ向かいはチェ

ルネイア姫の部屋、二つ隣りはフィリシティア姫の部屋になっている。

女官長の話によると、謁見の後に正妃候補達は慈母様のお茶会に呼ばれるそうだから暫くは暇だ。侍女としての王宮での注意事項等色々と必要な情報は、三人揃って後から女官長から教えて貰えるらしいし、それまでは自由時間だ。

そこでメイミは持ち前の好奇心を発揮して廊下に出てみた。開け放たれたままの各正妃候補の部屋のからは、忙しく立ち働く侍女の姿が見える。

「やっぱりうちのお嬢様の荷物は少ないんだわ。私からすればお嬢様でも多いくらいだけど、一体何をそんなに持って来てるのかしら……」

向かいのチェルネイア姫の部屋の様子を窺っていたら、金髪碧眼の侍女に睨まれてしまい、慌ててその場を離れた。

メイミと同じ立場のチェルネイア姫の侍女はカトリーヌ・デア・マルゴットという。小さいながらも領地持ちの伯爵令嬢だとか。多分結構年上の彼女は、あなた方とは同じ侍女でも格が違うのだから気安くするなというオーラが滲み出ていた。

綺麗だけど怖そうな人だとメイミはそそくさと次なる目標へと足を向けた。

折角の王宮暮らしだから出来れば楽しく過ごしたいと思うメイミは、単に友達になれたら良いなと思っていたのだ。

だが、まるで正妃になる気がないセリーヌと違って、他の候補者とその侍女にしてみればメイミは敵と同じで、メイミの行動はどう考えても敵情視察なのだ。良い顔をされるわけが無い。次に覗きに行ったフィリシティア姫の部屋でも、ハンナに怪訝な顔をされた。

ハンナは王宮に上がる為にアンセル男爵の養女になっていた。ア

ンセル男爵はレイゼン公爵の派閥の下っ端の名ばかり貴族だ。人の良さそうな、酷く緊張した様子のハンナを見て仲良くなれそうだと思っていたメイミは、ハンナの反応に少しがっかりした。しかし忙しい時に邪魔だから仕方が無いと諦め、先程手伝いをしてくれた侍女の一人を捕まえて温室の場所を聞いた。

王宮は四つの部分から成り立っている。政治の場である本宮、騎士達の詰め所と王立騎士院のある夏宮殿、王の妃達の住む後宮、そして本宮と後宮を結ぶ回廊の間に位置する春宮殿だ。春宮殿は王太子の為の小宮殿で、今は結婚前のエルドシールが使っている。アレシアとキヨもここに滞在中だ。その春宮殿の一角に温室はある。

「凄い……！」

庭園の中に姿を現した温室に、メイミは思わず声を上げた。

キシェラ男爵家の温室も家の格を考えれば破格に立派なものだったが、さすがは王宮の温室、規模ではほぼ十倍はあろうかという広さだ。

規模だけでなく、その外観も美しい。六角柱に三角の屋根をのせたような形のガラス張りの温室が大小幾つも連なるようにしてデザインされていて、さながらガラスの宮殿の様に見えた。

キシェラ男爵家の色とりどりの花が一年中咲き乱れる温室は、メイミにとってはこの世の楽園とも思う生まれてから一番のお気に入りの場所だったが、この温室は見た目すらも天国のお城のようだとメイミはうっとりした。

入り口を警備している近衛兵に今日王宮入りしたガルニシア公爵令嬢の侍女だと言うと、快く中を見せてくれた。中に入ってもメイミの感嘆の溜め息は止まらない。

キシュラ家の温室にもゼッタセルドでは普通は手に入らない他国の植物も沢山あったが、やはり王宮のそれには敵わない。植物学の

本で見た事しか見た事がなかった貴重な薬草を目にした時は、思わず叫びかけて慌てて口をおさえた。
これならきっとセリーヌも喜ぶ、この温室さえあれば二ヶ月などあっという間だと確信したメイミは、今度はいても立ってもいられず温室を後にした。
一刻も早くこの素晴らしい温室の事をお知らせしなければと、飛ぶ様な足取りで、ぽっちゃり体型の為に見た目には鞠が転がる様な勢いで、メイミはセリーヌの部屋に戻ったのだった。

お茶会での前哨戦

玉座の王は思わず見蕩れてしまう程に美しかった。凍り付いた様な紅の眼差しも、感情を削ぎ落とした様な硬質な声も、チェルネイアにはぞくぞくする程魅力的だった。あの凍った瞳が憎しみの炎を宿したら、きっともっと美しい。

チェルネイアにとっては慈母アレシアが選定を取り仕切るというのは予想外だったが、恐れてはいなかった。結婚するのは王なのだ。王の心さえ捉えられれば問題は無い。

一方、フィリシティアは王が恐ろしくてならなかった。相変わらず感情が全く見えない冷たい美貌には血が通っているとは思えなかった。自分もまたその様に人に思われがちだということは、彼女は気付いていない。気ぐらいの高さが怯えを悟られる事をよしとしない彼女の表情もまた、無表情と取られやすいのだ。それが中性的で人形めいた印象を助長している。

どうしよう、やっぱり私、あの方が怖い。

玉座からの距離はそれなりにある。それでもこれだけ怖いと感じてしまうのだ。これからもっと近くに接する事になるのに、こんなことではどうなってしまうのか。不安に押しつぶされそうになるのを気力で辛うじて堪え、フィリシティアは完璧な立ち振る舞いで謁見を終えた。

そして完全にやる気の無いセリーヌは、早く窮屈な髪型から自由になりたいときっちり編まれた髪のせいで生じた頭痛に苛々しながら謁見が終わるのを待っていた。父の立場を思えば娘の自分が下手を打つわけにはいかないので、そこは流石に年の功、公爵家令嬢に

相応しい立ち振る舞いで謁見を終えた。だが、このまま慈母様主催のお茶会に移ると聞いて思わず扇の影で舌打ちをしてしまった。

このアレシア主催のささやかなお茶会は、春宮殿にて行われた。普通はこのような場合、貴婦人は必ず侍女を連れてゆくものだ。一旦部屋に帰してしまえば侍女を伴って来ることは予想出来たので、強引ではあったが謁見を終えたその足で春宮殿に直接向かう様に指示を出した。

正妃候補達はこの強引な招きに少し疑問を感じながらも黙って従った。選定の鍵を握るアレシアに文句を言うなど馬鹿のすることである。それを除いても、アレシアは国王の生母なのだ。

案内された部屋には尼僧姿の若い娘が一人いるだけで、この娘が侍女の代わりをするらしかった。

正妃候補達はアレシアに促されて、庭園に面した大きなガラス扉の前に用意された席に着く。柔らかなクリーム色に薔薇の模様が描かれた壁と、夏の陽射しを柔らかく通す、これまた薔薇の刺繍が施された白いレースのカーテンが美しい。

「それでは改めまして。私は国王陛下の生母ではありますが、今は慈母の称号を頂いた貴族社会とは無縁の者。そちらの方で私の事はお呼びなさいませ」

「アレシア慈母様とお呼びすれば良いですか？」

アレシアの言葉にいち早く反応したのは、チェルネイアだった。

「えぇ」

「それでは私のこともチェルネイアとお呼び下さい。私もシーラ教

の信徒ですから、慈母様の娘と思って下されば幸ですわ。ねぇ、皆様もそうでしょう？」

全く気後れのした様子もなく促すチェルネイアに、少し遅れて二人も頷く。

「はい、勿論ですわ。私の事もフィリシティアと」

「私の事もセリーヌとお呼び下さい」

本来なら年長者であるセリーヌが最初にアレシアに答えるべきところだが、とうのセリーヌは淡々とした調子で受け流している。対するチェルネイアは主導権を握ったとばかりに得意げで、フィリシティアに至っては困惑顔だ。

「では、良き娘達にお茶を差し上げましょう。キヨ、準備を」

「はい、慈母様」

三者三様の反応を見せる候補達に、アレシアはやれやれと内心苦笑しながら観察する。おそらくキヨも内心で色々と思う事があるのだろう、目を合わせた彼女の賢そうな瞳が煌めいて、口元に微かに笑みが浮かんでいた。

この日の為に用意したのは珍しい異国のお茶で、ベルタが薦めてくれてくれてからはアレシアのお気に入りになっている。

アレシアが口を付けるのを待って、候補達もお茶に口をつけた。

今度はいち早く反応したのはセリーヌだった。

「まぁ……これはセツカの花茶ですね」

「そうです。良く知っていましたね、セリーヌ」

「はい。母の実家でセツカは栽培しておりますから」

「私は初めてです。とても香りの良いお茶ですわ。どういった由来のお茶なのでしょう？」

セリーヌに遅れをとったチェルネイアが少し強引に話に割って入る。どうでも自分が話の中心になりたいらしい。

「マーレシアの南に位置するラズエルという小国のお茶だと聞いています。栽培しているならば私よりもあなたの方が詳しそうですね、セリーヌ」

もう一度アレシアがセリーヌに話を振ると、セリーヌはにこっと愛嬌のある顔を綻ばせた。

「詳しいという程ではございませんが、私の知る限りを申し上げます。セツカは夏に小さな白い花を付けます。これが大変香りがよく、葉の新芽と花を摘んでお茶を作ります。実は豆粒程の大きさながら滋養に富み、煮れば柔らかく消化も良いので病人には最適の食材の一つともされています。ゼッタセルドよりも余程暑い国の木なので栽培は難しく、温室が無ければ冬には枯れてしまいますから、あまり知られてはいませんが」

成る程、セリーヌ嬢が博識であるという噂は本当らしい。いくら実家で栽培しているとはいえ、実際に育てているわけでもないだろうから知ろうとしなければ知る事のない知識だ。

「実が病人食に良いとは初めて知りました。簡単に栽培出来ないのは残念なことですね」

「掛け合わせて品種改良を試みてはいるのですが、なかなか上手くいかない上に時間が掛かるので……」

「まぁ、ガルニシア公爵家はそのような事までやっていらっしゃるの？」

アレシアが驚いて問う。他の二人の候補達も驚いたようだ。

「いいえ、母の実家のキシェラ男爵家です」

「キシェラ男爵家……」

誇らしげに答えるセリーヌに、アレシアは微笑んで頷きながらキシュラ男爵家がどのような家だったか記憶を探っていたが、いち早く割り込む隙を探していたチェルネイアに思考を遮られた。

「聞いた事の無い名前ですわね。フィリシティア様はご存知？」

「……いいえ。勉強不足で申し訳ありません」

微かに侮蔑を含んだチェルネイアの問いに、フィリシティアは再び困惑顔で答える。セリーヌに対するちょっとした嫌がらせであろうが、セリーヌはセリーヌで全く意に介した様子も見せない。

「無理もありませんわ。母の実家は中央の政治とは無縁の地方貴族ですから」

あっさりと田舎貴族だと認めて平然とお茶を飲むセリーヌに、さすがのチェルネイアもこれ以上何も言う言葉を探せなかったらしい。
沈黙が訪れたので、先程から大人しく会話を聞くばかりのフィリシティアにアレシアは目を向けた。

「フィリシティア、セツカの花茶は気に入りましたか？」

「はい。甘すぎず、とても上品な香りが心安らぐ様ですわ。最後に香る残り香が薔薇にも似ているように感じます」

不意に話を振られて一瞬僅かに緊張を繊細な美貌に走らせたが、そこは生粋のお姫様育ちである。優雅な仕草で首を傾げて微笑みと共に返された感想はいかにも高級なものに触れ慣れている事を示していた。しかもチェルネイアのような威丈高さが無い。

「あぁ……確かにそうですね」

フィリシティアに指摘されて改めて花茶の匂いを胸に吸い込んで、確かにとアレシアも頷く。同じ様にしていたセリーヌも頷いた。

「セツカの木はバラ科の植物ですから、香りも似ている部分があるのかも知れませんわ」

「そうですの？　セリーヌ様は本当に良くご存知ですのね」

自分の感想が的を射ていたことが嬉しいのか、フィリシティアは年相応の可愛らしさを感じさせる笑みを浮かべてセリーヌを素直に賞賛した。

「本当に。私など薔薇といえば薔薇の花束しか知りませんわ」
かと思えば、チェルネイアは薔薇は殿方から花束として贈られるもので、そんな経験は無いだろうとすかさず嫌味を賞賛に隠して言う。
「あら、チェルネイア様。一つ大切な薔薇を忘れていらっしゃいましてよ」
「……何でしょう？」
平然として言い返すセリーヌに、チェルネイアは微笑みながらも不快気にぴくりと眉を痙攣させて問い返した。
「勿論目の前にいらっしゃる、ゼッタセルドの白薔薇ことフィリシティア様ですわ。本当にこうして間近で見ると同じ人間とは思えない程に美しい方。今日のドレスもまるで白薔薇の妖精の様。ねぇ、チェルネイア様？」
「そ、そうですわね……」
美貌に絶対の自信を持つチェルネイアは、思わぬセリーヌの反撃で美貌においてフィリシティアの風下におかれてしまい、顔を引き攣らせた。にこにこと微笑むセリーヌは愛嬌一杯の容貌のおかげで、それが意図された反撃とは受け取られにくい。意外にも強かさを見せるセリーヌにアレシアは少しばかり目を見張った。
一方父からの賞賛は毎日の様に受けていたが、母や姉からは嫌われていたフィリシティアは同性からの賛辞には慣れていない。
何か言おうとしたが、真っ赤になって恥ずかしそうに俯いてしまった。

意外な反応にアレシアは目を細めて微笑ましく思い、セリーヌもまた反撃のダシにしてしまった相手の可憐で初心な反応にまぁ、可愛らしい方、と思わず声に出して微笑んだ。

面白くないのはチェルネイア一人である。あからさまに表情に出す事は流石にせず、周りに同調して本当に、などと言っているが内心は憤懣やるかたない。

その時、扉が叩かれた。

王の言葉

「国王陛下、お成りでございます！」

扉の向こうから侍従の声が響く。アレシアを除く一同に緊張が走り、皆一斉に立ち上がって深く頭を下げ、王の来訪に備えた。

「キヨ、扉を」

「はい、慈母様」

胸の前で手を交差させて軽く膝を折って頭を下げると、キヨは扉を開けに向かう。

先程の正装を解かぬまま、柔らかな色彩の溢れる部屋には不似合いな青と黒と金を纏う王の登場はこの場の雰囲気を一変させた。先程までの会話で和んでいた空気も吹き飛び、息を詰めるような正妃候補達の緊張感が支配する。

それを見てとって、王は一瞬立ち止まった。

「良い、皆顔を上げよ」

言われて正妃候補達は顔を上げるが、先程まで赤面していたフィリシティアはすっかり顔を白くして頑な表情になっているし、セリーヌはすっかり大人しやかな雰囲気に自己を押し隠して目を伏せている。チェルネイアだけが瞳を輝かせて王に媚びる様な笑みを向けた。

その様子にアレシアは内心苦笑して残念なことだと溜め息を吐き、立ち上がった。

「殿方をお招きした覚えは無いのですが？」
からかう様なアレシアの声に、表情を変えぬまま王は軽く頭を下げた。
「慈母様、突然お邪魔して申し訳ない」
「構いません。ここはあなたの家です。何一つあなたを拒む理由はありません。どうぞお掛けなさいな」
「では」
「皆さんもどうぞ席に着いて」
微笑むアレシアに促されて、王はキヨがアレシアの隣りに用意した椅子に座る。
いくら生母とはいっても、アレシアに軽くとはいえ頭を下げた王に戸惑いを隠せない正妃候補達にもアレシアは微笑んで着席を促した。
「皆それぞれに面識はあるが、こうして近く個人的に言葉を交わすのは初めてになると思う。そなた達のいずれも我が正妃になる可能性があるのだから、まずは気を楽にして欲しい。
人の目があると我はどうしても私人として振る舞えぬし、そなた達もそうであろうからこのような不躾なことと相成った。どうか許して欲しい。
さて、早速だが本題に入ろうと思うが、慈母様、宜しいか？」
王の最後の言葉に、この突然の来訪は予定されていた事だと正妃候補達も気付き、重大な事柄を予感させられてそれぞれが表情を引

き締めた。
だが、高まる緊張感に逆らう穏やかな声が優しく響いた。
「その前にお茶を。キヨ」
「はい」
いつの間に用意したのか既に王の分のお茶を用意していたキヨが、すぐに王前へと供す。
ふわりと香る芳香に王の顔が心なしが弛んだ。
「セツカの花茶か」
「えぇ、あなたもセツカの花茶がお気に入りでしたね。娘達も皆気に入った様ですわ」
「それは良かった。この香りは心が落ち着くので最近では寝る前に欠かせないのです」
ことさらゆっくりと穏やかに話すアレシアにつられてか、王の声音も表情も幾分柔らかいものに変わる。その変化は些細なものだったが、その僅かな変化すらも驚く程普段が無表情であったので、王妃候補達は目を奪われた。
そして一息ついた王は、そのままの穏やかさを感じさせる声で話し始めた。
「……我がここに来た理由は、正妃選びについて我の本音をそなた達だけに打ち明けたいと思ったからだ。慈母様には選定を一任するとしてあるが、実際は微妙に違う。
そなた達には、ある答えを探して欲しい。その答えを導く為の助

けを慈母様にはお願いしてあるのだ。今から我が言う事を、心して聞いて欲しい」

王もまた緊張しているのかゆっくりと息を吸った後、はっきりとこう言った。

「我は傀儡の王である」

正妃候補達は一斉に息を飲んだ。

それは周知の事実ではあったが、王自身がそのようにはっきりと宣言するなど前代未聞、驚きに皆一様に瞬きも忘れた様に固まった。

そんな一同を見回して、王はゆっくりと続きを話し始める。

「我がそなた達に正妃として望む事は、我が傀儡の王であることを理解した上で共に人生を歩み、伴侶としてお互いを慈しみ合う事、それに尽きる。

そなた達は我に夫として何を望むだろうか？

我がそなた達に夫として与えられるものは、誠実であること。それだけだ。

ここは我の城であるが、我の物であって、真実我の物ではない。我が妻になる者に与えられる衣装、宝石も、我の物であって真実我の物でない財によって購われる。

我自身がそなた達に真実与える事の出来るものは殆ど無い。真実我自身によってそなた達に与える事が出来るのは、ただ、我が心のみなり。

我が妻になる者は、生涯を通して唯一人となるであろう。側室も妾妃も生涯持たぬ。

伴侶たる妻の心の声を聞き、魂に寄り添う様に共にあることを望むだろう。

その証しとして、そなた達と我が母、そして創造神キアに誓う。
我が妻となる者は我と肩を並べるものなり。よって我はその者に対し、『我』という言葉を使わず『私』とする」

『我』という一人称は並び無き比類無き我という意味で、王にのみ許されたものである。それを正妃の前では使わぬということは、王妃を己と対等と扱うということだ。敬語文化の発達したこの世界では、この決断は相当に重い。

「これがそなた達に示してやれる私の夫としての誠意の精一杯だ。私の示した誠意に対して、そなた達は何を誓ってくれるだろうか？
そなた達のいずれも血筋正しく美しい姫君だが、それらを基準に伴侶を選ぼうとは思わぬ。
また、そなた達が心底望んでこの場にいるかどうかも分からぬ。
私は心の内をそなた達に隠そうとはせぬから、そなた達も隠すことなく思うところを述べて欲しい。求めがあり、私に答えられることならば全て答えよう。そなた達も見極めるのだ、私がそなた達の夫に相応しいかどうかを。
そして王妃選定期間の最終日、改めてそなた達に問おう。傀儡の王の王妃として何を成すかを。妻として私に対し何を誓うかを。その答えをもって、最終的に正妃を選ぶこととする」

話し切った王は、一仕事終えた安堵感からか笑みが浮かんだ。その笑みはその母によく似た優しい笑みであった。
それからすぐに侍従の呼ぶ声に慌ただしく王は去って行った。
正妃候補達の心に衝撃を残して。

「陛下が……微笑まれていらっしゃったわ……」

呆然と呟くフィリシティアに、アレシアは堪らず噴き出した。

「あの子も普通に人の子ですから、勿論笑うくらいしますよ」

これにてお茶会はお開きとなった。正妃候補達は王の言葉を胸に、それぞれの部屋へと帰った。

深夜のお茶会

「まずまず成功したのではないかしら、ねぇキヨ？」

「そうですね、私もそう思いますわ」

アレシアの言葉にキヨは大きく頷く。

現在、アレシアの居室では恒例になりつつある深夜のお茶会の真っ最中だ。出席者はアレシア、キヨ、エルドシールである。

一日を終えたエルドシールが幾分疲れた顔で口を開いた。

「全く、戴冠式よりも緊張したぞ。母上にお茶を勧められて良かった。あのままだったら、しくじっていた気がする」

「その割には最後に微笑みまで出ちゃって、姫君達びっくり仰天してたわよ？」

育ちの良い姫君達が揃いも揃ってぽかんとしてる様子には、何度思い出しても笑いが込み上げるキヨだ。

「本当に思わず笑ってしまう程、皆驚いていましたね。普段から表情が出にくい子だとは思っていましたけれど、王になってからはそれが悪化していたのね」

「えぇ、凍れる炎の王、ですから」

「私にはそちらの方が仰天でしたけれど」

くすくすと笑い合うキヨとアレシアに、エルドシールは僅かに眉

を顰めて憮然とする。

「……それくらいで勘弁して下さい、母上」

「それにしても、良くあのタイミングで微笑めたじゃない」

「覚えていない」

「そう？　途中から随分緊張が弛んで声にも表情にも余裕があったわよ。最後の微笑みなんて私でも思わず見蕩れちゃったわ」

勿論素のエルドシールを知っているキヨは、何度かエルドシールが笑うのを見た事がある。

最初に見たのは泉で、召還直後にエルドシールは大笑いしていたのだ。だが、その時はそんなふうにエルドシールが笑うのが滅多に無い事だと知らなかったので、正直全く記憶に残っていない。

素の時でも、エルドシールは綺麗に整った顔を少し綻ばせる程度の笑みしか浮かべないし、だから今日エルドシールが見せた微笑みは別格だった。誰もがはっきりとそうと分かる微笑みを見たのは、キヨも初めてだったのだ。

「多分『我』から『私』変えたからでしょうね……。あなたが子供の頃にはあの様な微笑みを私は良く目にしましたよ」

しみじみとしたアレシアの言葉に、エルドシールも表情を和らげてゆっくりと頷いた。

「そうかも知れません。我と己の事を言う度、自分が王だという事を思い知らされているようなものですから。その開放感と言い終えた達成感で無意識に笑みが出たのやも……」

「これでどんな反応を姫君達が見せてくれるかが、次の焦点ね」
キヨとしては、どの姫君でも良いから仄かにでもエルドシールに恋心を抱いてくれれば良いと思っていた。
「うむ、そうだな。母上から見て候補達はどんな様子でした？」
「そうね……フィリシティア姫は思った以上に幼い印象でした。その分純粋なのでしょうね、良い意味で本当のお姫様育ちという感じかしら。セリーヌ嬢はおっとりした雰囲気ですけれど、なかなかしっかり者のようです。チェルネイア姫は……何と言うかとても積極的な方でしたね」
苦笑するアレシアに、キヨもまた苦笑してエルドシールにお茶会での出来事を一通り話した。
キヨとしては当初は一番チェルネイアが気になっていたが、どうもあの態度からしてあてが外れたようだ。今はセリーヌ嬢に一番興味が傾いている。なかなかに鮮やかなチェルネイア姫への反撃と、母の実家の家格で劣る男爵家を誇らしげにしていた様子からぶっちゃけ一番好感を持った。フィリシティアに関しては正直綺麗な子、という以上の印象が無い。ドールーズ伯爵の言っていた通りだった。
だが、選ぶのはあくまでもエルドシールなので、なるべく私情を挟まない様に説明する。これが意外と難しいのだが。
エルドシールは黙ってお茶会の様子を聞いていたが、不意に思案気な顔になってアレシアに向き直った。
「……母上、チェルネイア姫に関しては少し気を付けておいて下さい」

「何かありましたか？」

「ドールーズの報告によると、彼女の乳母は人質に取られている様子です。侯爵は妹の嫁ぎ先の別荘を借りて、その塔に病気療養と銘打って乳母を監禁している。出入りするのは世話役の女が一人のみで、それもろうあ者という念の入れようだ。監視している私兵は小さな塔にも関わらず十人近く配置されている」

「まぁ……」

「それじゃ、やっぱりあの噂は本当なの？」

「おそらく。出自がどうあれ姫の返答次第では我としては正妃にしても良いと思っているが、もし姫が追い詰められているのだとしたら不味い事になるかもしれない。それから、リフィシティア姫の侍女だが、これも家族を人質に取られているも同然らしい」

「その人質は保護出来ないの？」

「今は時期が不味い。いずれはと思っているが下手に警戒されてはこちらも計画に支障が出る。それに侍女の方は人質にされている自覚が家族には無いから厄介だ」

「自覚が無いのですか？」

「はい。侍女の母は高価な薬が必要な難病らしいのです。公爵は下女として働いていた娘を給料の良い侍女に取り立て、それでも足りない分は援助してやっているという篤志ぶり。
　そのおかげで侍女の家族は全員公爵に感謝しているようです。心理的に完全に公爵の奴隷ですね」

「あぁ……あの方はそういう巧妙な罠を用意するのが得意でしたね。可哀想に……」

「腹黒いですね」

気の毒そうにアレシアは顔を曇らせ、キヨは全くだと顔を顰めた。

「今のところ完全に何も出て来ないのはセリーヌ嬢だけだ。ガルニシア公爵には娘を正妃にするつもりは全く無いらしいから、当然といえば当然だろうが。

一週間後の大舞踏会までは敵も騒ぎを起こしたくはないだろうし、暫くは平和だと思う。だが、この二人の動向にはキヨも気を付けていて欲しい」

「分かったわ」

神妙に頷くキヨに、前から気になっていた事を聞きたくなったエルドシールは徐に口を開いた。その答えは分かってはいるのだが。

「……ところで、何故母上には敬語なのだ？」

「あれ？　気になる？」

キヨが意地悪げな笑みを浮かべるので、エルドシールは嫌そうな顔をして手を振った。

「……やはり答えなくて良い。忘れてくれ」

「勿論アレシア様を尊敬申し上げているかですわ、陛下」

「忘れろと言ったのに……。そなたの答えなんぞ分かっていた」
「じゃあ何故聞いたのよ？」
「単なる気の迷いだ」
「私に敬語を使わせるくらい立派な王様になってね、エディ」
「そなたは死ぬまでそう言い続けるだろうな」
苦い顔をするエルドシールと愉快気にからかうキヨに、アレシアは控え目ながら声を上げて笑った。
それにつられてエルドシールも表情を和らげる。
こんな風に心地良い時間は、王になってからは殆ど無かった。穏やかに笑う母アレシアを見るにつけ、キヨのもたらした最大のものは、もしかしたら何気ない日常の優しい時間なのかもしれないと思う。
「ここにレンカがいてくれたら……」
無意識に口から出た妹の名前に、エルドシールは驚いて口を噤む。アレシアも驚いて目を見開くが、すぐに切なげな微笑みを浮かべて無言でそっとエルドシールの手を握った。
失われた妹を、娘を思う親子の邪魔をしない様に、キヨは二杯目のお茶を煎れようと席を立った。

姫君の初恋

あてがわれた部屋に案内されたフィリシティアは、かいがいしく世話を焼くハンナにも上の空で着替えを済ませた。

帰って来てから姫の様子がおかしいとハンナは心配でならなかった。

最初は謁見に続いて慈母様のお茶会で緊張の連続だったせいだろうと思っていたが、あれから暫く経つのにまだぼうっとしている。昼食用の軽食にも殆ど手を付けず、終始ぼんやりしていて、時折溜め息を吐く。

良く見れば頬が何時もより赤い。もしかしたら風邪でも引いたのではとハンナは顔色を変え、慌ててフィリシティアの大嫌いな薬を差し出した。良く効くのだが、酷く苦いのだ。

「姫様、大丈夫ですか？　大事にならないようにこれを飲んで下さい」

「……」

いつもはそんな不味い薬は飲みたくないと散々当たり散らすのだが、何故か今日に限って何も言わずに素直に受け取って薬を飲むフィリシティアにハンナは目を丸くした。しかも、あの苦い薬を飲んでいるのに、表情が変わらない。

空になったグラスをまじまじ見つめて、行儀が悪いと知りつつも僅かに残った薬をこっそり飲んでみるが、やっぱり強烈に苦い。

やはり、国王陛下との謁見で緊張の余りお心の方もお疲れになったのだろうかと、ハンナは訝しく思いながらも姫を心配して口直しに蜂蜜茶を用意した。

「姫様、お口直しにどうぞ」

「……」

やはりフィリシティアは無言のまま差し出された蜂蜜茶を飲み、ほうっと溜め息を吐いた。

「姫様、お疲れになられましたでしょう？　夕食までまだお時間がありますから、お休みになられますか？」

「……ねぇ、ハンナ。恋って不思議ね……」

「こ、恋、ですか？」

厳格なレイゼン公爵は、世俗から隔離してフィリシティアを育てた。侍女など使用人からも決して下世話な話が愛娘の耳に入らない様、それは神経質に育てたのだ。

だが、社交界にデビューしてから参加した数少ない舞踏会の中で、何度か余興として招かれた吟遊詩人の恋物語は聞いた事があった。それが初めて恋という概念に触れた経験で、若い娘らしく夢中になった。勿論娘を溺愛する父、公爵が許すわけは無いので吟遊詩人を家に招く事は出来なかったが、社交界で知り合った他家の令嬢との交流で密かに恋愛小説を手に入れ、恋に恋するお年頃を謳歌していたのである。

それは王との政略結婚を強く望む父へのささやかな反抗と、プレッシャーから逃れる為の現実逃避であったかもしれない。名家、レイゼン公爵家の令嬢として一分の隙もなく育てられたフィリシティアにとって、恋愛とは別世界に存在する手の届かない憧れと変わらないものだった。

対するハンナも年齢的には結婚適齢期だが、母の病気のこともあって慣れない侍女仕事で忙殺されている為、元々奥手なこともあって色っぽい話など皆無である。だからこそ、公爵に目を付けられたのだが。

「あの方の微笑みを見た時、心臓に矢が刺さった様だったわ。きっと恋の神の矢が刺さったのね……」

白い頬を赤らめ、うっとりと目を細める様は、同性のハンナから見ても可憐で美しかった。

「あの方というのは……国王陛下のことですか？」

あの方が怖いと泣いていたのは、つい昨日の晩のことである。余りにも突然の変化にハンナは戸惑いを隠せない。

「他に誰がいると言うの？　あぁ、ハンナ！　聞いて頂戴。あの方は、神に誓っておっしゃられたの。妻になる者は生涯を通して唯一人となると、側室も妾妃も生涯持たないと……」

「まぁ……」

「私、今まで陛下を誤解していましたわ。陛下は真に愛情深き方なのよ。流石は慈母の位を授かった程の方を母に持つお方……」

すっかり王に夢中のフィリシティアに、ハンナはどう反応して良いのか途方に暮れてしまう。今まで伝え聞いた王は、血の通わぬ様な冷血人間だという話だった。実際に王にお会いした事もある姫君ですら昨日の晩、怖いと泣いていたのだから、ハンナもそうなのだと信じ込んでいた。だが、主人が幸せなのは良い事だと気持ちを切

り替えてハンナは微笑んだ。

「それはようございました。国で一番美しくていらっしゃる姫君に想われて、国王陛下もお幸せでございます」

そのハンナの言葉を聞いて、フィリシティアは急に顔を曇らせた。先程までの上機嫌とは打って変わって沈んだ表情になる主人に、ハンナは慌てる。

「申し訳ございません、何か気に触る事でも申し上げましたでしょうか？」

「いいえ、違うわ。ただ……陛下の問いに対する答えを見付けなければならないの。陛下の妻になるには、美しさなど必要ないのよ。私にはそれしかないのに……」

「はぁ……、国王陛下は何と問われたのですか？」

「それは……秘密よ」

箱入り娘ではあっても、フィリシティアは愚かでは無い。少々強引なお茶会への誘いも、突然の王の来訪も、全ては計算された事。侍女の同伴を許さなかったということは、つまり正妃候補達にしか聞かせたくない言葉であり、自分で答えを探さなければならないということだ。そしてその手助けを出来るのも、王が指定した慈母アレシアのみということだ。

そう理解したフィリシティアは、憂いを帯びて物思わしげに俯いた。さらりと揺れる銀糸の髪が色付く頬に掛かり、いつもとは違う色香が漂う様なその表情に、ハンナは思わず赤面する。まるで少女が大人へと脱皮するような、危うい美しさに同性でありながら動悸

を感じてしまい、ハンナは火照る頬をぺちぺちと叩いた。

「どうしたの？」

「ひ、姫様が、急に大人っぽくなられたので、ハンナは驚いてしまいました」

素直に白状するハンナに、フィリシティアはきょとんとしてから柔らかく微笑んだ。

「そう？　だとしたら嬉しいわ。あの方の隣りに相応しい大人の女性になりたい……」

初恋を知ったばかりの姫君は、それでもまだ恋に恋をしている領域にいる。それゆえに、王が告げた言葉の重大さを、本当の意味ではまだ分かっていなかった。

ご令嬢の企み

「セリーヌお嬢様、お帰りなさいませっ！！」

やっと帰って来たセリーヌに、メイミは飛びつかんばかりに勢い良く出迎えた。

普通なら驚くところだが、セリーヌもまたちょっとした興奮状態だった為に完全にメイミの様子は無視してぴっちりしっかり扉を閉じると、ベッドに飛び込んで大笑いを始めた。

声を殺す為に枕に顔を埋めてバンバンとベットを叩きながら爆笑しているセリーヌに、流石のメイミも目を丸くして立ちすくんだ。

ひとしきり笑うと、目に涙を溜めながらセリーヌは肩で息をしながら起き上がった。

「あ～、全く傑作だったわ」

「一体何があったんですか？」

「それが本当に予想外の連続で、予想外に二ヶ月楽しめそうなのよ。とりあえず、お水頂戴？」

「あ、はい！」

メイミは弾かれた様にセリーヌに水を用意して差し出した。その水を公爵令嬢にはあるまじき勢いで一気に飲み干すと、セリーヌは怒濤の勢いで話し始めた

「まず国王陛下が予想外だったの。ちまたでは凍れる炎の王と言われ、確かに鉄面皮みたいに無表情な方だと思っていたのだけれど、

実際はかなり熱いお方みたいなのよ。侍女まで遠ざけて事実上人払いをした状況で、何て言ったと思う？」

「はぁ……」

「それが……ぷっ、大真面目な顔で、くふふっ、『我は傀儡の王である』って……っ！　あ～、もう駄目！」

再び笑い出したセリーヌに、メイミはすかさず二杯目の水を用意する。これもまた一気に飲み干して涙にを滲ませた目元を無造作に指で拭う。

もはや化粧も乱れ、綺麗に整えた髪型も乱れてリボンが外れかけていという、身内以外には見せられない様相だ。

「とにかくね、陛下は傀儡の王を脱却したいらしいのよ。その片棒を担ぐ王妃様がご希望なの。それぞれ背後に巨大派閥を背負っている正妃候補達相手に、随分と思い切った事をなさるわ。皆、陛下には傀儡でいてもらった方が色々と都合が良いから、確かに人払いもする筈よね」

「はぁ。私には良く分かりませんけれど、お嬢様が楽しかったなら良かったですわ」

正直、メイミは政治的なことは全く分からないので何がそんなに面白いのか分からなかった。

「でももっと愉快だったのはね、その後よ。実質的に、外見は正妃候補選びに全く関係無いっておっしゃったことになるから、陛下が去った後のチェルネイア姫の顔ったら……！」

「ゼットワース侯爵の姫君ですか？　あの美女と名高い……」

「そうよ。きっとご自分の美貌には絶対の自信がおありなのね。だから慈母様の前だというのに、恐ろしい顔をして怒りを露になさっていたわ。美女も台無し……」

また笑い出すセリーヌに、メイミは少し疑問を感じる。こんなに楽しそうなセリーヌは、最近は全く見なくなっていた。これは、もしかして、もしかするのかしらと、メイミの悪い癖がむくむくと頭をもたげ始めた。

「あのぉ……それでセリーヌ様、まさかとは思いますけれど、正妃になりたいとか……？」

「まさか！　正妃になんかなったら魔女の森に帰れないでしょう？　でも、陛下は面白い方だからお友達になれたらとは思うわ。多分、陛下は私が正妃になりたくないと思っている事をご存知でしょうし」

「そうなんですか？」

即答で否定するセリーヌに、メイミはがっかりした。

「ええ。わざわざ私達正妃候補が心底望んでこの場にいるかどうか分からないとおっしゃったくらいだもの」

「変わった方ですわね」

メイミもそれなりに身分の高い殿方と知り合う機会がある公爵家の侍女である。たとえ遊びだとしても、身分の下の女なら高貴な自分に望まれて嬉しくない筈は無い、と思い込んでいる馬鹿が多過ぎ

て、それが普通という認識になっている。

「そうよね。普通は正妃候補なんてなりたいと思ってなれるものではないわ。勿論私はそんな気はさらさら無いんだけれど。仮にも正妃候補として王宮入りしておきながら正妃になりたくないと思っている存在を許容するなんて、確かに変わっていらっしゃるわ。私も名家の令嬢としては変わっている方だという自覚はあるの。だからかしらね、陛下の事、気に入ってしまったわ」

「えぇ！？　気に入ったってセリーヌ様！　それは恋なんじゃないんですか！？」

俄然目が輝き出すメイミに、セリーヌは顔をしかめて軽く扇子でメイミの額を叩いた。

「もう、メイミったら恋愛小説の読み過ぎよ。嫌々正妃候補として王宮入りしたけれど、その王様相手に恋に落ちました、なんて馬鹿な展開を想像してるんじゃないでしょうね？」

「え！？　違うんですかぁ？」

叩かれた額をおさえながら納得いかない顔で食い下がるメイミに、セリーヌも呆れた顔でやれやれと溜め息を吐いた。

「違うわ。仲間意識が芽生えただけよ」

「仲間意識……実はそれが恋心だったとか……」

「メイミ！」

性懲りも無く続けるメイミをセリーヌはピシャリと名を呼んで黙らせる。こういう所は名家のご令嬢然として、流石に上に立つものの威厳がある。内容は内容なのだが。

メイミが大人しくなった所でセリーヌは扇子を開き、それで口元を隠して隣りに呼び寄せた。内緒話の典型的なスタイルである。メイミは主人の意を受けていそいそと身を寄せた。

「それでね、正妃なんて地位、誰でもやりたい人がやればいいと思っていたのだけれど、ちょっと考えが変わったわ。どうせならフィリシティア姫になって欲しいの。別にね、私は容姿の事も母の出自の事も、気にしていないわ。でも、馬鹿にされるのは気分が悪いの」

「チェルネイア姫ですか？」

「そうよ。だからフィリシティア姫を応援してチェルネイア姫を妨害する事にしたの。勿論メイミ、あなたも協力してくれるわよね？」

「セリーヌ様を馬鹿にした人を蹴落とす協力なら惜しみませんわ」

「流石は私の侍女！　だってチェルネイア姫が正妃になったら、私はあの人に最高礼をしなければならないのよ。考えただけでも腹立たしいわ」

「私も想像しただけで腹が立ちます！」

「頑張りましょうね、メイミ！」

「はい！」

最早扇子を放り出して固く手を握り合う主従は、新たな目標に燃

えていた。

そしてメイミは、温室の事を伝えるのをコロッと忘れていた。

美女の怒り

自分に振り分けられた部屋に案内されたチェルネイアは、怒りの持って行き場を探して見付からず、胸のルビーのブローチを引きちぎる様に外して高価なそれを床に放り投げた。繊細な生地が無惨に破れ、折角の美しいドレスの胸元に大きな穴が開いた。
だがそんなことには頓着せず、血が出るのも構わずにルビーの耳飾りも乱暴に外して床に放った。

そんな正気とは思えないチェルネイアの行動を、平然とした顔で眺める侍女カトリーヌは淡々とルビーの宝飾品を拾って仕舞う。
しかしカトリーヌの存在も、今のチェルネイアには気に掛ける程の価値も無い。そもそも心情的な繋がりの無い侍女など、チェルネイアにとっては空気同然だった。

一体どういう事なの！
あんな微笑み、あの方には似合わないわ！
どうして……！

チェルネイアは琥珀の瞳に赤が燃えているのではないかと思う程、憎しみを露にしてギリギリと奥歯を噛み締めた。

チェルネイアにとって、王は同志でなければならない存在だ。
その紅の瞳には憎悪こそが似合うのであって、あの様な優しげな表情などチェルネイアには全くの予想以外、そして怒りの原因だった。

もちろん、セリーヌにしてやられた様な格好になったことも怒りを感じるが、そんなことは些細なことだ。
それよりも王の態度だ。
チェルネイアは憎悪を支えに生きている。だからこそ他の候補達よりも敏感に、王の言葉の真意を直感的に理解していた。
王が全く憎悪など抱いていない事も、そして傀儡の王という立場から脱却しようとしているわけでは無い事も。
その上でどうしたいと考えているかなどは、まだ全てを話されていないのだから分かる筈もなく、チェルネイアにとってはそんな事はどうでも良いことだった。

信じられないわ！
何故恨まないの？
母親と引き離されて、お飾りの王様にさせられて、悔しくないの？
影で張り子の獅子と馬鹿にされて、直轄領まで実質上殆ど巻き上げられて悔しくないの？

そこではたとチェルネイアは気付いた。

あぁ……！
そうね、母親が生きていらっしゃるからね。
私も、だから身動きが取れなかったんだったわ。
良いわ、それなら私がその障害を取り除いて差し上げなくては。

その思いつきにチェルネイアの顔には喜びの笑みが広がる。

そうよ、そうだわ！
何故気が付かなかったのかしら？
母親の命を奪われたら、あの方の瞳も憎悪に染まる筈よ。
そして私はあの方に憎悪の誓いを捧げるの。
憎悪に染まった陛下は私の手を取って下さるわ！

チェルネイアの怒りが収まったのを見て取り、カトリーヌは既に用意していた着替えのドレスを手に恭しく頭を下げた。

「姫様、お着替えを」

「深紅に胸元に薔薇をあしらったドレスを出して頂戴」

チェルネイアはカトリーヌが差し出したクリーム色のドレスを一瞥してそう言い放った。
チェルネイアの指定したドレスは舞踏会様に誂えたものであった。夜会用のドレスをまだ昼間の時間帯に着ることはマナーとしてもかなり外れたものだったが、カトリーヌは黙って従った。

禁欲的なドレスを脱ぎ捨て、毒々しい程に女を感じさせる胸元が大きく開いたドレスを纏う。
鏡台の前に座ると、万事心得た様なカトリーヌは当然の様にチェルネイアの髪を美しく結い上げ始めた。舞踏会当日の為に用意していた数々の宝飾品も出して来て並べ、一つ一つチェルネイアを飾り立てて行く。ドレスに合わせて化粧も変え、カトリーヌの手によって刻一刻と変化してゆく自分の姿を、鏡の中にじっとチェルネイアを見つめた。
そして出来上がった見事な姿の自分に、チェルネイアは満足げに

艶笑した。

あんな利口ぶった田舎者の野暮ったい女にも、苦労知らずで蝶よ花よと育てられた世間知らずの人形女にも、私が負ける筈が無い。

最後に笑うのは、この私。

「伯父様に手紙を書くわ。用意を」

「はい」

用意された便箋に伯父への伝言をしたため、鑞で封をするとカトリーヌに渡す。

「カトリーヌ、伯父様にこれを渡して頂戴。くれぐれも誰にも知られない様に」

「心得ております」

今まで無表情だったカトリーヌは、不敵な笑みを浮かべてその手紙を受け取った。

つかの間の平和1

王は正妃選びについては当初の予想を裏切る積極性を見せていた。それは既に周知のことだったが、更に予想を超えた事態に周りは仰天した。傀儡の王として甘んじながらも会議には必ず出席し、全ての話を聞くという姿勢を崩さなかった真面目な王が、限定された期間とはいえ、それを放棄するというのだ。

正妃選びを理由に。

元々傀儡の王であるエルドシールに関しては会議にいてもいなくても同じと言えないこともないのだが、そこは示しがつかないというか、何事にも体裁を重んじる大臣達からすればとんでもない事態である。

「我は今まで王という立場を重視する余り、正妃候補となったどの娘とも親しく話した事が無い。そのような状況で、どの娘を正妃に選ぶかなどどうして決められようか？」

「しかし、陛下。陛下は正妃選びに関しては慈母様に一任するとおっしゃられたではありませんか？」

「その慈母様に言われたのだ、お互いを知ることこそが肝要だと。よって我はこれから暫くの間、会議の時間を正妃候補達と過ごす事にする。無論、王としての責務は果たす。執務は今まで通り行うから、会議の内容はその間にでも報告を受ければ問題無かろう」

大臣達は顔を見合わせる。最近の王は今までと別人の様に不意打ちが多過ぎて、周りは振り回されているのだ。

種を明かせば対策を練られない様にわざと王は突然の提案をして

いるのだが。
もし前もってこの提案をしていれば、正妃候補達と過ごす時間について色々と煩い注文を付けられるだろうし、正妃候補達に色々と吹き込む者も多いだろう。
具体的に言えば、自分の推す正妃候補と親密になる為の二人っきりの時間を持たせようと画策したり、その為に他の正妃候補を妨害する様な企みを計画したり、そういう事である。

「陛下、恐れながら申し上げます。陛下の御行動は様々な場所に影響を及ぼします。その様に突然申されましても、すぐには対応出来ませぬ」

髪の薄くなった頭を下げて諌める典礼大臣に、エルドシールはふむ、と一応頷いた。

「確かにそなたの言う事も尤もだが、王である我の結婚はこの国にとって最も重要な事柄の一つだとそなたは申した。それに相違ないか？」

「それは、相違ございません」

「では、最重要に位置する正妃選びを優先して考えるのは妥当であろう。対応出来ぬと申すが、ならば急な病で我が会議に出られぬことになったと思えば良い。候補達と面会する場は春宮殿に限定すれば、警護に関してもそれほど問題は無いだろう。どうしてもという重要な会議には出席する。執務は今まで通りなのだから政務が滞ることも無いと思うが、何か問題があるか？」

普段それほど喋らない王に理路整然と反論されると、屁理屈の達人である大臣達も動揺の為か上手い言葉が出て来ない。

「……ございません」

結局の所、不都合な点と言えば体裁においてだけであり、それも正妃選びこそ国の一大事とすれば大義名分になるのだから、政務に支障が無いなら反対する強い理由など見当たらないのだ。

「宰相は？」

「仕方ありませんな。では、明日からで宜しいでしょうか？」

「そのように取りはからえ」

宰相はあっさりと認めた。自分の愛娘が関わる事でもあるし、最初から強硬に反対するつもりは無かった様だった。宰相は触れ合う時間が多ければ多い程、王は我が娘に夢中になると信じて疑わなかった。

御前会議を終え、執務室に向かうエルドシールに声をかける者が居た。

ガルニシア公爵だ。

「陛下、少し宜しいですか？」

「何だ？」

今までエルドシールに積極的に近付こうとはしなかった、その男が話しかけて来た事に少し驚く。付き従う侍従と護衛の四人を少し遠ざけてやると、躊躇いがちに話し始めた。

「娘、セリーヌの事ですが……陛下はどうお思いですか？」

「……どう、とは？」

その質問は、エルドシールには予想外なものだった。

もしや、実はガルニシア公爵は本心では娘を正妃にしたいと望んでいたのだろうかと訝しく思った。

だが、それは見当違いな心配だった。

「いえ、我が娘ながらセリーヌは到底正妃には向きませぬ。ですからもし、陛下が少しでもその可能性をお考えなら……」

人の良い老爺といった風貌の老紳士を、まじまじとエルドシールは見つめる。まさか選ぶなと直接言って来るとは。一歩間違えば不敬罪に問われる様な内容だ。

「そなたが乗り気でないのは知っていたが、我に直接言うとはな」

「申し訳ありません」

「良い。しかしそなたは一つ誤解をしている。例え我がそなたの娘を正妃に望んでもそなたの娘が否と言えば、全ては公になることは無い。だだし、我が望んでそなたの娘が是と応えれば、そなたが反対しても貫い受ける」

「なんと……。では、正妃候補として王宮入りしている者達に拒否する権利をお与えなのですか？」

驚く老紳士にエルドシールは表情を改め、真摯に相手に頷いた。

嫁に出すことになるかも知れない娘を心配するのは、父親ならば当然の感情だ。

「そういう事になる。ただ、その事については公爵の胸の中に留めておいてくれ」

「……陛下は、どのようなお方なのか……分からなくなって参りましたな」

「そうか？」

「はい。ここのところの陛下は別人の様です」

感慨深げにヒゲを撫でながら言う老紳士に少しだけエルドシールは考え込み、一瞬だけ身を寄せてある事を耳打ちしてから侍従と護衛を呼び戻し、執務室に戻った。

つかの間の平和2

獅子王に似ていると噂されていらっしゃるけれど、本当に赤い髪がたてがみの様だわ。
何て美しいのかしら。
金に炎の色が映っている様だわ。
そう、金の燭台が踊る炎の色に煌めいているのに似ている。
それにしてもアレシア様に似ていらっしゃるのに、柔和と言うよりも凛々しくていらっしゃるのはその眼差しのせいでかしら。
真っ直ぐに心の底まで見通してしまわれるような、強い眼差しに見つめられると、呼吸を忘れてしまうわ……。

「フィリシティア様？」

あぁ、どうしよう、心臓が壊れてしまいそう……。

「フィリシティア」

「え？　あ、はい、慈母様。何でしょう？」

実は、気が付かない内に視線に気付いた王と無言で見つめ合う様な状態であったのだが、夢中で見蕩れていたフィリシティアはそれにすら気付かず、アレシアの呼びかけに突然現実に引き戻されて慌ててそちらを向く。
そんなフィリシティアにアレシアは苦笑して王に何やら目配せをする。
困惑するフィリシティアに王は徐に口を開いた。

「私の顔に何か付いているか？」

「い、いいえ……」

そこで初めて自分が王に見蕩れ、周りの言葉が入っていなかったのだと気付いて消え入りたい様な羞恥に俯いた。公爵令嬢としては、到底相応しからぬ失敗だ。

「陛下、それは野暮と言うものですわ。フィリシティア様は陛下に見蕩れいらっしゃっただけです」

そんなフィリシティアの様子に楽しそうにセリーヌが口を挟む。図星を突かれてフィリシティアは増々羞恥に身を縮ませた。

実際、透ける様に白い肌をほんのり染めて夢見る様な青い瞳で王を見つめる可憐な美少女の姿は、いつまでも眺めていたい程に美しかった。

セリーヌはいち早くそんなフィリシティアの様子に気付いて観察していたのだが、王が視線に気付いて見つめ合うような事態になると、不味いと判断して声を掛けたのだ。何が不味いかといえば、チェルネイア姫の機嫌が、である。視線に気付くまでは、王はチェルネイア姫と剣の話題でそこそこ盛り上がっていたからだ。

セリーヌの呼びかけに気付かないフィリシティアに、今度はアレシアが声を掛けたという次第だ。

アレシアは、隠す事も知らないまま幼い恋をしているフィリシティアに慈しみを込めた眼差しを注いでいた。

「そうか。ではフィリシティア姫、そなたは私の何処が気に入ったのか？」

王は相変わらずの無表情さで淡々と問うが、声は穏やかで冷たく

は無い。
だが、フィリシティアは王の問い掛けに混乱していた。まさかこんな問いをされると思わなかったので、つい本音がぽろりと転がり出た。

「……陛下の、御髪が、炎を……」

そこまで言って、本来王の髪を褒めるなら、偉大な獅子王を引き合いに出すのが一般的であり、最上である事に気付く。しかし、炎まで言ってしまったのと、混乱していた為に上手く誤魔化す事が出来ず、結局思った通りに述べた。

「御髪が、炎を映して踊る様に煌めく金の燭台の様だと……」

またしても失敗してしまった。そう思うと語尾が消え入る様に小さくなり、華奢な身体を微かに震わせた。

「その様に褒められたのは、初めてだ。そなたの髪も、月の光を受けた湖面の様に美しいと思う」

しかし、王は意外にもフィリシティアの返答を喜び、思わぬ賛辞を貰う事になった。
驚いてフィリシティアが顔を上げると、鋭く凛々しい紅の瞳が優しく笑っている様に思えて、頬が熱くなった。褒められた事も嬉しいが、王に喜んで貰えた事が嬉しくてフィリシティアは胸が一杯になった。

「まぁ、陛下は思いの外詩人でいらっしゃるのですね。私の髪はどうお思いになられまして？」

そんな二人の間に割り込むのは、先程まで陛下との会話を独り占めしていたチェルネイアだ。甘ったるい視線で自慢の美しい栗色の巻き毛を軽く揺らし、賛辞を強請る。男からの賛辞を聞き慣れている女ならではの傲慢さが滲む笑みを浮かべ、賞賛される事を疑いもしない態度にセリーヌは密かに感心した。

ただし、折角王とフィリシティア姫がいい雰囲気だったのを邪魔した事に関しては全く感心出来ない。

「チェルネイア姫の髪は……上質の鹿の毛皮の様だな。思わず触れてみたくなる」

「まぁ……どうぞお触れになって？」

女性の髪を褒める言葉としては鹿の毛皮は首を傾げてしまうが、その後の言葉がチェルネイアの矜持を満足させたようだ。王の母の前であるにもかかわらず、図々しく身体を傾ける様にして王に身を寄せた。

「あら、狡いですわ、陛下。平等に私の髪も褒めて下さいませ」

王が困惑しながらも触った方が良いのだろうか、というような躊躇いを見せて指を動かしかけた、その絶妙なタイミングで今度はセリーヌが邪魔をした。

王は僅かにほっとした様な様子でセリーヌの方を向き、チェルネイアは肩すかしを食って悔しげに顔を強張らせた。

「そうだな……。そなたの髪は豊かな大地の色だ。懐かしい思いを抱かせる」

「あぁ、陛下。嬉しいお言葉を有り難う存じます」

これもまた、女性の褒め言葉としてはいかがなものかという内容だったが、魔女の森をこよなく愛するセリーヌにとっては本当に嬉しい言葉だった。
それが恋心に結びつかないのがセリーヌのセリーヌたるゆえんなのだが、確実に王に対する好感度は上がった。

そんなこんなで、王が設定した王妃候補達との交流会第一回目は終わった。
明日からは順番に一人ずつ庭園で交流することになるのだが、そうなると順番で揉めた。主に候補達を取り巻く人間の思惑が原因だ。しかし、その順番もアレシアの鶴の一声で年齢順という事になった。
つまりトップバッターはセリーヌだ。
ここは一つ、フィリシティアの為に一肌脱いで彼女を王に売り込み、更にチェルネイアを邪魔する仕掛けを考えなければ、と、セリーヌはメイミとの密談に花を咲かせた。

「というわけで、結構陛下とフィリシティア姫はいい雰囲気だったと思うの。ただ、本当にお姫様育ち過ぎて大人しいのよね。割とぼんやりっぽい陛下は下手したらチェルネイア姫に押し倒されて押し切られかねないし、私も援護するけれど、もう少しフィリシティア姫にも積極的になって頂かないと話が進展しないわ。今日だって陛下と言葉を交わせたのは、その髪の毛の話だけだし」
「そうですね。聞く限りではチェルネイア姫は本当に積極的でいらっしゃる様ですし」
「そうよ。いつ野獣になって陛下に襲いかかってもおかしく無いわ」

「お嬢様、女性の場合は女豹って言うんです。野獣は男性です」
真面目な顔で間違いを指摘するメイミにきょとりとセリーヌは目を瞬かせる。
「あら、そうなの？　まぁ、女豹でも野獣でも危険な事には変りはないでしょ。今まで陛下は女性を傍に寄せなかったから、女性の扱いに慣れていらっしゃるとも思えないし、うっかりチェルネイア姫の流れに引き込まれたら危ない気がするのよ」
「本当に。陛下も若い殿方には変りはありませんものね」
「やはりアレシア様を引き合いに出して、陛下にそれとなくご忠告申し上げるのが良いかしら？」
「私もお嬢様に賛成です。陛下ってアレですわよね、母親依存症……」
「えぇ、私もそう思っていたの」
ふふ、と意味深に笑みを交わす主従の中では、エルドシールはマザコンという図式が出来上がっていた。
「後はフィリシティア姫の方ですわね。お嬢様も気に入っていらっしゃるなら普通にお友達になられて、色々助言さし上げたら如何ですか？」
メイミの提案にセリーヌは頷くものの少しばかり浮かない顔をする。セリーヌの侍女ではあるが、まだ若く政治の事も全く知らない

メイミは、王宮という場所では物事を単純に考え過ぎるのだ。
そういう素直な所がセリーヌは気に入っているのだが、フィリシティア姫と友人になるにはメイミが予想しない高い壁がそびえ立っているのだ。それぞれの実家に居る時よりはだいぶ低くなっているとはいえ、彼女の父であるレイゼン公爵が良い顔をするわけが無いし、その意を受けた侍女も良い顔をしないのは当然だ。見知らぬ場所に一人放り込まれたあの頼りなげな姫君が、実家から連れて来たお気に入りの侍女の言葉を無視出来るとは思えない。

「それは私も考えたわ。でも、素直に受け入れて下さるかしら。勿論フィリシティア姫じゃなくて周りの人間がよ？　メイミ、あなたフィリシティア姫付きの侍女とは……？」

「勿論挨拶と一通りの自己紹介などはしましたけれど、個人的にはまだ全然……。でも、頑張って探りを入れてみます！」

申し訳無さそうに言ってから決意を新たに息巻くメイミににこりとセリーヌは微笑む。
侍女は侍女同士、だ。

「ええ、そっちはあなたに任せるわ。くれぐれもチェルネイア姫の侍女には知られない様、慎重にね。私が親しくしたいと思っていることが知れれば、色々と相手も勘ぐるでしょうし。一番避けなければならないのは、フィリシティア姫にチェルネイア姫の悪意が向くことよ」

あの箱入り姫では、人食い花の様なチェルネイア姫に悪意を向けられたらあっという間に潰れてしまいかねない。そう思って注意すると、メイミがうっとりした顔で溜め息を吐いた。

「お嬢様、素敵ですわ。可憐な姫君を影から守る騎士の様です……」

「……メイミ、暫く恋愛小説は禁止よ」

「えぇ！？」

「今は、小説よりも大事な現実でしょ？」

「そ、そうですね。孤独な凍れる炎の王と可憐な白薔薇の姫君の小説よりもロマンチックな恋愛を成就させるべく、不肖メイミ、頑張ります！」

「……」

とてもやる気になってくれているのは嬉しいが、その言動には不安を感じずにはいられない。

これさえ無ければ、と思うセリーヌだった。

つかの間の平和3

フィリシティア姫が王に恋心を抱いた理由は、結局の所王が伴侶となる相手に対して変わらぬ愛と誠実さを誓ったからだ。
自分の容姿を基にした父の愛の不確かさ、壊れてしまった母と父の愛情、母と姉との不和という状況下、彼女は常に愛情不足だった。愛情に対する不信感もあったが、それ以上に愛情を信じたい気持ちも強く、そして恋という魔法の言葉を知ったばかりだった。

安定した愛情を妻となればずっと与えられるのだと知って、心惹かれないわけがない。そういう意味ではまやかしの恋とも言える。しかし、全ての恋は勘違いから始まると言う言葉があるように、彼女の恋が全くの偽物という事も出来ない。
たとえ自分の為に恋という魔法を無意識に掛けたのだとしても、それは彼女が同年代の異性に向かって心を開いた初めての経験だった。

「姫様、今日のお茶会はどうでしたか？」

夢見心地の様子のフィリシティアに、ハンナは着替えを手伝いながら問い掛けた。
社交の場であるお茶会に出席する為のドレスと、部屋で過ごす為のドレスはまた違う。

「陛下と少しお話が出来たわ。私の髪をお褒め下さったの」

「それはようございました。姫様の髪はどんな繊細な銀細工よりもお美しいですから」

「違うわ、月の光を受けた湖面の様に美しいのよ」

「まぁ……吟遊詩人の歌う女神のバラッドの様ですね」

「そうでしょう？」

言葉は違えど、同じ様な褒め言葉を捧げられた事は過去に幾度もあった。その褒め言葉自体も女性への賛辞としてはそこそこで、吟遊詩人ならもっと美辞麗句を並べて褒めたたえるだろう。それでも、重要なのは王の口から出たということだ。

そして、一番嬉しかった事は王が自分の賛辞を喜んでくれた事だ。炎を映した金の燭台の様……そう喩えたのは自分が初めてで、それを喜んで下さった。

”初めて”

その言葉に心が躍る。

まるで王の美しい赤金の髪が自分のものの様な気持ちがして、自慢したくて堪らなくなる。しかし、勿論そんなことは無いと分かっているし、その宝物の様な気持ちをいささかも傷付けられたく無かったので、フィリシティアはハンナにさえその気持ちを打ち明けなかった。

「きっと他の姫君方は悔しくお思いでしょうね」

何気ないハンナの言葉にふと、自分以外の候補達の姿を思い出す。

そういえば、陛下はあの方達にも賛辞を贈られていたような……。
何だったかしら？

王しか目に見えていない状態のフィリシティアには、他二人の候補者の存在など意識の外だった。よって、意識の外に締め出された存在に対する嫉妬は存在しようがない。
もともと誰よりも美しさで優れている、王妃に誰より相応しいと洗脳の様に言い聞かせられて来たフィリシティアには、他者と自分を比べて劣等感を感じたり、嫉妬するという思考回路が無いのだ。
それに、父の教育のおかげでチェルネイア姫が王との会話をほぼ独占していたことにも無関心だった。

人前では淑女はもの言わぬ美しい華であれ。

それがレイゼン公爵の娘に対する口癖だ。

また、答え探しについて不安はあるものの、時間もまだあるのでそこまで他の候補者を気にする要因が見付からなかった。それよりも、王が口にされた言葉を忘れてしまった事がフィリシティアにとっては大問題だった。

何だったかしら？　あぁ、思い出せないわ。
なんてこと！
陛下のお言葉を取りこぼすなど、もってのほかだわ！

王に見蕩れて夢中になり失敗してしまった事も思い出して、恥ずかしさと自分に対する憤りで思わず叫びたい衝動に駆られる。
フィリティアは衝動的に目についた扇子を床に放り投げた。

先程までの上機嫌が嘘の様に不機嫌になる主人に、ハンナは驚いて顔を強張らせた。何か気に触る事を言ってしまったのだろうかと、おどおどしながらドレスの背中のボタンを留めて姫君の支度を整える。
続いて髪を結い直しながらそっと姫君の様子を窺うが、苛々した様子の見える表情におろおろするばかりだ。何か声をおかけした方がよいとは思うものの、気の効いた事を言える様な機転も無い。
初めての恋に振り回れて何時にも増して機嫌の上下が激しい姫君を、どうお慰めしたら良いものかと頭を悩ませた。
沈黙が余計にハンナの焦りを掻き立て、姫君の苛々を助長する。
とうとう髪の結い直しも終わってしまい、途方に暮れつつ櫛を置いたその時、ハンナの目に自分が生けた花瓶の花が飛び込んで来た。

そうだわ！

「姫様、気分転換にお庭に散策に出られたら如何ですか？　女官長様から教えて頂いたのですが、後宮の庭園は小さいながらもとても美しいと評判なのだそうです。国王陛下が手ずから植えられた林檎の木もあるそうですし」

「陛下が？」

興味を示す主人に良かったと胸を撫で下ろし、言葉を重ねる。

「はい、なんでも修道院を懐かしまれて植えられたのだとか」
「そう……。午後の予定は？」
「特に何も伺っておりません」
「それなら行ってみようかしら。勝手に散策しても構わないかどうか、確かめて来て頂戴」
「はい」
どうやら機嫌が直ったらしい主人に、ハンナは嬉しそうに頷いた。

後宮の庭園はかなりの広さがあった。警備をしやすくする為に四方を高い煉瓦の壁に囲まれた庭はさながら箱庭の様で、幾つかの区域に分かれ、その区域ごとに趣きの違う庭が配置されている。庭の入り口は一つしか無く、武芸の心得のある王宮侍女が交代で警備をしているので、護衛やお供を連れずに一人でも気ままに散歩出来るようになっていた。
なんとなく一人で庭を見たかったフィリシティアは、ハンナを連れずに一人で庭の門を潜った。
「まぁ……！」
威圧感すら感じた高い煉瓦の壁の向こうには、驚く様な光景が広がっていた。
季節感をまるで無視したありとあらゆる季節の花が咲き乱れてい

たのである。これが噂に聞いた神子の遺産の庭かと、その美しい光景に溜め息を漏らした。

神子の遺産とは、神子の祝福によって付与されたキア神の恵みのことだ。祝福の対象は土地であったり、人であったり、物であったり、付与された恵みも様々で、ある意味人々が簡単に目にする事が出来る神の奇跡の片鱗である。

どんな日照りにも枯れず水の量も変わらない泉、燃料も無いのに永遠に輝き続けるランプ、ひとりでに音楽を響かせるハープ等があり、人に祝福が付与されれば代々特殊な能力を受け継ぐ。ただし、人の場合はその力や存在を利用されないように注意深く隠されることが殆どだ。

当然ながらゼッタセルド王家の人間も遺産を受け継ぐ血脈であるが、その特殊能力については一部を除き秘されたままだ。

そして、この庭は第三代神子ハーナが祝福した土地の上に作られた。

勿論後宮という場所柄、そしてずっと後宮自体が閉鎖されていたということから不確かな噂でしか聞いた事が無かった。

フィリシティア自身、この庭を見るまでそのような噂をすっかり忘れていた。

無秩序に見える程のびのびと育った木々とその足下を飾る名も無き小さな色とりどりの花々に誘われて散策を始めれば、次々と不思議な光景に出会う。

初夏の薔薇の隣りに冬の薔薇とも言われるカメリアが咲いていて、その向こうにはスミレの絨毯が広がり、白い蝶がひらひらと何匹も舞い踊っている。

そこを過ぎると、背の高い木が作る木陰と小さな小川が流れる涼しげな様相に変化した。それは昔、まだ両親が仲が良かった頃に家

族揃って滞在した避暑地の森に似ていた。さらさらと微かな音を立てて流れる水のせせらぎに、不思議と心惹かれて暫くぼんやりと眺めていたが、その平和は唐突に破られた。

「あら、フィリシティア様。偶然ですわね」

はっとして振り返ると、木立の向こうに立っていたのはチェルネイアだった。

「ごきげんよう、チェルネイア様」

午前中のお茶会に比べると、幾分すっきりした髪型に変え、陽射しを避ける為に隙無く肌を覆うドレスに変わっている。

胸元が大胆に開いたドレスよりもよっぽど上品で美しいのに、何故陛下の前ではその様に装わないのかしら？

本人が聞いたら何も知らないネンネと馬鹿にしそうな事を本気で不思議に思いながら、折角の散歩を邪魔されて残念に感じた。

出来れば挨拶だけでこのまま別れてしまいたい。

そんな期待とは裏腹に、相手は侍女を従えて真っ直ぐにフィリシティアに向かって歩いて来る。

「あちらに白薔薇が咲いておりましてよ。お好きでしょう？」

「え？　えぇ、好きですわ……」

「ご案内致しますわ。こちらよ」

にこにこと満面の笑みで話しかけられては無下にする事も出来ず、戸惑いながらも頷くと、強引に腕を取られて引き摺られるようにして歩き出す。
なんて不躾な方かしらと、内心不愉快に思いながらも年長者である相手には大人しく従うしかない。

入り口付近の花畑に戻り、小川とは反対側に進むと薄紅色の蔓薔薇のアーチがあった。それをくぐると、打って変わって整然と幾何学模様にも似た美しい植え込みと咲き乱れる色とりどりの薔薇の庭に出た。
かつてゼッタセルドの薔薇と言われた母の為に父が作った薔薇園は、大振りの深紅の薔薇と純白の薔薇だけで構成されていて、統一感があり、すっきりと美しい。国一番だと父の自慢の庭でフィリシティアもそう思っていたが、この庭の方が素敵に感じた。
こちらは大振りの薔薇も野薔薇の様に小振りの薔薇も、色も様々に一見無秩序にみえるが不思議と調和がとれ、整然とした美しさまで感じる。薔薇を囲む美しく刈り込まれた植え込みが花器の様にも見えて、一つの完成された絵の様に見えるからかもしれない。
強引に連れて来られたものの元々薔薇は好きなので、いつの間にか夢中になって数々の薔薇の美しさに見蕩れた。

と、チェルネイアが足を止め、フィリシティアも足を止めた。
その一角には他に比べて花弁の数が明らかに多い、見事な大輪の白薔薇が咲いていた。風に吹かれて重たげに揺れるその薔薇は、フィリシティアが知る中でも一、二を争う大きさだった。
「ね？　素晴らしいでしょう？」

「はい」

「お気に召しまして？　良かったわ。カトリーヌ、一輪フィリシティア様に切って差し上げて」

突然のチェルネイアの言葉にフィリシティアは驚いて、つい不躾に相手をまじまじと見てしまう。

この方は、どうしてまるでこの庭の主人の様に振る舞われるのかしら？

ここは陛下のお庭ですのに……。

「チェルネイア様、勝手に花を手折っては咎められませんか？」

さすがにこんな無作法に巻き込まれては困ると、そう言ってみたところで相手は全く取り合わず、自信に満ちた笑みを浮かべてこう言い放った。

「ここは後宮の庭ですわよ。候補とはいえ、ここは妃達の為の庭。何を咎められることがありますかしら？」

フィリシティアにしてみれば、未だ候補なのに既に妃になったかの様な理論を振りかざすチェルネイアに絶句してしまった。

結局薔薇を切るのを止められず、一輪の白薔薇が侍女によって手折られ、まずチェルネイアに渡された。

チェルネイアは薔薇の香りを嗅ぐ仕草をしてから、すっと手をフィリシティアに向かって伸ばした。何事かと身を引きかけて反射的に目を閉じたフィリシティアは、髪に何かが触れる気配を感じて何

をされたのか悟る。

「髪に飾って差し上げただけですわ」

「……有り難う存じます」

身構えた己を少しばかり馬鹿にした様な声音でからかわれ、フィリシティアは再び頭をもたげ始めた不快感を誤魔化しながら、微笑んで礼を言う。

そんなフィリシティアを眺めて、チェルネイアは満足げに微笑んだ。

「ほら、素晴らしくお似合いだわ。カトリーヌもそう思うでしょう？」

「はい」

「本当にお美しいわ。最高級の繊細なお人形の様。人形姫と称されるだけのことはありますわね。私などと違って殆どおしゃべりにもならない静かなところも……。えぇ、私には真似出来ませんわ」

煩い程に大袈裟に賞賛するチェルネイアの言葉は、普段なら当然と思いながらも満足を感じつつ謙遜して礼を言うところだ。

しかし、今回ばかりは沸き上がる不快感に息が詰まる気がした。

何故だか分からないが、この方は私を馬鹿にしている。

褒める振りをして、貶している。

そう感じると、プライドの高いフィリシティアは貝の様に口を閉

ざした。黙り込んで表情にも反応を示さなくなったフィリシティアに、チェルネイアはつまらなそうに拡げた扇子で素知らぬ顔をして風を扇ぎ、少し疲れたのでお先に失礼、と言って去って行った。

折角の良い気分が台無しだわ。

今日はこれで二度目……。

理由も分からず馬鹿にされた不快感と、他人から見下されるという今まで殆ど体験した事のない屈辱と衝撃に思わず涙ぐんでしまう。

一体、私の何を馬鹿に出来ると言うの？

人前では万事控え目に、もの言わぬ美しい花が淑女の理想でしょう？

人形の様に美しいことの何が悪いの？

すっかり気落ちしてふらふらと歩いていると、今度はまた違う趣の場所に出た。

それは今まで似たものすら見た事の無い、庭だった。言うなればそこは果樹園。普通食用の実の成る木は、農作物であるから庭には植えない。農地になど箱入りの貴族の姫君が訪れたことがあるわけも無く、フィリシティアは生まれて初めて木に成っている果物を見たのだ。

やはりあらゆる季節の果物がたわわに実り、同時に花も咲いているというちょっと異常な様子なのだが、初めて目にしたフィリシティアにはその異常を察知出来るわけも無く、林檎の木を見付けると足早に駆け寄った。

優しい、甘い香りの漂う小さな白い花と赤い実を食い入るように見上げる。

こんな小さな花なのに、こんな大きな実を付けるのね。
この木を、陛下が植えられたのだわ。

そう思うと落ち込んでいた気持ちが慰められた。普段なら考えもつかない事だが、気持ちの赴くままに木肌に触れてみる。しっとりとしてヒンヤリと冷たく、それでいて何故か温かく感じる不思議な感覚に囚われた。

ここが神子の遺産の庭だからかしら？
それとも、陛下が植えられた特別な木だからかしら？

先程よりも甘い香りが強くなった気がして胸一杯に吸い込み、今度はそっと木の幹を抱き締めてみた。
きっと父が見たらはしたないと叱られてしまうとちらりと思ったが、頬をおずおずと預けた木肌の心地良さにそんな事は霧散してしまった。

まるで落ち込んだフィリシティアを慰めるように、林檎は優しく香り、そよ風に葉を揺らして囁いた。

つかの間の平和４

今日のセリーヌの装いは、気合いが入っている。

自宅にいる時は服装に余り頓着せず、下手をすると使用人と間違われる様な格好をしているが、着飾る必要がある時はとことんこだわる。意外にも桃色が一番好きな色という乙女な側面もあるご令嬢の本日の装いは、正に桃色一色だった。

フリルを幾重にも重ね、リボンも多用したドレスはパニエで大きくスカートを膨らませるデザインだ。薄いシフォン生地を使用しているので、動く度に重ねた生地が風に揺れる桃色の花びらの様に軽やかに揺れる。

二十歳としては可愛らし過ぎるものだったが、愛嬌で誤魔化せるとセリーヌは思う。堂々と着ていれば、不思議とそれなりに見えるのだ。

そもそも年相応の落ち着いた色のドレスを着るとやたらと老けて見えてしまうのだ。チェルネイア姫の様な大胆なドレスを着こなす身体も無い。かといって、フィリシティア姫の様な妖精じみたシンプル系統のドレスは美貌が無ければ貧相なだけになってしまう。

だから、消去法で考えても、この手のドレスは自分に最も似合うと信じていた。メイミが一生懸命巻いてくれた巻き髪には大きな桃色のリボンを飾ってある。茶色の髪に桃色は相性が良い。

別に女として王に自分を売り込む気はさらさら無く、相手に敬遠されようが全くかまわないので自分の着たい物を着て、好きな様に自分を飾る。

結局、色々理由を付けたところで他人目線で実際に似合うかどうかは問題では無いのだ。自分が似合うと信じるものを着れば満足なのである。

そして、こんなに可愛らしい格好をしておきながらセリーヌが選

んだ王とのデート場所は書庫だった。
図書館でもなく、書庫である。
書庫の管理役人が突然の王の来訪と場にそぐわぬ女性の出現に驚き、動揺しながらも一番奥の部屋を開け、席を外してくれた。
古い書物独特のかび臭さを感じさせる空間に、セリーヌは目を輝かせて思わず王より先に一歩踏み出した。そんなセリーヌの後ろから、王はランプを片手に続いて入る。
火気厳禁の書庫で使われているランプは、なんと神子の遺産である永遠に輝き続けるランプだ。国宝級の代物だが壊れる事も無いので、一度火災で貴重な資料が消失した事件があってから使われるようになったらしい。
このランプを入り口横の所定の場所に設置すると、随所に仕掛けられた鏡が光を反射して書庫全体が文字が確認出来るくらいには明るくなる仕組みだ。

「して、セリーヌ嬢、そなたの探している文献とは？」

「ハーナ様が残したという、人々の治療記録ですわ。王家所有の持出し厳禁、公開不可文献のリストにありますでしょう？」

「そうか。そなたが言うならあるのだろう。手分けして探すか。神子関係の書籍はこの列にあるから、そなたはそっちの端から探せ」

「有り難うございます」

「どうした？」

大きな書棚が八つ並んでいる中、神子関連が一つだけとは随分と少ない気がしたセリーヌは、その疑問が顔に出たらしい。

「いえ、思ったより少なかったので」

正直に答えると、王は頷いた。

「ハーナ様本人の手によるものは、全て神殿にある。ここにあるものはハーナ様が命じて役人が記録したものか、ハーナ様の日々の生活を記録した書記官の資料だけだ。ハーナ様以前の二人の神子については、研究書はあるが時代が古過ぎて石碑や石版でしか当時のものは残っていない」

言われてみれば当然の事で、成る程と納得した。

ということは、私が読みたいと思っていた書物は役人が記録したものなのね。

もしかしたら当てが外れるかもしれないわ。

探す前から少し落胆しながら、セリーヌは王の指示に従って奥から目的の書籍を探し始めた。

「セリーヌ嬢、これではないか？」

しばらくして王が一冊の分厚い本を差し出した。

暗がりの中、差し出された本の題名を指でなぞりながら読めば、それは確かに目的の本だった。

「赤咳病の記録……、はい、確かにこれです」

「では閲覧室に案内致そう」

閲覧室には明かり取り用の小さな天窓があるが、日光による書籍の劣化を防ぐ為に最低限の光しか入って来ない。
読書の為に例のランプを閲覧用の大きな机に置き、王とセリーヌは向かい合って座った。そこで初めてセリーヌはそのランプの不思議さに気付いた。

「不思議なランプですわね。熱が無い……」

確かにガラスの内部で炎が燃えているように見えるのだが、近くにあっても当然あるべき熱が感じられず、思わず手を伸ばして確かめたセリーヌは驚きの声を上げた。

「神子の遺産の一つだ」

「神子の遺産……！」

あっさりと王が口にした言葉に、セリーヌは驚いて目を見張った。

「驚いたか？」

「はい。宝物庫に仕舞い込まれているとばかり……」

「他の物はそうだ。これだけは普通に使われている。この城には、物でなければ他にもそなたが簡単に目にすることが出来る神子の遺産がある」

「まぁ、簡単に？」

「そなた自身もそうであろう？」

またも驚くセリーヌに、王は不意に微かに苦笑してみせてから真っ直ぐにセリーヌの瞳を射すくめ、低く潜めた声で囁いた。
その言葉の意味する事が分からぬセリーヌではない。神官長と懇意にしているという王ならば、セリーヌが神子の遺産の血筋を受け継ぐ者だと知っているのだろう。だが、それを口にするのはタブーなのだ。
沈黙するセリーヌに、王は軽く右手を上げて頭を振った。

「すまぬ、答えられぬ質問であったな。私の言った遺産とは後宮の庭のことだ。午後にでも見に行ってみれば良い」

「そうしてみますわ」

「では、私は別の本でも読んでいよう。終わったら声を掛けてくれ」

「はい」

席を立って閲覧室を出てゆく王を見送ってから、セリーヌは本を開いた。

じっくり読んでいる時間はないので、章ごとにざっと斜め読みした程度だったが、結局記録にはセリーヌが探していた事柄は載っていなかった。

やはり神子自らが書き綴った記録が見たい。

そのためには神殿に問い合わせるしかないが、こと神子の事に関してはシーラ教は秘密主義が徹底している。見せてもらえる可能性はとても低い。セリーヌは思わず溜め息を吐いた。
顔を上げて王の方を見ると、王は熱心に何かの本を読んでいた。

明るい日の光の下よりも、室内の薄明かりの下の方が美人に見えると聞いた事があるが、それは男性でもそうなのだろう。ランプの柔らかな橙の光に照らされた、王の彫りの深い顔は、陰影を濃くして一層顔立ちの美しさを際立たせていた。

私も多少は美人に見えているのかしら？

ふと、そんな埒も無いことを思いながら声を掛けた。

「陛下」

「終わったか？」

「はい。有り難うございました」

「その顔は、探し物は見付からずじまい、か」

表情に出ていたのか、僅かに苦笑する王にセリーヌも苦笑を返す。

「残念ながら。おそらく神殿にある神子直筆の書物に記されているかと思いますけれど、多分見る事は叶わないでしょうね」

「そうか……」

「ですが貴重な書物を読ませて頂きました事、とても感謝しております。これはこれで、中々面白うございました」

「どう面白かったか聞いても構わないか？」

不意に興味深げな眼差しを寄越されてセリーヌは少し戸惑う。記

録書など大して面白い物ではないが、他者の思想が記されていないから逆に自由な発想の翼を拡げやすい。例えば数字一つ、表一つからその気になれば無限に思考を拡げて妄想することも可能だ。つまり、セリーヌが面白いと思ったのは好き勝手に拡げた妄想とも言える代物で、確たる根拠等ないのだ。だから他人である王に話して良いものかと戸惑ったのだ。

「そうですわね……ハーナ様がそのお力を振るうに当たって水を媒体とされたところでしょうか。神子様が降臨なさるという泉といい、初代神子様が水の女神とされていることといい、神子様は水との関係が深いように思われました。二代目神子様については、殆ど存じませんけれども……」

三代目神子ハーナが恐ろしい伝染病を神の力で打ち払ったというのは、誰でも知っている話だ。しかし、その詳しい内訳を知る者は余りいない。記録書には各国から届いた情報と自国の調査を基にした病人の数、完治した数、死亡者数、飲ませた水の量、治療に掛かった日数等、ありとあらゆる数値的な記録と、神子の行動の逐一が記されていた。

世界中にあるシーラ教の神殿は、キア神信仰と共にその具現である神子信仰もあって殆どが泉のある場所に建てられている。それは始祖竜を祀るガロ教を信仰している地域でも同じだ。人々が危機に瀕した時に現れる神子の存在は世界共通の信仰の対象であり、ガロ教の神殿でも泉があるのが普通だ。

シーラ教とは違い、ガロ教ではガロの慈悲の泉と呼ばれるが。

記録によると、まず神子ハーナは世界中の神殿の泉にその姿を映し、人々に言葉を伝えた。その内容は簡単に言えばこういう事だ。

地から湧き出る水、つまり泉と井戸の水は全て病を打ち払う薬となる。

その病が駆逐されるまで神子は主神殿に籠り、キア神の涙に力を注ぎ続けた。神子降臨の泉であるキア神の涙は、世界中の水脈に通じているからだという。記録にはその間に神子が取った食事内容と量、入浴の回数とその入浴時間、睡眠を取った回数と睡眠時間、力を連続で注ぎ続けた時間、果ては排泄の回数までありとあらゆる情報が羅列されていた。プライベート等、何処にも存在しない。

「確かにそうかも知れぬ。世界中の泉という泉、井戸という井戸は初代神子様の恵みだと言われているし、ハーナ様はその全ての泉という泉、井戸という井戸の水を一時的にとはいえ病を癒す薬に変えた。ハーナ様の場合はそれが一番効率が良いと判断されたから、とも思えなくは無いが。にわかには信じがたい御業だ。流石は偉大なるキア神の力を授かった神子といったところか」

効率うんぬんを持ち出すあたりが、政治に関わる王のものの考え方を示している様で、セリーヌはやはり王は政治に興味が無いわけではないのだ、と改めて感じた。

「本当に。このランプもとても不思議な物ではありますけれど、神子様の力としては児戯の様なものかも知れません。しかしながら私が興味深いと思った点はそこではありませんわ。これは私の単なる憶測ですが、もしかしたら水と関係が深い事と神子が女性ばかりな事は深い関係があるのではと」

これが神子ハーナが力を振るった経緯を読みながら刺激され、最初に閃いた考えだった。

「水と、神子が女性であることが、か？」

「はい。女性は胎を命の水で満たして赤子を育てます。母の子を育む命の水、人々の渇きを癒して大地を蘇らせた初代神子様の命の水、病から民を救ったハーナ様の命の水……」

「成る程、羊水か」

頷く王にセリーヌも頷き返す。

セリーヌ自身、明確にその考えを持っていたわけでは無いが、神の力の具現たる神子が女性ばかりなのに、男性と女性では女性の方が地位が低いのは矛盾している様に感じていた。キア神が父とされていて、キア神も男性が優位であるとしているならば、神子もまた男性である方が妥当の様な気がするのだ。

「飛躍し過ぎと思われるかもしれませんが、それがまたガロ教が生まれたきっかけではないかという考えが浮かんで、興味深いことと思ったのですわ」

「ガロ教？」

「えぇ。シーラ教ではキア神は“父なるキア”ですが、ガロ教では“母なる始祖竜ガロ”ですから。神子はガロ教ではガロの娘とされているようですし」

「それは興味深いな。第一の神を父と思うか、母と思うか、か」

王は何やら眉間に皺を寄せて考え始めた。セリーヌにはその心の内は分からなかったが、神官長と懇意にしている王にしては随分と自由な思考をお持ちだと思った。当然だが、シーラ教の総本山であるこの国でガロ教の話題を出すこと自体、余り良い顔をされない。

ガロを生み出したのがキア神とされているので、その存在を否定はしないが、シーラ教にしてみればガロ教というのは勘当した不良娘の様な存在なのだ。
　それだけでなく、学のある女性というのは男から大概煙たがられるものである。セリーヌの教授を引き受けてくれた学者達はやはり皆男だったが、セリーヌの教授を引き受けた時点で珍しい方なのだ。女に学問は必要無いというのが一般的な考えなのだから、女に学問を授けることも蔑視されがちだからだ。その変わり者の学者達でさえ、女であるセリーヌが独自の解釈や発想を話すと渋い顔をする者がいた。
　今は王妃という特殊な立場の候補だからこそ、学がある事を褒められる状況にはあるが、結局その学も男性主導の受け身的な学なのだ。
　王には不思議な事にそういう隔たりを感じない。だからこそ、正直に話せたのだが。

　それにしても、とセリーヌは思う。
　世の男というのは、女がおしゃべりな事を嫌うのが普通らしいが、だったら“男にとって理想的な女”は男が質問してくれなければどうやって自分の事を伝えるのだろう？

「ところで陛下、今度は私が質問しても？」

「私に答えられる事であれば、何なりと」

「陛下は私が何を調べようとしているのか、気にはなりませんの？」

「それは……何故質問しないのかという意味か？」

「そうですわ」

「理由は二つ、ある。一つは、私自身が詮索される事を好まない。もう一つはそれがそなたの秘密に関わる事と予想したので問う事は憚られた」

確かに誰だって詮索されることは好まないだろう。だが、詮索と興味を持つ事は根本的に違う。詮索という言葉を使うということは、個人的な好意が根底に無いということだ。

他人の秘密は詮索しないというのは、こちらも腹を探られたく無いという意思表示でもある。好意を寄せる相手の秘密は共有したいと思うのが自然だ。少なくとも女心としては。

「陛下は……真っ正直でいらっしゃいますね。けれども、それは女心を分かっていませんわ。それについて私が心底質問されたくないと思っていましたら、糸口になる様な切っ掛けを提示することはありません。陛下は私を、私達正妃候補のことをお知りになりたいとおっしゃった。であれば、陛下は糸口を捉えて問い掛けて下さらなくては。女性は殿方に聞かれもしない自分の事を話すことは無作法であると教えられるのですから」

「……そなたは自分から話しているように思うが？」

面食らった様子の王にそう言われると、セリーヌは笑顔で答えた。

「はい、ですから父にはじゃじゃ馬と呼ばれていますわ。それに私は“女性として”男性たる陛下に気に入られようとは思っておりませんの」

悪びれずに言うセリーヌの率直な言葉に王は一瞬呆気にとられた顔をして、それからお手上げと言うように軽く両手を上げた。

「私よりもそなたの方が余程真っ正直だと思うがな。親子揃ってはっきり物を言う」

「父上が何か？」

「そなたを正妃にするのは、やめておけと言われたばかりだ」

まさか父までが王に直接そんな事を言っていたとは、とセリーヌも驚くと共に苦笑した。少しばかり王に申し訳ない気持ちになる。正妃候補として王宮に上がりながら、王妃になりたくない、なるつもりはないと親子揃って直接言われた方としたら、不愉快に思うのも当然だろう。自分がされたら、きっと傷付くだろうと思う。

「親子共々不躾で、申し訳ございません」

セリーヌが神妙に頭を下げると、王は短く良い、と許しの言葉を与えた。

「とにかく、そなたの進言は心に留めておこう。チェルネイア姫には必要無い様に思われるが」

「まさしく、私はそれを言いたかったんですの！」

かの姫の名前が王の口から出たので、急に例の計画を思い出したセリーヌは思わず立ち上がらんばかりの勢いで喰い付いた。

一瞬前のしおらしい態度から豹変するセリーヌに、王がまた呆然とするのを無視して話し始める。

「問題はフィリシティア様ですわ！　あの方は本当に深窓の姫君で

いらっしゃいます。年齢が一番下ということもあり、自分から口を開く事はありませんでしょう。ですから、特に気を付けて差し上げて欲しいのです」

「……そなたは随分かの姫に肩入れしているようだが……？」

「肩入れ、という程ではありませんが。チェルネイア様に比べてフィリシティア様は余りに不利に思えて応援したくなりましたの」

セリーヌの言葉に納得していない様子の王が口を開きかけた時、閲覧室の扉が叩かれた。

「陛下、そろそろ昼食のお時間でございます」

「分かった」

扉越しの侍従の言葉に、王は立ち上がった。セリーヌもまた立ち上がる。

「セリーヌ嬢、残念ながら時間切れだ。そなたの話は中々楽しかった」

「私も陛下と話せて楽しゅうございました。明日はチェルネイア様と、ですわね。陛下は今ひとつ女性に慣れておられぬ様ですし、お気を付け下さいませ。くれぐれもアレシア様がお嘆きなる様な事にはならぬよう……」

「セリーヌ嬢」

不意に扉に向かい掛けていた王が立ち止まってセリーヌの言葉を

遮り、身体ごとセリーヌに向き合った。

「はい」

「そなたが私を見くびっているとは思わぬが、無策と思われるのは心外だ。それにこれは私の結婚だ。必要以上に口を出す事はまかりならぬ。そなたが当事者であること放棄したのなら尚更であろう。違うか？」

先程までとは打って変わった王の厳しい言葉と眼差しに、セリーヌは雷に打たれたように固まった。いつの間にか思い上がっていた自分に気付いた瞬間だった。

何も言えずに立ち尽くすセリーヌの様子を見て取ると、幾分表情を和らげて再び口を開いた。

「私に言わせれば、そなたもまたフィリシティア姫と変わらぬ箱入り娘に過ぎぬ。確かにそなたは普通の貴族の姫君達に比べて知識は豊富で賢いかも知れない。しかし、知識は尊いものだが学ぶだけではその価値は無いも同然だ。そなたがどんな知識を求めているのかは知らぬが、その知識がそなたの内に留まるだけのものならば何の役に立つのか」

王の言葉に、セリーヌは羞恥に顔を赤くした。

頭でっかちの愚か者。

知識をひけらかすインテリを気取る貴族の若者を馬鹿にしていたセリーヌは、自分も同じ穴のムジナだと言われたのだ。確かに、今までこうすれば良いのに、ああすれば良いのにと、政治の話を聞きかじる度に思っていた事は沢山ある。

しかし女の身では何も出来ないと結局不満を溜めるだけで何もしてこなかった。本気で変えたいと思えば、いくらでもやりようはあったのだ。セリーヌには大貴族で権力もあり、娘の言葉に耳を傾けてくれる父がいる。その父を通して働きかけることも出来た筈だし、父を頼らずとも頑張っていれば数は少なくとも認めてくれる男性はきっといた筈だ。セリーヌを可愛がってくれた学者や、この王の様に。

いつの間にかセリーヌは女であることを言い訳にして、行動することを諦めていた。本気で政治を変えたいと思うなら、嫌いな社交界にも積極的に出て生の経験を積むべきだったのに、そうはしなかった。

昔は、母の実家にいた頃は、そんな事は無かったのに。吸収した知識が役に立つと思えば何でもやってみた。時にはとんでもない事態になって叱られた事もあったが、大ババ様は末頼もしいと笑って褒めて下さった。いつの間に、私はこんな情けない人間になっていたのだろうか。

セリーヌは恥じ入って、再び王に深々と頭を下げた。

「頭を上げよ。すまぬ、少し厳しく言い過ぎた」

「いいえ。女と侮らず、対等の人間としておっしゃって下さった事、心から感謝致します」

「そうか。私も対等の人間として話の出来る存在は快く思う」

その王の言葉は優しさを感じさせ、セリーヌはゆっくりと頭を上げて王の表情をうかがった。

王の表情は静かで、セリーヌを見下した様な気配も、また怒りも、感じられなかった。セリーヌは、自分の甘さと王の器の大さを感じ

て初めて畏敬の念を抱いた。正直に言うと、即位してから何年もの間傀儡の存在だった王をセリーヌは見くびっていたのだ。
この方は、仰ぐに足る王なのだ。
兄王子達がことごとく死亡した為に、末の王子でありながら幸運にも王位が転がり込んで来ただけの王ではなく、王になるべき方だったのだ。
セリーヌはエルドシールというこの男が、自国の王である事にキア神に感謝を捧げた。
すっかり反省した様子のセリーヌに、王は少し困ったかの様に首を僅かに傾げ、様子をうかがい返した。
「私はそなたには多くを成す力があると思う。それはそなたの父も言っていたことだが。そなたが男ならば遺憾なくその力を発揮出来たろうに、残念なことだと嘆いていたぞ」
「それは……買いかぶり過ぎですわ。父は親馬鹿なのです」
セリーヌは、先程とは違う羞恥に顔が赤くなる。
「では、今の所はそうしておこう。だがもし、その知識で何を成すか、それを決めたならば、キヨに話してみよ。私がそなたにしてやれる助言はそれだけだ」
「キヨ……アレシア様付きの尼僧の？」
予想だにしない名前に、驚いて王に確認すれば、王は深く頷いて続けた。
「神官長グラスローは私などよりもキヨに弱い。キヨの口添えがあれば、ハーナ様直筆の書も閲覧可能になるかも知れぬ」

何故そんなにキヨという尼僧に神官長が弱いのか、それを聞きたかったが再び叩かれた扉の音に会話は途切れた。

自室に戻ったセリーヌは口数も少なく、物思いに沈んでいる様子でメイミを心配させた。

問い掛けにも上の空の主人に、王と何かあったのかと気を揉み、最終的に王と二人っきりだったという書庫で恋が芽生えたのではないかと舞い上がった。

その考えは夕食時にはいつも通りに戻ったセリーヌに完全否定されるのだが。

とにもかくにも、ガルニシア公爵令嬢とその侍女の平和な王宮生活はこの日も無事に終りを迎えた。

つかの間の平和5

王付きの侍従は全部で五人いる。

普通は侍従というのはいわゆる御学友の中から選ばれるが、エルドシールの場合その生い立ちのせいで御学友がいなかった。だから、エルドシールの侍従達はかつて自分の亡くなった兄達の御学友であり侍従であった者が殆どで、例外は一人だけである。

年齢的な事を考えて三人までがエルドシールとも年の近い、故第十王子、故第十一王子の侍従だった者達で構成されている。ラロース、マリーセン、セッペロの三人は王より二、三歳年上で、お互いに仲が良い。だが、心の内を見せない王に対しては三者三様の接し方をしていた。将来的に政治の中枢に関わる事を期待されている若者達は仲は良くともライバルなので、その辺りは微妙な緊張感がある。

そして一人だけ別格扱いの侍従が一人いる。

故第一王子、すなわち前王太子が十七歳という若さで亡くなった時、既に王太子付きの侍従達の中でも特に優秀とされていたガルニシア公爵の嫡男オーランドだ。侍従という立場でありながら副宰相職も兼任し、ガルニシア公爵一派の事実上の頭である。ちなみに副宰相は五人いる。

現在三十五歳のオーランドが王の侍従になったのには二つの理由がある。一つは王太子時代という準備期間を持たず、すぐにも実務に関わらなければならなかった王を支えられるような、既にその経験のある優秀な侍従が必要だった事。そしてもう一つは、内戦で多くの若い才能が失われたことによる人材不足だ。

レイゼン公爵派やゼットワース侯爵派には残念ながらこれはという人材が居なかった。次代の政治の勢力図に大きく関わる侍従の選

定は、そうした理由でその筆頭にオーランドが、その他の侍従にはガルニシア公爵派以外の勢力に属する若者が選ばれた。ラロース、マリーセンはレイゼン公爵派、セッペロはゼットワース侯爵派、そして最後の一人モリーツもゼットワース侯爵派である。

モリーツだけが王より年下の十七歳で、ゼットワース侯爵の三男である。つまりチェルネイア姫とは従兄弟の関係であり、現在は戸籍上の弟だ。

この日の朝、官吏達が出勤する前、本宮と春宮殿を結ぶ回廊の片隅で人目を避け、柱と彫刻の影でモリーツと一人の侍女が逢っていた。

「確かに預かりました」

「待って。チェルーは……姉上はどんな様子？」

目的の物を受け取った侍女はすぐにもそこから立ち去ろうとしたが、モリーツに呼び止められて鬱陶しげな表情を隠しもせずにぶっきらぼうに答えた。

「特にお変わりなくお過ごしです」

「もし……もし、何か困った事があったら……父上にも言いずらいような事があったら、僕を頼って欲しいと姉上に伝えて欲しい」

侍女の態度に些か怯みながらも、モリーツはしどろもどろに言おうと決めていた事をどうにか伝えた。

「畏まりました」

「その……カトリーヌ、くれぐれも姉上を宜しく頼む」

「心得ております。では」

金髪碧眼の冷たい美貌の侍女は、にこりともしないでその場を去って行った。親しくは無いが、子供の頃からカトリーヌを知っていたモリーツは不安げな顔でその後ろ姿を見送った。

マルゴット伯爵令嬢カトリーヌは現在マルゴット伯爵家のかりそめの女主人である。マルゴット伯爵位の後継者だった兄がまだ幼い甥を残して内戦で他界し、兄嫁も病気で亡くなった為、カトリーヌは結婚もせずに伯爵位を継ぐ甥を育て、没落する伯爵家を支える為にゼットワース侯爵の愛人になったのだ。

「チェルー……」

カトリーヌと父との手紙のやりとりを仲介するだけのモリーツは、その手紙の内容も、そこからチェルネイアの様子を窺い知る事も不可能だった。胸を締め付ける様な苦しさに胸を抑えて、モリーツは唇を噛み締めた。

六つの時やって来た美貌の従姉妹の姫、チェルネイアにモリーツは淡い初恋を抱き、その想いは時を止めたままずっとモリーツの心に留まり続けた。それはチェルネイアと父との間に肉体関係があると知ってからも変わらず、艶やかに微笑みながら、その影で苦しむチェルネイアの姿をずっと影から見守って来たのだ。

「モリーツ、そこで何してるんだ？」

「っ、脅かさないでよ、セッペロ。ちょっと考え事」

急に話しかけられてモリーツは飛び上がるようにして振り向き、

声の主が同僚のセッペロだと知るとほっとして苦笑した。
セッペロはモリーツの上の兄と同い年の幼なじみで、その面倒見の良い性格からかモリーツや下の兄とも良く遊んでくれた。そんなわけで今でもモリーツはセッペロと仲が良いし、実の兄達よりもセッペロに懐いている程だ。

「こんなところでか？　お前じゃ逢い引きってことも無いだろうけど」

「セッペロと一緒にしないでよね」

モリーツはゼットワース家特有の大きな鼻を膨らませて顔を顰めた。
セッペロは少し垂れ目気味の目元が色っぽいとご婦人方に人気の優男だが、剣を持たせれば侍従の中では一番の腕前だ。更に侍従に抜擢された程頭も良い。要するに容姿と文武の実力に恵まれた非常に忌々しい男なのだ。モリーツが勝てるのは家柄くらいのもので、頭の方も機転が利くという点では負けている。

「はいはい。それより早く行かないと陛下がお待ちだぞ。また変わった場所を陛下は逢瀬にお選びだ」

「変わった場所？」

「夏宮殿」

最近の陛下は突拍子も無くて戸惑う。セッペロはそれが面白くて仕方ないらしいが、基本的に不測の事態が苦手なモリーツはまごまごしてしまう。
御正妃候補様方との逢瀬は春宮殿に限定するから、警備の問題も

それほど無いだろうとごり押ししたというが、結局しょっぱなから陛下はそれを無視した。昨日はセリーヌ嬢との逢瀬に本宮の書庫に指定し、朝から近衛兵の護衛の配置を変えたり人員を動かしたりと大変だった。今度は夏宮殿だと言う。

確か今日はチェルーが陛下の相手の筈なのに、何故夏宮殿なのだろう？

昨日はセリーヌ嬢の希望だと言っていたけれど、チェルーが夏宮殿を逢瀬の場所に指定するとは思えない。

「セッペロ、モリーツ、両名ただいま参りました」

「入れ」

春宮殿の陛下の私室には既に他の侍従達は揃っていて、陛下は朝食を取りながら書類に目を通していた。

遅いぞ、と睨みを利かせるオーランドにモリーツとセッペロは身を竦めて目を伏せた。

「では、本日の陛下のご予定を確認させて頂きます。朝二刻半から三刻まで外務大臣及び各国大使との御前会議、三刻から昼一刻まで御正妃候補様との御会合、御昼食はアレシア様と取って頂き、昼一刻半から通常の執務となります。昼三刻半から、各大使との個別の面談が予定されておりますが、今から行われます御前会議の如何に寄っては予定変更もあるかと。夕の一刻半からは法務大臣と典礼大臣と御夕食となっております」

この世界では一日を朝、昼、夕、夜の四つに分け、更にそれぞれを三刻に分ける。朝一刻は午前六時、昼一刻は正午、といった具合で一刻は二時間相当になる。朝二刻は午前八時で、二刻半は午前九時だ。

「夏宮殿の件ですが、陛下がお出でになられるのは騎士院の訓練場、案内はガッシュ・メルロー教授で宜しいでしょうか？」

「良い」

「では、その様に手配致します」

ここのところの王の無軌道ぶりに不満を募らせる筆頭侍従に、他の侍従達は居心地が悪い。元々、オーランドは完璧主義というか、堅苦しい人間なのだ。

一旦御前を下がるとその不機嫌さは、王の前では抑えているので余計にあからさまになる。

実際には無軌道という程酷い所行ではないのだが、今までが意志を持たないかの様に周りに従順というか、予定外の行動を一切取らなかった為にそう思われてしまうきらいがあった。

刺々しい雰囲気の中オーランドは侍従達に仕事を振り分け、モリーツは振り分けられた仕事をこなすべく夏宮殿にマリーセンと共に向かった。途中護衛に当たる近衛兵の手配を任されたマリーセンと別れ、騎士院に向かう。

用向きを伝えると程なくして王の剣の師であるメルロー教授が現れた。身体だけはゼットワース家の血を受け継いで大きい方だが、メルロー教授の堂々たる巨躯には圧倒されてしまう。

「本日、朝三刻、国王陛下が御正妃候補のお一人を伴い、こちらにお越しになります。ついては陛下のご希望で教授に案内をお願いしたい」

「陛下のご要望であれば、否やはござらん。喜んでお受け致します」

「では、警備の準備もあるので早速予定を組ませて頂きます。後ほど近衛兵を連れてもう一人侍従が参りますので、それまでに粗方場所の確認をさせて下さい」

「分かり申した。では、入り口から順を追ってみましょうか」

教授の案内で、騎士院の入り口から剣の稽古を行う訓練場への道筋を辿った。警備兵の配置や賊の潜みやすそうな場所を教授と共に話ながら確認し、手帳に書き込みながら進む。

モリーツにとっては古巣の騎士院であるから懐かしいことは懐かしいが、剣技の授業が最も苦手だった為にこの辺りには苦い思い出ばかりが詰まっている。良い思い出の一つも無い訓練場では、まだ幼いと言って良い少年達の姿が練習に精を出していた。直接指導された事は無かったが、メルロー教授は大変厳しいと有名で、それもあって少し気後れする。

チェルーは父の教育方針で女だてらに剣を扱うから、もしかしたら陛下はここで教授との立ち会いをチェルーに見せるつもりなのかも知れない。

モリーツは王の剣の腕がどれほどか知らないが、その予想が当たっているなら王はチェルーに気があると見て良い気がした。弟である自分としては喜ぶべきところだろうが、気持ちが重くなるのはどうしようもなかった。

「陛下のお相手を務める者を用意しておいた方が宜しいですかな？」

不意に教授に話しかけられて、ぼんやりしていた事に気付き、慌てて表情を引き締める。

「そうですね。陛下の詳しいご希望はうかがっておりませんので、

必ずしも必要とは言い切れませんが」

「侍従殿がお相手なさるのでも構わんのでは？　失礼ながら侍従殿はゼットワース家縁の方とお見受けする」

おそらく自分の顔立ちや風貌から、そう判断したのだろう教授の厳つい顔に言葉に詰まる。

「いや……私には務まりません。ゼットワース侯爵家のみそっかすの三男ですから」

「あぁ、あなたが有名な鬼っ子ですか」

教授は失笑とも取れる苦笑をして、モリーツが酷く気にしている事にあっさり言及した。武の名門に生まれながらモリーツは全く武に才能が無く、久々に強く意識した劣等感にモリーツの顔が強張る。

「しかし、侍従殿は確か飛び級で次席卒業でしたな。不屈の闘志は受け継いでいらっしゃるようだ」

「……そ、それは……」

いくら文で優秀でも剣を第一にする父には褒められた事が無い。まさか同じように剣を第一とする剣の教授にこんな風に褒められるとは思ってもいなかったので、思わずモリーツは赤面して黙り込んでしまった。

そんなモリーツを見て教授は何も言わずに、先を促して警備の話に矛先を変えた。モリーツは余り感情を見せない王がメルロー教授を慕っている事はなんとなく知っていたが、その理由が分かった気がした。

本当のところ、モリーツが頑張って来れたのはゼットワース家が家訓に掲げている”不屈の闘志”のおかげというわけでは無い。父に無視され、母にも兄弟にも馬鹿にされて育った自分が、それでも腐らず、王の侍従という大任を拝命できたのは、ある意味チェルネイアのおかげだった。

チェルネイアをいつか父から解放してやりたいという幼いながらも純粋な想いを支えに、モリーツは文官を目指して頑張った。

チェルネイアを救う為の力が欲しい。しかし自分には武の才能が無い。それなら文で力を付けるしかなかったからだ。

そして、その努力は周りが驚く程に成果を上げた。騎士院の卒業試験に普通よりも二年早く合格し、しかも次席の優秀な成績だった。文の分野ではどうしても力の弱いゼットワース侯爵派は思わぬ知らせに驚喜した。それはいままでその存在を無視していた侯爵も例外ではなく、これ幸いと王の侍従見習いとしてモリーツをねじ込み、去年正式に王の侍従として取り立てられたのだ。

だが、結局どれだけ頑張ったとて自分でチェルネイアを救う事など出来ない。

父を越える程の力を付けられるのは、後十年掛かるのか、二十年掛かるのか。

仕事に打ち込めば打ち込む程、自分の無力さが胸にのしかかる。そして、チェルネイアは自分が一人前の侍従になろうと四苦八苦している内に正妃候補に決まり、直接話す事も難しいような高みに登ろうとしている。

僕が父上からチェルーを自由にしてあげたかったけれど、到底無理そうだから……陛下がチェルーを正妃にしてくれて父上から解放してくれるなら、それで良いんだ。

陛下はチェルーを幸せにしてくれるかな……？

淡い初恋の終焉を予感しながら、モリーツは寂しさを隠して合流したマリーセンと近衛兵達と共に警備体制の予定を詰める事に専念した。

つかの間の平和５（後書き）

すみません。チェルネイア姫とのデートの予定だったんですが、次回に回しました。
本当はもう少し後に登場させる予定だったモリーツ君ですが、話の流れ上このタイミングにしました。ガルニシア公爵と折り合いの悪い嫡男も微妙にデビュー。

つかの間の平和６

その日の朝一番で、王から伝言を伝えられたチェルネイアは困惑と憤りに不機嫌になりながら支度をしていた。確かに一昨日、慈母アレシアを含めた正妃候補三人とのお茶会で陛下と剣の話題で盛り上がった。それは勿論、他の二人の候補がその話題にはついて来れないと思っていたからで、その目論みは成功した。

しかし、その成功は思いもよらない結果を今頃になってもたらした。伝言には、ゼットワース候直伝の姫の剣技を是非とも見せて頂きたい、というような主旨の事が書いてあった。

二人きりで逢えるこの機会に、チェルネイアとしては何かしらの性的接触を持ちたかったのに当てが外れそうだ。念のために持って来た剣の稽古用のシンプルなドレスを身につけ、長い髪を邪魔にならぬ様に纏め上げる。いつもは念入りに施す化粧も、汗に流れてはかえって美を損なうので今は薄化粧に留めた。

これでは到底王を誘惑出来る姿では無い、と鏡の中の自分に溜め息を吐いた。チェルネイアにとって衣装はとても重要な小道具で、なりたい自分、こうありたいと思う自分に合わせてドレスを選び、気持ちを高めるから、王を誘惑しようという意気込みが萎みがちだ。

鏡の前で少々ぼんやりしていると、背後で音も無く部屋に滑り込んで来る侍女の姿が見えた。

「早かったのね」

「はい」

チェルネイアが声を掛けると、カトリーヌは足早に主人に歩み寄り、そっとチェルネイアの手の中に手紙を滑り込ませた。

チェルネイアはその手紙を素早く開けて二度目を通すと、すぐに立ち上がって燭台の火を移し、暖炉に投げ込んだ。

「ゼットワース侯爵令嬢、チェルネイア様ご到着です」

王宮侍女に先導されて向かった春宮殿の王の居間には、王と侍従二人の姿だけがあった。

「ゼットワース侯爵が長女、チェルネイア、ただいま御前に参りましてございます。陛下に謹んで朝のご挨拶を申し上げます」

型通りの挨拶と、いつもよりは格段に劣る装いに負けるものかと余裕のある優雅さを指の先まで意識して深く腰を折り、頭を下げる。

「堅苦しい挨拶は良い。早速参ろうか」

気さくとも言える仕草で、礼を取っているチェルネイアに王は手を差し伸べ、そこでようやくチェルネイアは顔を上げて王の手に自分のそれを重ねた。

王の手が思ったよりも、大きく無骨で小さな傷の多い事に気付く。容姿と変わらず、綺麗な手をしているとばかり思っていたチェルネイアは、少し意外に思った。

ちらりと王の表情をうかがうと、相変わらず淡々とした表情だ。いつもなら色々と言葉も出て来るチェルネイアだったが、今日はどうにも調子が出ない。王にエスコートされて夏宮殿に向かいながら、

チェルネイアはこの沈黙をどうしたものかと考えあぐねていたところ、思いがけず王の方から声を掛けて来た。

「突然の申し出、不躾だったかと思うが許されよ」

「滅相もございません。ですが、陛下。所詮は女の手習いでございますから、お目汚しになるやもしれませんわ」

「それは無いだろう」

あっさりと確信を持ってそう言い切る王に、チェルネイアは首を傾げる。

「何故そうお思いになりますの？」

「そなたは背筋が特に強いからだ」

「背筋、ですか？」

「踊りの名手は数多く居るが、女性でそなた程上体にブレが無く踊る者は珍しい。おそらく剣の稽古のおかげであろう。それと分かる程に精進したのなら生半可なことではあるまい」

チェルネイアは狐に摘まれた様な気分だった。舞踏会では大胆なドレスで男性陣の視線を一身に集めて艶やかに踊る自分の、まさか背筋に注目する男がいるとは、全く予想していなかった事だ。

「そなた、レイピア一筋であろう？」

「はい」

レイピアは細身の剣で軽く、力の弱い者でも扱いやすい。殺傷能力には乏しいが、鋭い一突きさえ急所に決まれば相手を戦闘不能にする事も出来る。チェルネイアは女ということもあって、ずっとレイピアを得物にしてきた。

「私も習い始めの剣を使う筋力が無かった頃はレイピアで稽古をしたものだ。しかし、あれはやればやる程難しい武器だ」

「そうなのですか？」

「レイピアしか使った事の無いそなたには、分からぬかもしれないが」

僅かに苦い顔をする王を横目で見上げて、チェルネイアは漠然とした不安が込み上げるのを感じた。

陛下は、女性に慣れていないわけでは無く、そういった男女の睦み合いに余り興味が無いのかしら？

悩ましいばかりの完成された女性美を備えたチェルネイアの姿態に、性的な興味を全く持たない男性をチェルネイアは知らなかった。チェルネイア相手に、自分の剣の腕の話ならともかく、チェルネイアの剣の腕について真剣に話す男も知らなかった。

女の武器と機転を頼りに男性優位の社交界を生きて来たチェルネイアには、王は全く未知の生き物に見えて、足下がぐらつくような錯覚を覚えた。

一体何を考えていらっしゃるの？

今までは王の生い立ちから、自分と王は同類だと思っていた。しかし、それは間違いなのではないか？
慈母アレシアが殺されたとしても、憎悪に染まることは無いのではないか？
その恐ろしい予感に、チェルネイアは顔を強張らせた。
もし王を落とせなかったら、私は一生あの男の奴隷だわ。
そんなのは絶対に嫌！

「ここが夏宮殿だ。当たり前ではあるが、そなたは初めてであろう？」
「はい、父の職場ではありますけれど、実際に目にするのは初めてですわ」
夏宮殿は宮殿という言葉が全くそぐわない無骨な建物の群れだ。騎士や近衛兵達の宿舎、訓練場、上官達の執務室のある書類仕事を行う幾つかの建物だけが僅かに装飾的なだけで、後は一番奥に学び舎である騎士院がある。
訓練のかけ声があちこちから響く中、一行は真っ直ぐに奥へと向かった。
宮殿というなら、この騎士院だろう。元は本当に王族の所有する宮殿であったものを貴族の子弟の為の教育施設に作り替えたので、佇まいは古びているが美しい。青銅製の凝った作りの門の前には、既に出迎えの者達が待機していた。
「陛下、ならびに御正妃候補様、この度は騎士院に足をお運び頂き、

恐悦至極に存じます。案内役は、これなるガッシュ・メルローが務めさせて頂きます」

現在学長を務める老人がまず挨拶を述べ、続いて堂々たる体躯の老境に差し掛かった男が学長に促されて前に進み出た。

王は頷いてその男に声を掛けた。

「また世話を掛ける」

「なんのなんの。陛下の頼みであれば喜んで」

親しげに言葉を交わす様子から、チェルネイアは王と男の関係を推測する。おそらく今日の目的からして、この男は王の剣の師だろう。あの男によく似た野獣の様な鋭い気配を纏っていた。

ふと、視線を周囲に遣ると、こちらを見つめる見知った顔に行き当たった。戸籍上の弟、モリーツだ。そういえば王の侍従になったと聞いた。最近は殆ど顔を合わせていなかったが、相変わらず不景気そうな表情の少年にチェルネイアは面白くなさそうに小さく鼻を鳴らして目を逸らした。

「チェルネイア姫、これは我が剣の師だ。本日そなたの相手を務めてもらう」

「なんと……この姫君のお相手を私めが務めるのですか？」

やはりと、思いながらも、相手と同じ様にチェルネイアも驚く。当然王が相手をしてくれるものと思っていた。

「ガッシュ、甘く見ると痛い目を見るぞ。チェルネイア姫はゼットワース候から直々に手ほどきを受けている」

「ゼットワース候……なるほど、それは侮れませんな」

感慨深げな顔をして目を細めて自分を見定める様な男の視線に、チェルネイアは挑むかのように艶やかな微笑みを作った。

「お手柔らかにお願い致しますわ」

場所を訓練場に移し、立ち会いは身体の筋を痛めぬ様に軽く素振りで身体を解してからということになった。チェルエネイアは渡された訓練用のレイピアを手に、どうしたものかと迷っていた。本気を出した方が良いのか、か弱い女を演出して早々に負けた方が良いのか。

常ならば後者を選ぶが、王の様子からしてそれは得策では無い気がした。それにガッシュという男は手加減をする様な男では無いようだ。王は一度として一本取ったことが無いと言っていたし、何よりもその眼光の強さがそれを物語っている様に思えた。

今回はやはり前者を選ぶべきだと判断して、チェルエネイアは軽い素振りで手と身体にレイピアの感触を叩き込む。同じレイピアとはいえ、男性用のそれは普段チェルネイアが使っているものよりも幾分重い。いつもよりも体力の限界は早いと考えなければならないと、気を引き締めた。

そんなチェルネイアの姿をガッシュは興味深げに眺めていた。先日の王の来訪のこともあり、今日連れて来た正妃候補が王の本命かと思っていたが、自分と手合わせさせようというのだから少し違うかも知れない。それにしてもゼットワース候縁の人間に二人も続けて会うとは、珍妙なことだ。この分だと三人目もひょっとしたらありそうだ。

「準備はお宜しいか？」

姫君の準備が整った頃合いを見計らって声を掛けると、微笑みながら頷きを返された。ガッシュも男であるので、妙齢の美女の微笑みにはつい心がざわめく。どうにも参ったな、と内心で苦笑しながら愛用の剣を手に取った。愛用の剣といっても、稽古用の刃を潰したものだが。

向き合って胸の前で剣を掲げて軽く礼を交わす。女性と剣を交えるのは全くの初めてでは無いが、貴婦人然とした女性とは初めてだ。剣を持たぬ左手でドレスの裾を軽く摘んで剣を構える様子は、どちらかといえば今にも軽やかに宮廷舞踏でも踊り出しそうだと思った。

が、そんな戯れ言を思ったのは一瞬だった。

身体に染み付いた無意識の反射で、姫君が繰り出した鋭い一撃をガッシュは受け止め、驚きに目を見開いた。

成る程、これは侮れぬ。

レイピアというのは軽く細い。だから先端には持ち手の振動が伝わりやすく、切っ先が定まりにくい。だが、姫君の構えるレイピアの先端はピタリとして迷いが無く、流れる様な足さばきで移動している時ですら定められたその切っ先は確実にガッシュの急所、喉元を狙っているのが良く分かった。

受け止めた剣は軽く、ガッシュに殆どダメージを与えなかったが、レイピアという武器の特性を良く理解し、それに特化した身体作りをしたに違いない姫君の動きを教師の目は嬉しげに見つめた。

誘い水の様な軽い挑発を二三度繰り返して左右にガッシュを揺さぶり、隙をうかがって一気に大胆な踏み込みで急所を狙って来る。

女と侮っている相手なら、一瞬で勝負を決めてしまいそうな程、その突きは鋭い。しかし、二十合も打ち合えば運動量からも姫君に疲れが見え始めた。ガッシュは頃合いかと判断し、これが最後と決めたか思い切り飛び込んで来る姫君のレイピアを弾き飛ばした。

離れた場所に落ちたレイピアの乾いた音が響く。

続いて王の拍手の音が響いた。

「見事だった。まるで舞いを見ている様に美しかった」

はっと我にかえった様な顔をして、姫君は王の賞賛に優雅に礼をして見せた。

「いや、真に。レイピアに関しては姫君程巧みな使い手は少ないでしょう」

女ということを差し引いても、姫君の実力は中々のものだ。賞賛された姫君本人はやや困惑したような表情で恐縮してみせたが、だいぶ息が上がっていてただ頭を下げるばかりだった。そんな姫君の手を取り、王は用意させた椅子に座らせ、飲み物を持ってくる様に侍従に指示を出した。

「ガッシュ、次は我の相手を」

「仰せのままに」

姫君を休ませておいて今度は自分が訓練用の剣を取る王に、ガッシュは頷いて再び訓練場の中央に向かった。先日の来訪では話をしただけであったので、こうして打ち合うのは本当に久し振りになる。

型通りの礼を交わし、軽く切っ先で打ち合いを始め、斬戟の音に

紛れて言葉を交わす。
「姫の剣は、どうであった？」
「情熱的ですな。あの方は剣がお好きなようだ」
王の問いに答えながら、小手調べ程度にガッシュは攻撃を繰り出した。
「っ、他には？」
受け止めた王の顔が僅かに歪んで、返す切っ先で攻撃を仕掛けて来るが、それを難なく交わしてガッシュは間合いを取る。
「少しばかり無謀、ですか。捨て身の攻撃が多過ぎる」
「くっ」
そう答えてから、一気に間合いを詰めて重めの一撃を繰り出し、受け流しきれずに呻いた王の足下が僅かにふらついた。
「陛下、身体が鈍っていますな。これ位は軽く受けて頂かなくては」
おそらく政務に追われて鍛錬を満足に出来ていないのだろう。剣を教えていた時に比べると落ちてしまった技量にガッシュは苦笑した。
王もまた苦笑いを返す。
「面目無い…っ」

体勢を立て直して再び打ち合いを始める。
今度はお互いに無言だ。
一時、昔に帰って無心に打ち合う二人は、チェルネイアに訪れた異変に気付かなかった。

??見事だった。まるで舞いを見ている様に美しかった??

美しいと言われたことは、数えきれない程ある。
けれども、剣を持つ姿を美しいと讃えられたのは初めてだった。

チェルネイアは、色々と混乱していた。
王に美しいと賞賛されたことは、喜ばしいことだ。けれども、これは自分が思い描いていたこととは違う。そもそも、剣を自分に教えたあの男でさえ、一度として剣の腕を褒めてくれたことは無かったし、あの男以外を相手にしたことが無かったので、チェルネイアは自分の実力を客観的には全く知らなかった。
あの男は憎悪を燃やして挑むチェルネイアを嗤いながらあしらい、嬲る様にして稽古を付けた後は、一歩も動けない程に疲れ切って悔しさに泣くチェルネイアの身体を蹂躙し、更に屈辱の中に叩き落とした。奇跡的にあの男から一本をもぎ取った十七の夏以降、稽古後の蹂躙は無くなったが、屋敷内では公然の秘密となっていた性暴力は現在も続いている。

「メルローは強かっただろう?」

不意に背後から響いた声にチェルネイアの心臓は凍り付いた。

それは忘れもしない、あの男の声だった。

「まだ数日だが、お前の身体が恋しいぞ……」

背後に近付く気配に鳥肌が立つ。嘲りを含んだその声に、チェルネイアは真っ青になって唇を噛んだ。

「忘れるな、お前が誰の物かを」

呪いのように囁かれた言葉に、気が遠くなりそうだった。

もう駄目。

そう思った時、丁度勝負がついたらしい王の声が響いて、チェルネイアを呪縛から解放した。

「メレデス将軍ではないか、どうした？」

「いえ、陛下と我が娘がこちらにいらっしゃると聞き及びまして、立ち寄らせて頂きました」

あの男が先程までとは打って変わって朗らかな声で王に答えるのを聞きながら、出来ればこの場から一刻も早く逃げ出したいとチェルネイアは思った。

「そうか。どうだ、そなたも一汗流して行くか？　ガッシュもそなたとなら本気の打ち合いが出来るだろう」

「遠慮しておきます。将軍職を拝命しております現在、剣豪メルロー教授相手といえど負けてしまっては下に示しがつきませんし。そ

れにすぐ戻らねばなりません。まだ仕事中ですので。では、失礼致しました」

去って行く気配にようやく身体の力を抜いて、震える息をそろそろと吐き出した。

「チェルネイア姫？」

「これは……顔色がお悪い様ですな」

ここでようやくチェルネイアの様子がおかしい事に気付いた王と教授が、心配そうに顔を顰めた。

「いえ、大丈夫ですわ」

少しも弱みを見せたくないチェルネイアは、どうにか笑おうとしたが上手くは行かなかった。

「いや、打ち合いに夢中になってそなたのことを疎かにしてしまった。許せ。あぁ、丁度良いところに戻って来たな、モリーツ！」

「はい、陛下」

飲み物を用意して戻って来たばかりのモリーツが、王に呼ばれて慌てて駆け寄った。

「チェルネイア姫が……そなたの姉君が気分を悪くされたようだ。奥にある医務室に案内せよ。我も少しガッシュと話したらすぐに行く」

「畏まりました」

王の言葉に明らかに取り乱した顔をして、モリーツは頭を下げた。実は戻って来る途中、ほんの少し前に父親であるゼットワース侯爵とすれ違って、悪い予感がしていたのだ。

正妃候補を休ませたいと医務室の医者に言うと、気を聞かせて人払いをしてくれた。扉の外に護衛の近衛兵二人を残し、まだ顔色の悪いチェルネイアを奥の簡易ベッドに座らせた。

「チェルー、具合悪かったら横になる？」

「……」

気遣って声を掛けても、チェルネイアは黙ったまま美しい顔を強張らせて頭を振った。

「もしかして、父上にまた何か……」

「うるさい！」

「でもっ」

「黙って頂戴、役立たずの弱虫に話す事なんか無いわ」

琥珀の瞳に涙を滲ませて睨まれると、モリーツも泣きたくなった。

でも、ここで引き下がったら駄目だと自分を奮い立たせる。

「そんな事…っ、僕だってもう一人前の侍従だよ？　もしかしたら、力になれるかも知れないし」

必死で訴えるモリーツをチェルネイアは少しだけ見つめて、すぐに疲れた様に目を逸らした。

「無理よ。もう手遅れだわ」

「え？」

「……乳母やは、もうこの世にいないんだから……」

辛うじて耳に届く程度の呟きに、モリーツは目を丸くして息を飲んだ。そんな話は初耳だ。しかし、チェルネイアが病気の為に離れて暮らしている乳母の存在を心の支えに生きて来た事は、当然モリーツもよく知っていた。

「まさか……！」

「冗談よ。それより水を頂戴」

すぐに否定したチェルネイアだったが、その荒んだ笑みと投げやりな態度に、それが真実だとモリーツは悟った。少なくともチェルネイアはそう信じている。

一体どうして？

沸き上がる疑問と胸の痛みを堪えながら、モリーツはチェルネイ

アに水を飲ませ、躊躇いがちにその背をさすった。振り払われるかと思ったが、チェルネイアは大人しく水を飲みながらモリーツに背を撫でられていた。

暫くすると少し立ち直った様で、鬱陶しげにモリーツの手を払って立ち上がった。壁に掛かった小さな鏡に己の顔を映し、少し赤くなった目元と顔色の悪さに不機嫌な顔をして濡れタオルを要求した。ぺちぺちと頬を叩いて血色を良く見せかけ、モリーツから渡された濡れタオルで目元を冷やす。

そして王がやって来た頃には、いつもの調子を取り戻して艶っぽい微笑みで出迎え、モリーツの存在等最初からなかったかのように王と連れ立って春宮殿へと戻って行った。

つかの間の平和7

宮廷で今一番の話題は何と言っても王と正妃候補達の逢瀬についてだった。

??聞きましたか？

陛下はセリーヌ嬢と書庫に籠り、何やら親密に時間ぎりぎりまで話し込んでいらっしゃったとかーー

ーーあぁ、陛下は知的な女性がお好みだったらしいーー

ーーいや、昨日のチェルネイア姫との話は聞いたか？

そうとも言い切れないぞーー

ーーどういう事だ？ーー

ーー私も聞いた。

何でも陛下はチェルネイア姫をいたく気に入られて賞賛されたとかーー

ーー賞賛？

あの美貌を今更？ーー

ーーいいえ、違いますよ。

今日、陛下は夏宮殿の騎士院を逢瀬の場に選ばれて、姫は見事な立ち会いをなさったらしいですーー

ーーそうそう！

それで姫の剣の腕を賞賛なさったとかーー

ーーその後少し具合を悪くされたチェルネイア姫を、それは親密なご様子で抱きかかえるように後宮までお送りになられたそうですよーー

ーー剣の腕……！ーー

ーー陛下は強い女子がお好みなのかも？ーー

ーーいや、ご生母様の様な賢女がお好みに違いない。
やはり本命はセリーヌ嬢ではないか？ーー

ーー……ここだけの話ですがね。
実はね、私、慈母様に贈り物をしたんですよーー

ーー……それで？ーー

ーー……いざという時、震えるばかりで何も出来ないようでは王妃は務まりません。
チェルネイア姫はゼットワース候直々に手ほどきを受け、剣の素養がございます。
そう、ご注進申し上げたのですよーー

ーーなんと！ーー

ーーでは慈母様はそれを陛下に……？ーー

ーーしかし、別の話も聞いたぞ。
やはり贈り物を慈母様に差し上げて、一国の王妃ともなれば外国からの客人をもてなさねばならない、その際侮られることなく、

感嘆されるような知性をお持ちな女性と言えばセリーヌ嬢をおいて他に無い、と申し上げたらしいーー

ーー成る程！
　では、そちらの願いも陛下に届いた結果が書庫での逢瀬ということに？ーー

ーーやはり、正妃選びの大きな鍵は慈母様が握っておられるらしいなーー

ーーこうしては居られない……！！ーー

　この様な噂話が飛び交い、踊らされる宮廷雀達の動きが慌ただしくなっていた。

　そんな中、焦りを募らせていたのはレイゼン公爵一派である。そして最も焦っていたのはレイゼン公爵その人であった。

「くっ、女狐め！　今までは頑として何一つ受け取らなかったと言うに！　今更になって欲を出したか？　慈母という地位にありながら、醜いことだ」

　宰相執務室で、一人になった途端にギリギリと奥歯を噛み締めて憎しみも露に吐き捨てた。
　生母とはいえ、長く宮廷を離れていた大人しいだけの女に何が出来るものかと侮っていたのは確かだ。過去、何度も贈り物を届けさせたが、それらはことごとく丁重な断りの手紙と共に返却されて来た。まさかここに来て受け取るとは、全く予想外のことであった。

娘の美貌に絶対の自信があったレイゼン公爵だが、それは男である王が相手であればの話である。
王は不遇な時代を生母と共に修道院で過ごしたためか、生母に頭が上がらないようだとは思っていたが、こんなところで足を掬われるとは、と苛立が募る。全く予想しなかったことではないが、これ程までに強い影響力を王に持つとは思っていなかった。

すぐに手を打たなければ。
何か余程印象的で金を掛けた贈り物をしなければ、遅れを取る。

そう考えながら、同時に公爵の頭にはフィリシティアに付けた侍女の娘の顔が浮かんでいた。

邪魔ならば、消してしまえば良い。この先フィリシティアが正妃になったとしても、ことあるごとにあの女にしゃしゃり出てこられては不愉快だ。

既に公爵の頭の中では、哀れな一人の娘が使い捨てにされる未来が描かれていた。

その頃、侍従モリーツは急な体調不良を訴え、侍従長から休暇を貰って王宮を辞していた。本来王直属の侍従は別格で、王が認めれば侍従長に許可を貰う必要は無いのだが、最年少でまだ立場の弱いモリーツは律儀に侍従の取るべき行動秩序を守っていた。そして、この侍従長はレイゼン公爵一派に取り込まれていたので、モリーツの急な体調不良と休暇を取ったことは直ぐさまレイゼン公爵に知らされた。

静かに忍び寄る幾つもの陰謀の影を知らぬかの様に、今日もゼッ

タセルドの空は青く晴れ渡っていた。

つかの間の平和8

「セリーヌ様！　お嬢様！　やりましたよ！　ちょっとだけだけど、フィリシティア姫の侍女と仲良くなりました～！　今日、これからハンナさんとキヨさんと一緒にお散歩行って来ます！」

元気よく部屋に駆け込んで来たメイミに、セリーヌは目をぱちくりさせた。書き物の手を止めて、首を傾げる。

「……じゃあ今フィリシティア姫は何をしていらっしゃるのかしら」

チェルネイア姫は陛下との逢瀬から戻って来てはいるだろうが、二人が会っているとは思えないし、アレシア様は今日は面会の予定がいっぱいだと言っていた。あの姫君を侍女が一人にするとは思えないし、あの姫君が一人で行動するとも思えなかった。

「姫君は後宮の庭園にいらっしゃっているようです。一人で散策されるのがお気に入りみたいで……、あ！　丁度良いからお嬢様も行かれては？　偶然を装っての出会い……ロマンスの始まりですわ……！」

途中から思考が飛ぶメイミにセリーヌは苦笑したが、確かに良い機会だと思った。それにしても、あの内気な姫君が一人で散策とは意外だ。

「ロマンスはともかく……良くやったわ、メイミ。流石は私の侍女だわ」

「セリーヌ様の為ですもの、これくらい軽いです！　では、行って来ますね！」

飛び跳ねる鞠の様に飛び出して行くメイミを見送り、セリーヌは書き物を片付けて話には聞いていた後宮の庭園に向かった。

「一体なんなの！？　この滅茶苦茶な庭は！」

王が言っていた神子の遺産の庭を一目見た途端、セリーヌは思わず怒鳴った。

季節も、それぞれの植物に合った風土も全て無視して、全ての植物が全盛期という状況に、感動するよりも先にセリーヌは怒りが込み上げてしまったのだ。

栽培がとても難しい筈の北国の木が、普通に茂って花を咲かせているのが真っ先に目に入ったからだ。真夏のゼッタセルドでは、それは絶対にあり得ない光景だ。苦労して品種改良を続け、どうにかこうにか最近夏を越えられるものが出来たと母の実家から知らせが来たばかりだったから、余計に腹立たしい。

シュスというこの肌の白い木は、とても貴重な木なのだ。

それは石化病という難病に関係がある。ある日突然身体の末端、手の指や足の指が動かなくなり、だんだんと身体の中心に向かって麻痺が進む。麻痺した部分はまるで石の様に固くなり、ついには体

中が石の様に固くなって心臓が止まる。
一度この病に掛かると治癒は絶望的、シュスの木の皮を煎じたものが唯一病の進行を止める薬で、それ以外に患者が生き延びる方法は現在見付かっていない。昔は交易で大量に北方から入って来たシュスの煎じ薬は、国が内戦で疲弊して交易が滞っている為に流通量がかつての十分の一にまで減っていた。少ない薬を巡って、その価格は高騰するばかりだ。
キシェラ家がその栽培に乗り出したのは、大ババ様がこの病を患ったことが切っ掛けだった。いくら貴族といえども、それほど裕福というわけでは無いキシェラ家にとってシュスの煎じ薬は高過ぎたのだ。そこで、キシェラ家は比較的安価で手に入るシュスの種を大量に購入し、親戚であるガルニシア公爵家に出資してもらってシュスの栽培を始めた。欲しい人間はいくらでもいるので、軌道に乗れば金を回収出来るし、助かる人も増える。難しいことは分かっていたが、ただただ高価な輸入もののシュスの煎じ薬を買い続けるよりはキシェラ家の良き未来に繋がると、大ババ様が決断したからだ。

神子の遺産の土地をただの庭園にしとくなんて、何て馬鹿ばっかりなの！？
栽培が難しい薬になる木や薬草を植えたら、この国はどこの国より素晴らしい薬の国になるのに！
季節も関係無く、新鮮な薬草が手に入るとしたら、こんなに魅力的な事ってあるかしら？

ガルニシア公爵家のセリーヌの部屋のバルコニーは、実は畑と化していた。シュスは難し過ぎて到底無理だったが、いくつかの薬草に関してはセリーヌ自身も交配を繰り返して品種改良を試みていたから、その苦労は身を持って知っていた。
そんな苦労を嘲笑うかのように、此処には多種多様な木々と草花が青々と生い茂っている。怒りが去ると、なんだか無力感に襲われ

てがっくり来てしまったセリーヌは、当初の目的を忘れて入ってすぐのベンチに座り込んだ。

どうせなら、世界中の土地に祝福を与えてくれればこんな苦労をする必要も無く、何処でも誰でも薬が手に入って、皆幸せなのに。何故こんな中途半端な広さの土地に祝福をお与えになったの？

それも後宮の女達の心を慰める事だけを目的に存在しているなんて……

神子様を悪く言うつもりは無いが、“全ての民を慈しむ神子”という存在と矛盾するようで、出来るなら納得のいく説明が欲しいとセリーヌは思った。

しかし、すぐにその思いにセリーヌは頭を振った。

「いいえ、そもそも神子様がそれを望まれたとは思えないわ」

そんな事の為に神子様が祝福をお与えになったとは思えない。

では、何の為に？

でも……もし本来の目的をないがしろにしているなら神殿が黙っているとは思えない。

やはり、本当にこれが神子様の目的なの？

「あぁ～、もう。考えれば考える程分からないわ」

元より少な過ぎる情報では、正しい答えを導こうにも検証する術も無い。

余りにも漠然とし過ぎていて、答えを求めるのは無理だとセリーヌは早々にサジを投げた。

でも……そうね、私が王妃になったら、この庭は実験の為の畑に

するわ。
どんな植物でも育つなら、交配も容易に出来るし、もしかしたら育つ速度も普通よりも早いのかもしれない。そうならばもっと効率良く早くに品種改良出来る。
あぁ、でも普通の土地も必要だから、すぐ隣りにも畑を作って……。正妃一人を守ると王もおっしゃっていたから、あんなに大きな後宮は必要無いわ。だったら今閉鎖されている部分を研究棟にして、優秀な学者を集めて……。

そこまで考えて、セリーヌははっとした。

正妃になれば、反発はあってもきっとそれは実現不可能ではない。
王は、神子の残した知識を学んで、何を成すのかと聞いた。
そして、最初の日に傀儡の王の王妃として、何を誓うのか、そう聞いた。

もしかして、こういう事なのかしら？

傀儡の王から脱する為の力が欲しいのではなく、王妃としてこの国の為に何が出来るか、そう言う事？
あぁ、私としたことが、すっかり忘れていたわ！
王妃は、女の身で公に権力を握る事のできる唯一の地位。
王妃という地位につきものの様々な煩わしさを差し引いても得るものがあるなら、望んでみても良いかもしれない。

セリーヌは立ち上がると、草花の生い茂る中を進み、シュスの白い木肌に手を当てた。
手の平から伝わってくるのは生きる喜びに満ちた歓喜の感情だ。
故郷を遠く離れた異郷で、悲しみと苦痛の感情ばかりを伝えて来たシュスの芽や苗木達を思い出し、セリーヌは涙が滲んだ。

この国を、植物の楽園にしたい。
それがこの国を、民を、幸せに導く筈。
その為に、王妃の地位を望んでも許されるだろうか？

もの言わぬ植物の心を感じ取る能力。それがキシェラ家の女に伝わる神子の遺産だった。

つかの間の平和9

「……セリーヌ様？」

物思いに耽っていたセリーヌに、不意に声を掛ける者があった。

セリーヌの目に飛び込んで来たのは、日の光に透ける白く輝く髪をした、美しい妖精だった。セリーヌは驚きに呼吸を忘れた。ここが神子の遺産の庭だということもあって、本物の妖精かと思ったが、すぐにそれが生身の人間だと気付いた。

「ごきげんよう、フィリシティア様。あなたもお散歩ですか？」

「はい」

日に透けて溶けてしまう様に儚い風情の佳人に、セリーヌはため息をついた。

本当に、美しい人。生きているのが不思議に思うくらいに。

この庭を見るまでは、セリーヌは彼女の応援をするつもりだったが、今となっては心が揺らいでいた。この妖精には、王妃として政治に関わる能力は無いだろう。そう思うと、余計に自分ならばという気持ちが湧いて来てしまう。

「あの……セリーヌ様。少しお話させて頂いても構いませんでしょうか？」

「え……？　ええ、構いませんわ。そこのベンチに座りましょうか」

思いがけず相手から誘われてしまい、セリーヌは少し戸惑ったが、好感を持っている相手であれば断る理由も無く、快く誘いを受けた。
姫君が嬉しそうな表情をふわりと整った顔に拡げると、硬質な印象が和らいで年相応の幼さを感じさせる。
内気な質の姫君は、緊張しているのが美しい動作の端々に窺えて、セリーヌは密かに苦笑した。セリーヌと姫君では、同じ公爵令嬢でも格段の差がある。セリーヌ相手に緊張などしなくても良いだろうに、その初々しい様子はセリーヌには予想外だった。あのレイゼン公爵の娘なら、きっと横柄で高圧的だと思い込んでいたので、その落差に余計にこの姫君に好感を抱いてしまうのかもしれない。
姫君の、何か聞きたい事があるらしいのだが、なかなか言い出せない様子が可愛らしい。その姿をしばらく眺めていたかったが、流石に悪趣味だと思ってセリーヌから声を掛けた。

「何か、私にお話したいことがおありですか？」

「ぁ……、はい。お聞きしたい事が、あるのです」

「私にお答え出来ますことなら、何でもお答え致しましょう。どうぞお聞きになって？」

「とても、恥ずかしいのですけれど、先日のお茶会で……その、陛下が……」

姫君はみるみる白い頬を赤くし、居たたまれないといった様子で、俯いた。

「陛下が？」

セリーヌが促してやると、姫君はおずおずとセリーヌの顔を見て、意を決して再び話し始めた。

「陛下が、セリーヌ様の髪をお褒めになられましたでしょう？」

「あぁ、そんな事もありましたね」

「それで、その……私、その時、本当に失礼なことではありますけれど、ぼんやりしておりました」

「えぇ、存じておりますわ」

その記憶はまだ新しい。あの時のチェルネイア姫も傑作だったが、ぼうっとエルドシールを見詰めるフィリシティア姫の様子も、セリーヌにとっては忘れがたい光景だった。

「お恥ずかしい限りです……」

「そんな事ありませんわ。とても可愛らしいと私は思いましたし、慈母様もそうお思いになられたと思いますよ」

からかうつもりは無かったが、セリーヌが正直に伝えると姫君は目に見えて更に赤くなり、狼狽えて視線を逸らした。

「……そ、それで、なのですけれど、陛下が、どのようなお言葉でセリーヌ様の髪をお褒めになったのか、教えて頂きたいのです」

セリーヌは、一瞬質問の意味が分からなかった。普通、恋する方が他の女性を褒めた言葉なんて、知りたくないと思うのが女心では

無かったかしらと首を傾げた。セリーヌ自身は恋とは無縁だったが、恋愛小説好きの侍女のおかげで恋愛に絡むあれこれはそこそこ知っていた。

「……フィリシティア様は、不思議な事をお尋ねになるのね」

「不思議、ですか？」

「えぇ。何故、そんな事をお知りになりたいのです？」

姫君はきょとんと目を瞬かせ、困惑して首を傾げた。

「何故、と言われましても……。陛下のおっしゃったお言葉を取り零すなど、失礼なことですし……ぁ、それに、陛下のお好きなものを知りたい、からですわ」

途中で不意に気付いた様に、姫君はぽん、と小さな花が咲いたように微笑んだ。

「陛下のお好きなもの、ですか？」

「はい。褒め言葉に使うということは、それを良いものと陛下が感じていらっしゃるということですから」

成る程、とセリーヌは思った。つまり、姫君はセリーヌに贈られた褒め言葉が知りたいのではなく、エルドシールの好きなものが知りたいだけなのだ。全く嫉妬という言葉を知らなげな目の前の少女をまじまじ見詰め、これは本当に妖精なのでは、とセリーヌは思った。

「陛下は私の髪を、豊かな大地の色と褒めて下さいました」

「豊かな、大地の色……」

「実際は褒め過ぎだと思いますわ。栄養の豊富な土の色は、私の髪よりずっと濃い色をしていますから。黒に近いのです」

「土に色の違いがあるのですか？」

目を丸くする姫君に、セリーヌは内心苦笑した。普通の貴族の姫君は、土の色の違いなぞ知らなくて当然だ。知っている自分が変わっているのだ。

「ありますわ。今度よくよく注意してご覧になってみて下さい。この庭園の土の色も、場所によって少しずつ色が違うはずです」

「まぁ……私、ちっとも気付きませんでした」

神妙に頷く姫君に、セリーヌはふっと微笑んで悪戯めいた口調で告げた。

「ちなみに、陛下がチェルネイア姫の髪を褒めた言葉は上質の鹿の毛皮です」

セリーヌの言葉に、姫君は一拍置いてはにかんだ笑みを浮かべた。

「……ありがとうございます」

「どういたしまして、フィリシティア様。そろそろ参りましょうか。だいぶ日も傾いて来ましたし」

「はい」

結構長い事自分はこの庭園で一人物思いに耽っていたのだと、日の傾きからセリーヌは不意に気付いた。そしてそんな自分より先に来ていた姫君が、相当長いことこの庭園に居た事に気付く。確かにこの庭は妖精の長期滞在にも耐え得る美しさだ。

「セリーヌ様」

「何でしょう？」

ベンチから立ち上がって門へ向かいかけたところで、セリーヌは姫君に呼び止められた。

「今度お部屋にお邪魔しても構わないでしょうか？」

「……えぇ、構いませんわ。歓迎致します」

思いがけず妖精に懐かれたセリーヌは、内心少し微妙な気持ちだったが、微笑んで頷いた。今、セリーヌの心は王妃となる事に気持ちが傾き始めていた。今更何とエルドシールに言うのかという事もあったが、それ以上に目の前の妖精に対して自分の打算的な動機が非常に後ろめたかった。

素直に喜ぶ姫君を前に、セリーヌは複雑な気分だった。男性の優越性が高く、政治的な能力を全く求められないこの国の王妃の座には、セリーヌの様に権力を持つ事を目的として王妃の座を欲する女は望まれていない。むしろフィリシティア姫のように全く無知で、全てを男性に頼る汚れ無き永遠の乙女のような存在が望ましい。男に何処までも都合のいい女性像だが、それがこの国の貴族社会の常

識であった。レイゼン公爵程その考えを徹底している者は少ないが、セリーヌの父でさえ娘可愛さと、いずれキシェラ男爵家を継ぐ準備の為に学問を許してくれたに過ぎない。

もしこれでフィリシティア姫が、本当に父のレイゼン公爵に言われるままの空っぽな娘だったら、セリーヌはこんな事は思わなかっただろう。目の前の妖精じみた少女は、エルドシールに恋をしているのだ。恋故にエルドシールの妻、王妃になりたいと望んでいるから、自分の打算が後ろめたい。

全く厄介な事になったものだわ、と、セリーヌは内心で深々とため息をついた。

つかの間の平和１０

その日、フィリシティアはまだ日が昇るか昇らないかという早朝に目が覚めてしまった。昨夜は昨夜で、なかなか寝付けなかった為に、完全な寝不足である。このような状態で陛下の前に出る等、考えられないとフィリシティアは焦ったが、焦ったところで余計に目が冴えてしまっただけだった。結局もう一度眠る事は叶わず、ベッドの中で己の情けなさに涙を滲ませた。それでもフィリシティアはハンナがやってくる前には、すっかり涙を引っ込めて何事も無かったかの様に振る舞った。

フィリシティアは、ハンナと二人の王宮侍女によって整えられて行く自分の支度を、じっと鏡の中に見詰めた。ハンナはもっと浮かれていると思った主人の静かな様子に、心配げに何度も鏡の中の美しい顔を盗み見た。

「姫様、陛下がどちらへ姫様をお連れして下さるのか、楽しみでございますね」

ハンナは主人の気持ちを引き上げる様に、明るい声で言った。

「……ねぇ、ハンナ。私、変ではない？　何時もと同じかしら？」

「え？　はい、姫様は何時もとお変わりなく、お美しくていらっしゃいますよ」

不安げな主人の声にハンナは慌てて力強く頷き、励ます様に微笑んだ。無表情だったフィリシティアはそれでようやく表情を和らげ、上向いた機嫌に少しばかり弾んだ声でハンナに、今日初めての指示を出した。

「そう。それなら良いわ。ハンナ、確か紅珊瑚の髪飾りがあったわね。あれを出してちょうだい」

「は、はい！では、ドレスも別の物を出して参ります！」

既に白地に青薔薇の模様のドレスを身に付け、青薔薇の造花を髪に飾っていたフィリシティアだったが、時間にはまだ余裕があるので約束の刻限までに間に合わないという事はない。ハンナは慌てて王宮侍女二人を引き連れて、紅珊瑚の髪飾りとそれに合うドレスの捜索に向かった。

春宮殿の使用人は、滞在中のアレシア付きの侍女数名の他は全て侍従で揃えられていた。男の使用人と言えば年嵩の執事や庭師等しか知らなかったフィリシティアは、当初かなり戸惑った。春宮殿に仕える王宮侍従達は秘書的役割をこなす王の侍従達とは違い、宮殿の住環境や食事を整える事が仕事である。王宮侍女と同じで、中、下級貴族の家督を継げない次男以下がなることが多かった。

その内の一人であろう、自分より幾分幼く見える声変わり前の少年侍従が先導の役をすると聞いて、フィリシティアは密かに安堵した。以前の先導はいずれも背の高い、年上の青年侍従であったため、慣れないフィリシティアはなんとなく恐怖を感じていた。年上の若い貴族の男性を見る機会は確かにあったが、夜会等なら常に父が傍にいた。直接口を聞くわけでもない身分が下の王宮侍従が、昼日中、護衛の兵もすぐ近くにいる状況でフィリシティアに危害を加えることなどあり得ないのだが、異性とほぼ二人きりのような、この先導されて部屋に向かう時間が、フィリシティアは酷く苦手だった。

「レイゼン公爵令嬢、フィリシティア様ご到着です」

声変わり前の明るい声を響かせ、少年侍従が到着を告げると、居間の扉がゆっくりと開いた。

朝の光の溢れる室内で立っている人物に、フィリシティアの胸は早鐘を打ち始めた。一歩毎に高鳴って行く胸の鼓動に、フィリシティアは息を詰めて王の前へ進み出、火照る頬を隠す様に裾を摘んで優雅に膝を折り、深々とお辞儀をした。

「レイゼン公爵が次女、フィリシティア、ただいま陛下の御前に参りました。謹んで朝のご挨拶を申し上げます」

「私からも朝の挨拶を申し上げよう、フィリシティア姫。顔を上げて、我が手を取られよ」

フィリシティアは増々頬を紅潮させ、おずおずと差し出された王の手に、自分の手を重ねた。

「そなたは後宮の庭園が殊の外お気に召したようだと聞き及んでいるが、それに相違ないだろうか？」

「はい。とても美しいお庭で、時を忘れて過ごしてしまいます」

「それは良かった。あの庭は私の独断でかなり手を入れている。そなたさえ良ければ私が改めて案内したいと思うが、如何だろうか？」

「はい！」

フィリシティアは余りにも嬉しくて思わず大きな声で返事をして

しまい、すぐにしまったと扇子で口元を隠し、俯いた。

「……とても嬉しゅうございます」

「では、参ろう」

王からは微かに笑うような気配がして、フィリシティアは恥ずかしさの余り気を失ってしまうかと思った。

あぁ、またやってしまったわ！　きっと、陛下にはしたない女と思われてしまったに違いないわ……

折角王に手を引かれ庭園に向かったものの、道中フィリシティアは後悔と己の情けなさに囚われて王に話しかけられてもまともに返事が出来ず、余計落ち込んだ。

そんなフィリシティアを見かねたのか、王は庭園に入ってすぐのベンチに彼女を誘った。つい昨日、フィリシティアとセリーヌが話したベンチだ。

「そなたは本当に無口だな。私も人の事は言えぬが。見たところ何か気落ちしているようだが？」

「っ、あの……陛下、申し訳、ありません……」

心配しているかの様な王の問いに、フィリシティアはなんと答えて良いか分からず、申し訳なさで涙が滲んだ。それに、これ以上何か言って、はしたない女だと王に思われたくなかった。

俯くフィリシティアに王は静かに溜め息を吐いた。

「話してはもらえぬか。仕方無い、では私の話を聞いて頂こう。予

め言っておくが、私は話す事が得意では無いから面白くはないかも知れぬぞ？」

「そんなこと……！　陛下のお話し下さることなら、何でも嬉しく思います」

殿方に対して徹底的に受け身であるよう教育されたフィリシティアは、王の言葉にほっとして、ようやく顔を上げた。勿論、王の話を聞けるのも嬉しかった。

「ならば遠慮無く。そなたの父、レイゼン公爵の理想の女性は、もの言わぬ花のような女らしいが、私にはその考えが良く分からぬ。もの言わぬ花は、花でしかない。私はもの言う花の方が魅力的に感じるが、そなたはそう思わぬか？」

突然、父の事を言われてフィリシティアは目を丸くした。しかも、絶対的に正しいと思っていた父の言うことに、絶対的な唯一の方である国王陛下が異議を唱えておられる。

フィリシティアの混乱を察したのか、王は僅かに眉根を寄せて首を傾げた。

「急に言われても、返答の仕様が無いか。そなた、薔薇が好きか？」

「……はい」

単純な今度の問いには、フィリシティアはちゃんと答える事が出来た。すると、王も少し安堵したかのように雰囲気を和らげ、フィリシティアもそれを感じ取っておずおずと肩に入った力を抜いた。

「では、その薔薇がそなたに話しかけて来たら、そなたはどう思う

？　例えば、ごきげんよう、姫君。今日は良い天気ですね、と話しかけて来たら？」

「薔薇が、ですか？」

「そうだ。実際、かの神子ハーナ様は植物の声が聞こえる方だったと言う」

「まぁ……」

「それで、そなたは薔薇に話しかけられたら、どう思う？」

王の問いかけは、少しばかり突拍子も無かったが、フィリシティアは一生懸命それを想像してみた。薔薇が話しかけるというのはやはり想像出来なかったが、薔薇の花の上にちょこんと座った可愛らしい薔薇の精に話しかけられる様は想像出来た。自然と、フィリシティアの口元に笑みが浮かぶ。

「……嬉しい、と思います」

「私も嬉しいと思うだろうな」

そう言った王の瞳が、フィリシティアには優しく映った。まるで血の色の様で恐ろしかった王の瞳の色は、今では真っ赤に熟れた、あの王の植えた木に実る林檎の様に慕わしい。王は唇で微笑まず、その瞳で微笑むのだとフィリシティアは知った。

王は、私がもの言う花であることを望まれている。フィリシティアはそう感じたが、何を話して良いか分からない。そんなフィリシティアの内心を察したのか、王はふと、フィリシティアの銀の髪を飾る美麗な透かし彫りを施した櫛型の紅珊瑚の飾りに目を留めた

「その紅珊瑚、そなたの髪に良く映えるな。とても良く似合っている。紅色がそなたは好きか？」

紅珊瑚は紅玉程には硬質ではなく、どこか温もりを感じさせる色合いで、フィリシティア姫の染まった頬の色に似ていた。

「はい、ありがとうございます。あの……」

王との逢瀬に自分で選んだ紅珊瑚の髪飾りを褒められて、フィリシティアは増々頬を赤らめて喜びに胸を高鳴らせた。

何故この髪飾りを選んだのか、王にお伝えしたい。そんな気持ちがフィリシティアの中に沸き起こるが、無意識にそんな事ははしたないと歯止めが掛かってしまい、口籠ってしまう。

「……ゆっくりで良い」

「は、い。前は、私はそれ程、紅色は好きではありませんでした」

王に励まされて、フィリシティアはゆっくりと話し始めた。

「そうか。では、紅色が好きになるきっかけが何かあったのだな」

「はい。……陛下の髪と、瞳が、とてもお美しいので、好きになりました」

そう告げたフィリシティアの言葉に王は僅かに目を見張り、ほんのりと耳朶の辺りを赤くした。

「そういえば、そなたは私の髪を褒めてくれたな。では、私は紅珊

瑚の精にきっと感謝されていることだろう。こうしてそなたの髪を飾ることが出来て、紅珊瑚も喜んでいるだろうから」

先ほどよりは格段に気持ちが解れたらしいフィリシティアの嬉しそうな顔を見て、王は立ち上がった。

「では、そろそろそなたを案内致そう」

差し出された王の手に、今度ははにかみながらもフィリシティアは迷い無く自分の手を重ねた。

つかの間の平和１１

最初に王がフィリシティアを案内したのは、小川の流れる森の小道だった。
「そなたは、ここは好きか？」
「はい、昔避暑に訪れた湖畔の森に良く似ております」
「そうか。ここはな、私が生まれ育った場所の近くにある森を真似て作った。夏には水浴びをし、魚や木の実を採り、黒兎や鹿を狩り、薪を拾った森だ」
「まぁ……」
フィリシティアには、森の小道は散歩以外の事をする場所では無かった。王の話に驚きつつ、木漏れ日に輝く小川や、小さな動物が飛び出して来そうな茂みを不思議そうに眺める。
「そなたには経験が無いだろうが、森というのは民に大きな恵みを齎す、素晴らしい場所だ」
王の言葉に、ふとフィリシティアはセリーヌの言葉を思い出した。下草の茂る土は、黒々としていた。
「本当に、黒い……」
「黒い？」
「いえ……あの、セリーヌ様が、先日、本当の豊かな大地の色は黒に近い色をしていると、教えて下さったのです」
「あぁ、土の色か。確かにそうだな。だが、私にとっての豊かな大地の色はこれではない。これは、豊かな森の土の色だ」
王は一つ頷いて、次の庭園に導いた。そこはフィリシティアが既に何度か足を運んだ果樹園だ。王はその入り口で立ち止まり、茂る果樹の林を見渡した。
「この国の農地は、何処もこんな色をしている。私が生まれ育った修道院の畑も」
目を細める王の言葉に、フィリシティアは改めてその土を見た。

その土の色は、確かに黒と言うよりは少し濃いめの茶色であり、それはかの人の髪の色に似ていた。
「セリーヌ様の、髪の色ですね」
「そういえば、そのような事を申したな」
僅かに驚いた様子を、その紅の瞳に見せる王を見上げ、フィリシティアは思い切って再び口を開いた。
「あの……、チェルネイア様の髪は、上質の鹿の毛皮でした」
「そのような事も、申したな」
今度は少し、王は眉間に皺を寄せた。それを見て、フィリシティアの心臓はきゅうっと締め付けられるようだったが、王は相変わらずの調子で再び話し始めた。
「そなたは知らぬだろうが、庶民の靴は木の皮を鞣したものか、木靴が殆どだ。私ももっぱら木靴で育ったが、木靴は成長と共にすぐに履けなくなって痛くて仕方が無いのだ。だから、初めて鹿の毛皮で出来た靴を履いた時には、驚いたものだ。この世にこんな心地の良い靴があるのかと。しかし、本音を言えば裸足が一番だ。木靴は痛いというのもあって、寒くない時期は裸足で過ごすことが多かった」
どうやら王は不快に思ったわけではないらしく、フィリシティアはほっと胸を撫で下ろし、驚きと共に王の話に聞き入った。が、最後の下りでフィリシティアは頬を赤くして俯いてしまう。その様子に気付いた王は、あぁ、と今度は先ほどよりも分かりやすい苦笑を浮かべた。
「淑女であるそなたには考えもつかない事であろうな。だが、裸足で歩く大地は、とても気持ちが良いものだ。小川の冷たい水も、素足にはとても心地良い」
当然のことながら、フィリシティアは裸足で外を歩くことなどしたことが無かった。というよりも、そのようなことは考えられなかった。靴を脱ぐ機会というのは、貴族にとっては入浴時かベッドに入る時だけで、素足を見せるという行為は、つまり性的な誘いと同

義であった。
　王は話題を変えようと、果樹園の中を進みながら話題を探し、ふと一つの木の前で立ち止まった。それは、フィリシティアがお気に入りにしている、あの林檎の木だった。
「この林檎の木は、私が植えた。修道院から小さな苗を貰って来て植えたのだが、翌日にはこの様に背も高く茂って、花も実も付いていた」
　フィリシティアは、驚きに俯いていた顔を上げてまじまじと自分より背の高い林檎の木を見詰めた。実家の庭の木々は、そんなにすぐに大きくはならなかったはずだ。
「まぁ……林檎の木というのはそんなに成長の早いものなのですか？」
「いや。普通なら苗がここまで成長するには少なくとも五年は掛かる。五年が、一晩だ。さすがは神子の遺産と言ったところか。しかし、私としてはゆっくり育てたかったので正直なところ残念だった」
　王の言葉が、本当に心底残念そうな様子だったので、フィリシティアは不思議そうに首を傾げた。
「林檎の木を育てるのは、そんなに楽しいのですか？」
「林檎に限らず植物を育てて実りを得ることは、とても喜ばしい事だ。しかし、楽しいこともあるが悲しい事もある。一つ、そなたにやろう」
　悲しいこととは、何なのだろうかとフィリシティアは聞きたく思ったが、慣れた仕草で王が？いだ林檎を渡されると、そんなことは霧散してしまった。
　陛下が手ずから？がれた、陛下の林檎。
　そう思うとどんな価値のある宝よりも、その林檎は素晴らしいものに感じて、思わずフィリシティアの受け取る手が震えた。
「ありがとうございます」
「言っておくが、それはそなたが普段食べ慣れているだろう高級品

とは種類が違う。酸味が強いから、ジャムにでもすると良いだろう」
嬉しさに頬を上気させ、フィリシティアが礼を言うと、王は少し戸惑ったような声音で言い、もう一つ林檎を？いだ。
「陛下も、この林檎をジャムにしたものを食されるのですか？」
「いや、私はこのまま皮ごと齧るのが好きだ」
「か、齧るのですか？」
「行儀が悪いと叱られるので、ここでこっそり食べる」
驚くフィリシティアを尻目に、王は軽く林檎の表面を擦ってから無造作に林檎に齧り付いた。
フィリシティアは手にした林檎と、王の顔を交互に眺め、それから王の真似をして林檎の表面を手で軽く擦ってみた。すると林檎が先ほどよりも紅の輝きを増しているように感じて、その不思議さに一瞬見蕩れた。もう一度王を見上げると、フィリシティアの様子をじっと興味深気に窺っている。こんなはしたない事、父は絶対許さないだろうとフィリシティアは思った。思ったが、心の中で父に謝罪して思い切ってその赤い果実に歯を当てた。
シャリ、と小気味良い音がして、フィリシティアの口の中に酸味の強い果汁が広がった。予想以上の酸っぱさに、フィリシティアの目に涙が滲む。
「だから言ったではないか。無理をするな」
呆れたように王に言われると、フィリシティアは何故か酷く悔しく感じた。
「いいえ、私、酸っぱいものが好きですから、無理などしておりません」
普段なら決してそのような物言いをしないのだが、フィリシティアはらしくない意地になった顔をしてもう一口林檎を齧った。やはり林檎は酷く酸っぱかったが、隣の王もシャリシャリと音を立てて林檎を食べているのを見て、なんだかとても誇らしい気持ちになった。本当に、酸っぱい林檎が好きになりそうな気がした。
「私の林檎は、お気に召されたか？」

「はい」
「そうか。ならば何時でも好きな時に？いで食べたらよい」
王はそう言って、もう一つ林檎を？いでフィリシティアに渡した。
フィリシティアは、その林檎を大事にレースのハンカチに包んで持ち帰った。夢のような時間はあっという間に過ぎてしまったが、夢の余韻は長く続いた。ハンナに暇をやり、一人部屋でレースの包みを開き、愛し気に林檎を撫でているだけで、フィリシティアは今までに感じた事の無い満たされた時を過ごした。

つかの間の平和１１（後書き）

今年最後の更新です。
これにてつかの間の平和は終了、年明けからは大きく事態が動く予定です。

嵐の始まり1

いよいよ明日、正妃候補達の大々的なお披露目である、大舞踏会が開かれる。
王宮侍女を筆頭に、王宮に携わる人間全てがその準備に追われていた。主役の一人でもある王、エルドシールもまた、明日の準備の為に早めに執務を切り上げ、まだ夕日が空にある内に春宮殿に戻った。
真っ先にエルドシールを出迎えたのは、昼過ぎから姿が見えなかったオーランドだった。
「陛下」
「何かあったのか？」
足早に近付くオーランドの顔色は、心なし悪い気がしてエルドシールは顔を顰めた。
「はい、実はモリーツが」
軽く一礼して、オーランドが耳打ちして来た内容に、エルドシールは厳しい目をして頷いた。

春宮殿の地下には、貯蔵庫と使用人達の部屋がある。ただ、この使用人達の部屋は今は物置になっていて普段は全く人気が無い。
その埃っぽい一室に、鳶色の髪をした若者がうつ伏せに横たわっていた。背中には痛々しい程に白い包帯が幾重にも巻かれ、目に痛い深紅がその白に滲んでいた。処置の途中で現れた王に侍女は慌ててひれ伏し、オーランドに促されて逃げるように退室していった。
エルドシールは意識の無い若者を厳しい顔で見下ろし、そっと上掛けを傷付いた体に掛けてやった。
「説明を聞こう」
「昼過ぎ、門番が私に使いを寄越して来ました。陛下の一大事だか

ら、どうしても内密に私に連絡を取ってくれと門番にモリーツが頼んだようですが、私が駆けつけた時には既に意識を失っておりました。傷はそれ程深くはないようですが、失血多量で余り良くない状況です」
「では、其方はモリーツから何も聞いていないのだな」
「はい」
「他言は？」
「一切しておりません。知っているのは門番とその妻、手当をした御典医見習い、それに先ほどの侍女です。後者二人は口が堅いので心配ありません。しかし門番夫妻については口止めはしておりますが、そう長くは保たないかも知れません」
　そつの無いオーランドの対応にエルドシールは一つ頷いて、びっしりと汗をかいたモリーツの額を粗末なテーブルに置かれていた濡れタオルで拭った。そんな事は私が、とエルドシールを止めるオーランドにその濡れタオルをひょいと手渡して、微かに笑みを浮かべた。生真面目な性格は、モリーツが一番オーランドに似ており、王付き侍従の中でオーランドが一番目を掛けているのは実はモリーツだとエルドシールは感じていた。そして、モリーツがオーランドを尊敬していることは、その行動の端々に現れていた。
「モリーツの事は其方に任せた。後で心強い助っ人を付けてやる。意識が戻り次第我に知らせよ。見習いの医師には、絶対にモリーツを死なせるなと言っておけ」
「御意」
　深々と頭を下げるオーランドを、しばし見詰めてからエルドシールは再び口を開いた。
「それから……。オーランド」
「はい」
「其方が、其方ゆえにモリーツは其方を頼ったと思う。筆頭侍従ゆえに、ではなく。我もモリーツその判断は正しいと信じる。其方は我を歯がゆく思っているのは知っているが、その忠誠心には二心無

いと信じている。では、頼んだぞ」
一気に言い切って、唖然としているオーランドを残し、足早にエルドシールはその部屋から出て母の部屋に向かった。
少々過激なところがあるものの、オーランドの生真面目な仕事ぶりをエルドシールは評価していた。ドールーズなどは、そういう融通の利かない過激な正義感の持ち主が一番危険で厄介なのだと言うが、エルドシールはオーランドがそうだとは思えなかった。確かに真面目で正義感が強いから穏健派の父、レイゼン公爵とは折り合いが悪いし、エルドシールの煮え切らない政務に対する態度に苛立っている印象を受けることもある。しかしそれは、仕える主を一度失ったゆえの激しい後悔が背後にあるとエルドシールは感じていた。
前王太子で、エルドシールの異母兄、優美で知に秀でていたというシェーンセレスト王子。オーランドはいつもエルドシールの背後にその人を見ている。最初こそ比べられているような気がして少なからず反発を感じたものだが、そういうわけではないらしいと彼の態度を見ていて思うようになった。しかし、最初の印象というのはなかなか頑固で、どうも最後の最後で信じきる事ができないまま来てしまった。
それも、キヨが来てからすっかり消えた。消えたと言うよりは、自分の直感と相手を信じる勇気を取り戻したと言うべきか。
「しかし、ありのままの自分の気持ちを言うのは、恥ずかしいものだな……」
最初反発を感じていたからか、ガッシュに告げた時の数十倍は恥ずかしく感じた。自分の直感が間違っていたら、その時はその時だ。今はモリーツの為にも、出来る事をする。
そう心に決めて、エルドシールは母、アレシアの部屋の扉を叩いた。
「母上、失礼する」
先触れも無く現れた息子に、アレシアは驚いて刺繍の手を止めて立ち上がった。部屋に控えていた、見慣れぬ侍女も慌てて壁際に下

がって深々と頭を下げた。その横を通り抜けてエルドシールは型通りにアレシアの前に軽く膝を折り、礼をすると急いでその手を取って椅子に座るように促す。そのまま身を屈めてアレシアに耳打ちした。

「キヨは？」

「今、フィリシティア姫付きの侍女のところです」

「では、戻ったら私の部屋に寄越して下さい」

何かあったのだとアレシアは察して囁きで素早く会話を交わし、会話が済むとすぐに体を起こしたエルドシールを見上げて、アレシアはゆったりと微笑んだ。

「では、後ほどキヨに緊張を解す効果のあるお茶を運ばせましょう。そういえばあなたは結構な上がり症でしたね」

からかうような響きのアレシアの言葉に、エルドシールは軽く眉間に皺を寄せて頷いた。

「面目無い。お心遣い有り難うございます。では、明日の準備があるのでこれで失礼させて頂きます」

見慣れぬ侍女を僅かに気にしつつ、軽く会釈をしてエルドシールは来た時と同じように足早に部屋を去っていった。残されたアレシアは、微笑みの影でゆっくりと震える吐息を吐いた。

嵐の始まり2

明日の為の最終的な衣装合わせが一段落した頃、不意にノックの音が響いた。
「陛下、慈母様付きの侍女が参っておりますが」
扉の外に待機していたセッペロの声に、良いところに来たとエルドシールは内心ほくそ笑んだ。これ以上衣装合わせに付き合うのは、辛いと感じ始めたところだった。
「通せ」
扉が開かれると、キヨがお茶の準備を整えたカートを押して入って来た。カートを押す姿も、膝を折って胸の前で両手を交差させる礼も、随分とさまになって来たなとエルドシールは感心しながら眺めた。少し前まで結構あら削りな感じがしたのだが。
「陛下、お寛ぎのところ失礼致します。慈母様から陛下へお茶を預かって参りました」
「そうか、ご苦労。丁度良い、一休みするので其方達は下がれ」
衣装合わせの為に来ていた王宮侍従達に告げると、一礼して一斉に音も無く退室して行く。未だに人に命令する事に慣れた気がしないエルドシールは、その徹底した影に徹する侍従達の行動に疲れを感じて米神を軽く揉んだ。
そんなエルドシールを尻目に、キヨは淡々と薬草茶を準備し始めた。
最初の頃感じた不安を全く感じさせない慣れた手つきで茶を供すキヨを眺めながら、エルドシールは今後の事を目まぐるしく考えていた。
モリーツの事もあり、色々と対策をしておかねばならぬ事が増えた。
「……それで、何があったの？」
前に置かれた薬草茶に手を伸ばし、独特のすっとする味を一口味

わってからエルドシールは口を開いた。
「モリーツが斬られた」
「ええと……？」
眉間に皺を寄せて首を傾げるキヨに、話さなかっただろうかとエルドシールも首を傾げる。
「我の侍従の一人でチェルネイアの義理の弟、ゼットワース侯爵の三男だ」
「あぁ、一番若い子。えっ、あの子が斬られたって、どういうこと？」
モリーツの姿を思い出したのか、途端に顔色を変えたキヨにエルドシールは軽く頭を振った。
「まだ、分からん。今は意識は無いが、助かるだろう。意識が戻ってから聞くしか無い。意識を失う前に、我の一大事だから筆頭侍従のオーランドに内密に連絡を取りたいと門番に訴えたそうだ」
「エディの一大事って、そりゃ穏やかじゃないわね」
顔を曇らせるキヨに、エルドシールも重々しく頷いた。
「今地下の一室に匿っているが、あそこは環境も悪い。済まないが其方が隠れ蓑になってくれないか？」
「私の部屋をモリーツっていう人の病室にすれば良いの？」
言葉の意図を正確に汲み取ったキヨの答えに、エルドシールは満足げに微かに口の端を上げた。
「察しが良くて助かる。其方の具合が悪い事にすれば医師や世話をする侍女の出入りも誤摩化せる。我の筆頭侍従のオーランドも出入りすると思うが、我慢してくれ」
「分かった」
あっさりと頷くキヨは、やはり並みの女性ではないなと改めてエルドシールは思った。普通は結婚前の女性がたとえ病人だったとしても自室のベッドに異性を寝かせるなど、とんでもない事だ。まして、キヨは神に仕える身。上に立つ人間として、彼女のような使い勝手の良い人材は全く得難く有難い。

「其方の方も何かあったのだろう？」
「ええ。そりゃもう大きな事があったわよ」
エルドシールが話を振ると、キヨは賢そうな黒い瞳を輝かせてにっと笑った。キヨがフィリシティア姫の侍女と逢っていた理由は、以下の通りだ。
セリーヌの侍女、メイミとフィリシティア姫の侍女ハンナ、それにキヨは、同じ新参者同士でそれなりに仲が良くなり、時間が開いた時などは良く一緒にお茶を飲むようになったという。そんな時、メイミがまずハンナの異変に気付いた。元から少しおどおどしたところがあったハンナだが、王とフィリシティア姫の逢瀬があった日を境に目に見えて顔色が悪く、いつも怯えた様子で胸の辺りを押さえるようになった。心配したメイミがキヨに相談し、キヨがハンナに逢って来たのだ。
「あのオドオドっぷりは確かに普通じゃなかった。でも、問題は部屋から彼女が顔を出した瞬間に、額の宝玉が熱くなったことよ。危険を知らせる宝玉の反応は、普通は触れたりよっぽど近付かない限りしない筈なのに、よ。よっぽど強い毒だと思うわ。それで、咄嗟に私言ったの。『不思議な匂いですね、ハーブですか？　具合がお悪いようですが、ハーブは時には猛毒にもなる事がありますから摂取にはお気を付けた方が宜しいですよ』って。そしたら彼女真っ青になって泣き出して。後は心配するふりをして、その“ハーブ”の事を聞き出したの」
「聞き出すまでしたのか」
下手をしたらキヨ自身の命も危ういような状況だ。気の小さい娘が相手で良かったが、よくよく無謀な事をするとエルドシールは呆れた。しかし、キヨは自慢げに黒い瞳を輝かせて胸を反らした。
「聞いただけじゃないわよ。服の中に首から下げていた匂い袋を見せてくれたわ。触ってみたら、額がもう火事みたいに熱くなったから間違いないと思った。泣いてしゃべれない彼女を慰めながら、毒と知らずに持ち込んで後から毒と気付いて恐ろしくなった、という

話を誘導尋問ででっち上げて、これは私が処分するって巻き上げて来たわ。それがこれ」
キヨはカートの上の茶葉を入れる陶器の箱を指差した。証拠品まで押収して来るとは、と、エルドシールは渋い顔をしてその箱を手に取った。
こんなものを渡されても正直保管に困る。かといって、そのまま野放しの方が困るが。こういうものは専門家に任せたいところだ。毒の正体を調べねばならないし、しばらくグラスローにでも預けるか。しかし、よっぽど特殊な毒でも無い限り、証拠品と言っても直接レイゼン公爵に繋がることを証明するのは難しいだろう。残念だが、軽い脅しくらいにしかならない可能性が高い。
それにしても、失敗したとなればその侍女と家族の命が危うい。レイゼン公爵に警戒心を抱かせずに身柄を確保する手だては無いものか。
「見逃しちゃ、まずかった？」
はっとして顔を上げると、キヨが不安げな顔をしてこちらを窺っていた。
「いや、大丈夫だ。今の段階でレイゼン公爵と事を構えるのは得策ではない。だが、その侍女の身柄と家族は押さえておかねばなるまいと、考えていただけだ」
「そうね。いざという時の切り札になるし」
ほっとした顔をするキヨに頷いて、残りの薬草茶を飲み干す。
そこではたと、エルドシールは気になった事を思い出した。
「そういえば、母上の部屋に見慣れぬ侍女がいたが」
「あぁ、それは多分さっき話に出て来たメイミよ。セリーヌ嬢の侍女の」
「セリーヌ嬢の、か。ならば問題はないだろう。が、気は抜くな、キヨ。何か起るとすれば明日の舞踏会後だと思う。しかし、何かあれば明日は我自らは動けぬだろうから対応が遅くなる。そこを突いて来る可能性も捨てきれない。外からの刺客は警備兵を増員したか

ら対応出来ると思うが、内部は舞踏会に人手を取られて手薄だ。決して母上に信用出来る人間以外を近付けるな。毒は其方がいれば大丈夫だとは思うが」
　アレシアは尼僧の為、舞踏会には出席しない。そこがエルドシールが神経質にならざるを得ない点だ。レイゼン公爵が娘の晴れ舞台の日に事を起こすとは思えないし、侍女の方の芽はキヨが摘んでくれた。しかし、ゼットワース候の方は未だにその人柄を把握しきれないところがあり、どのように動くか未知数な部分が大きい。たとえアレシアの存在が邪魔だという理由がなくとも、誰かを陥れる為に殺害に及ぶ可能性はいくらでもある。また、神殿の政治に対する影響力の増大を懸念しているガルニシア侯爵派の中の一派が、独断で不穏な動きを見せているともドールーズから報告が来ていた。
「分かった、女官長次官にも伝えておく。何だか緊張するわね。実際に自分が事件の渦中にいるんだって改めて認識すると、ちょっと怖いわ。今更だけど」
　キヨは珍しく神妙な顔をして、ふるりと尼僧衣に包まれた体を震わせた。
「全く、それは本当に今更な話だぞ。元は其方が焚き付けたことだろう」
「分かってる！　キア神の名にかけてアレシア様は守るわよ、絶対！」
　呆れたように言えば、キヨは顔を赤くして拳を振り上げて声を荒らげた。エルドシールは慌てて顔を顰め、腰を浮かしかけながら扉の方をちらりと見遣ってからじろりとキヨを睨んだ。
「しっ、大きな声を出すな」
「っ、ごめん。じゃあ、そろそろ戻るわ。余り長居すると勘ぐられそうだし」
「それは無いだろう」
　キヨは慌てて小声になり、誤摩化すようにちろりと舌を出して笑った。まるっきり子供の様な表情に、エルドシールは憮然として即

否定した。
「少しぐらい私に花持たせてよ、朴念仁」
「お世辞でもか？」
「お世辞でも」
「あい分かった。次回からは気を付けよう」
「明日、エディも頑張ってね」
「無論だ」
軽快なやり取りの最後は、にっと片方の口の端だけを上げる微笑みでキヨは締めくくり、エルドシールもまた僅かに苦笑を口元に滲ませた。
カートを押して退室するキヨの後ろ姿を眺めながら、友とはこういったものだったなとエルドシールは昔を懐かしく思い出した。一緒に悪戯をして叱られた、あの時の友は今どうしているだろうか。
しかし、そんな思いに浸ったのもつかの間、キヨと入れ替わりにやって来たオーランドを迎え入れ、モリーツの身柄の移動とキヨとの協力などを指示し、その後も色々と対応に追われて一息吐いた頃にはすっかり夜も更けていた。
息抜きにバルコニーに出ると、雲一つない夜空に降るような星が輝いている。エルドシールはその一つが、不意に赤く、禍々しく輝いたような気がして息を飲んだ。
「何も無ければ良いが……」
呟いた言葉は夜の静寂に吸い込まれ、この夏の盛りに何故か背筋が寒くなるような一陣の冷たい風が吹き抜けて行った。

嵐の始まり3

キヨのベッドに横たわる青年は、時折呻き声を上げ、必死で何かを訴えるようなうわ言を言う。しかし、それは意味のあるものとして聞き取るには余りにも不明瞭で、傍らに侍っているキヨはもどかしい思いに焦れていた。

既に真夜中は過ぎている。ランプの灯りだけの薄暗い部屋で苦しむ青年の額に浮いた汗を拭ってやりながら、早く意識を取り戻せとキヨは念じ続けていた。

モリーツの事は顔だけは知っている程度の間柄だ。オーランドも似たようなもので、モリーツを運び込んで来た際に初めて言葉を交わした。

命には別状ないという医師の言葉もあり、キヨはモリーツが心配というよりは彼が握っている秘密が気になってしかたなかった。エルドシールの一大事だという、その情報は一体なんなのか。

汗を拭った額に手を当てると、先ほどよりも熱が下がっているような気がした。飲ませた薬が効き始めたのかもしれない。医師の話では、刀傷を負った状態で長時間馬を走らせた為に傷口が広がり、失血が激しいらしい。今の時点では命に関わる程ではないが、意識が戻らない状態が長引けば衰弱死の可能性もあるという。

「頑張って。間に合わなかったら、こんな傷を負いながら此処まで来たかいがないでしょ？　目を覚まして……」

自宅に帰らず、オーランドに内密の繋を頼んだということは、そこにゼットワース候の陰謀が絡んでいるように思える。それがキヨを不安にさせる。たぶん、エルドシールもそうなのだろう。普段わりと大きく構えている彼が、あれだけ念押しするのも珍しかった。

「うぅ……っ」

再び呻き声を上げてシーツを掴むモリーツの手を、キヨは咄嗟にぐっと握った。見ると、彼の瞼が痙攣して今にも開きそうに思えた。

「モリーツ様、確りなさって下さい」
キヨが声を掛けると、それに反応したかのようにゆっくりと瞼が開いた。そしてそのぼんやりとした瞳が確かに自分を認識しているとキヨは感じて、安堵と高揚に両手で相手の手を握り直した。
「モリーツ様、大丈夫ですか？　今すぐオーランド様をお呼びしますね」
「っ、待って……っ！」
キヨが嬉々として立ち上がると、驚く程の力で腕を掴まれた。たった今、意識を取り戻したばかりとは思えない、鬼気迫る勢いと眼差しにキヨは息を飲んでじっと相手を見詰め返した。
「あなたは、アレシア様の、侍女ですね？　お願いします、どうか、どうか、その前にチェルーに、チェルネイア姫を、呼んで下さいっ」
一瞬、キヨは意味が分からなかった。だったら何故、父であるゼットワース候に知らせなかったのか。必死の形相の彼には悪いが、キヨにはその願いを聞く気にはなれなかった。
「申し訳ありません、私は陛下に全てオーランド様の従うように命じられています。そしてオーランド様には、あなたが意識を取り戻し次第連絡するようにと言われております」
「そこを、どうか……っ！　キア神の僕であるあなたなら、無駄に人が死ぬのをどうして見過ごせますか？」
必死に縋る相手の手に更に力がこもる。腕の痛みにキヨは顔を顰めたが、相手の言葉に心が少しばかり揺れた。
「つまり、チェルネイア姫に知らせなければ、無駄に人が死ぬとあなたはおっしゃるのですね？」
キヨの心の揺れを察したのか、ここぞとばかりモリーツは大きく頷き、その動きに背中の傷が痛んだのか顔を歪めて苦痛を露にした。それでもキヨの腕を掴むモリーツの手の力は緩まない。
「それは、陛下にとって不都合になることはありませんか？」
「決して！」
「それを誓えますか？」

「キア神の名にかけて！」
本当は、こんな事で絆されてはいけないのだろうと思う。しかし、我が身を省みずに必死で縋るこの年若い青年の心を、キヨは無視出来なくなってしまった。エルドシールにしても、モリーツというこの青年には良い印象を持っているようだった。だからこそ、キヨに預けたのだと思う。正直、チェルネイア姫には余り良い印象が無い。しかし、モリーツというこの青年は信じられる気がした。
「分かりました。此処にチェルネイア姫をお連れ致しましょう」
キヨの言葉に、モリーツの瞳からは涙が溢れた。感謝の言葉さえ、忘れた様子で何度も小さく頭を下げる様子に、キヨはいたたまれない気持ちになった。命を掛けても、彼は誰かの命を救おうとしているのだろう。
「ただ、かの方が私を信用するかは分かりません。何か、チェルネイア姫を信じさせるに足る伝言はありませんか？」
モリーツは、しばしの逡巡の後、告げた。
「では、『私の愛しい飴玉』と」
その言葉を確認して、キヨは行動を開始した。飾り戸棚の奥からエルドシールから預かっている国宝を取り出す。泉と神子をモチーフにした家紋が入った指輪をしっかり左の親指に嵌めた。何か不測の事態が起った時、キヨの判断で動くことをエルドシールは許可していた。それはアレシアに何か起った時の為の措置であったが、こんなところで使う事になろうとは思いもしなかった。緊張に震えそうになる指先をぎゅっと握り込んで、キヨは深呼吸した。
でも、これがきっとエディの為になると信じる。少なくとも、モリーツ君はエディと共にこの国の未来を作る若者だわ。キア、どうか私を見守っていて。
「モリーツ様、どうかそのまま安静になさっていて下さい。もし朝になっても私が戻らない場合は、私が失敗したとお思いになって、朝様子を見にいらっしゃる事になっているオーランド様に全てお話し下さい」

キヨの言葉に、キヨが冒すことになった危険に初めて思い至ったのか、モリーツは青い顔を更に青くした。夜中に後宮に忍び込み、妃候補を連れて来るなど、普通で考えれば正気の沙汰ではない。

キヨは何度も申し訳ないと繰り返して涙を滲ませるモリーツに布団を掛けてやり、水を満たした吸い飲みを傍らに置いてやってから軽く微笑んだ。

「全てはキア神の御心のままに。神があなたの想いを祝福なさるなら、きっと上手く行きましょう。では、行って参ります」

闇に紛れる黒いショールを頭からかぶり、キヨは暗い廊下へと滑り出た。

嵐の始まり４

真夜中に突然、慈母様付きの侍女代わりの尼僧が現れた事にも驚いたが、それにも増してその尼僧が告げた言葉に驚愕した。そして、モリーツが密かに自分と逢いたがっている事にも驚いた。にわかには信じられない事だ。しかも、何故モリーツが自分に逢いたいのかは尼僧は知らないという。これでうかうかとこの尼僧姿の侍女について行って、殺されでもしたらとんだ馬鹿者だ。

それに、チェルネイアにとってモリーツは憎い男の息子でしかなかった。上二人の兄達のように、侮蔑や下衆な色目を向けて来る事は無かったが、いつも物陰から様子をうかがうような行動も、哀れんでいるかのような優しさも、大っ嫌いだった。確かに先日久々に言葉を交わしたが、今更何の用だというのか。チェルネイアはモリーツになど逢いたくもなかったが、侍女が告げたあの言葉の威力は大きかった。どうして、あの言葉をモリーツが知っているのか。もしかして、と思う気持ちを止められなかった。

迷ったあげく、結局チェルネイアは愛用の紅のショールを羽織って急かされるままに部屋を出た。夜の後宮は当たり前だが完全に閉め切られている。一つしかない外へ出る門のこちら側には武器を持った侍女が、そして門のあちら側には近衛兵が守っているのだ。どうするのかと思いながらついて行くと、尼僧は普段チェルネイアなどが決して足を踏み入れない使用人達の領域、地下へと向かう階段に差し掛かった。

「これから先、見た事はどうぞ記憶に留めないで下さいませ。本来なら正式な妃となられた方しか知らぬ事でございます」

階段を下りる前に、尼僧は小さく潜めた声でチェルネイアに告げた。それを何故お前が知っているのかと問い詰めたく思ったが、今はその時ではないとチェルネイアは黙って頷いた。

暗い階段を頼りない小さな手燭の灯りを頼りに下り、ひんやりと

した空気の満ちた廊下を進む。どれほど歩いただろうか、そろそろ突き当たりに遭遇しそうだとチェルネイアが思い始めた頃、尼僧が立ち止まった。そして注意深く、ゆっくりと右側の、他と全く変わらない素っ気ない木の扉を開けた。静まり返った廊下に、僅かに軋む音がやけに大きく響く。チェルネイアの鼓動はいやがおうにも高まった。このように後宮を抜け出した事が知れれば、どんな罰が待っているか。想像するだに恐ろしく、後悔が胸を過る。しかし、そうこうしているうちに扉を開けて中に滑り込んだ尼僧が、早くとチェルネイアを急かした。

此処で引き返すくらいなら最初から拒んでいたと覚悟を決め、チェルネイアは唇を軽く噛んで己の弱気を投げ捨てた。

入ってみると、その部屋は倉庫のようだった。小さな蝋燭の灯りに照らされて幾つもの家具や、絵画、小さな小物など、雑多に詰め込まれている。尼僧はその中を迷い無く進み、壁に掛けられていたタペストリーをめくった。実際、尼僧が何をしたのかはその背に隠れていた上、暗くて分からない。しかし、何かカチッというような、歯車が噛み合わさったような音がして、それまで壁だった場所にぽっかりと黒々とした穴が出現した。

驚きに目を見開き息を詰めるチェルネイアを振り返って尼僧は早くとまたチェルネイアを促し、動転していた為かチェルネイアは深く考える前に慌ててその暗闇に飛び込んだ。

尼僧の先導で暗い通路を進みながら、チェルネイアはこれがいわゆる隠し通路なのかと妙に感慨に耽っていた。この通路を通って逃げた妃がいたのだろうか。もしくは、王の子供がいたのだろうか。もしかしたら妃同士の諍いで巻き込まれた侍女の死体や、お手つきになって王の子を宿した女が通ったのかもしれない。いずれにせよ、男の身勝手と欲望の為に苦しんだ女達がきっとここを通ったのだ。悔しさと、言い表せない虚しさが冷たい石の床から這い上がってくるようで、チェルネイアは無意識にショールの合わせ目をぎゅっと握り締めた。

そんな事を考えている内に、どうやら終点に着いたようだった。尼僧はチェルネイアの視線を背中で遮るようにしながら、壁に何かをしているようだった。おそらく、先ほどと同じように鍵かなにかがあるのだろう。再び機械が動くような微かな音がして、音も無く壁が消えた。どんなからくりなのかと驚いたが、そういえば先ほども音はしなかった。思わず聞いてみたくなったが、今この状態では無理だと開きかけた口を閉じた。

その出口をくぐると、やはりそこは地下室の一つのようだった。がらんとした、何も無い部屋には窓も無い。尼僧が、静かに扉を開ける。振り向いてみると、もうあの出入り口はどこにも無かった。前を向き直すと、尼僧が戸口に立ってチェルネイアが来るのを待っている。引き返せないのだという不安に足が竦んだ。それでも、チェルネイアは背を伸ばして一歩を踏み出した。

再び尼僧の先導で暗い廊下を歩き、しばらくしたところでやはり上へと続く階段があった。その階段を上り始めようとする尼僧の腕を、咄嗟にチェルネイアは掴んだ。驚き振り返る尼僧に向かって、チェルネイアは唇に指を当てて見せ、再び元来た廊下に引っぱった。

「人が来る気配が」

チェルネイアの囁きに、尼僧は頷いてすぐ傍の扉をかろうじてすり抜けられるまで開くと、その中に滑り込んだ。チェルネイアも階上の気配に神経を尖らせながら、その後に続く。

そのまま息を詰めていると、案の定、人の足音が微かに聞こえて来た。そしてその足音が階段を下りて来る。チェルネイアとキヨは扉が開けられたら影になる壁際に身を寄せ、手燭の火を吹き消した。近付く複数の靴音からすると、どうやら二人連れのようだった。おそらく見回りの近衛兵だ。

「……地下の空気はどうも苦手だ」

「なんだ、怖いのか？」

「馬鹿言うな」

話し声が聞こえ、続いてすぐ近くの扉を開く音がする。うるさい

程に鼓膜を震わす鼓動に、チェルネイアは祈るような気持ちで目を閉じた。
とうとう、二人の隠れている部屋の前で足音が止まる。無造作に扉が開かれ、その影でチェルネイアは息を止めた。
「……此処も異常なしっと」
幸い彼らはランプで軽く中を照らしただけで中には入らず、すぐに扉は閉じられた。離れて行く足音に良かったと胸を撫で下ろし、隣の人物と全く同じタイミングで震える吐息を吐き出していた。まるで申し合わせたかのような、ぴったり合ったそれに思わずチェルネイアは苦笑を浮かべた。暗闇の中、相手も同じような顔をしているに違いないと思った。それにしても、尼僧というのはこんなに胆がすわっているものなのだろうか。チェルネイアの中では尼僧というのは何かあればすぐに神の名を唱えて大袈裟におろおろする者、という認識があった。それに忍び歩きが上手い尼僧など、聞いた事が無い。
そんな事を考えていると、だいぶ彼らの気配が遠ざかったところで当の本人から囁かれた。
「随分と人の気配に聡くていらっしゃるんですね。助かりました」
酷く感心したような、その囁きにチェルネイアは何故か赤面した。容姿以外のことで褒められるのは慣れていない。お互いの顔が見えないくらいの暗闇で良かったと、チェルネイアは思った。
「……寿命が縮んだわ。これでろくでもない用事だったら死ぬ思いを味合わせてやる」
そう囁き返して、はたと再びあの伝言を思い出す。その言葉の意味を一刻も早く知りたい。
再びあの二人が地下の見回りを終えて階段を上り、階上へと去って行くのをじりじりしながら待ち、十分時を置いてからチェルネイア達は部屋を出た。

嵐の始まり5

その部屋に入った途端、鼻を突いたのは消毒液と薬草の青く苦い臭いだった。ベッドと文机、衣装箱とソファがあるだけの侍女用のこざっぱりしたこざっぱりした、チェルネイアのものからすれば随分と小さな部屋は、入ればすぐに全部が見渡せた。ベッドの横に置かれたサイドテーブルの小さなランプの灯りだけでも、暗闇に慣れた目には十分だった。

ベッドには、見知った顔の男が寝ている。その男はチェルネイアと目が合うと、呻きながら起き上がろうとし、尼僧がその傍らに駆け寄った。

「いけません。折角縫った傷が開いてしまいます」

「っ、有り難うございます、尼僧殿。何とお礼を申し上げて良いか……」

尼僧は苦しそうに呻く男を再びうつ伏せに寝かせ、男の体に掛けてあった薄掛けを剥いだ。

「そう思われるのでしたら、絶対安静にお願いします。あなたが元気にならないことには私はベッドで眠れないのですから」

男の背中には、痛々しい程に白い包帯が一面に巻かれていた。僅かに赤いシミが浮き出ているのが、遠目にも分かった。それを確認して僅かに尼僧の声が固くなる。チェルネイアは傷の事は知らされていなかったので、状況が飲み込めずに戸口に立ちすくんでいた。その間にも、男と尼僧の会話は続く。

「申し訳ありませんがお二人きりにすることは出来ません。この度の事は私の独断ですから、私には見届ける責任があります。あなたが約束して下さった事が守られるなら、他言は一切しません。承諾頂けますか？」

「……あなたを信じます、尼僧殿」

「では、チェルネイア姫」

振り向いた尼僧に名を呼ばれ、はっとしてチェルネイアは顔をそちらに向ける。尼僧はすっと後ろに下がって、ベッドとは反対側に配置されているソファへと腰を下ろした。
何となく、躊躇いながらもチェルネイアは足を踏み出し、ベッドの脇に置かれた椅子に腰を下ろした。間近で見ると、相当背中に大きな傷を負った事が分かる。滲んでいる血の形からすると、右肩から左脇に掛けてざっくりと斬られたらしい。実際の刀傷を負った事のないチェルネイアは、その現実の傷を目の前にして手が震えた。

「ごめん、チェルー。こんな夜中に呼び出して」
モリーツの顔はランプの暖かな色に照らされているのに酷く青白く、それでも笑みさえ浮かべるその唇は色を失っていた。
「……どういう、こと？　背中に怪我をしたの？」
「うん、ヘマやっちゃって」
「相変わらずノロマね。それより、用はなんなの？」
こんな時にまでへらへらしているモリーツに、チェルネイアは酷く苛立った。何故、こんな時まで人の機嫌をうかがうような笑みを浮かべるのか、全く理解出来なかった。
しかし、そのモリーツが、不意に真剣な目をして言った。
「チェルー、君の乳母は、生きている」
突然の言葉に、チェルネイアは何を言われたのか理解するのに時間がかかった。そんなはずは無い。長い時間かけて確かめた、手紙のやりとりでの真実が間違っているはずが無かった。しかし、あの言葉は確かに“乳母”と自分しか今は知る者がいないはずの言葉だった。
言葉の出ないチェルネイアの手を、モリーツは傷の痛みをこらえて腕を伸ばしてぎゅっと握った。
「本当だよ、僕は実際に逢って来た。『私の愛しい飴玉』、あの言葉は、君の乳母から聞いた言葉だよ。きっと君なら分かると思った。

途中で色々あって、斬られちゃって、遅くなっちゃったけど」
すまなそうに苦笑するモリーツの言葉に、まさか、と思いながらも溢れ出す感情が止まらなかった。
本当に、本当に母はまだ生きているのだろうか？
モリーツの言う通り、まだ母はこの世に生きて、私のことをあの懐かしい呼び方で語っているのだろうか？
そう思うと、涙が溢れた。
同時に、先日モリーツとつかの間交わした会話を思い出した。
「……まさか、あの時の私の言葉を聞いて、そんな無茶をしたっていうの？　あなた、馬鹿じゃないの？」
「そうかな？」
「そうよ」
単純に、悔しかった。自分がずっと苦しみ思い悩んでいた事を、たった数日で解決されてしまった事に、理不尽な憤りを感じて。しかも、それを自分が見下していたモリーツが成し遂げた事が、悔しかった。しかし、それを遥かに上回る喜びに、涙が止まらなかった。
そんなチェルネイアにモリーツは静かな眼差しを向け、ゆっくりと口を開いた。
「でも、あのままだったらチェルーは、きっと取り返しのつかない事をしていたでしょう？」
「っ、何の事？」
自暴自棄になって頭を占めていた計画を見透かすようなモリーツの発言に、チェルネイアは急に現実に引き戻されて涙を拭って相手を睨んだ。
「やっぱり図星だった」
「だから、何の事よっ」
苛立つチェルネイアとは対照的に、モリーツは嬉しそうな顔をする。
「昔から図星を指されて誤摩化そうとすると、君は右の眉がピクピクするんだ」

「し、知らないわよ、そんなことっ」
初めて知った自分の癖に狼狽えるチェルネイアに、またモリーツが嬉しそうな顔をする。そして再び真剣な顔になって、チェルネイアの手を握る手に力を込めた。
「チェルー。どうか早まった事をしないで。詳しい事は、まだ話せないけど。でも、本当に君の乳母は生きているから」
もう一度真剣に告げられた言葉に、チェルネイアは信じたい、信じさせて欲しいと切実に思った。もう少し、もう少し母が生きているという実感が欲しかった。
「……乳母やは、他に何か言っていて？」
「泣き虫の飴玉を心配していたよ。飴玉が溶けてやしないかって。琥珀色した、透明な上等の飴玉みたな瞳……。本当だね、チェルーの瞳はそんな色だ」
チェルネイアの脳裏に、懐かしい母の姿が浮かんだ。チェルネイアの瞳の色は、内戦でチェルネイアが生まれる前に死んだ父親譲りだった。
『そんなに泣いたら、私の大好きな飴玉が溶けて無くなってしまうわ。だからどうか泣き止んで』
泣き虫だった幼い自分を、そう言っていつも優しく抱きしめてくれた。父譲りの瞳の色をいつも褒めてくれた、優しい笑顔が今でも鮮やかに蘇る。
止まりかけたはずの涙が、再び滝のように溢れ出た。
「うぅ……、あんた、馬鹿よ。本当に、馬鹿。私、感謝なんかしないからっ」
泣きながらこんな台詞、全く負け犬の遠吠えみたいで様にならないと思った。しかし、今まで必死で意地を張って生きて来たチェルネイアは、モリーツに弱さと涙を見られたことが恥ずかしくて悔しくて、本当は感謝したいのに出て来たのはそんな言葉だった。そんな心情を、またも見透かすようなモリーツの微笑みが憎らしい。
「うん、感謝なんかしなくていいよ」

「感謝はしないけど、借りを作るのは嫌いなの。私が正妃になったら、陛下に言ってご褒美をあげるわ」
「そんなこと、良いよ」
「私が嫌、なのっ」
「でも、僕は受け取れないよ。だって、僕はチェルーに借りを返しただけだもの」
思いがけないモリーツの言葉に、チェルネイアは何の事だと顔を顰めた。
「……何よ、それ」
「チェルーが正妃様になったら、きっともうこんな風に親しく口を聞く事も出来なくなるね。これが、最後かもしれない。だから、良いかな」
「何が良いかな、なのよ」
相変わらず自分だけは全て分かっていると言うような、いけすかない微笑みを浮かべて訳の分からない事を言うモリーツを、チェルネイアは睨みつけた。
するとそれすらも予想済みだと言うように、モリーツは一層柔らかな笑みを浮かべた。
「チェルーは、僕の初恋だよ。ずっと好きだった。孤独な美しい僕の従姉妹。強がりで、でも本当は泣き虫な僕の従姉妹。僕は武人としては全く才能が無いゼットワース家の恥さらしだったけど、そんな僕が腐らずに文の分野で頑張って来れたのは君がいたから。君に相応しい男になりたい、いつか君を父上から解放してあげたいって、ずっと思ってた」
微動だにせず、能面のような顔をして無反応な様子のチェルネイアに、モリーツは苦笑してそっと握ったチェルネイアの手を離した。
「傲慢も良いところだよね。こんなみそっかすの僕が、君に相応しい男になろうだなんて、君を救おうだなんて。でも、こうして、陛下付きの侍従になれたのも、自分に自信が持てるようになったのも、全部、元を辿れば君のお陰なんだ。だから、僕は借りを返しただけ。

チェルーは僕の事なんか気にせず、幸せになって」
　黙って告白を聞いていたチェルネイアの瞳から、再び涙が溢れ出した。
「何よ。何なのよ、訳が分からないわ。あなた、何でそんなに馬鹿なの？　そんな事、私知らない。知らない……っ！　勝手な事言わないでよ、そんな事の為にこんな傷まで負って、本当、あなたって救いようの無い馬鹿っ。馬鹿過ぎて、泣いちゃうじゃないっ」
　チェルネイアは両手で顔を覆って泣き始めた。捩じれた心が、軋みながらも戻ろうとしている。母以外には、この世に信じられる者など居ないと思っていた。母の愛以外に美しいものなど、無いと思っていた。世の中の人間は、自分を利用出来る駒か欲望のはけ口としてしか見ていないと思っていた。
「そんなに馬鹿馬鹿言わないでよ。さすがにちょっとへこむ」
　そんな事を言う相手に、チェルネイアはまだ素直にはなれずに悔し紛れに思わず相手の腕を叩いてしまった。

　後宮の地下の秘密の出入り口まで、尼僧はチェルネイアを送ってくれた。
「……あの、私をモリーツに会わせてくれて感謝しますわ」
　少し迷ったものの、モリーツに会えたのはこの尼僧の理解と協力なしには実現しなかったので最後にそう告げた。何故、慈母様に忠実だと思われるこの尼僧がこのような事をしたのかは不明だったが、なんとなくモリーツに肩入れしたんだろうと思った。
「いいえ。正直申し上げて、私はあなた様に良い印象を持っていませんでした。ですが、今は少し好きになりました」
「あなた……尼僧にしては随分な物言いね」
　地味というか、ともすれば貧相な容貌の尼僧は驚く程あけすけな物言いをして、笑った。
「恐れ入ります。では……」

澄まして会釈した尼僧が再び秘密の抜け道の闇へと体を滑り込ませると、瞬時にそこは元通りの石の壁になった。時間にすれば二刻に満たない程のものだったが、まるで丸一日寝ずに動き回ったかのような疲労を感じた。

チェルネイアは静かに歩き始める。

まずは顔を冷やして瞼が腫れるのを防がなければ。そして、朝一番でカトリーヌに計画の中止を伝える。

そう言えば、あの尼僧の名前は何だったかしら。機会があれば、また話してみたいわ。

そんな事を思いながら自室へ戻るチェルネイアの脳裏の片隅には、ずっと優し気なモリーツの微笑みがあった。

嵐の始まり5（後書き）

いつも読んで下さって、有り難うございます。
嵐の始まりはこれにて終了です。
月曜から仕事が忙しくなるので、また更新がゆっくりになってしまいます、ごめんなさい。
次の更新は金曜日を予定しています。
今後もよろしくお願いします。

舞踏会の幕開け

舞踏会は通常、夕暮れから始まる。この日、昼三刻前から招待客達の王宮入りが開始された。身分の低い者から先に入り、身分の高い者になればなるほど舞踏会開始の直前に入る。夕一刻から開始の舞踏会は、まずは晩餐から始まる。晩餐の為の食堂は四つ用意されており、身分によってどの食堂で晩餐を取るか厳密に決められていた。国王と同じ第一の間での晩餐に招かれることは名門貴族のステータスであり、要職についていても身分が低ければ招かれることは無い。ドールーズなどは副宰相職にありながら格の低い伯爵家なので、第二の間の末席にいた。

そつのないお世辞で周囲に愛想を振り撒きながら、ドールーズは昨夜もたらされた知らせについて忙しなく思考を巡らせていた。アレシアが王宮に来てからというもの、今までは無かった動きを見せている一派がある。ガルニシア公爵と親戚関係にあるトーレ侯爵は右将軍の職にあり、左将軍ゼットワース侯爵が国境警備と地方の治安維持を担当しているのに対し、王都の治安維持と貴族の警護を担当している。そして、伝統的に神殿と仲が悪かった。ちなみに王宮警備の近衛兵団は独立した組織で、団長はレイゼン公爵の義兄であるデニスローン侯爵が務めている。

今朝オーランドと面会を果たしたモリーツは、ゼットワース侯爵縁の某伯爵家でどういうわけかトーレ侯爵の腹心と目される人物が出入りしいたこと、そして深くフードをかぶっていたために確認はできなかったが、エルドシールの叔父サイゲル卿らしき人物の姿も見たと報告した。その情報はすぐにドールーズにも知らされ、ドールーズの中では幾つかの仮説が導き出されていた。今までドールーズはレイゼン公爵こそ最も危険な存在とみなしていたが、どうやら認識を改める必要があるらしい。独自に集めた情報と照らし合わせるとアレシア暗殺のシナリオが見えてくるのだが、ゼットワース侯

爵の狙いが何なのかがどうもはっきりしない。侯爵がこの陰謀によって何を得るのか、もしくは誰を失脚させようとしているのか、幾つか仮説は立てられるものの、決定的な何かが足りない。パズルの重要な手掛かりが一つ、抜け落ちているような感じだ。

「ハロルド、どうかして？」

気付くと眉間に皺が寄りそうになっていて、傍らの叔母が不安げな顔をして様子をうかがっている。

「いえ、なんでもありません、叔母上。仕事の事で少し気になることがありまして。このような時に無粋をいたしまして申し訳ありません」

「まぁ、ハロルド。本当にあなたは仕事の事ばかりねぇ」

未婚のドールーズは、パートナーが必要な席には大概この叔母を伴う。毒にも薬にもならない大人しくて善良な老婦人は、困った顔をして微笑んだ。いい加減に結婚しないさいというようなことを思っているに違いないと、ドールーズは苦笑した。

余計なことを言われないように、ドールーズは如才なく叔母と向かいに座ったコルト伯爵夫妻と、最近の話題について適当に会話を合わせる。御正妃選びの件は既に国中に知れ渡っていて、御婚約の際に催されるはずの祭りを当て込んで旅芸人や商人が少しずつ集まっているようだった。その中に希代の歌姫がいるとのことで、噂話に花が咲いていた。ドールーズは当然そちらには余り興味がないので、相槌だけ打ちつつ再び考えを巡らせ始める。

アレシア暗殺の可能性は切羽詰まった問題として非常に重要だが、実はドールーズにとって一番厄介な印象を受けたのは、サイゲル卿の影だった。ゼットワース侯爵にとってサイゲル卿と繋がることは、命取りになりかねない危険なことだ。サイゲル卿は最近頻繁にフェンリール国と接触を持っている形跡があり、謀反の影が常に付きまとう人物と軍事力を持つゼットワース侯爵が繋がっていると知られれば、たちまち反逆罪を疑われる。そこをあえて接触する理由はなんなのか。サイゲル卿の手札は少ない。獅子王の血を半分引いてい

るという血筋と、フェンリール出身の前王妃に繋がる人脈と情報、そしてフェンリールの外交官や商人達との繋がりくらいだ。ゼットワース侯爵がそれを必要とする理由も目的も仮説は立てられるものの、どれも説得力にいま一つ欠けている。こちらも、何か重要な手掛かりが抜けているように感じられた。

それにしても意外にも骨のある若者だと、ドールーズはモリーツの今回の行動を内心で称賛した。はっきり言えば、父であるゼットワース侯爵に反旗を翻したようなものだ。伝え聞いた話では、遭遇した私兵にどこのネズミかと問われて答えずに逃亡し、その時に背を斬りつけられたということだった。夜間だったこともあり、顔はほとんど見られていないというし、そのネズミが息子だったとはゼットワース侯爵はおそらく知らないだろう。独断でチェルネイア姫の乳母に会いに行ったことは、馬鹿正直に名乗って面会を果たしたから知られているだろうが。もっとも、小さな塔に十人も私兵が張り付いているのだから、ゼットワース侯爵の息子という肩書で正面から面会を求めなければ乳母に会うのは難しかっただろう。チェルネイア姫のたっての願いで乳母の様子を見に行ったということだから、侯爵としてもそう表立って息子を責めるわけにもいくまい。それら全てを承知の上での行動だとしたら、気弱そうに見えて、なかなかどうして強かなところのある若者である。

そうこう考えている内に晩餐が終了し、大広間への移動が始まった。ドールーズも叔母の手を取り、人の流れに身を任せた。

大広間は、華やかな舞踏会の会場に相応しく絢爛豪華な装飾が施されていた。シャンデリアには無数の蝋燭が輝き、金で統一された調度品や壁の装飾がその光を受けて燦然と輝いている。磨き抜かれた白い大理石の床は、美しく着飾った人々を映して万華鏡のようだ。重厚な深紅の天鵞絨（ビロード）のカーテンもまた美しい襞（ひだ）を輝かせ、絢爛たる様相を見せていた。

開け放たれた扉の両側に、式典用の豪華な制服を着た近衛兵がラッパを構えて高らかにファンファーレを鳴らす。すると、大広間に集まった紳士淑女は全て入口から奥の王座まで続く緋色の絨毯の両側に並んだ。

二度目のファンファーレが鳴り響くと、今度は一斉に一同が深く膝を折って頭を垂れる。

「国王陛下、並びに御正妃候補様方、お成りでございます！」

侍従長の高らかな宣言が響き、まず国王が、そして三人の正妃候補が続いた。国王の装いは、白を基調として金の刺繍と装飾を施したベストに、深紅のマントを身に着けていた。夏らしく素材は軽いものを選んでいるのでブラウスは袖の部分などは透けるように薄い。

王は王座の前までくると一同を振り返り、後に従っていた姫君達がその両側控えて膝を折り、頭を垂れたところで、もう一度ファンファーレが鳴る。

「皆の者、面を上げよ」

顔を上げた一同を見渡し、王はゆっくりと口を開いた。

「今宵の舞踏会は、皆知っての通り我が正妃候補らの為のものだ。いずれも我が国が誇る美しき花。その内の一つが、未来の国母となるだろう。我がゼッタセルド王国に栄えあれ！」

栄えあれと一同が復唱し、それを契機に音楽が始まる。最初の曲はゆったりとしたワルツだ。王はまず、フィリシティア姫に手を差し出した。個別の会合が年長順だったのに対し、今回のダンスの順番は年少順と決まっていたのだ。

フィリシティア姫は頬を染めて王の手に己の手を委ね、ホールの中央へと躍り出た。その周りを取り囲むように、紳士淑女もそれぞれ手を取り合って舞踏が始る。

長い長い夜の、それが始まりであった。

波乱1

軽やかに裾を翻して踊るフィリシティアの姿に、多くの者が目を奪われた。青い生地に透ける程に薄く織った白絹を重ねたドレスは、ダンスの動きに合わせて刻々とその色合いを微妙に変える。ふわりと重ねられた白絹が揺れる度に、その上に施された金と銀の蝶が空を舞う様に見えた。控え目に開いた胸元と美しく結い上げた銀髪にはラピスラズリの青い蝶が止まっている。ちりばめられた小振りの真珠が朝露の様な清冽な初々しさを思わせた。

しかし、何より人々の目を奪ったのは、恋知り染めし乙女の微笑みだった。最高級の人形のようと称される薔薇の美少女は、良く言えば控え目な表情しか公の場でみせた事は無かった。それが今宵はどうだろう？　化粧ではなく頬を赤く染め、サファイアのような硬質な青の瞳ではなく、夢見るような海の青で王を見詰める。フィリシティアが王に恋をしているのは誰の目にも明らかで、その様はくすぐったいような微笑ましさを感じさせた。最初の曲が終わる時の寂しそうな表情の、可憐さには女性でも溜め息を零した程だ。

続いて王に手を取られたのは、チェルネイアだ。流れる曲が、アップテンポの難度の高いステップを組み合わせた有名な妖精の悪戯という曲に変わる。すると一部の舞踏自慢達を除いて皆壁際に下がり、皆がチェルネイアに注目する。この踊り手を選ぶ難しい曲を踊らせたら、チェルネイアの右に出る者はいない。今宵のチェルネイアは、余計な飾りの一切無い胸元の大胆に開いた深紅のドレスを纏い、大輪の深紅の薔薇で豊かな栗色の髪に飾っている。うなじに零れ落ちる巻き髪も艶かしく、挑発的についと顎を上げてあでやかに微笑む美女に男は魅了され、女は嫉妬を燃やす。そして軽やかに一分の隙も無く裾を捌き、音楽に合わせてステップを踏み、余すところ無くその舞踏曲の素晴らしさを躍動する体で表現する。激しく、それでいて決して優雅さを損なわず、指の先まで、頭のてっぺんま

で神経が行き届いていながら奔放さと官能的な揺らめきを感じさせる体の動き。
　ことここに至っては男も女も関係なくチェルネイアの舞踏に魅了され、舞踏自慢達も踊りを止めて二人に見入る。王も舞踏は得意な方だが、チェルネイアが相手では全く霞んでしまう程だった。しかし、深紅のマントを身に付けた王と深紅のドレスのチェルネイアは恐ろしく絵になり、そしてチェルネイアの肉感的で挑発的な仕草と、それに対する無表情な美貌の王の揺るぎない態度がまた人々を熱狂させた。凍った心の美貌の王を誘惑する情熱的な美女。娯楽的な芝居っけたっぷりに演出されたような二人の舞踏は、人々の大喝采で終焉を迎えた。
　そして、最後の王のお相手はセリーヌである。曲は再び伝統的なゆったりしたテンポのワルツに戻った。人々も再び広間に三々五々それぞれのパートナーと共に踊りの輪に戻って行く。
　セリーヌの装いは、柔らかな橙色の薄衣を重ねたもので、デザインにしても意匠にしても、特別凝ったものではなく、纏った本人同様に没個性的なものだった。唯一特筆すべきは地模様に歌う小鳥が織り込まれていて、芸術的な絵画のようなその織り模様が手を取り合う程に近付けば分かるというものだった。結い上げた髪を飾るものも、橙のリボンと白いレース、そして暖色系の宝石をちりばめた小鳥の髪飾りと白い羽飾りで、少し変わってはいるが決して奇抜なものではない。
「あれだけ派手な方の後というのは、ちょっと嫌になるくらい自分が埋もれるのが分かりますわ」
　苦笑混じりにセリーヌがエルドシールに囁いた。
「我は注目が逸れて助かったぞ。さすがにアレは疲れる。踊っている最中は楽しくもあるが、アレは舞踏と言うより果たし合いに近い。本当なら一休みしたいところだ」
「確かに、食うか食われるかというような緊張感がありましたわ。チェルネイア姫は当代一の踊り手でしょうね」

そう思っているとは分からない無表情のエルドシールの言葉に、セリーヌはくすりと笑った。
セリーヌもエルドシールも気付いていなかったが、エルドシールが前二人とは踊っている間に言葉を交わさなかったので、地味に注目を集め始めていた。もっともチェルネイアとあの難しい曲を踊っている時に言葉を交わすような余裕などあるわけが無いのだが。会話が漏れない様に少し顔を寄せて言葉を交わす二人の様子が非常に親密に見え、各方面に微妙な波紋を広げていた。まさかのダークホースである。
そんな事はつゆ知らず、無難に一曲踊り終えた二人の元にオーランドが青い顔をしてやって来た。つい最近も見た筆頭侍従の青い顔にエルドシールは眉間に皺を寄せた。耳打ちされた内容に顔色を変えたエルドシールに、すぐ傍にいたセリーヌは何か重大な事が起きたのだと直感した。実際にはエルドシールの表情は殆ど変わっていない。しかし、唇が僅かに震えたのをセリーヌは見逃さなかった。
「何かあったのですわね？　陛下はここから離れることをお望みですか？」
セリーヌの問いに、エルドシールは沈黙で答えた。
「お望みですのね。では、私をお連れ下さい。色々憶測はされましょうが、女性と連れ立ってこっそり場を離れたとなれば無粋にすぐどうこう動く者はいないでしょう」
「すまぬ」
エルドシールは僅かに苦し気な顔をして、絞り出す様に謝罪し、セリーヌの手を取って大広間を後にした。
オーランドがもたらしたのは、慈母アレシアが倒れたという知らせだった。

波乱１（後書き）

いつも読んで下さってありがとうございます。
次回の更新は水曜日を予定しています。

波乱2

アレシアの世話が一番の仕事ではあったが、女官長次官であるベルタの仕事は多岐に渡る。元は春宮殿にはエルドシールのみが住んでいたので、その管理も殆どは王宮侍従が取り仕切っていた。しかし、アレシアが来てからは、それまで無かったこまごまとした仕事も増え、それらはベルタとベルタが信頼する二人の侍女で分担し、直接のアレシアの世話は殆どキヨに任せていた。しかし、昨夜思わぬ事態が起きる。キヨが急な病で倒れたのだ。もっともキヨの急病は仮病で、王の命でとある怪我人を密かに匿い、医者と世話をする看護の為の侍女を出入りさせる為のものだとはキヨから知らされていた。誰を匿っているのかは知らされなかったが、今朝エルドシールから直接アレシアを頼むとの言葉があり、決して信用出来ない者をアレシアに近付けるなと再三念押しされたとキヨから聞いていたのもあり、ベルタは朝からぴったりとアレシアに付いていた。

キヨはアレシアの毒味を一手に引き受けていたので、食事の時だけキヨが配膳室に呼ばれ、毒味後のものをベルタの信頼する侍女の一人が部屋まで運び、更にそこでもベルタの毒味を経てようやくアレシアの口に入る、というものだった。予定通りの段取りで夕食を取り、食後のお茶をアレシアが飲んだときに事件は起った。勿論、アレシアが口を付ける前に同じポットのお茶をベルタが飲み、更にカップに直接毒が塗られていることまで警戒すると同時に温めるという目的でも湯を注ぎ、その湯の味見をした上で捨ててお茶を注いでいる。

それにも関わらず、アレシアは半分程飲み干した頃、突然真っ青な顔をして倒れた。ベルタは悲鳴を上げて扉の外に控えていた侍従に、医者をと叫んだ。悲鳴を聞きつけて駆けつけた護衛兵にも指示を出して春宮殿一帯を封鎖し、水を大量に運んで来させる。

ベルタは倒れたアレシアを抱え起こして必死で水を飲ませようと

した。一体何が起ったのか、ベルタには全く分からなかった。ただ、分かっているのは腕の中のアレシアの命が、消えそうだという事だ。真っ青な顔にはびっしりと汗が浮かび、手足が痙攣して唇が紫色に変色していた。

「アレシア様！　しっかりなさって下さい！」

必死で水を飲ませようとするが、口の端から溢れてしまってどうにもならない。泣きながらベルタはアレシアの血の気の失われた頬を叩き、意を決して口移しで水を飲ませる。するとどうにか喉が動いて水を飲んだ。ベルタは必死でそれをくり返し、五回程飲ませると口の中に指を突っ込んで胃の中の物を吐かせた。周り中に吐瀉物の臭いが立ちこめ、ベルタのドレスも床も汚物に塗れたが、そんなことを気にしている余裕は無い。再び必死で水を飲ませる作業に戻り、また吐かせるが、どんどんアレシアの呼吸はか細くなるばかりだ。最悪の事態に折れそうになる心を奮い立たせ、必死でその作業を続けていると、騒ぎを聞きつけたキヨと手伝いに来ていたメイミが駆けつけた。

「一体どうしたんです！？」

「多分毒よ！　この症状はそうとしか考えられない！」

倒れたアレシアと吐瀉物に塗れた惨状に悲鳴を上げるキヨに、ベルタは鋭く言い放った。

「まさか……っ！」

自分が確認した時は、毒の気配などみじんも感じなかったとキヨは狼狽え、アレシアの足下に転がったカップを咄嗟に拾い上げた。そしてその途端顔色を変えた。

「なんで！？　私が確認した時は大丈夫だったのにっ！」

熱くなった額は、そのカップに毒の痕跡がある事を知らせていた。

「毒の種類は！？」

駆け寄るメイミが食らい付くようにキヨに聞くが、キヨは頭を振るばかりだ。

「私は毒かどうかが分かるだけで、種類は分からないっ」

「かしてっ！」
メイミはキヨの手からカップをひったくると匂いを嗅いだ。花茶の匂いしかしないが、何かあるはずと必死で鼻を利かせる。
そこへ医者が漸く到着した。ベルタに水を飲ませて吐かせる作業を続けさせながら、初老の医師は脈を診たり瞳孔を覗いたりして状態を把握する。
「毒は何に盛られていました！？」
「お茶です！　中味は溢れて無いけど、これがそのカップ！」
キヨはメイミの手からカップをひったくって取り返し、医師に渡したが、医師もメイミと同じく毒の特定が出来ないらしく難しい顔で鼻をカップにくっつけていた。
「ポットにはもう無いのか！？」
医師の言葉にはっとしてキヨはカートの上のポットに飛びついた。しかし、額に熱は感じない。
「違う……違う！　これは毒じゃない！　毒はお茶じゃない！　じゃあ何なのっ！？」
パニック気味にキヨが叫んだとき、エルドシールとセリーヌが現れた。二人も惨状に血相を変えてアレシアに駆け寄る。
そして動揺しているキヨの肩を掴み、エルドシールは怒鳴った。
「キヨ！　落ち着け、お前が取り乱してどうする！　良いか、良く思い出せ、何を毒味したか」
「勿論全部よっ！　食事からなにから全部！　勿論花茶も調べたし、食器類も全部調べたわ！」
「それで、今毒を感じるところはあるか？」
「カップよ！　花茶が入っていたカップ！　でもポットの花茶には毒が入ってない！　カップにも毒は塗られてなかった！」
「砂糖は？」
「砂糖も確かめたわっ！」
半泣きになりながら叫ぶキヨの言葉に、それまで黙っていたセリーヌが動いた。

「砂糖……！　ちょっと失礼！」
セリーヌはテーブルの上の砂糖壺を取り上げると、指を突っ込んで砂糖を舐めた。
「これです！　これですわっ！　犯人は“甘美な誘惑”です！」
「なんだとっ！？」
医師が顔色を変えて立ち上がり、セリーヌに詰め寄る。
「間違いありません。僅かにですけど柑橘系の香りと、舌に残る苦みがあります！」
「確かに……！」
砂糖を舐めてみて重々しく頷く医師は、そして絶望的な顔をしてエルドシールを見た。
「陛下、毒の種類は分かりました。キネレイ草の根から抽出される砂糖に似た物質ですが、熱が加わると猛毒に変質するのです。そしてその解毒には、やはりキネレイ草が必要になります。しかし……」
「そのキネレイ草が、無いのだな？」
医師の表情にエルドシールが畳み掛けるように強張った顔で確認する。医師は苦い顔をして頷いた。
「母上は……あとどれくらいもつ？」
「一晩、もつかどうか……」
「一晩！？　ねぇっ、どうにかしてそのキネレイ、手に入らないの！？」
激しい勢いでキヨは医師に喰ってかかったが、医師は難しい顔をして頭を振るばかりだ。
「キネレイ草と言うのは、南部でも特に熱い地域にしか自生していない、幻の草なんです。毒や薬に関するもので南部の植物はキシェラ男爵家の温室にもありますが、キネレイは稀少過ぎて……」
セリーヌも苦し気な顔をして頭を振った。ベルタは必死で未だにアレシアに水を飲ませて吐かせることを繰り返していたが、セリーヌの言葉を聞いて嗚咽し始めた。重苦しい雰囲気の中、エルドシールは汚物に塗れた母アレシアを抱き上げる。険しい顔をして、ベッ

ドへと母を運ぶその姿に、重い沈黙が部屋を支配した。
「あぁあああっっ！　あります！　ありますよキネレイ！！」
不意に、その沈黙を破った者があった。メイミだ。
「セリーヌ様！　王宮の温室には珍しい植物がいっぱいって話したじゃないですか！　私探検した時に見付けたんです！　持って帰ったら大ババ様も喜ぶからこっそり引っこ抜こうと思っててて、すっかり忘れてましたっ！！」
興奮して叫ぶメイミに一同の視線が一気に集中する。
「どこなのそれはっ！？」
「案内しますっ！」
メイミは転がる様にして部屋を飛び出し、その後をキヨとセリーヌが追った。

波乱3

薬は取り扱いを間違えば猛毒になることがある。もともとキレネイ草は関節の炎症に効く湿布の原料として使われていて、口にする薬草ではないのだ。砂糖の代わりに根をすりつぶして使っているのは、その特性を良く知っている現地の人間くらいのもので、熱を加える料理には決して使わない。数も少なく、通常流通するのは湿布の原料になる葉の部分だけだ。その為、ほんの一握りの人間にしか、この毒は知られていなかった。

そして、砂糖に誤摩化されてお茶の味の違和感を探しにくくなるため、砂糖とお茶は別々に毒味をするのが常識であった。それを逆手に取られたのだ。

解毒用のキネレイが手に入ると分かったところで、エルドシールはベルタと医師にアレシアを任せ、動き始めた。

まずは舞踏会の中止と王宮の封鎖、そして宰相はじめ主立ったもの全てを春宮殿の居間に招集せよとの命を下す。キヨとセリーヌ、そして侍女のメイミ以外のアレシアの部屋への入室を禁じるように指示を出し、頭を冷やす水を一杯飲み干して走り出した。

「オーランド、そなたを信用して頼む。神官長グラスローを密かに春宮殿に連れて来てくれ。大臣どもに気付かれてはならぬ」

「はっ」

ぴたりと付き従うオーランドにエルドシールは耳打ちして密かに命じ、同時に護衛兵の一人にモリーツが寝ているはずのキヨの部屋を王命で封鎖させた。

次は？　何か打っておく手は無いか？

必死でエルドシールは次を考えながら自室に走る。アレシアに向けられた明確な殺意、珍しい毒の選択、これはレイゼン公爵ではない。こんな入手の難しい毒では足がつきやすいから、公爵の性格からして考えられない。身分の低い者を使い捨てと思うからか手の込

んだ事はせず、ひとたび事が起ればそのずさんさを理由に己の関与を否定し、あっさりと切り捨てる。だとすれば今回の黒幕はゼットワース侯爵しか考えられないが、狙いは何なのか。入手困難な南方の毒、これに繋がる犯人、いや、犯人に仕立てられようとしている人物は誰なのか、陥れられようとしているのは、誰なのか。

そこで、はたとエルドシールは今まで考え付かなかった可能性に気付いた。

「まさか……！」

思わず声に出てしまった焦りに、エルドシールは顔色を変えた。きびすを返し、猛然と走り出す。邪魔なマントを引きちぎるようにして脱ぎ捨て、慌てて追いかけて来る護衛の近衛兵と侍従を引き連れ、エルドシールは元来た道を急いだ。階段を駆け下り、アレシアの部屋の前を通り過ぎ、春宮殿の中庭に出る。

その途端に女性の悲鳴が響いた。近衛兵ではない、騎士の複数の姿が夜の闇の中に微かに浮かび上がる。

「やめよ！！　王命である！！」

エルドシールは叫んだ。間に合ってくれと祈りながら。

思わぬ邪魔に、ゼットワース侯爵は忌々し気に舌打ちした。あと一歩というところだったが、騎士達はともかくガルニシア公爵令嬢の前で王命を無視するわけにはいかない。目の前で腰を抜かしている尼僧姿の貧相な娘から、渋々剣を引いた。セリーヌ姫とその侍女を捕らえている騎士に合図して離させる。

「何をしているのだ！？　左軍の騎士を連れて王たる我の住居に許可無く立ち入るとは、どういうことか！？」

いつもは淡々としている王の激高する怒鳴り声に、さすがに侯爵も少し顔を強張らせてその場に跪いた。騎士達もそれに続く。

「大丈夫ですかっ！？」

「私は、平気っ、それより、早くアレシア様に……！」
駆け寄るメイミとセリーヌにキヨはぎこちなく頷き、早くそれを持って行ってくれとセリーヌが持つ薬草を目で示す。
「私が残りますから、お嬢様は早く行って差し上げて下さい！」
メイミがキヨの手をぎゅっと握ってセリーヌに叫んだ。セリーヌも強張った顔のまま頷くとさっときびすを返して走り出す。
「セリーヌ嬢、護衛を連れて行けっ」
すれ違い様にエルドシールはセリーヌに声をかけ、己に付いて来た近衛兵をセリーヌの後ろから追いかけさせる。セリーヌは王の言葉も無視する様に一心不乱に走った。今は一刻の猶予も無い事を、薬に詳しいセリーヌは良く分かっていた。

セリーヌが駆け去った後、エルドシールは険しい表情で跪くゼットワース侯爵の前に立った。
「キヨ、大事無いか？」
「はい、陛下」
震えながらもメイミの手を借りて立ち上がるキヨの姿を見て、エルドシールは間に合ったと心からほっとした。しかし、険しい表情は崩さずに続けてゼットワース侯爵を叱責する。
「左将軍、メレデス・ガレ・ゼットワース。そなた、何故このようなことをした？　申し開きしてみよ！」
「はっ！　恐れ多くもアレシア慈母様が倒れられたと聞き、犯人はこの者に違いないと確信したからです。逃してはならぬと許可を得ずに春宮殿に騎士を連れて参りましたのは、真に申し訳ございません」
「それが真実だとしても、詮議も無しに殺害せんとするとは呆れてものも言えぬ！　将軍職にある者とは思えぬ短慮、恥を知れ！」
しかと見たわけではないが、尋常ならざるセリーヌとメイミの悲鳴からしてゼットワース侯爵がキヨを殺害しようとしていたのは明白だろう。短慮と責められても、キヨが犯人という証拠が出て抵抗

したとかなんとか連れて来た騎士が証言すれば、罪にも問われないだろう。そのような思惑が透けて見えて、エルドシールは吐き捨てる様に怒鳴った。

感情も露に怒鳴るなどという、初めて見る王の姿に近衛兵も侍従も、騎士達も唖然となり、ゼットワース侯爵に至っては自分の見通しの甘さにギリギリと奥歯を噛み締めた。まさか、これ程までに王に覇気があるとは、予想しなかったことだ。その上、解毒剤になる薬草があったらしい。このぶんではアレシア暗殺にも失敗しそうだった。しかし、そんなゼットワース侯爵をよそに、他の者達は別の感情に支配されていた。

「……獅子王様！」

侍従の一人が、雄々しいエルドシールの姿に思わず呟きを漏らし、さざ波のようにその感動が広がる。王者たる者の持つ覇気と、名高い獅子王を彷彿とさせる姿にわらわらと付き従って来た者達も跪いた。

「皆の者、良く聞け。もう知っていると思うが、我が母アレシアが毒に倒れた。予断を許さない状況にある。王宮に出入りする者全てが容疑者であると心得よ。しかし、何人たりとも詮議無しに犯人として殺害する事は禁じる。もし、これを破る者あれば、口封じの為と見なしてその者も同罪とする。ラロース、速やかにこの事をこの場におらぬ皆にも伝えよ」

「はっ」

付き従っていた者の中にいた王付き侍従のラロースは、素早く立ち上がって命令を遂行すべく走り出した。

「キヨ、そなたには嫌疑が掛かっているゆえ、一緒に来てもらう。近衛兵、キヨを連れて来い。ただし、粗略に扱う事も拘束することも許さぬ」

命令を受けた近衛兵がメイミとキヨを取り囲む様にし、まだ足が震えている二人を支えた。それを見届けると最後に未だに跪いたままのゼットワース侯爵を見下ろし、常のような感情を抑えた淡々と

した口調で告げた。
「左将軍。そなたも招集されていた筈だ。詮議の場でそなたの握っているキヨが犯人だという証拠について聞こう。良いな？」
「はっ」
完全に王に場を支配され、主導権も握られた事を悟ったゼットワース侯爵は内心の憤怒を押し隠して従順を装った。しかし、まだ策は破られたわけではない。これからだと、その目に密かに研ぎすまされた野心の光を宿していた。

波乱3（後書き）

いつも読んで下さってありがとうございます。
次回の更新は水曜日を予定しています。

波乱4

「私、メレデス・ガレ・ゼットワースは、ここにいるキヨなる尼僧見習いをアレシア慈母様毒殺未遂の犯人として告発し、合わせてそれに関わったと考えられる宰相レイゼン公爵、並びにグラスロー神官長を告発する」

春宮殿に集められた政治の中枢に関わる面々の前で、ゼットワース侯爵は言い放った。

「何と！　何を証拠にそのようなことを！」

激高するレイゼン公爵は、痩せた元々病的な青白い顔を更に青くして怒りにぶるぶると拳を震わせた。他の者達も、突然の侯爵の爆弾発言に騒然となった。近衛兵に両腕を取られたままのキヨも蒼白になって、唇を噛み締めている。

「静かに。左将軍ゼットワース侯爵、その根拠を聞こう」

一同を静かにさせ、エルドシールは固い表情で続きを促した。

「は。実は、上級神官の一人から相談を受けたのがそもそもの始まりでした。その者が申すには、慈母様付きの見習い尼僧キヨなる者の出自が怪しいということでありました。神殿が管理しているキヨなる者に関する書類をその者が証拠として私に渡してくれたのですが、この書類はグラスロー神官長が自ら書かれたものでした。こちらをご覧下さい」

ゼットワース侯爵は懐から折り畳んだ紙を取り出し、そのままそれを差し出した。侍従のラロースがそれを受け取り、王の元へと運ぶ。

エルドシールがその紙を開くと、そこにはキヨについて適当にねつ造した出自が書いてあった。

名前の欄にはキヨとだけあり、出身は南のマゼン海王国、備考には流民、黒髪黒目とだけ記されていた。

「それに記載されているキヨなる人物は、マゼン海王国出身の黒髪

黒目の流民としか書かれておりません。勿論流民であれば、詳しい出自が分からないのも仕方無いことですが、このキヨなる者は尼僧見習いになってまだ日も浅い。書類の日付は先々月の二十八日となっています。二ヶ月にも満たない。その大半を王宮に上がる為に養女となったドールーズ伯爵家で過ごしている。お立場の重い慈母様の側仕えとするには、余りにも尼僧見習いとしての期間は短く、身元も怪し過ぎるとは思いませんか？」

一同を見回すゼットワース侯爵は不敵な笑みを浮かべた。

「日数的に考えれば、慈母様とキヨ尼僧見習いの関係は王宮に上がった時点でほぼ初対面のはず。キヨらしき人物がそれ以前に修道院に出入りしていたという話も、調べましたが一切ありませんでした。その様な者がなぜ、陛下と慈母様の信頼を得たのか。それは、神官長の強い推薦があった。違いますか、陛下？」

問いかけられたエルドシールは、相変わらず無表情を貫いて問いには答えず、先を促す。

「……それで、何故それが母上の毒殺に結びつくのだ？」

「勿論、怪しいと思い調べてはおりましたが、何も無ければ特にそのこと自体に罪はありません。ですが、警備も厳しく、内部での毒味の体制も整っている春宮殿内で毒を盛ることが出来た者で、怪しい者といえば、この尼僧見習いしかいません。聞けば、その者は毒味を担当していたと言うではありませんか」

そこで一旦話を切り、ゼットワース侯爵は懐から先ほどとは別の書状を取り出し、ラロースに渡す。

「そこにこの手紙です。どうぞ」

エルドシールの手に書状が渡ると、ゼットワース侯爵は自信満々の態度で恭しく頭を下げた。

そして、その手紙の内容を読んでエルドシールは顔色を変えた。名前は伏せてあるが、それは明らかにレイゼン公爵から神官長へ宛てたと思われる内容で、筆跡もレイゼン公爵のものに見えた。アレシアを殺害して王を精神的に追いつめ、最近活発に実権を取り戻そう

とするかのような動きをする王に元の傀儡王戻って頂く。そしていずれは王も暗殺してレイゼン公爵家が王家に取って代わるという陰謀を暗示する内容だった。
　エルドシールは読み終えると、それを傍に控えていた財務大臣であるガルニシア公爵に渡す。他の大臣達がその周りに集まり、その内容に驚愕し、ある者は強張った顔で、ある者は皮肉めいた笑みを押し隠してレイゼン公爵を見た。
　暗殺された前々神官長がレイゼン公爵と繋がり、王家に取って代わろうとして次々と王子達を殺害したという疑惑があったことは、政治の中枢に関わるこの場にいる面々は誰も表立って言った事はないだけで、皆知っている。そして、キヨの養父となったドールーズ伯爵がレイゼン公爵の子飼いの部下であることも良く知られていた。
「しかし、それに何故神官長が関わるのだ？　この手紙の内容が真実だとして、神官長に何の益がある？」
「神殿の政治への影響力を強める為でしょう。特にグラスロー神官長は聖職者でありながら権力欲が強く、強力な支配体制を神殿内に構築し、色々と黒い噂もあるのは周知の事。その上、最近は民の窮状を訴える名目で政治にまで口出しし始めていたことも、周知の事」
「違う！」
　エルドシールに淀みなく答えるゼットワース侯爵の斜め向かいで、密書を読んだレイゼン公爵が叫んだ。そして、エルドシールの前に転がり出るように跪いた。
「違う！　私は断じてこのような手紙は書いてなどおりません！　陛下、私は罠に陥れられようとしております！　そうだ、これはゼットワース侯爵の陰謀ですぞ！　おのれ、軍人風情が！　お前の三男が休暇願いを出して行方知れずなのを知っておるぞ！　あの三男はかの偽物姫の侍女とこそこそ密会しておったのも知っているぞ！
　そうです、陛下！　その侍女こそが犯人ですぞ！　だいたい私は陛下からの手紙でその尼僧見習いの養父としてドールーズとの養子縁組に口添えしたのみ！　断じてその尼僧見習いなどとは関係無い

！　全てゼットワース侯爵の陰謀です！」
　目をぎらつかせ、悪鬼のごとき表情でゼットワース侯爵を口汚く罵るレイゼン公爵を見る皆の目は冷たい。沈みかかっているかに見える船に、権力に魅せられた者達は途端に冷たくなるものだ。
「落ち着け、宰相。改めてそなたには発言の機会を与えるゆえ、今は静かに」
　エルドシールは取り乱すレイゼン公爵を叱咤するように声を掛け、ひたりとゼットワース侯爵の傲岸不遜な表情を見詰めた。
「さて、左将軍。そなたの言い分は良く分かった。宰相の他に、何か意見のある者はあるか？」
　少しざわめいた後、代表という感じでガルニシア公爵が一歩前に出た。
「陛下」
「申してみよ」
「確かにそれなるキヨという尼僧見習いは、怪しいことこの上ない。しかし、それだけで犯人と断定するのもいかがなものかと思う次第でございます。こちらの密書には、暗殺の実行犯については特に人物を特定できるような情報は書いてありません。この上は、凶器である毒が何であるか、どのような状況で毒が盛られたのか、それらの医師からの報告と、春宮殿に本日出入りした者達の事情聴取を執り行ってから判断すべきかと存じます」
「うむ、正論だな。母上の容態も気になる。ラロース、直ちに医師に状況を聞き、可能ならここへ医師を呼べ」
　ガルニシア公爵の言葉にエルドシールは深く頷き、他の者も異論はないようだった。ラロースが命を受けて急いで居間から退出する。ギリギリと歯軋りが聞こえそうに歯を食いしばったレイゼン公爵の恐ろしい形相にエルドシールは一瞬顔を顰め、そして青い顔で立っているキヨに目をやった。
　南の毒は、明らかにキヨを犯人に仕立てる為に選ばれた。これで医師の話で毒の種類が知らされれば、状況としては完全に黒と判断

されるだろう。しかし、キヨには切り札がある。
たとえそれがキヨにとって不本意でも、命にはかえられない。
その時は許せ。
その思いを強く持ってキヨを見詰めると、目を合わせたキヨがわずかに泣きそうな顔をして頭を振ったようにエルドシールには見えた。

波乱5

春宮殿の居間にて事件の詮議が行われていた頃、オーランドは神殿前での騒ぎに立ち往生していた。
「何故右軍の騎士が？」
固く閉ざされた神殿の扉の前に、右軍の青い鎧に身を包んだ騎士達が手に手にたいまつを持って詰めかけている。
「神官長の地位にありながら、国家に仇なす謀反人グラスローを今すぐ引き渡せ！」
指揮官らしき者の声が響き渡る。
ぴたりと閉じた扉はうんともすんとも言わず、苛立った騎士達は大丸太を引っぱり出して扉を破壊するつもりのようだった。
「何と言う事だ、陛下はこれを見越していたのか」
オーランドは唇を噛み締めてその様子を見ていた。これでは表から神官長を連れ出すことは無理だ。
「オーランド殿！」
不意に声を掛けられて、オーランドはびくりと肩を震わせた。
咄嗟に腰の剣に手を掛けて振り向くと、そこには同じ副宰相の地位にあるドールーズ伯爵がいた。
「やはり、こういう事ですか」
伯爵も険しい顔をして神殿前の騒ぎを見遣った。
「おそらく内部に裏切り者がいます。しかも上級神官に」
「何ですって？　何故それをあなたが？」
「それはまた追々。今は神官長様の救出が先です。こちらに！」
促す伯爵に僅かに躊躇うものの、確かにその通りではあるので警戒しつつもその後に従った。

「良かった……。きっと間に合う」
セリーヌはアレシアの額の汗を拭いながら、ようやっと一息吐いた。
キネレイを持ち帰って早速医師と共に調合し、先ほどそれをアレシアに飲ませたばかりだった。量は十分とは言えないから、もしかしたら後遺症が残るかもしれない。しかし、命はきっと助かる。そう信じてセリーヌは拳を握った。
ベッドに横たわるアレシアの呼吸が、心持ち先ほどよりも穏やかになったようにも感じる。
「セリーヌ様、お礼申し上げる。あなた様のお陰で毒の種類がいち早く分かり申した。調合の方も、あなた様がおられなんだらきっとこれ程上手くは行かなかったでしょうな。さすがキシェラ家の血を引いていらっしゃる。慈母様は助かりますぞ」
初老の医師はアレシアの脈を診ながら、静かに感謝とねぎらいの言葉をセリーヌに掛けた。キシェラ家はその薬草栽培で医術に携わる者には有名な家柄だった。
セリーヌはその言葉に何も言えずに僅かに涙を滲ませた。御典医である彼の言葉は、セリーヌの今までの努力を認めてくれたようで嬉しかった。
何より、自分の知識が人の命を救うことに役立ったのが嬉しかった。
「セリーヌ様、後は私が」
湯を運んで来たベルタに声を掛けられて交代し、セリーヌは少し休憩を取ることにした。
それにしても、不思議な感覚だったわ。
セリーヌはそう思って自分の手を見下ろした。
キネレイを乱暴に引っこ抜いた時、セリーヌはキネレイの悲鳴を感じた。その時セリーヌは強く思ったのだ。
ごめんなさい、でもどうしてもあなたの力が必要なの、どうか力を貸してと。

そうすると、不思議にキネレイが熱を持ったような気がした。今までの感情を感じ取るだけの感覚とは違い、全く別の何か特別な感覚。キネレイが、自分の指の一部になってしまったような、不思議な一体感を感じた。

あれは一体何だったのかしらとセリーヌが首を傾げた時、扉が叩かれた。

「陛下が御典医をお呼びです。状況が落ち着いておりましたら、ご同行願います」

扉の外から、声が掛かる。

初老の医師は難しい顔をして首を振った。状態は一応落ち着いたが、これから段階的にまた解毒薬を投与しなければならない。脈や顔色などから判断し、適切と思われるタイミングで少しずつ解毒薬を減らしながら水と交互に飲ませるのは、経験を積んだ医師でなければ無理だった。

「私が参りますわ。説明だけなら私でも出来ます」

「そうですな、確かに」

セリーヌがそう言って立ち上がると、医師はほっとした顔をして頷いた。

「セリーヌ様！　そのままじゃあんまりなのでお着替えを。ベルタ様、続きの間をお借りします！」

あの後遅れてこの部屋に帰って来たメイミには部屋の掃除くらいしか出来る事が無く、いつの間にか機転を利かせて着替えを持って来ていた。

確かにこの格好じゃ、陛下や大臣達の前には行けないわ。

セリーヌはすっかり汚れてしまったドレスを見下ろして苦笑し、メイミに急かされて着替えを済ませた。

「セリーヌ様、どうかキヨさんを助けてあげて下さい。何だか良く分からないんですけど、あの鼻デカオヤジ、キヨさんをまるっきり犯人扱いなんですよっ」

セリーヌは思わず噴き出した。鼻デカオヤジとは、ゼットワース

侯爵のことだろう。
「笑い事じゃありません！　あのままじゃ、キヨさん無実の罪で殺されちゃうっ」
泣きそうな顔をしながらセリーヌの髪を直すメイミに、セリーヌはそうだったと表情を引き締めた。
「ごめんなさい、分かってるわ。大丈夫、彼女を救う手だては何かある筈だわ」
「信じて、待ってます」
支度を終えて自分に縋る目を向けるメイミにセリーヌは決意を込めて頷き、詮議の場に乗り込むべく部屋を出た。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7883m/

ラダトリアの聖女異聞

2011年2月7日23時14分発行